

秋田県文化財調査報告書第499集

貝 保 遺 跡 (第2次)

— 地方道路等整備事業(建設)主要地方道秋田八郎潟線に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2015・9

秋 田 県 教 育 委 員 会

シンボルマークは、北秋田市浦田白坂（しろざか）遺跡
出土の「岩偶」です。
縄文時代晩期初頭、1992年8月発見、高さ7cm、凝灰岩。

貝^{かい}保^ほ遺跡(第2次)

— 地方道路等整備事業(建設)主要地方道秋田八郎潟線に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2015・9

秋田県教育委員会

序

本県には、これまでに発見された約5,000か所の遺跡をはじめとして、先人の遺産である埋蔵文化財が豊富に残されています。これら埋蔵文化財の保存・継承と積極的活用は、地域社会の歴史や文化に親しみ、理解を深め、ふるさとを愛する人づくりにつながります。

一方、住民の生活や経済活動、地域間の交流などを支える交通網の整備、とりわけ道路ネットワークの整備は、本県にとっての重要な課題の一つです。湖東地域においては、老朽化した湖東総合病院新築移転に伴い、日本海沿岸自動車道に関わる主要地方道秋田八郎潟線の整備が行われています。

本教育委員会では、これらの地域開発との調和を図りながら、埋蔵文化財を保存し、活用することに鋭意取り組んでおります。本報告書は主要地方道秋田八郎潟線の整備に先立って、平成25・26年度に八郎潟町において実施した貝保遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。調査の結果、古代の竪穴建物跡や井戸跡などがみつき、当時の人々の生活の一端が明らかになりました。

本書がふるさとの歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財保護の一助になることを心から願うものであります。

最後になりましたが、発掘調査及び本報告書の刊行にあたり、御協力いただきました秋田地域振興局建設部、八郎潟町教育委員会、五城目町教育委員会など関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成27年9月

秋田県教育委員会

教育長 米 田 進

例 言

- 1 本報告書は、主要地方道秋田八郎潟線建設事業に伴い、平成25・26年度に調査した、八郎潟町所在の貝保遺跡の発掘調査報告書である。調査内容については、すでにその一部が埋蔵文化財センター年報等によって公表されているが、本報告書を正式なものとする。
- 2 調査要項
遺 跡 名 貝保遺跡(かいほいせき)
遺 跡 略 号 4KH
遺 跡 所 在 地 秋田県南秋田郡八郎潟町川崎字貝保99-3ほか
調 査 期 間 平成25年9月2日～10月29日
平成26年9月29日～10月10日
調査面積1,300㎡(平成25年：1,210㎡、平成26年：90㎡)
調 査 主 体 者 秋田県教育委員会
調 査 及 び 整 理 山 村 剛(秋田県埋蔵文化財センター中央調査班 学芸主事)平成25・26・27年度
担 当 者 水 品 仁 志(秋田県埋蔵文化財センター中央調査班 学芸主事)平成25年度
築瀬圭二(秋田県埋蔵文化財センター中央調査班 学芸主事)平成26年度
利 部 修(秋田県埋蔵文化財センター中央調査班 主任文化財専門員)平成27年度
巴 亜子(秋田県埋蔵文化財センター中央調査班 文化財主事)平成27年度
総 務 担 当 者 菊 地 尚 久(秋田県埋蔵文化財センター中央調査班 主査)平成25年度
鈴木菜穂子(秋田県埋蔵文化財センター中央調査班 主査)平成26・27年度
調 査 協 力 機 関 秋田県秋田地域振興局建設部 八郎潟町教育委員会 五城目町教育委員会
- 3 第3図は、国土交通省国土地理院発行の1/50,000地形図『五城目』を、第4図は、秋田県秋田地域振興局建設部提供の1/500工事用図面をもとに作成した。
- 4 遺跡基本層序と遺構層位中の土色表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』2005年度版に拠った。
- 5 発掘調査及び整理作業における以下の作業は、下記の業者に委託した。
水準測量・方眼杭設置業務委託：有限会社船木測量設計事務所
木製品の実測：株式会社吉田生物研究所
- 6 理化学的分析及び保存処理は、下記の業者に委託した。なお、本書ではその分析結果報告を第4章に掲載した。
平成25年度
木製品保存処理・樹種同定・金属製品保存処理：株式会社吉田生物研究所
樹種同定・放射性炭素年代測定：株式会社加速器分析研究所
平成26年度
木製品保存処理・樹種同定・放射性炭素年代測定：株式会社吉田生物研究所
- 7 本書の執筆は、第2章第1節及び第3章の一部を水品が、第4章を除くそれ以外を山村が行った。また編集は山村が行った。
- 8 発掘調査及び整理作業において、御指導・御助言を賜った以下の方々に記して感謝申し上げます。
井上喜久男 森達也 (五十音順)

凡例

1 遺構番号は、その種類ごとに略記号を付し、検出順に連番とした。これらの中には、精査及び整理作業の過程で欠番としたものもある。遺構及び遺物等に用いた略記号は下記の通りである。

S I 竪穴建物跡 S B 掘立柱建物跡 S A 柱穴列 S E 井戸跡 S D 溝跡
 S K 土坑 S N 焼土遺構 S K P 柱穴様ピット
 R P 土器 R W 木製品 S 礫

2 遺構配置区割図中にある明朝体の数字は、柱穴様ピットの遺構番号を表す。

3 土層番号に用いた数字は、ローマ数字を遺跡基本層序にアラビア数字を遺構層位に使用した。

4 遺構の縮尺は、1 / 40を基本とし、各遺構の規模により、1 / 30・1 / 60・1 / 80・1 / 160を適宜使用した。

5 遺物の縮尺は、以下の通りである。

土器・陶磁器：1 / 2・1 / 3 石製品・鉄関連遺物：1 / 2・1 / 3

木製品：1 / 3・1 / 6

6 須恵器・土師器の破片については、断面の左側に外面、右側に内面を配置した。また、破片から断面を反転して復元実測した図もある。

7 土師器のうち、内面が黒色処理されたものを内黒土師器、両面が黒色処理されたものを両黒土師器とした。また須恵器や土師器のヘラ状工具によるナデ調整において、目が粗い筋がはっきりしたものをカキ目とした。さらに土師器では、カキ目より目が細かい筋のものをハケ目、筋は見えないが、工具によるナデ調整をナデ、指によるものを指ナデと表現した。土師器甕・壺の口縁部における横位筋状の調整は横ナデとした。また、右回転はロクロの時計回りを示す。

8 遺構図・遺物図の網フセ、調整等の凡例は次の通りである。これ以外の場合は、各挿図中に凡例を示した。

<遺構関連>



強被熱部



弱被熱部



焼土



礫(断面)



炭化物



RP
(土器)

<遺物関連>



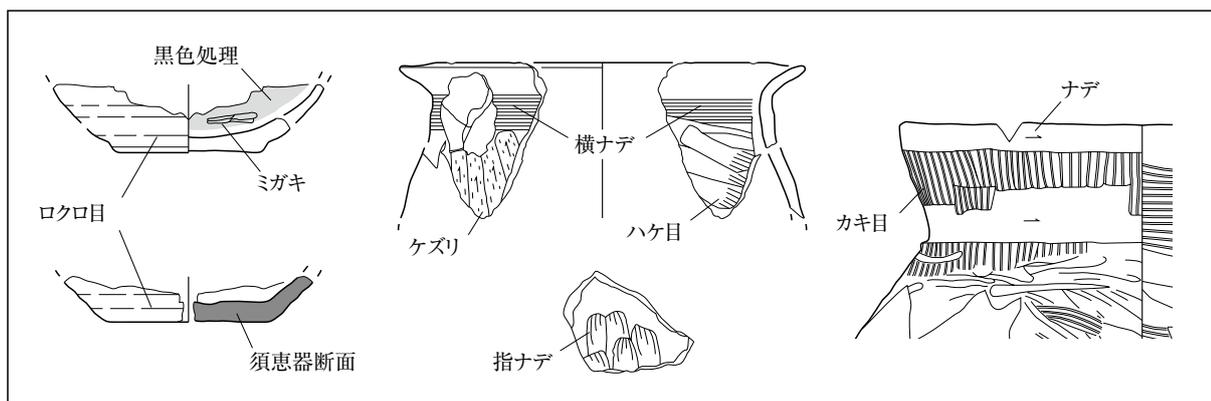
木製品(腐食部)
土師器・陶磁器(釉薬)



墨付着



スス付着



目 次

序	i
例言	iii
凡例	iv
目次	v
挿図目次	vi
表目次	vii
図版目次	viii
第1章 調査の経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 発掘調査の経過	1
第3節 整理作業の経過	3
第2章 遺跡の位置と環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	6
第3章 調査の方法と成果	14
第1節 調査の方法	14
1 発掘調査	14
2 整理作業	17
第2節 基本層序	17
第3節 検出遺構と遺物	20
1 竪穴建物跡	20
2 柱穴列	33
3 井戸跡	34
4 溝跡	47
5 土坑	52
6 焼土遺構	55
7 柱穴様ピット	56
8 遺構外出土遺物	56
第4章 理化学的分析	90
第1節 炭化材・木製品の樹種同定	90
第2節 放射性炭素年代測定(AMS年代)	95
第5章 総括	101

挿図目次

第1図	遺跡位置図	4
第2図	遺跡周辺の地形区分図	5
第3図	貝保遺跡と周辺遺跡位置図	7
第4図	調査区と工事計画図	15
第5図	グリッド・確認調査のトレンチ及び基本層序位置図	16
第6図	基本層序図	19
第7図	遺構配置図(全体)	21・22
第8図	遺構配置区割図①	23
第9図	遺構配置区割図②	24
第10図	遺構配置区割図③	25
第11図	遺構配置区割図④	26
第12図	遺構配置区割図⑤	27
第13図	遺構配置区割図⑥	28
第14図	遺構配置区割図⑦	29
第15図	遺構配置区割図⑧	30
第16図	S I 1019	31
第17図	S A 1015	33
第18図	S E 1004	35
第19図	S E 1005	38
第20図	S E 1006	41
第21図	S E 1007	42
第22図	S E 1008・1009・1034	45
第23図	S D 1025・1035・1036	48
第24図	S D 1027	49
第25図	S K 1001・1010・1011・1017・1018・1021・1024、S K P 1190	54
第26図	S N 1029、S K P 1332	56
第27図	遺構内出土遺物(1) S I 1019	61
第28図	遺構内出土遺物(2) S I 1019、S E 1004	62
第29図	遺構内出土遺物(3) S E 1004	63
第30図	遺構内出土遺物(4) S E 1004	64
第31図	遺構内出土遺物(5) S E 1004	65

第32図	遺構内出土遺物(6) S E 1004・1005	66
第33図	遺構内出土遺物(7) S E 1005	67
第34図	遺構内出土遺物(8) S E 1005	68
第35図	遺構内出土遺物(9) S E 1005	69
第36図	遺構内出土遺物(10) S E 1005	70
第37図	遺構内出土遺物(11) S E 1004・1005・1006	71
第38図	遺構内出土遺物(12) S E 1006	72
第39図	遺構内出土遺物(13) S E 1007	73
第40図	遺構内出土遺物(14) S E 1007・1008	74
第41図	遺構内出土遺物(15) S E 1008・1009	75
第42図	遺構内出土遺物(16) S E 1009	76
第43図	遺構内出土遺物(17) S D 1025・1027	77
第44図	遺構内出土遺物(18) S D 1027	78
第45図	遺構内出土遺物(19) S D 1027、S K 1017・1018・1024、S K P 1332	79
第46図	遺構外出土遺物(1)	80
第47図	遺構外出土遺物(2)	81
第48図	プレパラート顕微鏡写真(1)	92
第49図	プレパラート顕微鏡写真(2)	94
第50図	暦年較正年代グラフ(参考)	98
第51図	貝保遺跡出土井戸枠模式図	102

表目次

第1表	貝保遺跡周辺の遺跡一覧(1)	9
第2表	貝保遺跡周辺の遺跡一覧(2)	10
第3表	柱穴様ピット一覧(1)	58
第4表	柱穴様ピット一覧(2)	59
第5表	柱穴様ピット一覧(3)	60
第6表	土器・陶磁器一覧(1)	82
第7表	土器・陶磁器一覧(2)	83
第8表	土器・陶磁器一覧(3)	84
第9表	土器・陶磁器一覧(4)	85
第10表	土器・陶磁器一覧(5)	86
第11表	木製品一覧(1)	87
第12表	木製品一覧(2)	88
第13表	木製品一覧(3)	89
第14表	石製品・鉄製品一覧	89

第15表	樹種同定結果	91
第16表	貝保遺跡出土木製品同定表	94
第17表	放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)	97
第18表	放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代)	97
第19表	測定試料及び処理	99
第20表	放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果	100

図版目次

図版 1	遺跡全景
図版 2	遺跡遠景・近景
図版 3	遺跡近景 1
図版 4	遺跡近景 2
図版 5	S I 1019、S A 1015、S E 1004
図版 6	S E 1004・1005・1006
図版 7	S E 1007・1008・1009・1034、S D 1025
図版 8	S D 1025・1027・1035・1036
図版 9	S K 1018・1024、S N 1029、S K P 1332、作業風景等
図版10	平成13・14年度調査区
図版11	出土遺物 1
図版12	出土遺物 2
図版13	出土遺物 3
図版14	出土遺物 4
図版15	出土遺物 5
図版16	出土遺物 6
図版17	出土遺物 7
図版18	出土遺物 8
図版19	出土遺物 9
図版20	出土遺物10
図版21	出土遺物11
図版22	出土遺物12
図版23	出土遺物13
図版24	出土遺物14

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯

主要地方道秋田八郎潟線は、日本海沿岸自動車道五城目・八郎潟ICへのアクセス道として、西の八郎潟町を走る国道7号から、東の五城目町を走る国道285号までを結び、周辺地域から高速道路への交通の円滑化を目的として計画されたものである。主要地方道秋田八郎潟線高速交通関連道路整備事業に伴い、事業主体者である秋田県秋田建設事務所が、秋田県教育委員会に道路建設予定地周辺の埋蔵文化財分布調査を依頼し、平成13年の分布調査によって、湖東総合病院(現：湖東厚生病院)移設地への資材搬用進入路予定地に遺跡が新たに発見された。対象面積が少ないこともあり、確認調査を経ずに、同年8月27日～9月18日、翌14年4月11日～26日にかけて、秋田県埋蔵文化財センターが1,310㎡(平成13年：860㎡、平成14年：450㎡)を調査し、古代の集落跡であることが判明した。

その後、湖東総合病院の移転に伴う地方道路等整備事業により、過年度の調査区を挟んだ東西の道路建設予定地周辺事業地内の埋蔵文化財分布調査についての依頼が、再度秋田地域振興局建設部からあり、平成24年に秋田県教育委員会が分布調査を行って、遺跡が東西に広がることを確認した。これを受け秋田県埋蔵文化財センターが、平成25年6月19日～28日にかけて2,100㎡の確認調査を実施し、道路工事に係る1,300㎡が本発掘調査範囲になった。この後、平成25年9月2日～10月29日に1,210㎡を、残りの90㎡は翌26年9月29日～10月10日に発掘調査を実施した。

参考文献

- 秋田県教育委員会 『開防遺跡・貝保遺跡－主要地方道秋田八郎潟線高速交通関連道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』 秋田県文化財調査報告書第361集 2003(平成15)年
- 秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第491集 2014(平成26)年

第2節 発掘調査の経過

平成25年度

調査に先駆け重機による表土除去を8月20日(火)～8月28日(水)までの期間で行った。その後実施した発掘調査の経過は次の通りである。

【第1週】9月2日(月)～9月6日(金)

作業員19名に作業内容や雇用条件等の説明。発掘機材の搬入及びB区環境整備の実施。A区ではグリッド打設作業が未終了のため、調査はB区から開始。B区で基本層序用畦の設定及び精査を実施。2日、作業開始に伴い、高橋所長と利部中央調査班長が来跡。3日、書類確認のため中央調査班菊地主査が来跡。4日、豪雨のため作業中止。

【第2週】9月9日(月)～9月13日(金)

B区縁辺の表土除去及び確認調査時に第IV層上面で検出済みの井戸跡3基(S E1006・1008・1009)

第1章 調査の経過

の他、別に井戸跡3基(S E 1004・1005・1007)、土坑1基(S K 1001)を検出。井戸跡2基(S E 1004・1005)を精査し、それぞれ井戸枠の材を確認。13日、学生1名を伴い、弘前大学の上條准教授が来跡。本週の見学者は延べ7名。

【第3週】 9月17日(火)～9月20日(金)

B区で検出した5基の井戸跡の精査と柱穴列跡(S A 1015)の精査。台風による大雨の影響で調査区が水没、排水作業を行う。A区のグリッド打設作業が終了。18日、利部班長が調査指導のため来跡。本週の見学者は2名。

【第4週】 9月24日(火)～9月27日(金)

A区で、遺構検出及び精査。柱穴様ピットを多数検出。B区では、引き続き5基の井戸跡と平成13・14年度の調査で検出した溝跡(S D 10)の西側延長部分(S D 1027)の精査。井戸跡(S E 1008)の埋土から白磁碗片が出土。本週の見学者は3名。

【第5週】 9月30日(月)～10月4日(金)

A区で溝跡(S D 1025)及び竪穴建物跡(S I 1019)のカマド煙出部を検出。B区では井戸跡の精査を継続。4日、ローリングタワーを設置し、B区近景を撮影。1日、利部班長が調査指導のため来跡。3日、八郎潟町総務課広報担当太田主事が広報取材のため来跡。本週の見学者は1名。

【第6週】 10月7日(月)～10月11日(金)

A区は遺構の検出及び精査を行い、新たに焼土遺構(S N 1029)と40基以上のピット群を検出。B区では6基の井戸跡と溝跡(S D 1027)の精査を継続。8日、京副所長が調査指導のため来跡。11日、雨のため作業中止。本週の見学者は2名。

【第7週】 10月15日(火)～10月18日(金)

B区での精査は、溝跡(S D 1027)を除き作業工程の都合上、一旦中止した。A区では、基本層序用畦を設置するとともに、遺構の検出及び精査を継続。竪穴建物跡(S I 1019)の本体中心部分は、污水管渠の設置によって消失していることを確認。また、井戸跡(S E 1035)を検出。井戸跡は、調査区内全体で7基目。15日、調査終了に向けた打ち合わせのため、文化財保護室磯村学芸主事と利部班長が来跡。17日、秋田魁新報社南秋田支局長高橋記者が取材のため来跡。京副所長が調査指導のため来跡。18日、磯村学芸主事が視察のため来跡。

【第8週】 10月21日(月)～10月26日(土)

A区では主に竪穴建物跡(S I 1019)のカマド付近や井戸跡(S E 1035)の精査、B区では6基の井戸跡と溝跡(S D 1027)の精査を再開。B区内の井戸跡(S E 1005)底部に玉砂利層を確認した。26日に開催する遺跡見学会の準備。22・23日、調査応援に利部班長と山田文化財主任が来跡。22日、高橋所長が調査指導のため来跡。23日、八郎潟町総務課広報担当の小玉・太田両氏が広報取材のため来跡。本週の見学者は延べ5名。26日、遺跡見学会を開催、見学者65名が来跡。

【第9週】 10月28日(月)・29日(火)

B区、6基の井戸跡の精査を完了。28日、文化財保護室高橋主任学芸主事が来跡。29日、秋田地域振興局建設部佐藤主任、磯村学芸主事、利部班長及び発掘調査担当者による現地引き渡しを実施。京副所長が作業終了に伴い来跡。撤収作業を行い調査を終了した。本週の見学者は1名。

平成26年度

調査に先駆け重機による表土除去を9月16日(水)に行った。その後実施した発掘調査の経過は次の通りである。

【第1週】9月29日(月)～10月3日(金)

作業員5名に作業内容や雇用条件等の説明。発掘機材の搬入及び調査区の環境整備。第IV層上面の精査及び遺構検出。調査区西端は、近現代の集水施設を設置するため広範囲に攪乱を受けていた。調査区南東で検出した溝跡(S D 1036)の精査。29日、作業開始に伴い、京所長と利部班長が来跡。30日、中央調査班鈴木主査がリース品確認のため来跡。

【第2週】10月6日(月)～10月10日(金)

柱穴様ピット群(S K P 1401～1409)の精査。調査区第IV層上面遺構検出状況の撮影。10日、利部班長が調査終了に伴い来跡。同日、建設部佐藤主任、文化財保護室宇田川副主幹、利部班長及び発掘調査担当者による現地引き渡しを実施。撤収作業を行い調査を終了した。

第3節 整理作業の経過

整理作業は、平成25年度の現場作業終了後の同年10月30日～平成27年9月30日まで実施した。

平成25年10月～平成26年4月までは、遺物洗浄と注記作業を行い、4月～5月までは集計・計量、分類作業を行った。土器等の接合・復元作業を3月～6月までの期間で行い、器形が判別できる土器は実測図を作成し、必要に応じて写真撮影や採拓を行った。実測図は基本的に1/1で作成した。遺物の実測とデジタルトレースは、平成26年4月～翌27年3月までの期間で行った。

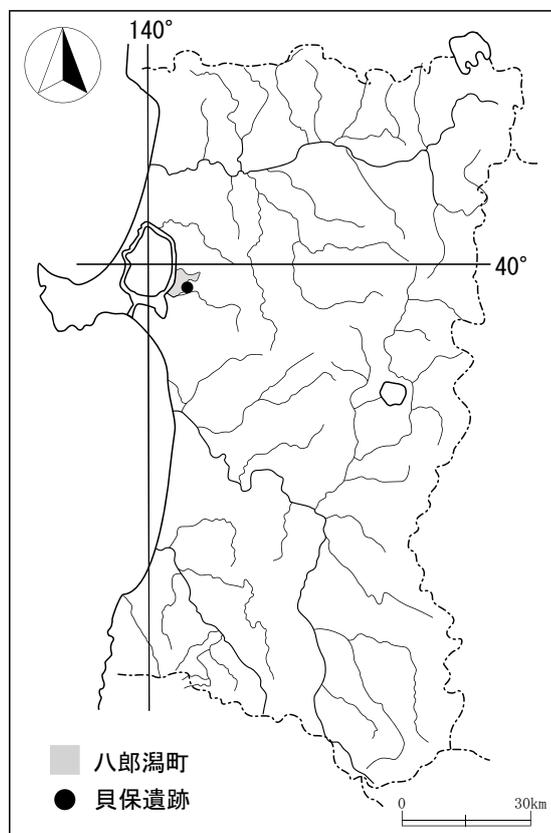
図面関係については、平成25年10月～平成26年10月までに遺構第2原図を作成し、平成26年4月から順次デジタルトレースを行った。トレース終了図については、平成26年7月～平成27年7月の期間に編集作業を行った。平成27年8月～9月までは、収蔵のためデータ作成・整理を行った。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

貝保遺跡のある南秋田郡八郎潟町は、県域日本海沿岸のほぼ中央、八郎潟東岸部に位置する。北側は山本郡三種町、東側は南秋田郡五城目町、南側は同郡井川町と接している。その面積は17.0km²で秋田県下の市町村では最小である。貝保遺跡は、J R奥羽本線八郎潟駅より東南東に約2.5km、北緯39度56分32秒、東経140度6分23秒に位置する(第1図)。

遺跡周辺の地形は、『土地分類基本調査 五城目』^(註1)によると、東部山岳地帯から八郎潟調整池に向かって大きく山地、丘陵地、段丘、低地に分類される。東部の山地は、南北方向に連なる俎山山地、薬師山山地、赤倉山山地に三区別される。これら山地の西側に、ほぼ120~160mの等高線を境にして標高50~100mの高さをもつ一連の丘陵面が発達する。この山地・丘陵地に源を発して鯉川、馬場目川、井川、豊川、及び馬踏川の五河川がすべて八郎潟に注ぎ、河谷にはそれぞれ大小数段の河岸段丘が発達する。丘陵地の西縁崖直下には標高10m以下の沖積低地が発達する。この低地は、北は山本郡三種町鯉川より南の秋田市金足まで、東は丘陵地末端崖線直下より西の八郎潟調整池湖岸線まで広がる、縄文海進以降の海面低下に伴って形成された湖岸平野である。本遺跡は、馬場目川が八郎潟に注ぐ河口付近から、上流へ約4.5km遡った地点の右岸から北に250m離れた標高7m前後の微高地にある。下流部の両側には十数か所の自然堤防が点在する。それはかつて、この川が時期によってたび

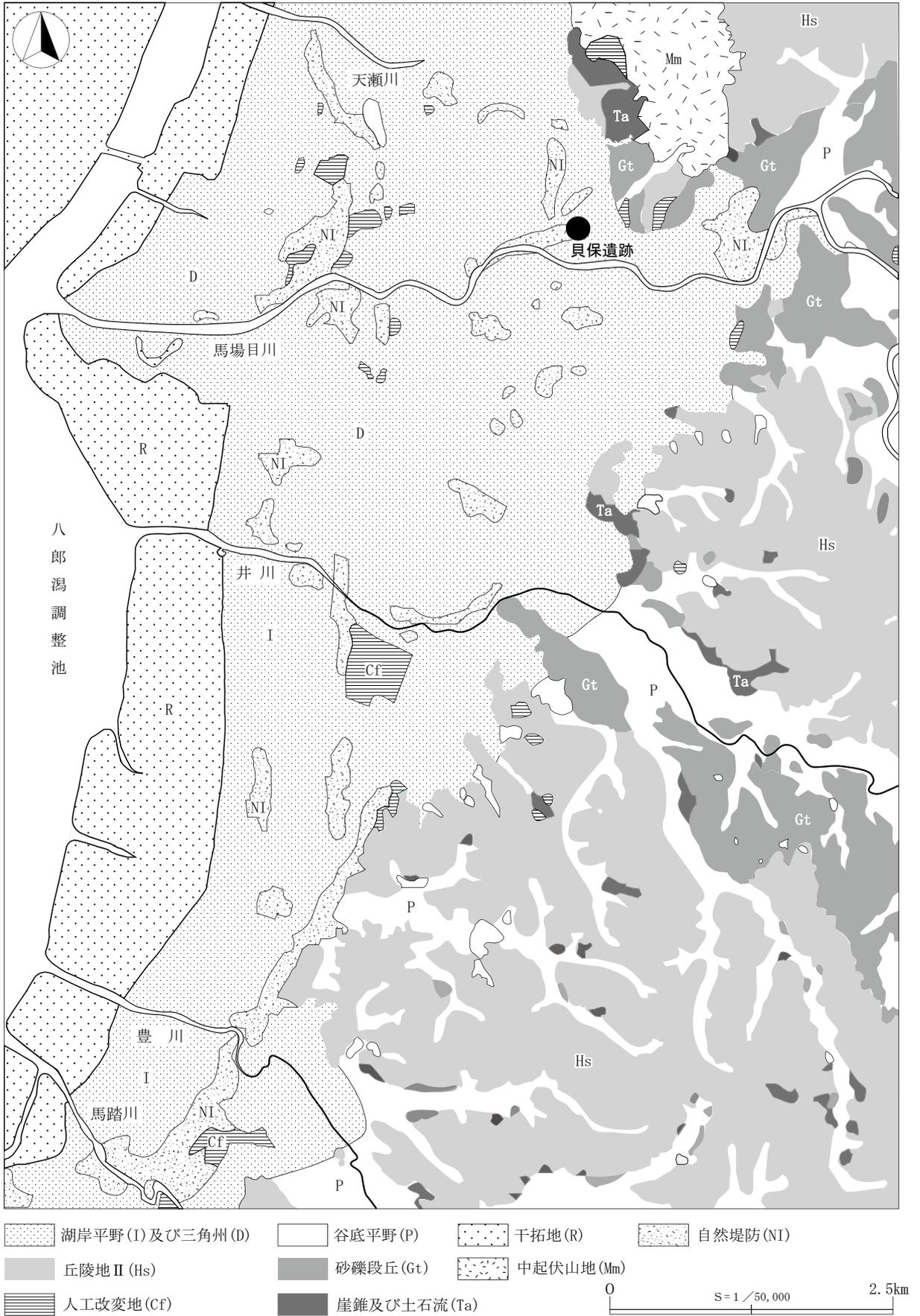


第1図 遺跡位置図

び流路を変えてきた証左である。この付近の低地に点在する集落の多くは自然堤防上に立地し、遺跡のある川崎地区もその中の一つである。ある時期には、現在の流路から北西に外れ、川崎地区の南側を蛇行して八郎潟に流入し、その際に形成された自然堤防上にほぼ東西に沿うように集落と本遺跡が立地する(第2図)。調査区は、1975年に撮影された航空写真では付近一帯が水田になっていた。前回の発掘調査が実施された平成13・14年度以前にはその一部が宅地に転用されていたが、それ以後は高速交通関連道路整備事業による県道整備に伴って荒蕪地となっていた。平成20年度には八郎潟町の公共下水道事業に伴い、調査区の一部に污水管渠等が設置されており、該当範囲では発掘調査が実施できなかった。

註1 秋田県『土地分類基本調査 五城目』1973(昭和48)年

註2 秋田県教育委員会『開防遺跡・貝保遺跡』秋田県文化財調査報告書第361集 2003(平成15)年



第2図 遺跡周辺の地形区分図

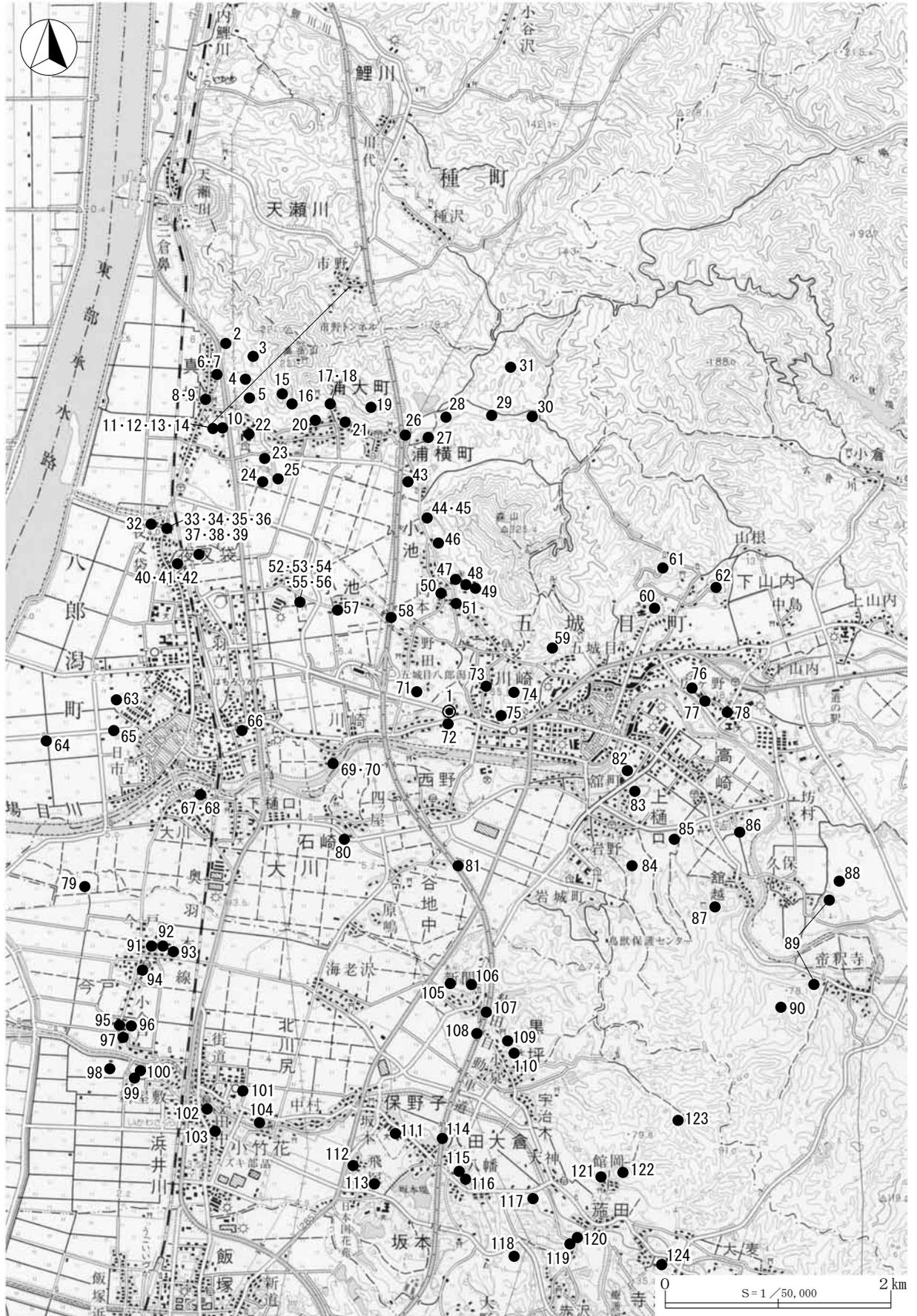
第2節 歴史的環境

貝保遺跡(1)は八郎潟町に所在し、五城目町との町境である八郎潟南東部に位置する。『秋田県遺跡地図(男鹿・南秋田地区版)^(註1)』に基づいて作成した貝保遺跡を中心とする八郎潟南東部の遺跡分布図(第3図)には、124の遺跡を数えることができる。これらの遺跡は、沖積地周辺の丘陵や河川沿いの河岸段丘等比較的小高い位置に集中している。以下、貝保遺跡周辺遺跡について縄文時代から近世までを概観する。

縄文時代の遺跡として、中期の八郎潟町沢田I遺跡(22)・井川町野畑遺跡(120)があり、それぞれ円筒式土器と大木式土器が共存し、南北の土器の交流を検討する上で貴重な遺跡^(註2)である。後・晩期には、森山南西麓に五城目町の岡本遺跡(51)、また馬場目川を挟んで中山遺跡(85)がある。中山遺跡は、明治33(1890)年に五城目小学校教員である佐藤初太郎によって発掘調査が行われた他、昭和57・58(1982・1983)年、平成2(1990)年に五城目町教育委員会によって発掘調査が実施され、湿地帯に残る泥炭層から晩期前半の編布・籃胎漆器・木胎漆器・赤色漆塗り丸木弓・漆塗堅櫛・樹皮製品等が出土し、漆工芸技術に関わる貴重な資料となっている。また平成23~27年には弘前大学により再調査^(註3)が行われている。

弥生時代の遺跡としては、井川町の新聞A遺跡(105)・新聞B遺跡(106)がある。新聞A遺跡からは、粉痕を伴う弥生土器が出土している。また越雄遺跡(107)は、竪穴建物跡や土器埋設遺構を検出した他、遠賀川系土器等が出土している。

古代になると8世紀第2四半期を境に、この地域では律令的な性格の強い遺跡が増加する。その背景には、天平5(733)年の秋田城の築造がある。この時代の遺跡としては、本遺跡の他、五城目町の石崎遺跡(80)・岩野山古墳群(84)・細越館(74)・中谷地遺跡(81)・開防遺跡(71)・雀館古代井戸跡(82)等がある。石崎遺跡では、櫓跡とされる柱痕と一辺400~500mの方形に巡ると思われる柵列の一部が確認され、出土遺物も8世紀末~12世紀末の土器が出土しており、秋田郡衙跡もしくは創建期秋田城跡と推定^(註4)されている。県指定史跡である岩野山古墳群は3回の発掘調査が実施され、多数の土坑墓及び方形周溝遺構が検出された他、武具・馬具・装身具等が出土している。また石帯等副葬品の内容から、被葬者は律令体制下の官人とみられている。遺跡は8世紀中頃~10世紀まで継続する墓域と思われる。細越館では、9世紀代の土師器・須恵器窯跡が確認されており、ここで生産された土器は、石崎遺跡や周辺遺跡に供給されたものと推測される。中谷地遺跡では、河道跡から多量の8世紀後半~9世紀後半の土器と木製品が出土している。特に木製祭祀遺物がまとまって確認され、石崎遺跡に関連した祭祀場の可能性が考えられる。開防遺跡は、県教委・五城目町教委がともに平成13(2001)年に発掘調査を行っている。その結果、掘立柱建物跡、竪穴建物跡、溝跡、鍛冶炉等の遺構が検出された他、8世紀後半~11世紀中葉の遺物が出土した。その中には、北緯40度以北に多く見つかっている、土器底部外面に砂粒が付着する砂底土器も出土している。開防遺跡に隣接する本遺跡も、平成13・14年に発掘調査が行われ、掘立柱建物跡、井戸跡、溝跡、鍛冶炉等の遺構とともに、9世紀第2四半期~10世紀前半までの遺物が出土し、開防遺跡と一連の遺跡であると推測される。またこれら2遺跡では鉄製品が生産されていることから、官衙の影響を強く受けていたものと思われる。また、岩野山古墳群同様に県指定史跡である雀館古代井戸跡は、昭和37(1962)年に耕地整理中に



第3図 貝保遺跡と周辺遺跡位置図

発見された。井戸は井桁組み上げ式で、周囲からは古代の須恵器や中・近世の陶磁器等が出土し、長期に亘り使用されたものと考えられ、近くに集落が断続的にあったのではないかと考えられている。

中世になると奥州藤原氏の支配下に入る。鎌倉時代になり、大河兼任の乱が鎮圧された後、橘氏が地頭として入り、その後南北朝期には安東氏の支配下に入る。図中に見える中世城館には、八郎潟町の浦城(19)・石塚Ⅲ遺跡(15)・押切城(65)、五城目町の岡本城(48)・砂沢城(61)・大川城(68)・細越館(74)・広ヶ野館(78)・石崎遺跡(80)・雀館(83)・熊野台(86)・館越館(87)・行内沢(88)・帝釈寺館(90)、井川町の坂本湊城(111)・築館(117)・比丘尼館Ⅰ・Ⅱ(118・123)・館岡館(122)が確認できる。また集落跡として北遺跡(58)・洲崎遺跡(98)も確認されている。五城目町の北遺跡では、井戸跡・便所跡等が検出され、井戸跡からは多種多様な木製品が出土している。井川町の洲崎遺跡では、115棟の掘立柱建物跡、312基の井戸跡、234条の溝跡や3条の道路跡等が検出された。また、13世紀後半～16世紀後半を中心とした八郎潟湖岸の集落が確認され、近世の羽州街道以前の街道と推測される道路跡も検出されている。遺物は、中国陶磁、木製品等の他、井戸の中から人魚木簡が出土している。また丸木舟を井戸枠に転用していたものもあった。板碑や五輪塔は、秋田県内では男鹿市・南秋田郡に集中しており、この地域の特徴になっている。図中からも板碑46基、信仰碑1基、五輪塔4基、宝篋印塔3基が確認できる。

近世になると、関ヶ原の戦いの後、秋田氏(安東氏)と入れ替わり、常陸(茨城県)から移封された佐竹氏の藩域となり、明治に至る。

註1 秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図(男鹿・南秋田地区版)』2003(平成15)年

註2 以下の文章は本節全般にわたり、次の文献を参照した。

小野一二『五城目町史デジタルデータ』五城目町教育委員会 2005(平成17)年

註3 「ふるさと小紀行」秋田さきがけ新報2012(平成24)年5月6日の記事より

註4 高橋富雄氏により唱えられた創建期秋田城遺跡説の内容は、延暦二三(八〇四)年の『日本後紀』の記事「秋田城は…伏して望むらくは、永く停廢に従い、河辺府を保たんことをと。宜しく城を停めて郡と為す…」の解釈により、それまでの秋田城を廢止して、これを当時「河辺府」と呼ばれていたところに移したとしている。よって、石崎遺跡は創建期秋田城を秋田郡衙に再編した施設であり、秋田城は秋田市高清水岡にあった河辺府に移転されたものとしている。

第1表 貝保遺跡周辺の遺跡一覧(1)

番号	遺跡地図 番号	遺跡名	種別	遺構・遺物	文献
1	27-54	貝保	集落跡・ 生産遺跡	掘立柱建物跡、溝跡、井戸跡、土師器、須恵器、鉄製品	本書・1・2・17
2	27-1	大沢Ⅰ	遺物包含地	縄文土器片、石器剥片	1
3	27-2	大沢Ⅱ	遺物包含地	石器剥片	1
4	27-3	石塚Ⅰ	遺物包含地	縄文土器片、石器剥片	1
5	27-6	石塚Ⅱ	遺物包含地	縄文土器片、石鏃、石器剥片	1
6	27-4	大沢碑Ⅰ	板碑	碑	1・3
7	27-5	大沢碑Ⅱ	板碑	碑	1・3
8	27-7	石塚延文2年碑	板碑	碑	1・3・4・5・6
9	27-8	石塚塔	五輪塔	塔身	1・3・7
10	27-10	沢田Ⅱ	遺物包含地	石器剥片	1
11	27-11	沢田貞和2年碑	板碑	碑	1・3・4・5・6
12	27-12	沢田碑Ⅰ	板碑	碑	1・3・4・5・6
13	27-13	沢田碑Ⅱ	板碑	碑	1・3・4・5・6
14	27-14	沢田碑Ⅲ	板碑	碑	1・3・4・5・6
15	27-49	石塚Ⅲ	館跡	空堀、帯郭	1
16	27-19	善知鳥坂塔	五輪塔	塔身	1・3・7
17	27-21	里ヶ久塔Ⅰ	宝篋印塔	基礎、応永15年銘有、笠	1・3・8
18	27-22	里ヶ久塔Ⅱ	五輪塔	基礎、塔身、笠	1・3・6・7
19	27-24	浦城	館跡	空堀、郭、腰郭、帯郭、青磁、黄瀬戸、明染付、越前系陶器	1・9・51
20	27-20	豊坂碑	板碑	碑	1・3・6
21	27-23	里ヶ久塔Ⅲ	宝篋印塔	塔、基礎、反花付壇上積式	1・3・8
22	27-9	沢田Ⅰ	遺物包含地	縄文土器片(中期：円筒上層a～c式・大木8a・8b・9式)、土偶、三角土製品、三脚石器、清車型耳飾、石鏃、石匙、石錐、石篋、石棒、石錘、石皿	1
23	27-16	鳥屋崎	遺物包含地	石器剥片(黒曜石を含む)	1
24	27-17	塞ノ神石Ⅰ	遺物包含地	石鏃、石匙、石皿、石器剥片多量	1
25	27-18	塞ノ神石Ⅱ	遺物包含地	縄文土器片、石鏃、扁平打製石器、石錘、石器剥片、鉄滓	1
26	25-49	小立花	遺物包含地	陶磁器、珠洲系陶器、銭貨、石鏃、石器剥片	1・10
27	25-54	鏡沢	遺物包含地	石器剥片	1
28	27-50	白ヶ口Ⅰ	遺物包含地	石器剥片	1
29	27-51	白ヶ口Ⅱ	遺物包含地	石器剥片	1
30	27-52	白ヶ口Ⅲ	遺物包含地	石器剥片	1
31	27-53	白ヶ口Ⅳ	遺物包含地	石器剥片	1
32	27-25	後谷地貞和5年碑	板碑	碑	1・3・4・5・6・11
33	27-26	一向堂碑Ⅰ	板碑	碑	1・3・4・5・6・51
34	27-27	一向堂碑Ⅱ	板碑	碑	1・3・4・5・6・51
35	27-28	一向堂碑Ⅲ	板碑	碑	1・3・51
36	27-29	一向堂碑Ⅳ	板碑	碑	1・3・51
37	27-30	川原崎碑Ⅰ	板碑	碑	1・3・4・5
38	27-31	川原崎文和2年碑	板碑	碑	1・3・4・5・6・11
39	27-32	川原崎文和4年碑	板碑	碑	1・3・4・5・11
40	27-33	地藏畑貞和5年碑	板碑	碑	1・3・4・11・12
41	27-34	地藏畑貞和碑	板碑	碑	1・3・4・11・12
42	27-35	地藏畑碑Ⅰ	板碑	碑	1・3・4・12
43	25-50	山際道ノ下	遺物包含地	石錘、石篋、土師器、珠洲系陶器	1・10
44	25-4	三石阿弥陀三尊塔	信仰碑	種子、百ヶ日観音(サ)、阿弥陀(キリーク)、勢至(サク)、元文2年6月	1・13
45	25-5	東谷寺	寺院跡	石造物	1・51
46	25-55	森山下	遺物包含地	石鏃	1
47	25-6	板碑	板碑	種子、青面金剛(キシヤ)	1・13
48	25-7	岡本城	館跡		1・9・51
49	25-8	板碑	板碑	種子、金剛大日(バン)貞治5年	1・13
50	25-56	家ノ下	遺物包含地	石器剥片	1
51	25-9	岡本	集落跡	竪穴建物跡、縄文土器(後期・晩期)、土偶、石器	1・51
52	27-36	中島碑Ⅰ	板碑	碑	1・6
53	27-37	中島碑Ⅱ	板碑	碑	1
54	27-38	中島碑Ⅲ	板碑	碑	1
55	27-39	中島碑Ⅳ	板碑	碑	1
56	27-40	中島碑Ⅴ	板碑	碑	1
57	27-41	萱戸家碑群	板碑	種子、紀年の確認できるもの約20基、種子の確認できるもの30基、その他自然石約20基程	1・3・4・11・12
58	25-51	北	集落跡	土坑、井戸跡、便所跡、溝跡、掘立柱建物跡、焼土遺構、縄文土器、石器、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、刀子、銭貨、木製品	1・10・16
59	25-13	神明前	遺物包含地	縄文土器片(中期・後期)	1・14
60	25-17	砂沢窯跡	窯跡	登窯、陶器片(現在は消滅)	1・14・51
61	25-15	砂沢城	館跡	空堀、帯郭、石器、土師器、須恵器、中世陶器、刀子、砥石、鉄滓	1・9・14・21・51
62	25-16	杉ヶ崎	遺物包含地	縄文土器片(中期・後期・晩期)	1
63	27-43	蒲沼	遺物包含地	土師器、須恵器、土製品、初期伊万里染付、木製品、唐津系陶器、瀬戸系陶器	1・3・19
64	27-42	蒲沼碑	板碑	碑(昭和57年、現在地に移す)	1・4・6・12
65	27-44	押切城	平城	堀、土師器、須恵器、近世陶器	1・9・51

第2表 貝保遺跡周辺の遺跡一覧(2)

番号	遺跡地図 番号	遺跡名	種別	遺構・遺物	文献
66	27-45	上昼根延文碑	板碑	碑	1・3・4・5・6・11・51
67	25-1	板碑	板碑	種子、金剛大日(パン)、伝康永の碑	1・15・51
68	25-2	大川城	館跡	板碑	1・9・51
69	27-46	前川原貞和2年碑	板碑	碑	1・3・4・5・6・51
70	27-47	前川原碑I	板碑	碑	1・3・4・5・6・51
71	25-53	開防	集落跡・生産 遺跡・火葬墓	竪穴建物跡、土坑、柱穴、焼土遺構、土師器、須恵器、鉄滓	1・2・17・20・21・51
72	27-48	貝保碑	板碑	碑	1・3・4・5・6
73	25-10	下台	遺物包含地	縄文土器(後期・晩期)	1・51
74	25-12	細越館	館跡・窯跡	帯郭、須恵器窯、土師器窯、須恵器、土師器	1・21・51
75	25-11	細越	遺物包含地	縄文土器(晩期)	1
76	25-19	板碑	板碑	板碑1基	1・13
77	25-18	広ヶ野	遺物包含地	縄文土器片(中期・後期・晩期)、石斧、石棒、土壘	1・14・41・51
78	25-20	広ヶ野館	館跡	土壘、空堀	1・9・14
79	31-1	大関尻	遺物包含地	木製鋸	1・22
80	25-3	石崎	城柵跡	柵列、柱脚、陶硯、木製品等	1・14・17・23・24・45・51
81	25-52	中谷地	集落跡・ 祭祀場	掘立柱建物跡、板材列、杭列、柱列、土坑、捨て場、溝跡、河川跡、須恵器、土師器、墨書土器、木製祭祀具、木製品、建築材、漆紙文書、陶磁器	1・16・17・25・51
82	25-21 25-②	雀館古代井戸	井戸跡	県指定史跡、土師器片、須恵器片、黒陶片、椽木、板材	1・26・27・51
83	25-22	雀館	館跡	青磁片、黄瀬戸片、礎石	1・9・14
84	25-14 25-①	岩野山古墳群	古墳	県指定史跡、蔵手太刀、毛抜太刀、円頭太刀、勾玉、石帯、刀子、鉄鏃、土師器、須恵器	1・4・14・17・28・ 29・41・51・52
85	25-23	中山	集落跡	竪穴建物跡、土坑墓、土坑、埋設土器、縄文土器(後期・晩期)、石器、漆製品(木胎漆器・櫛・藍胎漆器)、漆濃し布、漆液容器類、木製品、獣骨(シカ・イノシシ)、魚骨、クルミ、トチ	1・33・34・35・36・51
86	25-24	熊野台	館跡	井戸跡	1・9
87	25-25	館越館	館跡	空堀、帯郭	1・9
88	25-26	行内沢	館跡	縄文土器片、石斧	1・9・51
89	25-27	帝釈寺跡	寺院跡	阿弥陀如来立像、珠洲陶片	1・51
90	25-28	帝釈寺館	館跡	空堀	1
91	31-2	実相院板碑	板碑	角閃安山岩(自然石)、キリーク3基、パン他6基	1・4・22・34
92	31-3	熊野神社板碑	板碑	角閃安山岩(自然石)、パン3基、カン1基、キリーク1基	1・4・22・34
93	31-4	寺ノ内	遺物包含地	古銭(開元通宝・活平通宝他)	1・22
94	31-5	賢蔵院板碑	板碑	角閃安山岩(自然石)、キリーク1基	1・4・22・34
95	31-6	小今戸板碑I	板碑	角閃安山岩(自然石)、三仏1基	1・4・22・34・51
96	31-7	小今戸板碑II	板碑	角閃安山岩(自然石)、パン1基	1・22・34・35・51
97	31-8	小今戸板碑III	板碑	角閃安山岩(自然石)、サ1基、パン1基	1・4・22・34
98	31-9	洲崎	集落跡	堀跡、溝跡、井戸跡、土坑、竪穴建物跡、掘立柱建物跡、縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器、陶磁器、木製品、金属製品、石製品、土製品、井戸部材	1・22・36・37・38・ 39・51・52
99	31-10	新屋敷板碑	板碑	角閃安山岩(自然石)、パン2基、ウン1基、その他4基	1・4・22・34・35・51
100	31-11	新屋敷五輪塔	五輪塔	火山岩、五輪塔(地・水・火輪)	1
101	31-12	資料館前板碑	板碑	角閃安山岩(自然石)、キリーク1基、パン1基	1・4・22・34
102	31-13	田中神明社板碑	板碑	角閃安山岩(自然石)、アン1基、不明3基	1・4・22
103	31-14	羽立伊勢堂板碑	板碑	輝石安山岩(加工岩)、パン1基	1・22
104	31-15	下村	遺物包含地	墨書須恵器	1・4・22・40・41
105	31-19	新間A	遺物包含地	縄文土器片(晩期)、弥生土器(内3点が初痕土器片)、石鏃、石斧、石鏃、石匙	1・22・42・43・44・ 45・51・52
106	31-20	新間B	遺物包含地	縄文土器片(晩期)、弥生土器、石匙	1
107	31-38	越雄	集落跡	竪穴建物跡(弥生時代)、土坑、土器埋設遺構、弥生土器、土製品、石器、竪穴建物跡(古代)、溝跡、土師器、須恵器	1・16・22・37・46
108	31-39	越雄II	遺物包含地	土師器細片	1・47
109	31-21	小泉	遺物包含地	土師器片、須恵器片、丸玉	1・22
110	31-22	乗江院宝篋印塔	宝篋印塔	基礎、塔身、笠	1
111	31-18	坂本湊城	館跡	空堀、土壘、井戸跡、土師器、須恵器、刀子、黄瀬戸片、椀	1・9・22・48
112	31-16	飛塚I	遺物包含地	墨書土師器、土師器片、須恵器片	1・4・41
113	31-17	飛塚II	窯跡	鉢、壺破片、播鉢破片	1・22
114	31-40	縄手内	遺物包含地	縄文土器、土師器、珠洲系陶器	1・19
115	31-23	八幡古堂	遺物包含地		1・22
116	31-24	八幡神社板碑	板碑	角閃安山岩(自然石)、キリーク1基	1・4・22
117	31-29	築館	館跡	空堀、土壘、帯郭	1・9・22
118	31-25	比丘尼館I	館跡	空堀、帯郭	1・9・22
119	31-31	南台	遺物包含地	骨蔵器(土師器1個・須恵器1個)	1・22・41・49・50・52
120	31-30	野畑	遺物包含地	縄文土器片、石鏃、石匙、石槍、石斧、石鏃、石皿	1・22・41・49
121	31-28	羽根田	火葬墓	土師器壺(骨壺)、人骨	1・22・52
122	31-27	館岡館	館跡	腰郭、空堀、土師器、黄瀬戸、蔵骨器	1・9・22
123	31-26	比丘尼館II	館跡		1・9・22
124	31-33	味噌野	寺院跡		1

参考文献

- 秋田県教育委員会 『開防遺跡・貝保遺跡－主要地方道秋田八郎潟線高速交通関連道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』 秋田県文化財調査報告書第361集 2003(平成15)年
- 五城目町教育委員会 『中山遺跡発掘調査報告書』 1983(昭和58)年
- 五城目町教育委員会 『中山遺跡発掘調査報告書』 1984(昭和59)年
- 五城目町教育委員会 『中山遺跡発掘調査報告書』 1990(平成2)年
- 秋田県教育委員会 『越雄遺跡－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅦ－』 秋田県文化財調査報告書第357集 2003(平成15)年
- 秋田県教育委員会 『中谷地遺跡－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財調査報告書Ⅶ－』 秋田県文化財調査報告書第316集 2001(平成13)年
- 井川町教育委員会 『井川町史(続巻)』 2005(平成17)年
- 神田和彦 「秋田平野周辺における集落の様相」『第31回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』 2005(平成17)年
- 秋田県教育委員会 『洲崎遺跡－県営ほ場整備事業(浜井川地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』 秋田県文化財調査報告書第303集 2000(平成12)年

第1・2表 文献(表中の番号は文献番号に対応する。)

- 1 秋田県教育委員会 『秋田県遺跡地図(男鹿・南秋田地区版)』 2003(平成15)年
- 2 秋田県教育委員会 『開防・貝保遺跡－主要地方道秋田八郎潟線高速交通関連道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』 秋田県文化財調査報告書第361集 2003(平成15)年
- 3 八郎潟町教育委員会 『八郎潟町の石碑』 2001(平成13)年
- 4 秋田県教育委員会 『秋田県史 考古編』 1960(昭和35)年
- 5 奈良修介・磯村朝次郎 「八郎潟周辺の板碑(一)－板碑地名表－」『秋田考古学』 第3号 1955(昭和30)年
- 6 八郎潟町教育委員会 『八郎潟町史』 1977(昭和52)年
- 7 磯村朝次郎 「秋田県における中世石造遺物の形式、分布とその意義－特に鎌倉後期の五輪塔を中心として－」『秋田県立博物館研究報告』 2号 1977(昭和52)年
- 8 磯村朝次郎 「秋田県における中世宝篋印塔の型式と分布－特に八郎潟周辺の場合を中心として－」『秋田県立博物館研究報告』 11号 1986(昭和61)年
- 9 秋田県教育委員会 『秋田県の中世城館』 秋田県文化財調査報告書第86集 1981(昭和56)年
- 10 秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第308集 2000(平成12)年
- 11 奈良修介編 『秋田県の紀年遺物』 小宮山出版 1976(昭和51)年
- 12 奈良修介・磯村朝次郎 「八郎潟周辺の板碑補遺(一)－板碑地名表－」『秋田考古学』 第5号 1956(昭和31)年
- 13 五城目町教育委員会 『五城目町の石造記念物』 1975(昭和50)年
- 14 五城目町教育委員会 『五城目町史』 1975(昭和50)年
- 15 秋田県教育委員会 『北遺跡－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ－』 秋田県文化財調査報告書第315集 2001(平成13)年
- 16 秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第291集 1999(平成11)年
- 17 村上義直 「最北の郡衙石崎遺跡について」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』 第29号 2015(平成27)年

第2章 遺跡の位置と環境

- 18 五城目郷土史編纂委員会編 『五城目郷土史』 1957(昭和32)年
- 19 秋田県教育委員会 『蒲沼遺跡発掘調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第96集 1982(昭和57)年
- 20 秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第324集 2001(平成13)年
- 21 五城目町教育委員会 『開防遺跡－湖東病院建設に伴う敷地造成工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』 五城目町埋蔵文化財調査報告書第8集 2002(平成14)年
- 22 井川町教育委員会 『井川町史』 1986(昭和61)年
- 23 高橋富雄 「秋田城をめぐる諸問題」『日本歴史』28巻 10月号 1971(昭和46)年
- 24 五城目町教育委員会 『石崎遺跡発掘調査報告書』 1975(昭和50)年
- 25 秋田県教育委員会 『中谷地遺跡－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財調査報告書Ⅶ－』 秋田県文化財調査報告書第316集 2001(平成13)年
- 26 豊島昂 「南秋田郡五城目発見雀館古代井戸址」『秋田考古学』23号 1963(昭和38)年
- 27 船木義勝 「秋田県五城目町の雀館古代井戸から出土した黒色土器」『秋田県立博物館研究報告』第21号 1996(平成8)年
- 28 奈良修介・豊島昂 「秋田県南秋田郡五城目町「岩野山古墳」」『秋田考古学』19号 1961(昭和36)年
- 29 五城目町教育委員会 『岩野山・南秋田郡五城目町岩野山古墳第3次発掘調査報告書』 1975(昭和50)年
- 30 五城目町教育委員会 『中山遺跡発掘調査報告書』 1983(昭和58)年
- 31 五城目町教育委員会 『中山遺跡発掘調査報告書』 1984(昭和59)年
- 32 五城目町教育委員会 『中山遺跡発掘調査報告書』 1990(平成2)年
- 33 奥山潤 「秋田市周辺の縄文晩期末及後続期の遺跡概要」『秋田考古学』22号 1963(昭和38)年
- 34 内田武志・宮本常一編 「ひなのあそび」『菅江真澄全集第4巻』 未来社 1973(昭和48)年
- 35 田口勝一郎編 『図説秋田県の歴史』(図説日本の歴史5) 河出出版社 1987(昭和52)年
- 36 内田武志・宮本常一編 「のきのやまぶき」『菅江真澄全集第4巻』 未来社 1973(昭和48)年
- 37 秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第279集 1997(平成9)年
- 38 秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第281集 1998(平成10)年
- 39 秋田県教育委員会 『洲崎遺跡－県営ほ場整備事業(浜井川地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』 秋田県文化財調査報告書第303集 2000(平成12)年
- 40 小武海松四郎 「墨書須恵器(坏)の一例」『秋田考古学』第12号 1959(昭和34)年
- 41 豊島昂・奈良修介 『秋田県の考古学』 吉川弘文館 1967(昭和42)年
- 42 小武海松四郎 『靱痕土器をともなう秋田県南秋田郡井川町新開遺跡遺物について』 1977(昭和52)年
- 43 今村義孝 『秋田県の歴史』 県史シリーズ5 山川出版社 1969(昭和44)年
- 44 新野直吉 『古代史上の秋田』 秋田魁新報社 1981(昭和56)年
- 45 富樫泰時 『日本の古代遺跡－秋田－』 保育社 1985(昭和60)年
- 46 秋田県教育委員会 『越雄遺跡－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅦ－』 秋田県文化財調査報告書第357集 2003(平成15)年
- 47 秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第342集 2002(平成14)年
- 48 秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第486集 2013(平成25)年
- 49 小武海松四郎 「井川村野畑・南上台に見られる土器文化への考察」『秋田考古学』第3号 1955(昭和30)年
- 50 小武海松四郎 「井川村南台に於ける土師、須恵の骨壺について」『秋田考古学』第10号 1958(昭和33)年

- 51 五城目町教育委員会 『五城目町史デジタルデータ』 2005(平成17)年
- 52 井川町教育委員会 『井川町史(続巻)』 2005(平成17)年

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

1 発掘調査

表土除去作業は、埋蔵文化財センター職員立ち会いのもと重機で行った。調査区内の掘り下げは、盛土(第Ⅰ層)から旧耕作土(第Ⅱ層)までを重機で行い、古代の遺物包含層(第Ⅲ層)から人力で掘り下げた。基盤層(第Ⅳ層)上面で遺構確認を行い、検出した遺構について精査を行った。

調査はグリッド法で行った。平成13年度調査時に設定された、グリッドの原点であるMA50(世界測地系平面直角座標第Ⅹ系 $X = -5843.163$ 、 $Y = -62396.929$)を基軸^(註1)にし、座標北-南方向を南北の基線とし、これに直交するラインを東西の基線とした。これをもとに4m×4mのメッシュを組み、その交点に方眼杭を打設した。方眼の原点を通る南北線をMA、同じく東西線を50とし、南北線はアルファベットの符号を西に向かって昇順、東西線は数字の符号を北に向かって昇順となるよう付した。この方眼による4m四方の区画は、南東隅にあたる杭の南北と東西の符号を組み合わせ、MA50のように呼ぶこととした(第5図)。

遺構は、柱穴様ピットとそれ以外の遺構に分け、柱穴様ピットは検出順に1101番から、それ以外の遺構は1001番からの通し番号を付し、遺構の略記号と組み合わせ^(註2)て呼称した。中には、精査の結果により欠番としたものもある。実測図は、原則として1/20の縮尺で作図したが、必要に応じて、1/10の作図も行った。

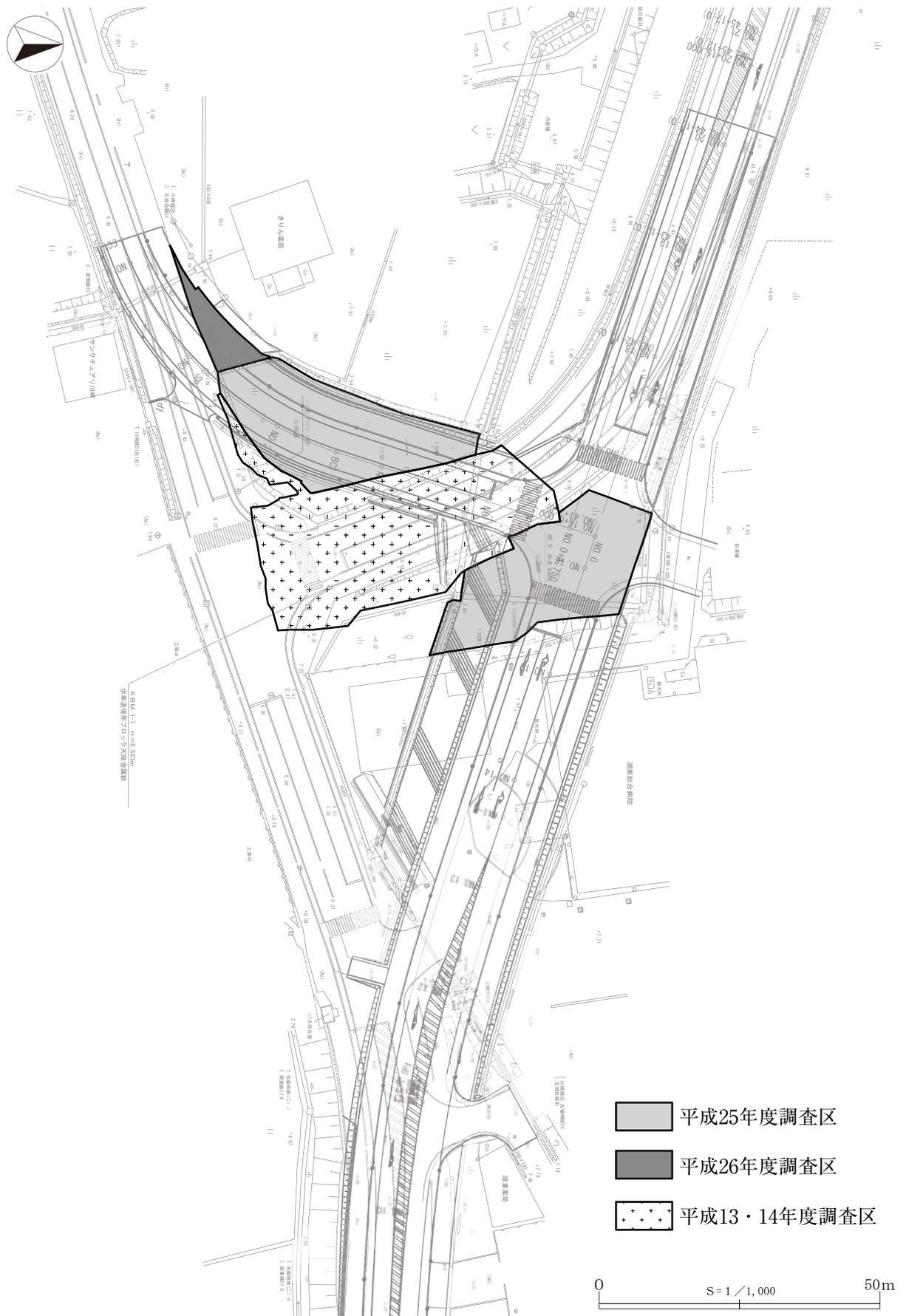
遺物は、出土区もしくは出土遺構、出土層位、出土年月日を記録して取り上げを行った。遺物の取り上げ等に用いる測量機器の設置は、調査区内外の方眼杭8か所に設定した水準杭をもとに行なった。

遺物の収納、取り扱いについては、土器、鉄滓等はチャック付ポリ袋に入れ、コンテナに収納した。木製の遺物については、コンテナに水漬けして収納した。

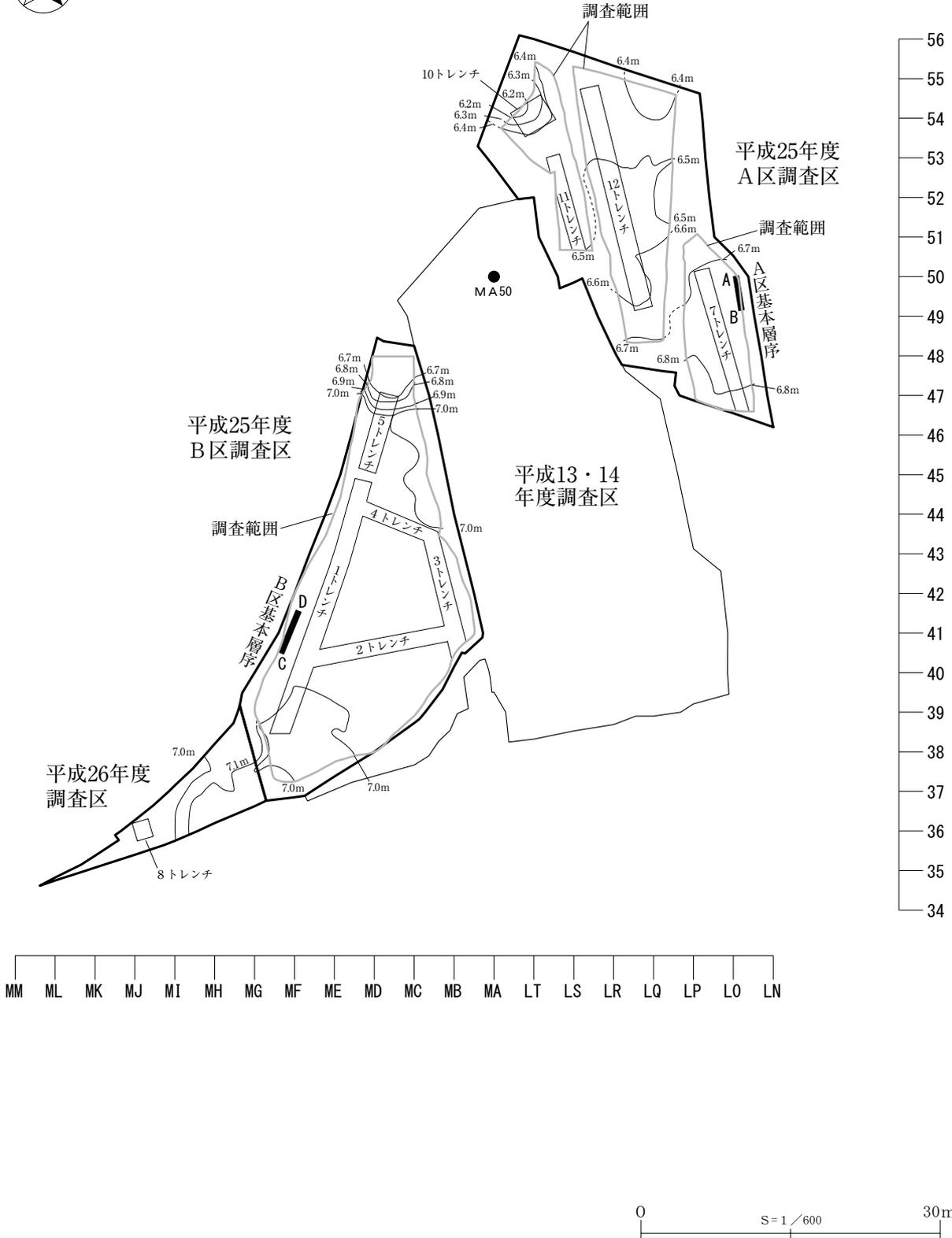
写真撮影は、遺構調査の随所で行った他、必要に応じて遺物の出土状況等を記録した。撮影は35mmアナログカメラ、デジタルカメラで行い、アナログカメラについてはリバーサルフィルム、モノクロフィルムを使用した。

註1 平成13・14年度調査結果を記した秋田県教育委員会『開防遺跡・貝保遺跡』秋田県埋蔵文化財調査報告書第361集では、MA50の座標を「国家座標第Ⅹ系の座標北を基準として($X = -6150.124$ $Y = -62099.948$)を原点とする各4m間隔の方眼を設置した。」と報告している。しかし、これは日本測地系での座標値であることや東日本大震災によって座標のずれがあること等から、今回改めて座標値を世界測地系に切り替え、数値を測り直して報告することとした。

註2 平成13・14年度は、遺構の検出順に01番からの通し番号を付けている。今回は、前回調査時に検出した遺構との混乱を避けるため1001番からの通し番号を付した。なお今回検出したS D1027は、前回調査で検出されたS D10の西側延長部分である。



第4図 調査区と工事計画図



第5図 グリッド・確認調査のトレンチ及び基本層序位置図

2 整理作業

遺物は、洗浄・注記の後、土器類については、必要に応じて接合作業を行った。土器類は、接合作業後に種類及び器種に分類し、それぞれの重量を計量した。計量後に報告書掲載土器類を選別し、遺存状態により、必要に応じエキポシ樹脂充填による復元作業を行った。

報告書掲載遺物図面については、実測図作成後、当該図をスキャニングして下図としてドローイングソフト(アドビシステムズ社製「Illustrator」)を用いてデジタルトレースして作成した。必要に応じ、拓本も作成し、同様にスキャニングしてトレース図と組み合わせた。

遺構等の図面に関しては、現場で作成した図から第2原図を作成し、スキャニングして下図としてドローイングソフトを用いてデジタルトレースを行った。

遺構・遺物等のデジタルトレース図は、最終的にドローイングソフトを用いてレイアウトし、挿図原稿を作成した。

第2節 基本層序

遺跡は、周辺よりもやや高い標高約7m前後の微高地に立地する。遺跡の北側及び北東では、馬場目川旧河道跡に隣接し、標高は周辺に比べて低くなっている。貝保遺跡の調査前の状況は、平成13・14年度の調査区も含め水田として土地利用されていたが、その後A区では宅地造成による盛土、B区では現在の道路工事に伴いそれぞれ盛土して現在に至っている。以前の調査区は、今回の調査区に東西を挟まれた隣接した場所である。よって、今回の調査区の基本層序も基本的には、前回の調査区とほぼ同じである。遺跡の基本層序はA区の東壁及びB区の西壁の2か所で観察し、大別して4層に分層した。詳細は以下に述べる。

第I層：表土。造成土である。A・B区は以前に水田としての土地利用がされていたが、その後の土地利用に違いがあるため、盛土にも違いが生じている。A区は第I a～c層が堆積する。層厚は100～210cmである。北側に行くに従い徐々に厚く堆積する。第I a・b層では、瓦礫や碎石等が混じる。B区では、第I d・e層を確認した。層厚は30～50cmである。A区同様、こちらでも北側に行くに従い徐々に厚く堆積し、第I d層では瓦礫や碎石が混じる。

第I a層 褐色土(10YR4/4) しまり強 粘性弱

第I b層 灰黄褐色土(10YR4/2) しまり強 粘性弱

第I c層 褐色砂(10YR4/4) しまり弱 粘性弱

第I d層 黄褐色土(2.5Y5/3) しまり強 粘性弱

第I e層 黒褐色砂(10YR3/2) しまり強 粘性弱

第II層：水田耕作土である。江戸時代以降の遺物の他、土師器が若干数出土した。このことから、遺物包含層である第III層や旧表土を含んだ本来の堆積土が、圃場整備により攪乱され、整地されたものと思われる。A・B区ともに水田としての土地利用がされていたため、前回調査区も含めた調査区全体で確認できる。B区の層厚は10～20cmである。耕作土である第II a層と、一部その下層に床土である第II b層を確認している。一方、A区の層厚は5～20cmであ

る。耕作土である第Ⅱ a層や床土である第Ⅱ b層が重なって、あるいはどちらかが単一で広がっている。第Ⅱ b層下には、第Ⅲ層に鋤や鍬の刃が入り込み攪乱を受けた第Ⅱ c層を、第Ⅲ層が残るA区の51ライン以南で確認している。また、確認調査時には、旧表土と思われる腐植包含層が、調査区北側の第Ⅱ層と第Ⅳ層間で確認されている。層厚は5cmほどである。

第Ⅱ a層 オリーブ黒色粘土(5Y3/1) しまり中 粘性強

第Ⅱ b層 褐灰色粘土(10YR4/1) しまり強 粘性強

第Ⅱ c層 暗褐色粘土(10YR3/3) しまり強 粘性中

第Ⅲ層：古代の遺物包含層である。B区では、水田に土地改変するための圃場整備にともない削平を受けたものと思われ、残存していない。A区では、調査区の南側である51ライン以南で確認でき、層厚は10～30cmである。51ライン以北は残存しておらず、B区同様に削平を受けているものと思われる。遺跡内で検出された遺構の覆土は、基本的には本層を基調としている。

第Ⅲ層 暗褐色土(10YR3/3) しまり強 粘性強

第Ⅳ層：本遺跡の地山(基盤層)である。調査区内でほとんどの遺構が第Ⅳ a層及び第Ⅳ a'層上面で検出されている。遺構検出面は基本的に第Ⅳ a層上面であるが、B区の一部や、A区の51ライン以北では、グライ化した第Ⅳ a'層上面で検出している。馬場目川の氾濫により堆積した土砂で構成されているものと思われ、暗褐色土の混じりが点在する。調査区内の地山面は、南側がやや高く、北側に行くに従い緩やかな傾斜になる。またA区では、LT54付近から急激に落ち込み、馬場目川の旧河道跡へ続くものと思われる。B区でもSD1027以北は、その南側に比べて標高は一段低い。また井戸跡(SE1005)の精査中、その壁面で地山層(第Ⅳ a・Ⅳ b)の堆積が観察できた。第Ⅳ a層30～40cm下で第Ⅳ b層が観察され、さらに70cm下では腐植を含む第Ⅳ c層があり、深いものでは2m近くまで達する。井戸底に近い壁面では旧河道の川底と思われる第Ⅳ d層の堆積状況が観察できた。

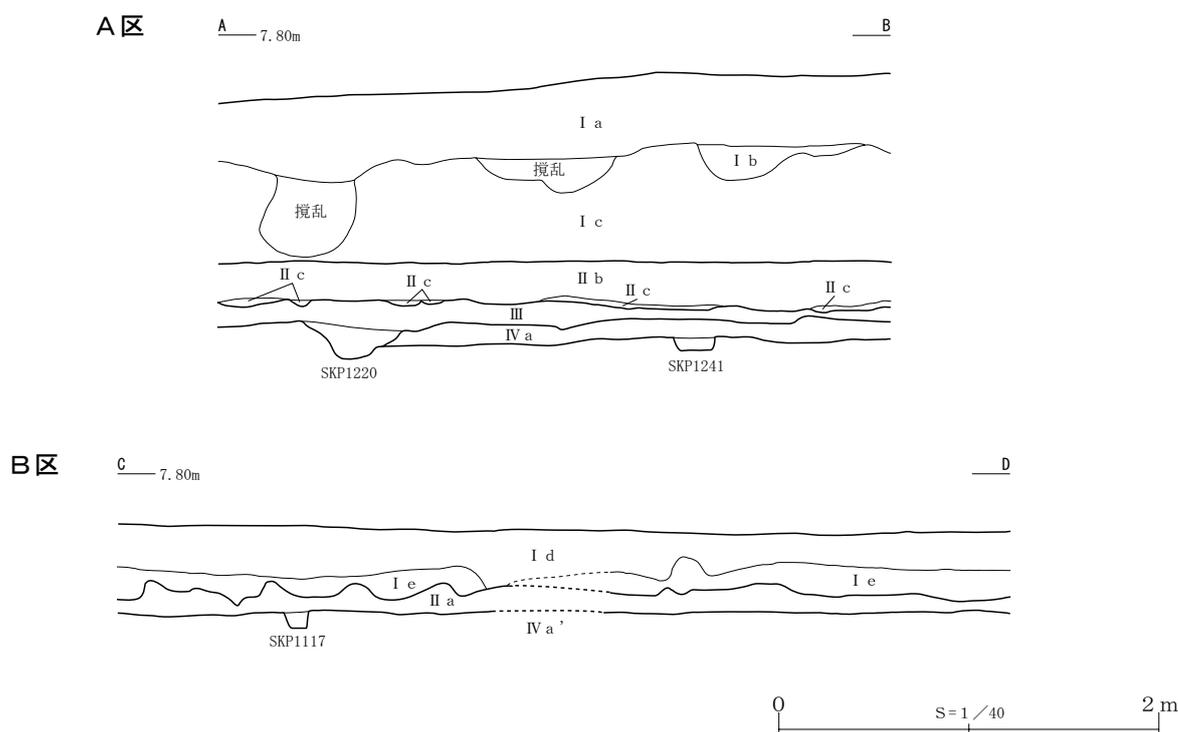
第Ⅳ a層 褐色土(10YR4/4～4/6) しまり強 粘性強

第Ⅳ a'層 褐色粘土(10YR4/4～4/6)と灰色粘土(7.5Y5/1)の混合土からオリーブ褐色土(2.5Y4/3) しまりやや強 粘性強

第Ⅳ b層 灰黄褐色粘土(10YR4/2) しまり強 粘性強

第Ⅳ c層 オリーブ褐色粘土(2.5Y4/3) しまり強 粘性強

第Ⅳ d層 暗緑灰色粘土(7.5GY4/1) しまり強 粘性強



【表土・造成土】

- I a 褐色土 (10YR4/4) しまり強 粘性弱
褐色砂まばらに15% 礫φ 5～20 mm 10%
- I b 灰黄褐色土 (10YR4/2) しまり強 粘性弱
炭化物粒状φ 1～5 mm 10% 礫φ 5～20 mm 1%未満
- I c 褐色砂 (10YR4/4) しまり弱 粘性弱
炭化物板状φ 2～5 mm・粒状φ 1 mm 以下1%
- I d 黄褐色土 (2.5Y5/3) しまり強 粘性弱
碎石多量に混在
- I e 黒褐色砂 (10YR3/2) しまり強 粘性弱

【水田耕作土】

- II a オリーブ黒色粘土 (5Y3/1) しまり中 粘性強
- II b 褐灰色粘土 (10YR4/1) しまり強 粘性強
炭化物粒状φ 1 mm 以下1%
- II c 暗褐色粘土 (10YR3/3) しまり強 粘性中
褐灰色粘土塊状φ 3～5 mm 1%

【古代遺物包含層】

- III 暗褐色土 (10YR3/3) しまり強 粘性強
炭化物粒状φ 1 mm 以下1% 赤褐色焼土粒状φ 1 mm 以下1%

【地山】

- IV a 褐色土 (10YR4/4～4/6) しまり強 粘性強
- IV a' 褐色粘土 (10YR4/4～4/6) と灰色粘土 (7.5Y5/1) の混合土からオリーブ褐色土 (2.5Y4/3) しまりやや強 粘性強

第6図 基本層序図

第3節 検出遺構と遺物

平成25・26年度の調査区で検出した遺構は、竪穴建物跡1棟、柱穴列1条、井戸跡7基、溝跡4条、土坑8基、焼土遺構1基、柱穴様ピット215基である(第7図)。遺構のほとんどが平安時代に属するものと考えられるが、竪穴建物跡は奈良時代に遡る他、出土した中世前期の白磁片より、柱穴様ピットのいくつかは中世以降の降る可能性もある。これらの遺構は、標高6.4～7.0mの比較的平坦な地形上に分布する。井戸跡は、平成13・14年度調査を含め8基検出しているが、その内の7基がS D 1027(旧S D 10)以南に位置する。一方、柱穴様ピットは、そのほとんどがS D 1027以北に集中する。本報告書に掲載した遺構内出土土器は、土師器82点、須恵器26点、白磁1点、井戸枿材を含めた木製品27点、鉄製品4点、石製品2点である。掲載した出土遺物の特徴については、遺構内外共に遺物観察表(第6～14表)に記載している。なお各遺構の出土土器について、未掲載のものは、坏・皿等を坏類、壺・甕・鉢・鍋等を袋物類として便宜的に分け、重量のみ記載した。また木製品は、水を多く含むため保存処理を行ったもののみ重量を測定している。

1 竪穴建物跡

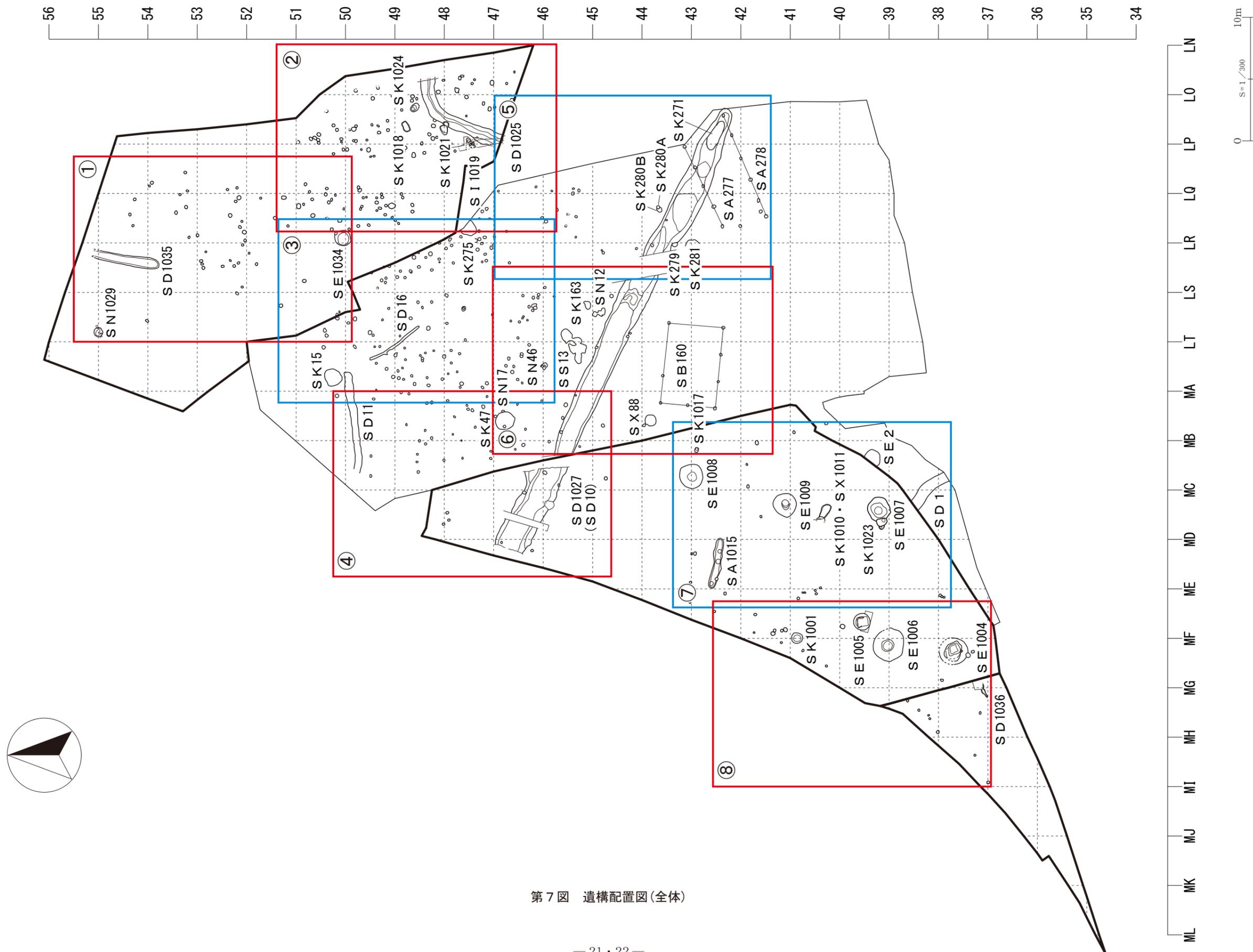
S I 1019竪穴建物跡(第9・16図、図版5)

《位置・確認状況》L O・L P 46・47に位置する。第IV層地山上面を精査中、中央部分が褐色でその周りが帯状の炭化物と、にぶい黄褐色土が環状に巡る不整楕円形プランを確認した。その後、サブトレンチ(A-B)を入れたところ、下層部より焼土・炭化物混入土が調査区外へ延びていく状況を確認した。断面観察の結果、礫・土器片・強く焼けた焼土が断面西側で検出された。そのためサブトレンチに直交した別のサブトレンチ(C-D)を設定し、さらに断面観察を行った結果、カマド袖の芯材と推定される板状の礫や、強く焼けた燃焼部と思われる部分を確認した。これにより竪穴建物跡のカマドであることが判明し、第IV層上面で確認したプランは煙道部であることがわかった。竪穴建物跡本体のプランは、本遺構堆積土と第IV層地山土との見分けが困難であり、第IV層上面では確認することができなかった。なお、本遺構が接する調査区ラインには污水管が設置されており、すでに竪穴建物跡の本体のほとんどは削平されているものと判断された。

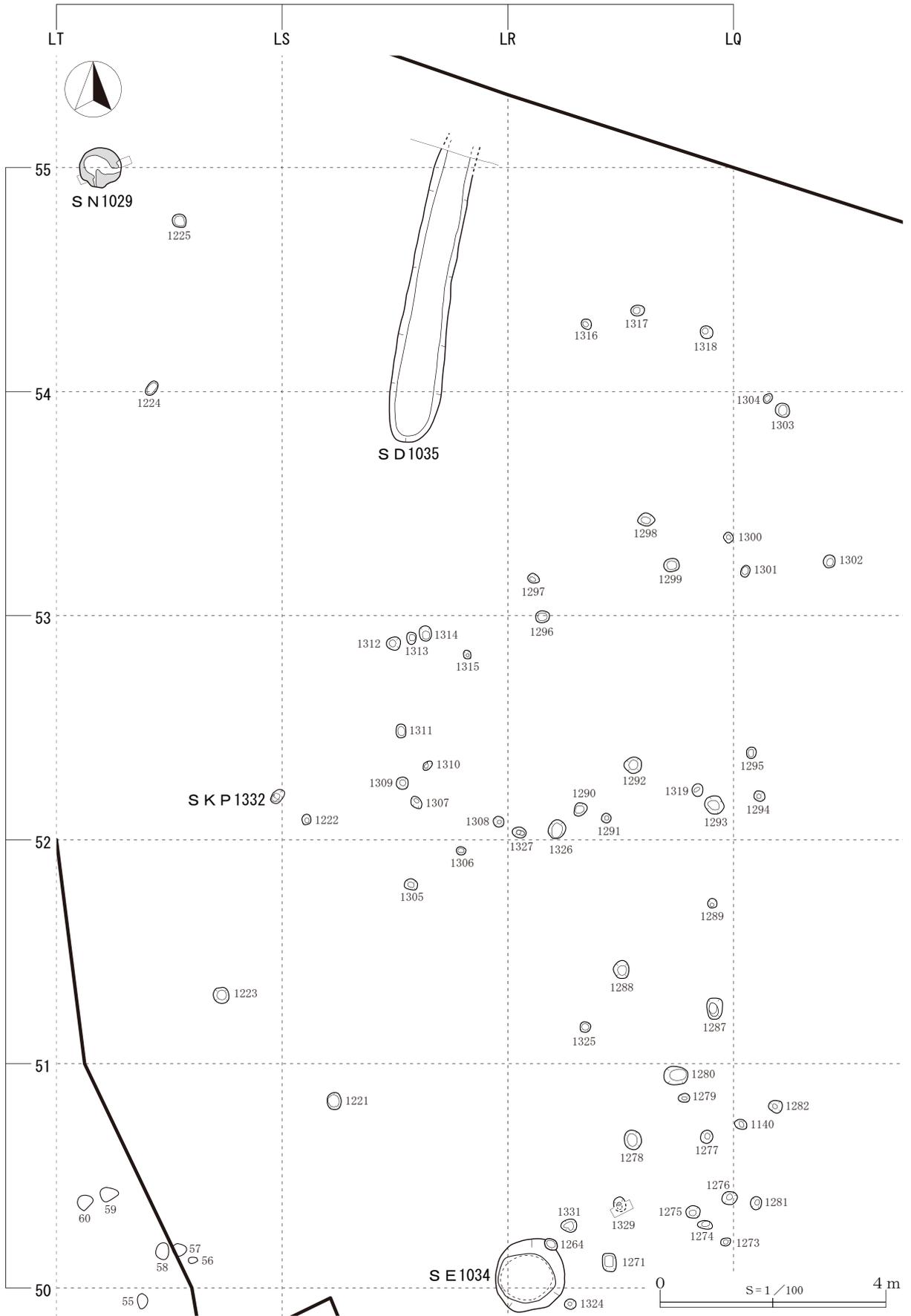
《重複》S D 1025に切られる。

《規模・形態》平面形は、調査区外に接するため全体像は不明である。長軸3.50m(北西-南東、残存値)、短軸0.88m、確認面からの深さ0.53mで、方形に近い形状を呈するものと思われる。

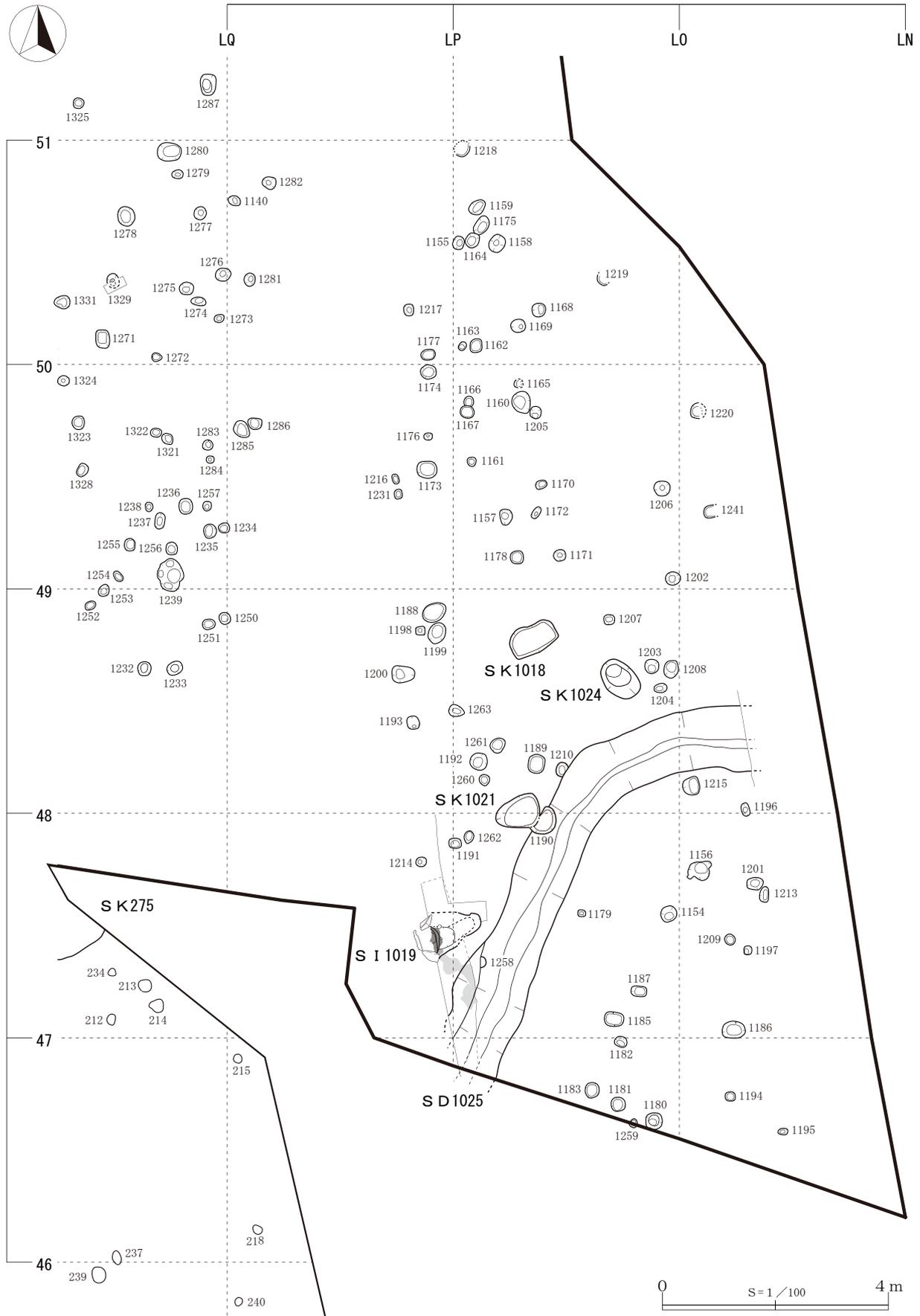
《埋土》8層に分類した。1～3・8層は第IV層地山土由来のにぶい黄褐色から褐色土、4・5・7層は第III層土由来の暗褐色土である。1・2層は、本遺構廃棄に伴い堆積したものと思われる。1層は、本遺構全体を覆う覆土で、第IV a層地山土と区別することは容易ではない。人為的な埋め戻しと考えられるが、短時間で堆積した様相を呈している。2層は1層と分けたが、混入物の違いのみで、本質的には同様な人為堆積土と考えられる。3・4層は、煙道部の天井崩落土と考えられ、4層は焼土や炭化物を比較的多く含んでいる。またカマド煙道部は、他の竪穴建物跡の調査例と比較すれば、煙道部を設置するため地山土を掘り込んで構築されたものと考えられ、3層は本遺構構築時、カマド煙道部上に残された地山土である。本遺構全体を覆う1層と3層の区別は容易ではない。5層は炭化



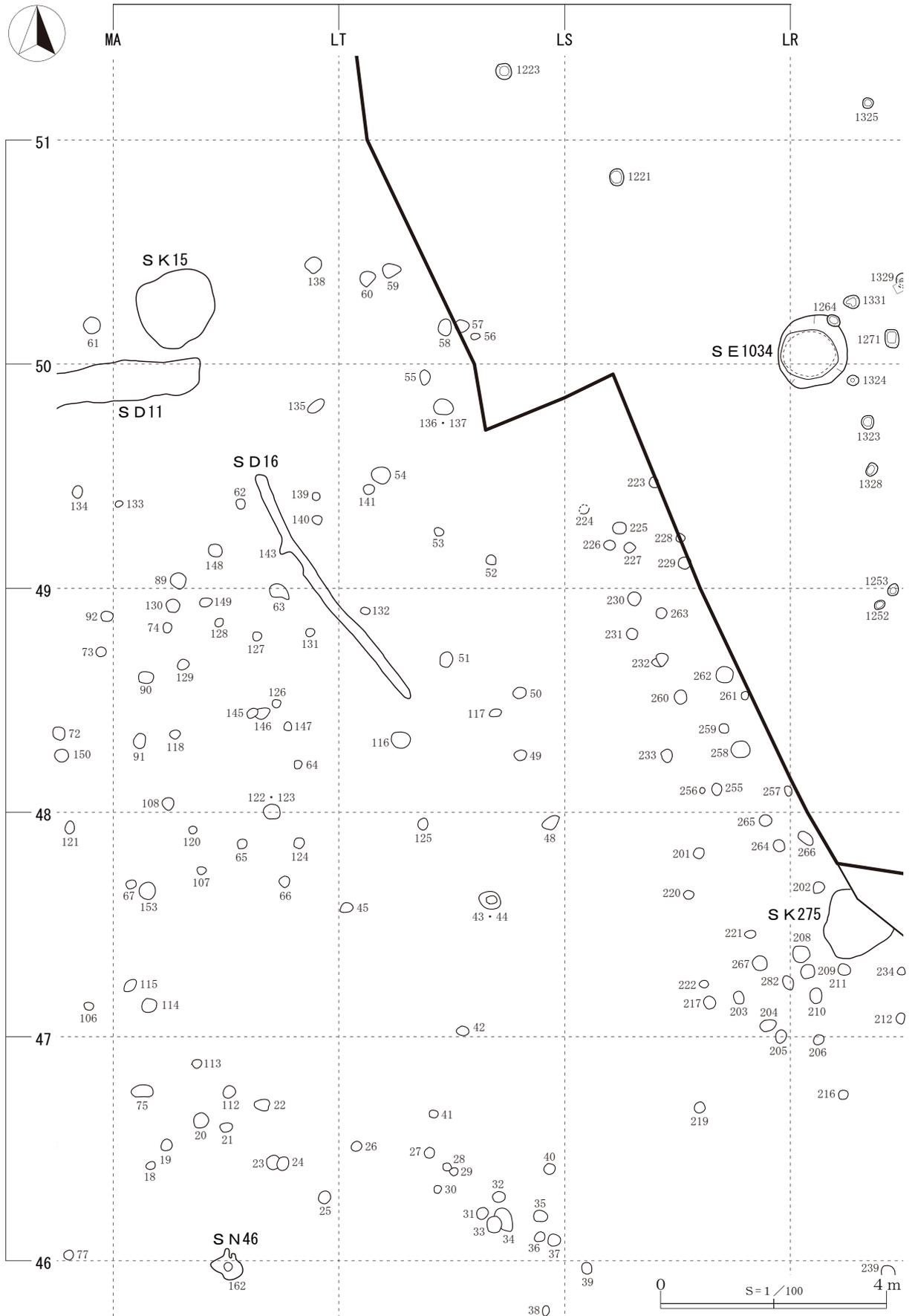
第7図 遺構配置図(全体)



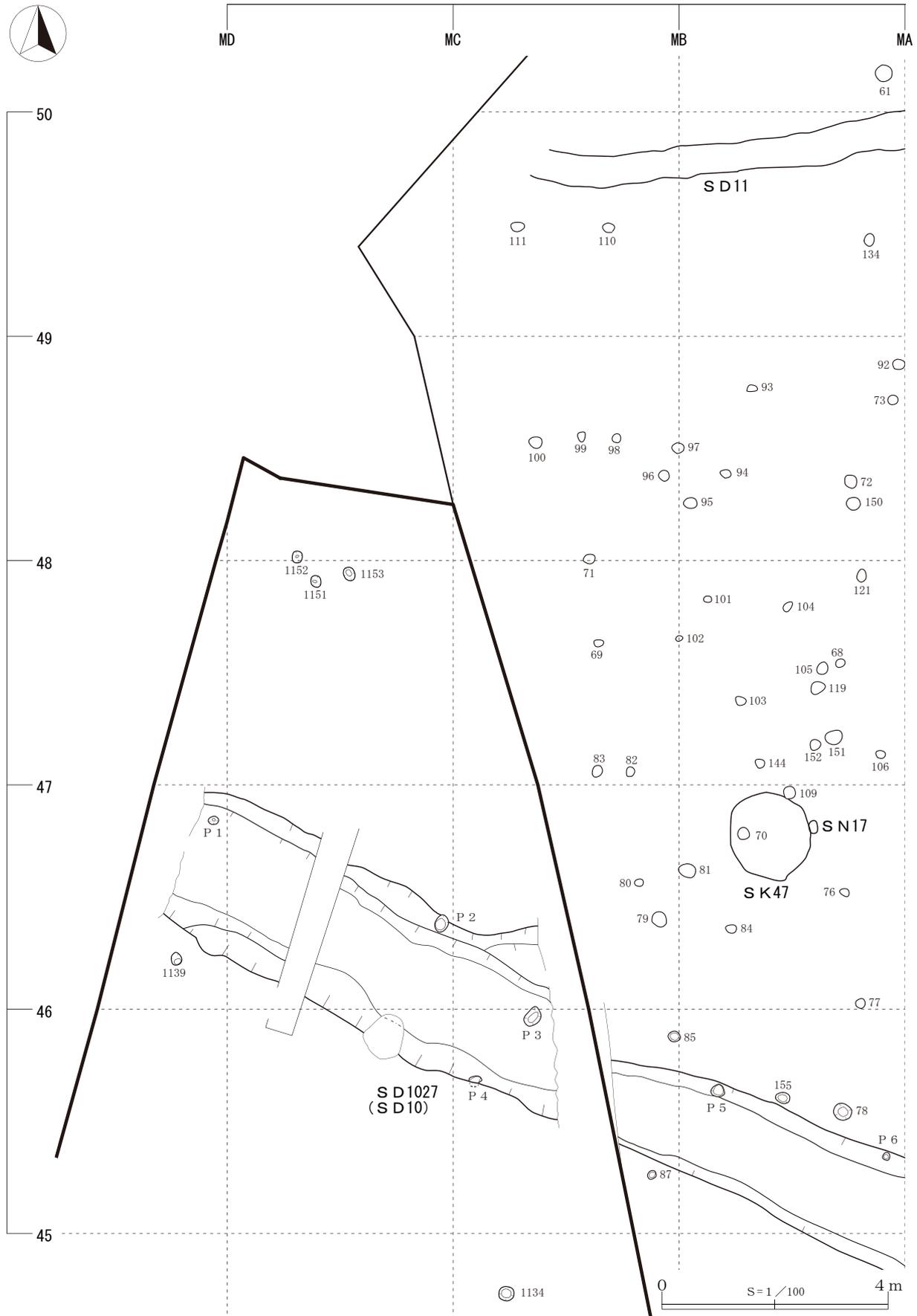
第8図 遺構配置区割図①



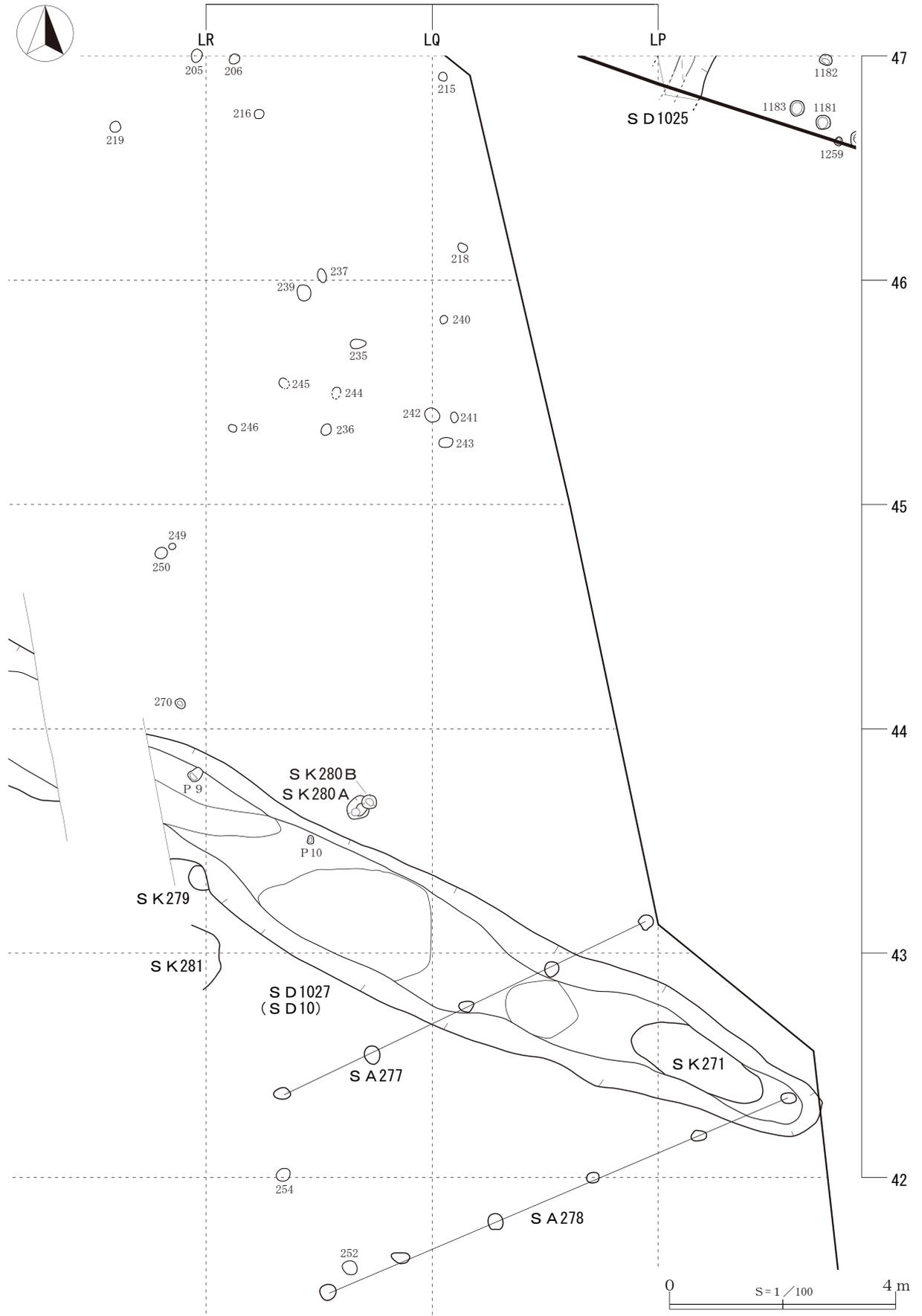
第9図 遺構配置区割図②



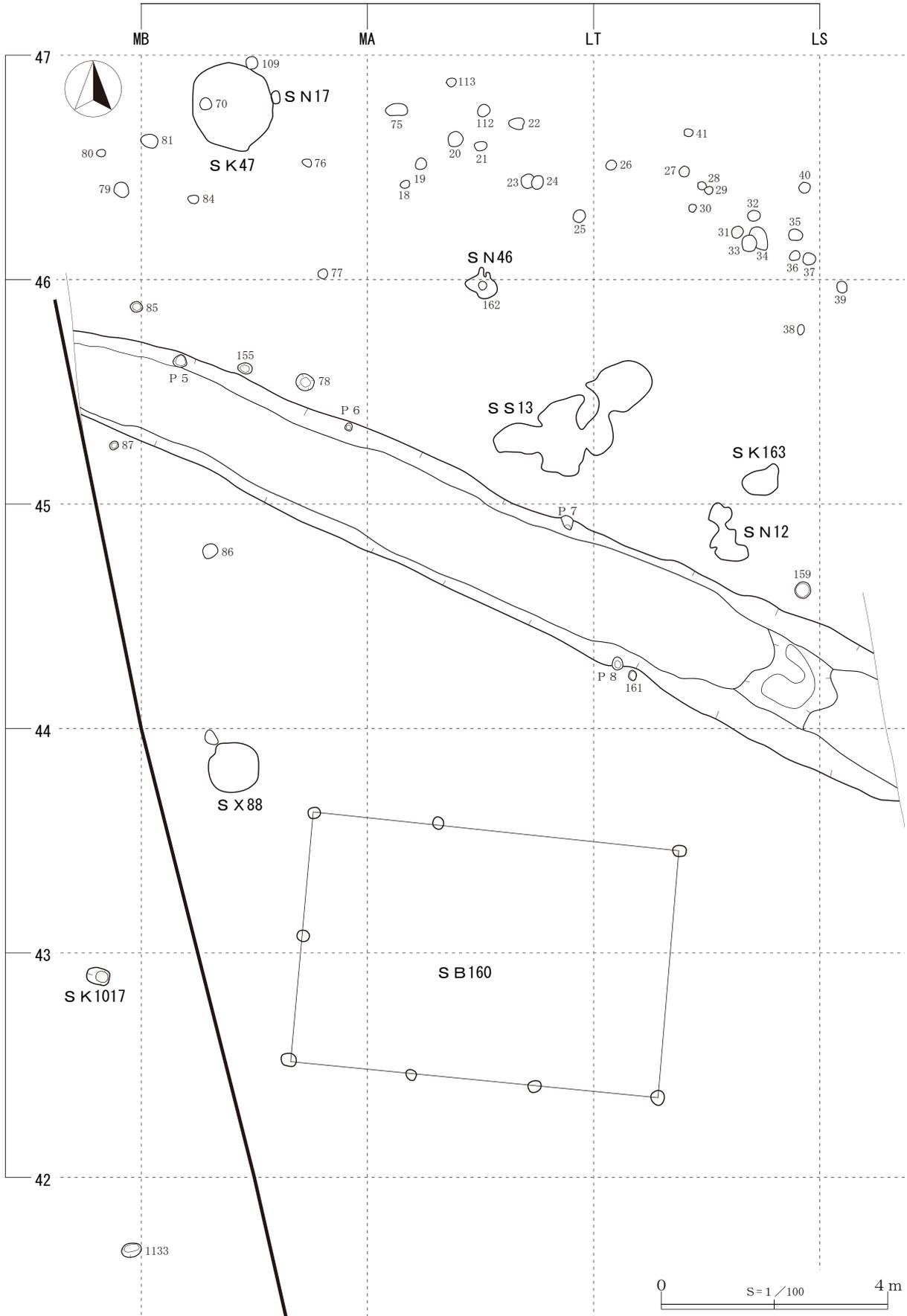
第10図 遺構配置区割図③



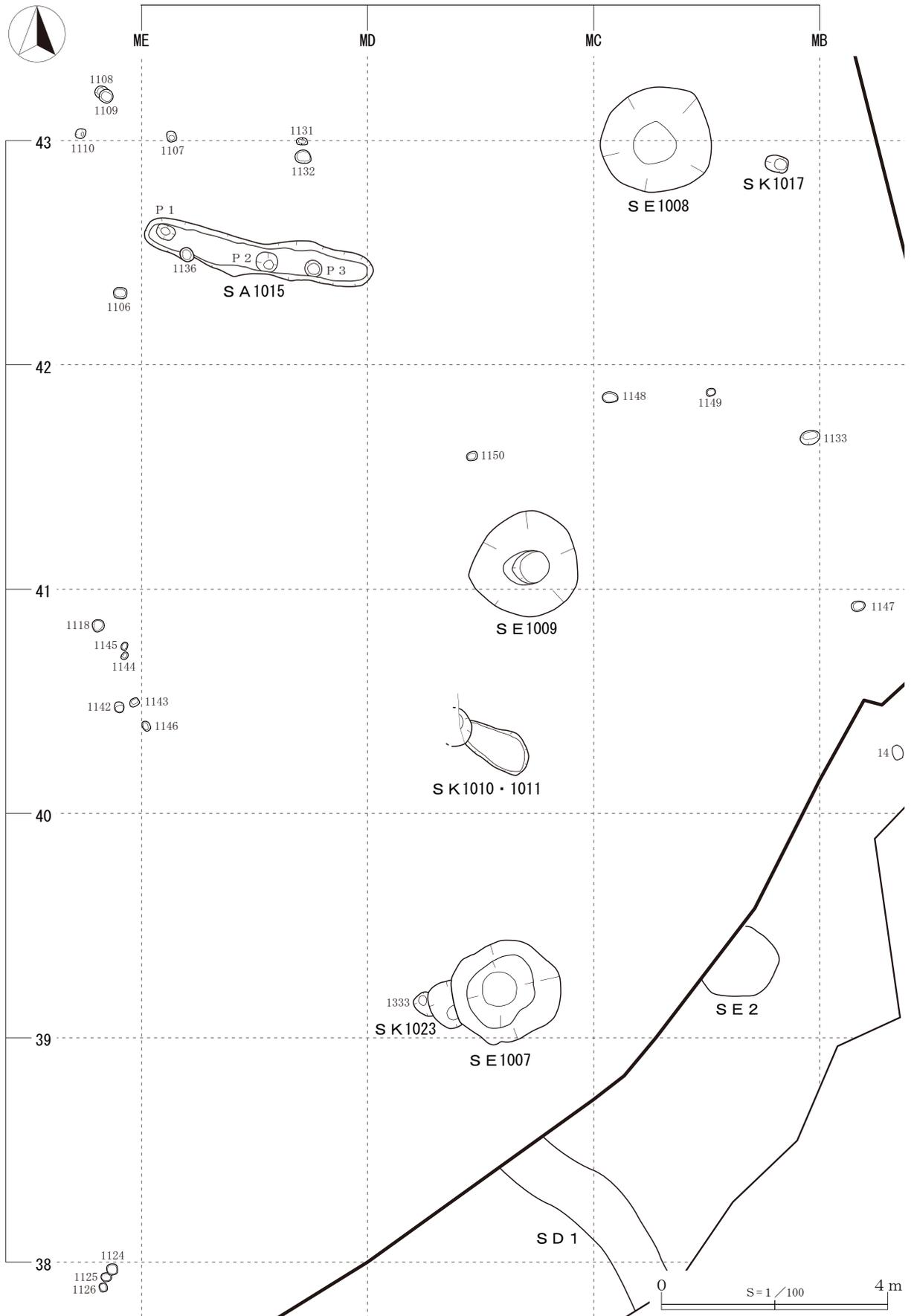
第11図 遺構配置区割図④



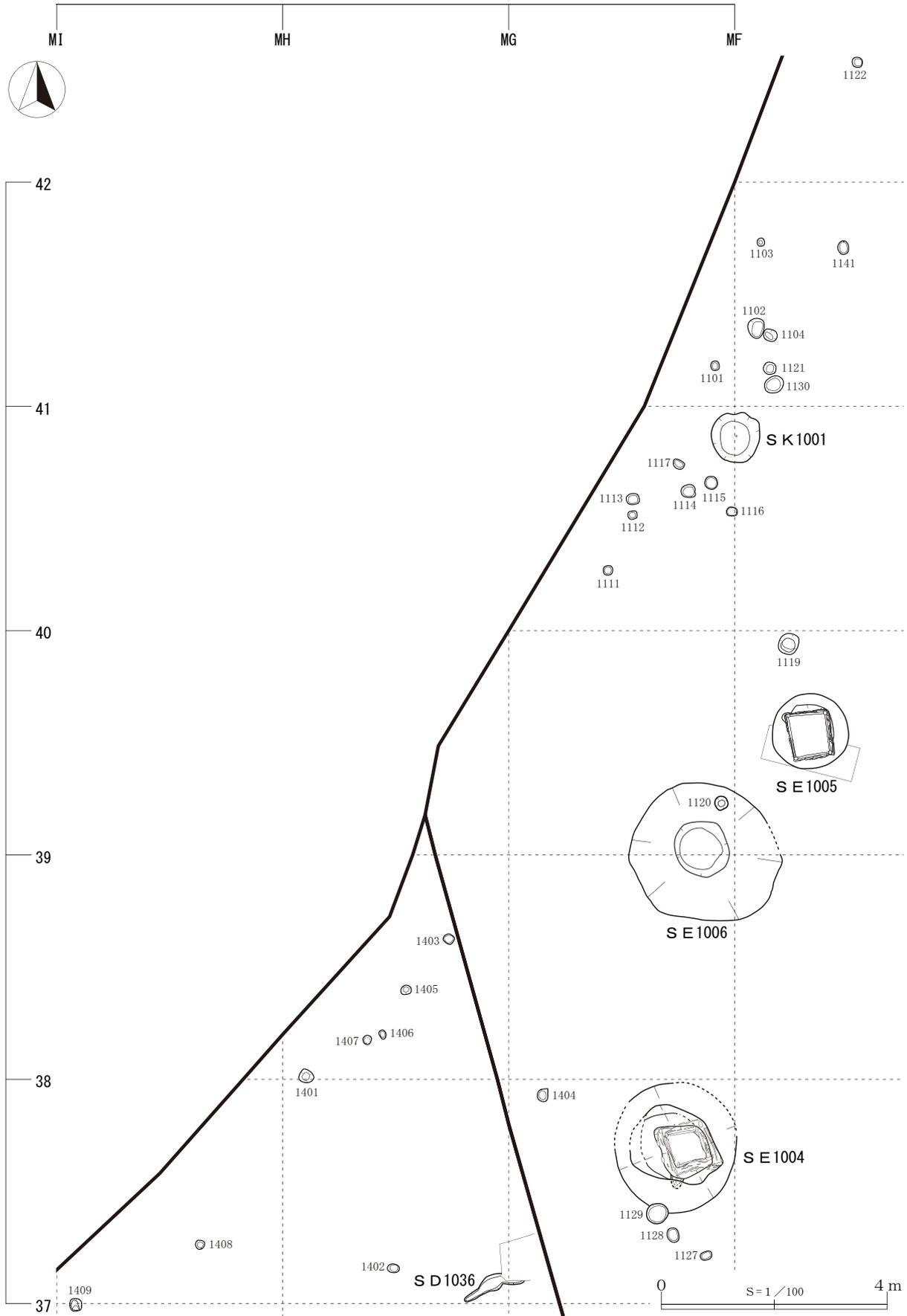
第12図 遺構配置区割図⑤



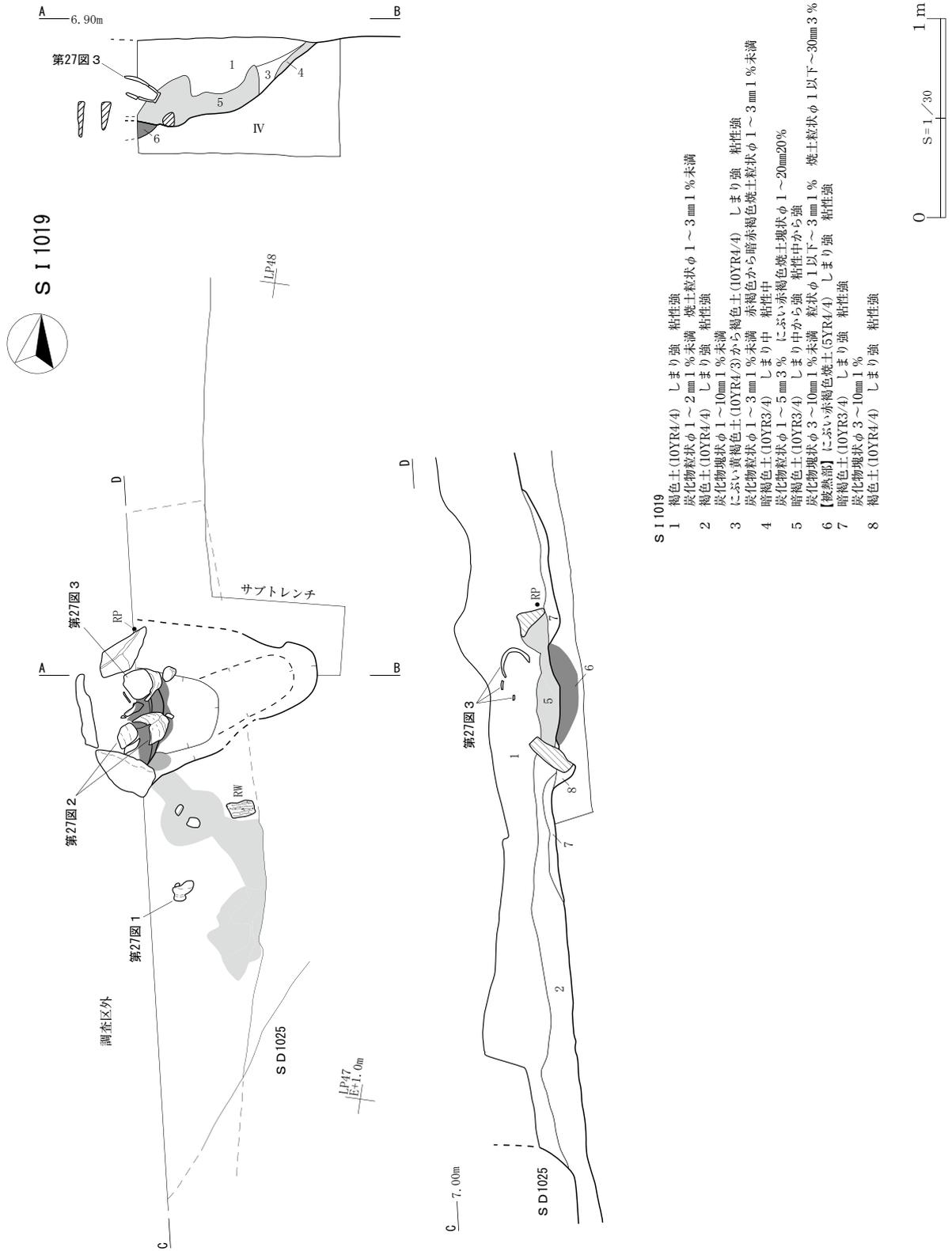
第13図 遺構配置区割図⑥



第14図 遺構配置区割図⑦



第15図 遺構配置区割図⑧



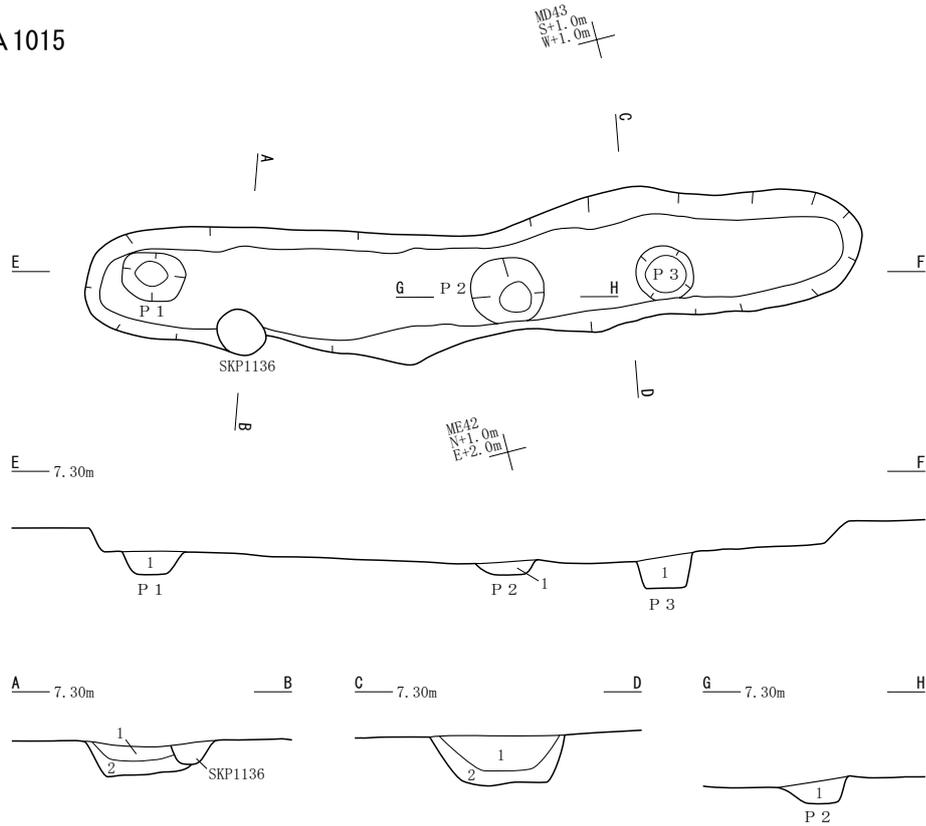
第16図 S I 1019

物・焼土混じり土で、燃焼部上の堆積土であり、カマド本体の崩落土と推測される。8層はカマドの南側で、カマドの袖の芯材である礫の下で確認している。礫を埋め込む際に、穴を穿ち8層を裏込めとしたものと推測される。しかし北側の礫周辺では確認されていない。7層は北側の礫下にあることから、竪穴建物跡の機能時や廃棄後に堆積したものと考えられず、竪穴建物構築時の貼床の可能性がある。竪穴建物の北側の範囲を示す7層が見えなくなる部分が、竪穴建物の立ち上がり付近と判断された。6層はカマド燃焼部である。

《カマド》南東壁の北よりに位置するものと推測される。規模は、現状の長さ1.20m(北東-南西)、幅0.88mで、主軸はN-70°-Eである。燃焼部の被熱の厚さは0.11mである。煙道部は、燃焼部から煙出に向かい緩やかに立ち上がり、煙出直下で急に立ち上がる。裾部はすでに崩落し現状を留めていないが、残された板状の礫により、およそその位置を確認することができる。板状の礫は幅45cm、厚さ7cmで3点出土している。これらは廃棄後に動いたものと思われるが、本来は焚き口付近でコの字形に組み立てられていたものと考えられる。北側と南側の礫が袖石、中央の礫が天井石として機能していたものと推測される。また2点の土師器長胴甕が、カマドの燃焼部上にやや斜めに並んで置かれていたが、北側の底部付近で確認されている円礫は、カマドの裾を構築していた芯材であった可能性がある。

《出土遺物》完形の土師器長胴甕3点(4565.0g)・小型甕1点(665.4g)・高坏1点(34.1g)の他、土師器長胴甕片(100.3g)が出土し、それぞれ図示した(第27・28図1~7、図版11・12)。2・3の長胴甕はカマドの燃焼部上に、やや斜めに並んで置かれ、竪穴建物の廃棄に伴い、カマド内に入れられたものと推測される。4の長胴甕と5の小型甕は、カマドの北側袖石の周辺に破片が散乱している。1は両黒土師器高坏でカマドのやや南で横倒した状態で出土している。その他の6及び、それと同一個体と思われる7の土師器甕片は、1の土師器高坏周辺に散乱していた。このことから、出土土器は、本遺構廃棄時の状態を留めているものと推測される。出土した土器はすべて非ロクロ調整の土師器で、1の高坏は、内外面にミガキが施されている。高台内は指で成形され、高台脚部はやや外反し張り出しているが、端部は丸味を持つ。また高台脚部外面には指ナデによる段がある。胴部は内湾気味に立ち上がり、途中さらに内湾して口縁部へ達する。口唇部は丸味を持つ。2~4の長胴甕は、内外面に調整が施され、5の小型甕は外面にカキ目、内面に木口状工具によるナデが施されている。底部はそれぞれ柱状で、胴部下半から頸部まで内湾気味に立ち上がり、口縁部は外反している。口唇部は比較的平坦で中央は僅かに窪む。また頸部には1及び2条の沈線がある。底部外面は2・4・5に木葉痕、3には笹葉痕が確認できる。以上の特徴から、これらの土器は8世紀中葉のものであると推測される。また6・7は同一個体の長胴甕と考えられる。

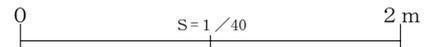
《所見》出土遺物から奈良時代の竪穴建物跡と推測される。5層から出土した炭化物の放射性炭素年代測定(暦年較正年代)で、392~506calAD(1σ)前後の古墳時代中期前後という結果が出ているが、現状では原因は不明である。本遺構は本遺跡内における遺構の中で最古のものである。本遺構廃棄後に、本遺構を切ってSD1025が構築されている。



S A 1015

- 1 暗褐色土(10YR3/4) しまり強 粘性弱
炭化物板状φ 1~3mm 1% 褐色土板状φ 1~3mm 1%
- 2 褐色土(10YR4/4) しまり強 粘性弱
炭化物板状φ 1~3mm 2%
- P 1 にぶい黄褐色土(10YR4/3) しまり中 粘性中
炭化物粒状
- P 2 暗褐色土(10YR3/4)と褐色土(10YR4/4)が7:3で混在
しまりやや強 粘性やや強
炭化物粒状φ 3~5mm 1%
- P 3 暗褐色土(10YR3/4)と褐色土(10YR4/4)が7:3で混在
しまりやや強 粘性やや強
炭化物粒状φ 3~5mm 1%

遺構名	平面形	長軸×短軸(cm)	確認面からの深さ(cm)	底面標高(m)
P 1	楕円形	33×26	13	6.75
P 2	円形	38×34	14	6.71
P 3	円形	30×28	19	6.68



第17図 S A 1015

2 柱穴列

S A 1015柱穴列(第14・17図、図版5)

《位置・確認状況》MC・MD42に位置する。第IV層地山上面を精査中、南北に延びる暗褐色土のプランを確認した。確認時は溝跡を想定していたが、溝の底部で柱穴3基を確認し、本遺構を柱穴列とした。

《重複》S K P 1136に切られる。

《規模・形態》溝状の掘り込み底部に柱穴が3基並んだ柱穴列である。溝状部の規模は、長さ4.12m(北西-南東)、幅0.56~0.70mである。A-B断面での深さ0.19m、C-D断面での深さは0.27mである。全体的に底面が平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。また、底部で検出された柱穴3基の柱間距離は、P 1-P 2、P 2-P 3が、それぞれ1.94m、0.80mで、主軸方向はN-77°-Wである。柱穴の規模は、溝状の掘り込み底部で確認した状態の長軸が0.30m~0.38m、同確認面からの深さは0.13~0.19mである。

《埋土》溝状部分の埋土は2層に分けた。1層は第Ⅲ層由来の暗褐色土で、2層は第Ⅳ層地山由来の褐色土である。本遺構を構築する際、柱や柱穴間に立てた板等を固定するため、人為的に埋められたものと推測される。また柱穴P1～P3の埋土は、P1が第Ⅳ層地山土由来のいり黄褐色土、P2・3は第Ⅲ層土由来の暗褐色土であり、それぞれ廃棄後に埋め戻された人為的堆積と考える。

《出土遺物》土師器坏類(174.1g)・袋物類(72.4g)・器種不明(4.2g)、須恵器坏類3点(10.3g)・袋物類5点(93.9g)、炉壁(31.3g)、鉄製品1点(2.4g)が出土している。鉄製品は割竹状に残存するが、小片のため詳細は不明である。

《所見》遺構の時期は、出土遺物から平安時代と推測される。本遺構は、溝状に掘り込んだ後、さらに柱穴を掘り込み柱を立てたもので、溝部分も埋めた布掘状の柱穴列であったと推測される。柱穴間に板が立てられていた可能性もあるが、その痕跡は確認されていない。本遺構はSD1027同様に区画のための施設と考えられるが、詳細な性格は不明である。

3 井戸跡

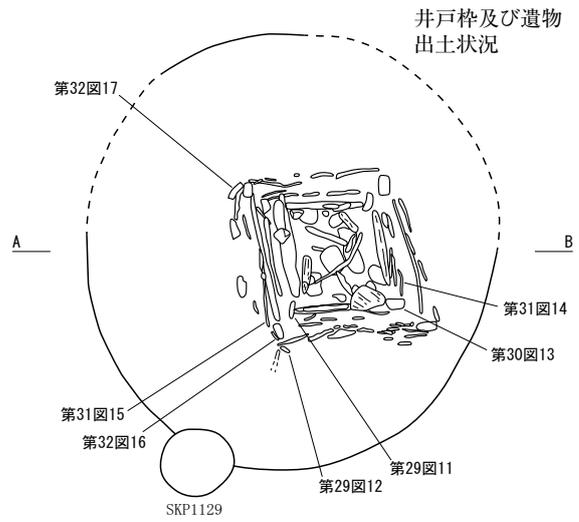
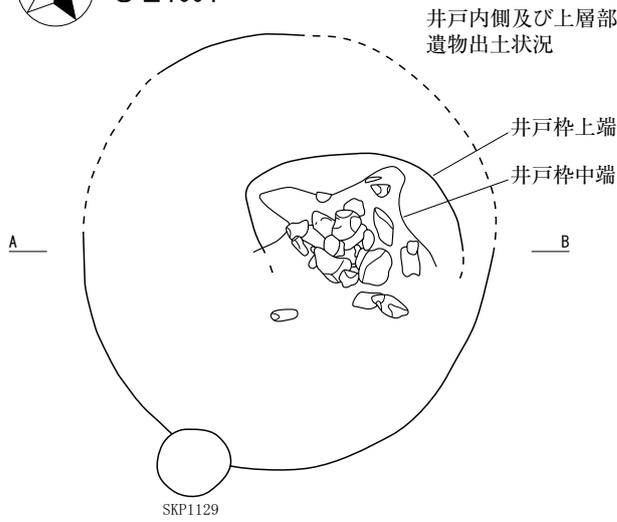
SE1004井戸跡(第15・18図、図版5・6)

《位置・確認状況》ME・MF37に位置する。第Ⅳ層地山上面を精査中、中央が黒褐色土、その周辺に炭化物や焼土粒が混入する褐色土のプランを確認した。

《重複》SKP1129に切られる。

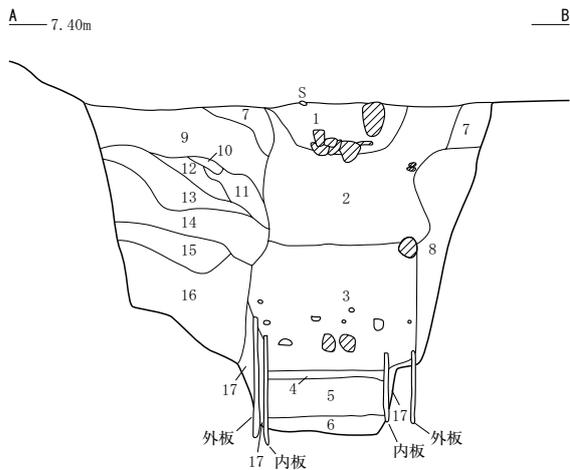
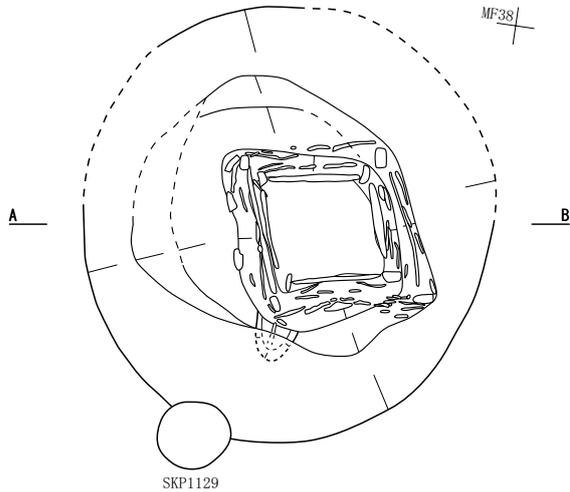
《規模・形態》平面形は長軸2.30m(北西-南東)、短軸2.20mの円形である。確認面から底面までの深さは1.78mである。掘方の底面は平坦で、壁は西側の一部を除き全体的に垂直に近い立ち上がりである。西壁では底部から0.40～0.70mの部分で緩やかに立ち上がる箇所がある。

《井戸枠》掘方内側に、100cm×100cm、80cm×80cmの2つの方形の縦板組隅柱横棧留の井戸枠が二重に埋設されていた。組み立てられていた井戸枠は、底部に近い部分のみが残存する。隅柱は心去材の二方桁が用いられていた。寸法は、内側隅柱が長さ84～88cm×最大幅7～10cm×最大厚6.5～7cmである。平均的な寸法は、長さ86.5cm×最大幅9.3cm×最大厚6.6cmである。一方外側隅柱は、長さ49～62.5cm×最大幅7～9.5cm×最大厚4.2～5.2cmで、平均的な寸法は、長さ56.5cm×最大幅8.3cm×最大厚19.4cmである。内外の隅柱ともに下端木口面はヨキにより杭状に加工されている。また井戸枠の内側に向けた板目面は、使用時の水位の変化が激しいためかどれも腐食が著しい。また横棧の両端はほぞとして加工されていた。内側隅柱では、相対する2本の隅柱の寸法は7～8.5cm×5.5～6cmの方形で、深さ2～3cmの盲孔を穿って横棧を嵌め込んでいた。またこれに直交する隅柱に対しては、盲孔のやや上に抉りを入れて横棧を当てがって連結した状態が確認できる。抉りは、南東内側隅柱のみ腐食のため不明であるが、他の3本では確認している。寸法は8～8.5cm×3～6cmである。一方外側隅柱は、内側ほど残存状態が良くない。そのため盲孔の有無は不明である。腐食のため上部を欠損しているが、抉り痕を確認することができ、内側同様横棧を当てていたことが推測される。縦板は、内外隅柱外側に、横棧に沿って隙間なく重ねて並べ立られていた。現位置を留めた縦板を52枚確認している。縦板は板目板を使用し、そのほとんどが木表面を外側に向けて配置していた。内側に配置された縦板は25枚で、年輪割された心去材の板目板である。上端木口面は腐食しているため詳細は不明であるが、下端木口面はヨキにより平坦に加工されていた。2枚のみ下端木口面が矢板状に加工されて



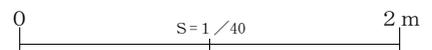
MG38
E+2.0m

完掘及び井戸枠
出土状況



S E 1004

- 1 黒褐色土(10YR3/1) しまり強 粘性強
炭化物粒状φ1以下~2mm 1%未満 明赤褐色焼土粒状φ1~2mm 1%未満
- 2 黒褐色土(10YR3/1)~黒褐色土(10YR3/2) しまり強 粘性強
炭化物粒状φ1以下~3mm 1%未満 赤褐色焼土粒状φ1~3mm 1%未満
にぶい黄橙色粘土塊状φ1~10mm 1%未満 褐色土塊状φ1~10mm 3%
礫φ40mmと70mm 2個
- 3 黒色土(5Y2/1) しまり弱 粘性強
炭化物粒状φ1mm以下 1%未満
- 4 黒色粘土(5Y2/1) しまり弱 粘性強
玉砂利φ40mmがまばらに混在
- 5 黒色土(5Y2/1) しまり強 粘性強
- 6 オリーブ黒色粘土(5Y3/2) しまり強 粘性強
- 7 黒褐色土(10YR3/1) しまり強 粘性強
炭化物粒状φ1~3mm 1%未満 明赤褐色焼土粒状φ1~3mm 1%未満
にぶい黄橙色粘土塊状φ1~10mm 1%未満 褐色土塊状φ1~10mm 1%
- 8 にぶい黄橙色粘土(10YR7/2) しまり強 粘性強
炭化物粒状φ1~3mm 1%未満 暗褐色土塊状φ30mm・板状φ10~30mm 20%
- 9 褐色土(10YR4/4) しまり強 粘性強
炭化物粒状φ1~3mm 1%未満 明赤褐色焼土塊状φ1~10mm 1%未満
にぶい黄橙色粘土(10YR7/2) しまり強 粘性強
- 10 黒褐色土(10YR3/1) しまり強 粘性強
炭化物粒状φ2mm 1%未満 にぶい黄橙色粘土塊状φ10~30mm 5%
- 11 にぶい黄橙色粘土(10YR7/2) しまり強 粘性強
黒褐色土塊状φ1~20mm 3%
- 12 にぶい黄橙色粘土から砂(10YR7/2) しまり強 粘性強
暗褐色土板状φ3~30mm 15%
- 13 黒褐色土(10YR3/1) しまり強 粘性強
炭化物粒状φ2~5mm 1%未満
にぶい黄橙色粘土粒状φ1mm・塊状φ30~100mm 5%
- 14 にぶい黄橙色粘土から砂(10YR7/2) しまり中 粘性強
暗褐色土板状φ5mm 1%・粒状φ5mm 1%未満
- 15 にぶい黄橙色粘土から砂(10YR7/2) しまり弱 粘性強
炭化物粒状φ2mm 1%未満
- 16 にぶい黄橙色粘土から砂(10YR7/2) しまり強 粘性強



第18図 S E 1004

いた。寸法は、木口面が平坦な板は、長さ19～78cm×最大幅5.4～18cm×最大厚0.8～3.5cmで、平均的な寸法は、長さ48.3cm×最大幅13.4cm×最大厚1.7cmである。矢板状の板は、長さ64.5～70cm×最大幅15cm×最大厚2cmで、平均的な寸法は、長さ67.3cm×最大幅15cm×最大厚2cmである。一方、外側に配置された縦板は27枚で、内側同様に年輪割された心去材の板目板である。上端木口面はやはり腐食している。下端木口面は、内側が平坦に調整加工された板が中心であるのに対し、外側は矢板状に加工されているものが23枚で、平坦なものは4枚である。寸法は、下端木口面が平坦なものが、長さ12.4～42.5cm×最大幅5.6～15.2cm×最大厚0.8～1.7cmで、平均的な寸法は、長さ21.3cm×最大幅9.7cm×最大厚1.8cmであり、掘方内に配置され、一部底部に押し込んで固定していた。一方矢板状の板は、長さ16.8～67cm(残存値)×最大幅6～17.7cm×最大厚0.8～1.9cmで、平均的な寸法は、長さ36.2cm×最大幅12cm×最大厚1.5cmである。また、外側の縦板のいくつかは掘方内に置かれたものでなく、掘方底部に突き刺して固定していた状況を確認している。

《埋土》17層に分けた。1～6層は井戸枠内埋土であり第Ⅲ層土由来の黒褐色・オリブ黒色粘土で、3層以下はグライ化している。一方、7～17層は井戸枠を固定するために埋められた裏込め土で、井戸枠構築後、直ちに埋められたと考えられる。7・11・14層は第Ⅲ層土由来の黒褐色・黒色土で、他は第Ⅳ層地山由来の褐色土からにぶい黄褐色粘土・砂である。17層はグライ化したものと思われる。すべて人為的な埋め戻し土である。17層は、井戸枠内に内側の井戸枠をはめ込む際の裏込め土と推測される。5・6層は、本遺構構築時に掘り上げ井戸枠を組み立てた後、井戸枠の地盤を固定することを目的に埋められた可能性がある。その後、5層上面に径4～6cmの小礫を敷き詰めている。4層は井戸機能時に堆積したものと考えられ、5層上面の玉砂利は、濁りのない水を得るための工夫と考えられる。1～3層は、廃棄に際し一括して埋め戻されたものと推測される。

《出土遺物》埋土から、土師器坏類(305g)・袋物類(586.1g)・器種不明(26.8g)、須恵器坏類2点(3.7g)・袋物類4点(86.8g)、鉄滓(155.4g)、炉壁(14.3g)、木製品では曲物片や板材片、石製品の砥石(1170.0g)が出土した。土器は1～4層の井戸枠内埋土上層に集中して出土している。また1層中で最大幅13cmの鉄滓や砥石片に混じり、最大幅20cmの大小の礫がまとまって出土している状態を確認するとともに、井戸枠内3層下位からも、礫を廃材と共に多量に投げ入れたと考えられる状態を確認している。またその礫に混じって曲物の細片も出土している。これら出土遺物の内、土師器甕1点・壺1点、須恵器甕1点、井戸枠構成材7点、棒状木製品、砥石(第28～32図8～18・第37図43、図版12・18・19・24)を図示した。8・9は非口クロ成形で、8は小型土師器甕口縁から頸部片で、口縁部が僅かに外反している。9は内黒土師器壺頸部から肩部片である。10は須恵器甕片で、内外面に平行叩きが施されている。11～17は井戸枠構成材で、11～13は隅柱で11・13が内隅柱、12は外隅柱である。それぞれ下方木口面が11・13は平坦に、12では杭状に加工されている。また13は、ほぞ穴が他の隅柱よりも多く転用材の可能性がある。14～17は縦板である。14は内側で下方木口面が平坦に、15～17は外側で下方木口面が矢板状に加工されている。18は棒状木製品で、全体的に丸味を帯びた加工がされている。43は砥石で、S E 1005の4層出土破片と接合した。表面に墨がたれ落ちた痕跡が残る。また井戸枠構成材の内、内外の南西隅柱(11・12)2本は放射性炭素年代測定を実施した。

《所見》S E 1005同様、井戸枠を伴う井戸である。遺跡内では、平成13・14年度調査区を含め8基の井戸跡が確認されているが、井戸枠を設けていたのは、本遺構とS E 1005のみである。井戸枠を設け

ることにより濁りがない清水が得られやすい。そのためこれらの井戸は、他の6基の井戸とは異なる使用目的があった可能性がある。井戸枠内5層上に敷き詰められた小礫は、水を浄化する目的で敷かれたものと考えられる。底部に小礫を敷き詰めた状態は、他にS E 1005やS E 1007でも確認している。また1層中及び3層下位に入れられた比較的大きな礫は、廃棄儀礼に関わる可能性がある。一方、井戸枠は二重に残った状態を確認しているが、土層観察の結果、4～6層が内側井戸枠の外部とつながらず、内側縦板によって隔てられていることや、外側縦板は矢板状の板が中心で、そのいくつかは掘方内に置かれたものでなく、掘方底部に突き刺して固定していたものもある。ただし17層は裏込め土であるが、グライ化の影響からそれぞれ内外の裏込め土としての判別ができなかった。よって井戸枠が当初から二重構造で造られ、内側井戸枠は集水施設であった可能性がある。しかし、内外の南西隅柱の放射性炭素年代測定(暦年較正年代)では、それぞれ1023～1147cal A D (1 σ)・1016～1119cal A D (1 σ)の年代値を示し、前後関係は判断し難い。いずれにしる井戸枠の設置において、外側縦板は矢板状、内側縦板は平坦なものという一定の規格性が見られるが、S E 1005と異なり統一性が弱い。したがって年代は、裏込め土や井戸枠内から出土した遺物・放射性炭素年代測定の結果より、11世紀前葉～12世紀前半にかけ構築されたものと思われる。本遺構は、日常生活用及び手工業生産用に使用されたと考えられるが、詳細は不明である。

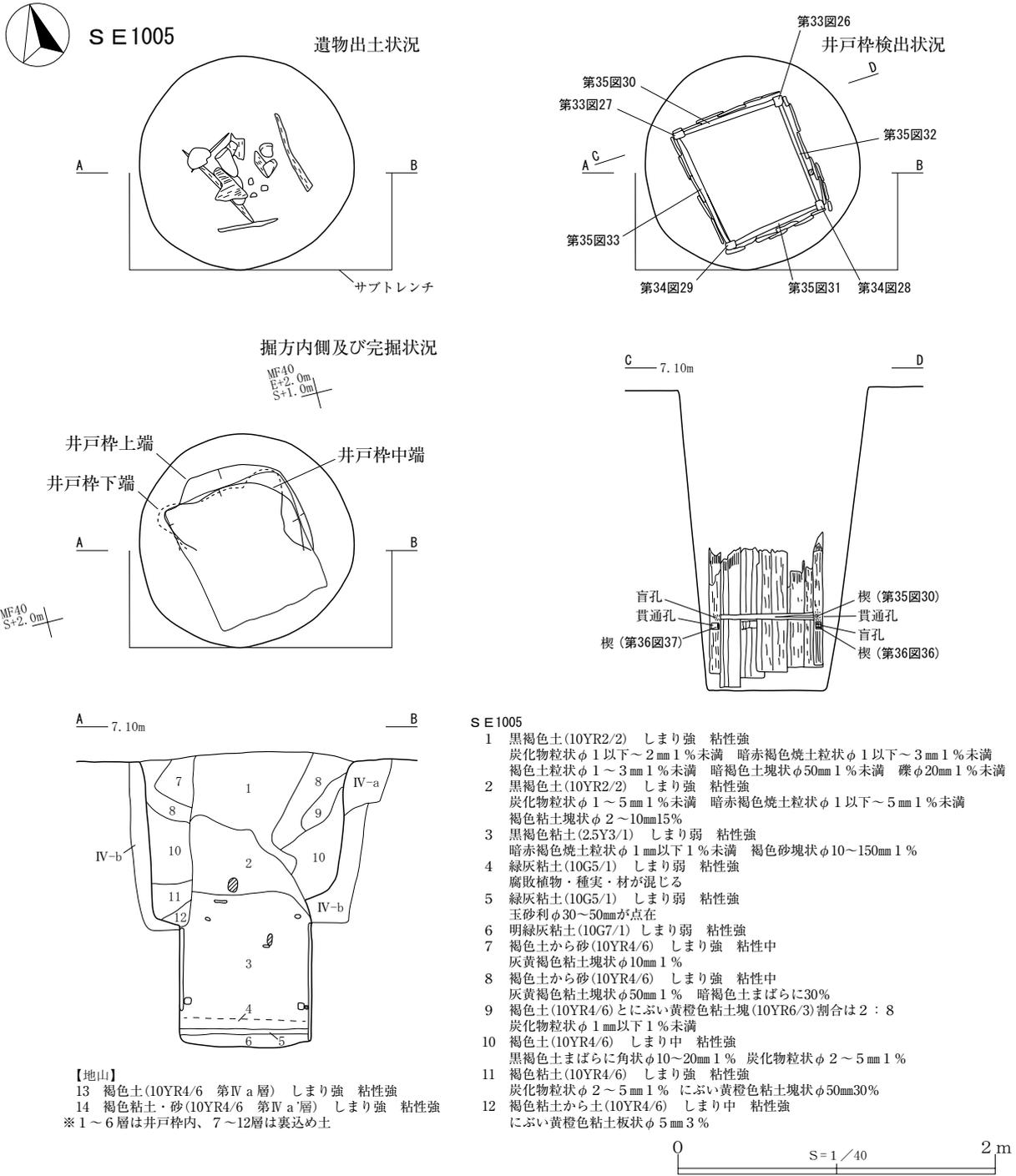
S E 1005井戸跡(第15・19図、図版6)

《位置・確認状況》ME 39に位置する。第IV層上面を精査中、暗褐色土の周辺を褐色土が囲むプランを確認した。

《重複》なし。

《規模・形態》平面形は、長軸1.36m(東-西)、短軸1.32mの円形である。確認面からの深さは、1.82mである。底面は平坦で、壁は底部から0.70～0.80mまで垂直に立ち上がり、その後緩やかに立ち上がった後、開口部まで再度垂直に立ち上がる。

《井戸枠》掘方内側に、約80cm×90cmの方形の縦板組隅柱横棧留の井戸枠が埋設されていた。組み立てられていた井戸枠は、本来地表まで延びていたものと考えられるが、腐食のため底部より高さ0.8m前後までが残存する。隅柱は4本確認され、ミカン割による二方桁の心去材が使用されていた。寸法は、長さ87～90.7cm×最大幅7.3～8.9cm×最大厚4.8～5.7cmで、平均的な寸法は、長さ88.5cm×最大幅8cm×最大厚5.3cmである。上端木口面は腐食し、下端木口面はヨキにより平坦に整えられている。隅柱はそれぞれ板目面に貫通孔を、桁目面には板目面の貫通孔の上下どちらかに盲孔を穿つ。また隅柱の上端は腐食のため、全体像は不明だが、抉りを設けて上部構造が続いていたと推測される。北東隅柱では貫通孔を上、盲孔を下に設け、それぞれ北西隅柱、南東隅柱に対応している。北西隅柱は盲孔を上、貫通孔を下にし、それぞれ北東隅柱、南西隅柱に対応する。南東隅柱は貫通孔を上にし、盲孔を下に設け、それぞれ南西隅柱、北東隅柱に対応する。また南西隅柱は盲孔を上にし、貫通孔を下に設け、それぞれ南東隅柱、北西隅柱と対応している。対応した貫通孔や盲孔は両端をほぞに加工した横棧によって連結している様子が確認できた。中には貫通孔や盲孔に楔を入れたもの、北東隅柱と北西隅柱を結ぶ横棧の先端に割れ目を入れてから楔を刺し入れ、連結の際のずれを調整しているものも確認された。また縦板が横棧に沿って隙間なく重ねて並べ立てられていた。現位置を留めた縦板は、26枚確認している。縦板は一部不明なものもあるが、それ以外はすべて年輪割された心去材



第19図 S E 1005

の板目板が使用されていた。上端木口面は腐食のため詳細は不明である。一方下端木口面は粗いものもあるが、ほとんどはヨキにより平坦に加工されていた。また板の向きは、木の裏面を外側に向けていたものも一部あるが、基本的には木の表面を外側に向けて置かれていた。内側の面は、使用時には直接水に触れているためどれも腐食が著しい。縦板の寸法は、長さ12~90cm×最大幅8~22.7cm×最大厚0.9~3.2cmで、平均的な寸法は長さ68.3cm×最大幅16.1cm×最大厚2.1cmである。

《埋土》12層に分けた。すべて人為的な埋め戻し土である。1~6層は井戸枠内堆積土である。その内1~3層は、第Ⅲ層土由来の黒褐色土・粘土である。また4~6層は、グライ化した第Ⅳ層地山

由来の緑灰・明緑灰色粘土である。7～12層は井戸枠構築後に、井戸枠を固定するために埋められた裏込め土で、すべて第Ⅳ層地山土由来の褐色土・粘土である。6層は、本遺構構築時に、井戸枠を組み立てた後、井戸枠の地盤を固定することを目的に埋められた可能性がある。その後、径4～6cmの小礫を敷き詰めている。したがって、6層上面の高さで水を得るために使用されていたものと推測される。4・5層は使用時の堆積と考える。また1～3層は、廃棄の際一気に埋め戻されたものと考えられる。

《出土遺物》埋土から、土師器坏類(458.6g)・袋物類(354g)・器種不明(81.7g)、須恵器坏1点(6.5g)・袋物類(93.6g)、曲物や棒状木製品、板材片、鉄滓1点(8.6g)、種実が出土している。土器は1～3層の井戸枠内埋土に集中して出土している。また井戸枠内の3層から棒状木製品、4層下位からは曲物の他、砥石、トチ・クルミの種実等が出土している。これら出土遺物の内、土師器坏3点・甕2点、須恵器袋物類2点、井戸枠構成材12点、曲物、棒状木製品、砥石(第32～37図19～43、図版12・20～24)を図示した。19～21はロクロ調整の土師器坏片で、20・21の底部切り離しは回転糸切りである。また21の底部は柱状気味である。22・23はともにロクロ調整の土師器甕片で、22は口縁部がくの字状に外反し、口端を斜め上につまみ出し、口唇部は外傾面を形成する。23は底部で底部切り離しは不明であるが、底部にヘラを抜いた際の痕跡が残る。24・25はそれぞれ須恵器袋物類で、24は甕片、25は器種不明の袋物類で外面に平行叩き、内面に同心円状の叩き後、内外面に横ナデを施す。19・22・25は裏込め土からの出土である。26～40は井戸枠構成材で、26～29は隅柱で、下方木口面は平坦に加工されている。30～33は横棧で、それぞれ両端がほぞに加工されている。また30では、一方の先端であるほぞ部分に調整のための楔が打ち込まれている。34・35は縦板で、下方木口面が平坦に加工されている。36～40は横棧を固定調整するための楔である。41は曲物片で、42は棒状木製品である。また43の砥石はS E 1004の1層出土片と接合している。また29の南西隅柱は放射性炭素年代測定を実施した。

《所見》S E 1004同様、井戸枠を伴う井戸である。裏込め土や井戸枠内から9・10世紀代の遺物が出土しているが、南西隅柱の放射性炭素年代測定(暦年較正年代)では、1049～1157cal A D(1 σ)の値を示す。このため、本遺構は平安時代後半の11世紀中葉～12世紀中葉に構築されていたものと思われる。遺跡内では、前述の通り8基の井戸跡が確認されているが、井戸枠を設けていたのは、本遺構とS E 1004のみである。井戸枠を設けることで濁りがない清水が得られる。そのため、この2基の井戸は、他の6基の井戸とは異なる使用目的があったことは前述した。井戸枠内の6層上に敷き詰められた小礫は、やはり水を浄化する目的で敷かれたものであろう。底部に小礫を敷き詰めた状態は、他にS E 1004やS E 1007でも確認している。一方、1～4層中に入れられた比較的大きな礫は、廃棄に伴って入れられた可能性がある。4層下位から出土したトチ・クルミの種実は、本遺構使用時か、廃棄時の儀礼に関するものの可能性が考えられる。また縦板は、下端木口面が平坦に整えられていることから、規格性のある縦板を使用していたことが推測される。本遺構は、日常生活用及び手工業生産用に使用されたと考えられるが、詳細は不明である。

S E 1006井戸跡(第15・20図、図版6)

《位置・確認状況》ME・MF 38・39に位置する。確認調査時に、第1トレンチ底面の第Ⅳ層上面を精査中、部分的に攪乱を受けた炭化物が混じる黒・黒褐色土のプランを確認した。

《重複》S K P 1120に切られる。

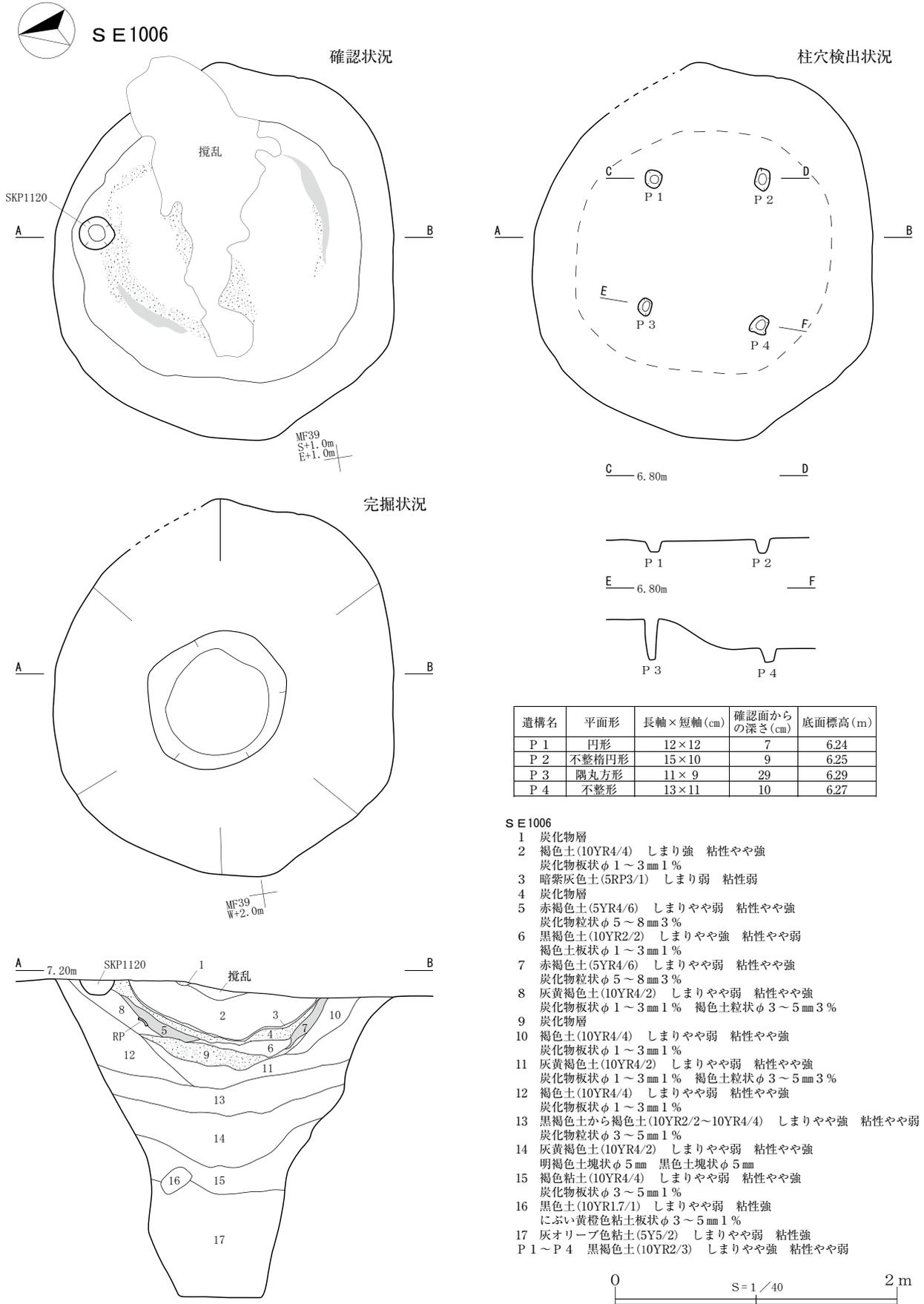
《規模・形態》平面形は長軸2.69m(東-西)、短軸2.40mの円形である。確認面から底面までの深さは2.28m、底面は平坦である。壁は北側の一部が内湾しているが、底面より約1m程垂直に立ち上がった後、急な傾斜で開口部まで立ち上がる。

《柱穴群》11・12層中で長軸0.09~0.15m、深さ0.07~0.29mの柱穴4基を確認した。柱間はそれぞれ、P 1 - P 2 が0.77m、P 1 - P 3 が0.93m、P 3 - P 4 が0.83m、P 2 - P 4 が1.04mである。

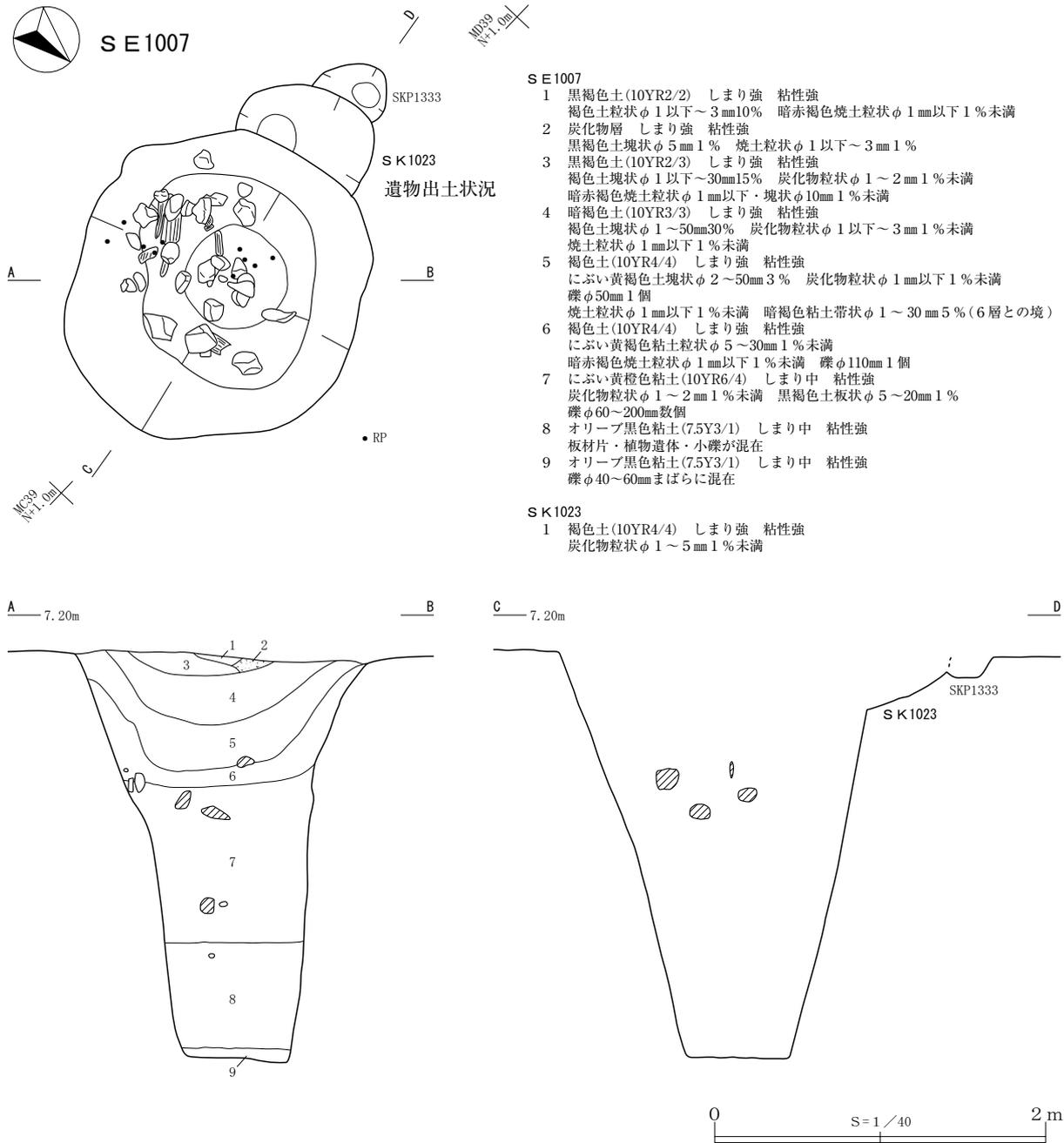
《埋土》17層に分けた。1・4・9は炭化物層、3は灰層。5・7層は焼土堆積層、6・16層は、第Ⅲ層土由来の暗褐色土、2・10・11・15は第Ⅳa層地山土由来の褐色土、8・12・14はⅣb層地山由来の灰黄褐色土、13層は第Ⅲ層土由来と第Ⅳa層地山土由来の混合土である。17層は地下水の影響によりグライ化した粘土である。すべて人為的な堆積土と推測される。1~10層は、11層堆積後、一時的に間隔を開けて埋め戻されたと考えられる。炭化物層や灰層、焼土層が堆積していることから、火を焚いた可能性も考えられる。しかし、焼土が塊状に堆積し原位置を留めていないことや、焼土の広がり本遺構の他の壁面で確認されていないことから、周辺の焼土や炭化物混入土等を入れて埋め戻した可能性が高い。11~17層は、井戸廃絶時に埋め戻されたものと考えられる。柱穴の埋土は、それぞれ第Ⅲ層土由来と考えられる黒褐色土であり、こちらも人為的な埋め立てと推測する。

《出土遺物》埋土から、土師器坏類(1240.5g)・袋物類(2573.2g)・器種不明(98.6g)、須恵器坏類(坏蓋含む)5点(121.0g)・袋物類(441.1g)、有孔石製品1点(48.6g)、鉄滓(3.7g)・炉壁(7.8g)及び板材片が出土した。土器は1~8層の井戸枠内埋土上層に集中して出土している。出土した遺物の内、土師器坏6点・甕5点、須恵器坏蓋1点・甕1点・壺2点、有孔石製品(第37・38図44~59、図版12・13・24)を図示した。44・46・47・49はロクロ調整の土師器坏、45・48は同じく高台付坏である。44・45・47・48は内黒及び両黒で、47の底部はやや柱状気味である。また49は柱状高台の底部で、底部切り離しは静止糸切りである。50~54は土師器甕で、50・51はロクロ調整、52・54は非ロクロ調整である。50・51は口縁部が外反し、口唇部は外傾面を形成している。52は両黒土師器甕の口縁部でミガキの後に隆線及び沈線が施されている。53は口縁から頸部片で、口縁部は外反し口唇部先端は比較的平坦である。また内外面にカキ目調整を施す。また54は砂底の底部片である。55~58は須恵器である。55は須恵器坏蓋である。天井部切り離しは回転ヘラ切りで、切り離した後、天井部周辺にナデ調整が施されている。つまみはない。天井部から口縁部に直線的に下り、端部は斜め下につまみ出され、外傾面を形成する。56は内外面平行叩きの甕胴部片である。57は壺頸部片である。58は貼付高台の須恵器壺底部である。ロクロ調整で、底部切り離しは不明である。底部を中心部から拡散する放射状のヘラ削りで調整後に高台を貼り付け、ロクロで再度調整している。高台は外側へ張り出し、端部の断面は接地部が隅丸の方形である。59は用途不明の有孔石製品である。その他15層及び17層から板材片が各1点出土し、15層出土板材片は放射性炭素年代測定を実施した。

《所見》本遺構は素掘の井戸である。本遺跡内では8基の井戸跡が確認され、その内素掘の井戸跡は、本遺構を含め6基である。9層出土の炭化物及び15層出土の板材片の放射性炭素年代測定(暦年較正年代)結果では、それぞれ899~981calAD(1σ)、996~1039calAD(1σ)の値を示している。結果、9層出土の炭化物が、その下層に当たる15層出土の板材片よりも古い年代が算出されるという逆転現象が起きている。これは、9層の埋め立てに伴って古い時代の板材が周辺から紛れ込んだものと推測



第20図 S E 1006



第21図 SE1007

される。また遺構からは9・10世紀代と推測される遺物が中心に出土しており、出土板材の年代測定結果と合わせると、本遺構の時期は10世紀末~11世紀前半の平安時代中葉と推測される。また、11・12層中で杭痕とみられる4基の柱穴が検出されている。柱穴群は、本井戸の廃棄時の埋め戻し後に構築されている。よって、井戸の廃棄に伴う祭祀儀礼等の可能性も考えられるが、詳細は不明である。また、柱穴群はその打ち込み面がはっきりしておらず、井戸の埋め戻しに際し、どの時期に構築されたのか不明である。井戸の堆積土上層には、炭化物層や灰層及び焼土塊状の堆積が見られる。これにより、火を焚いた可能性も考えられるが、焼土塊の堆積状況は原位置を留めておらず、周辺の壁面にも強い被熱の痕跡がない。以上より周辺の焼土及び炭化物等を井戸埋土の窪みに埋めたものと考えられる。本遺構は、日常生活用及び手工業生産用に使われたと考えられるが、詳細は不明である。

S E 1007井戸跡(第14・21図、図版7)

《位置・確認状況》MC 38・39に位置する。第Ⅳ層地山上面を精査中、黒褐色・暗褐色土に炭化物・焼土粒の混じるプランを確認した。

《重複》S K 1023を切る。

《規模・形態》平面形は長軸1.93m(東-西、残存値)、短軸1.78mの略円形で、確認面からの深さは2.49mである。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。

《埋土》9層に分けた。1～4層は第Ⅲ層土由来の黒褐色・暗褐色土を基調とし、5～7層土は第Ⅳ層地山土由来の褐色土・にぶい黄褐色粘土を基調とする。8・9層はグライ化したオリブ黒色粘土を基調とする。9層以外はすべて人為的な堆積土と推測される。本遺構が構築された直後に底面上に径4～6cm小礫を敷き詰めている。9層は井戸機能時の堆積と考えられる。6～8層は、井戸の廃棄に際して埋められたものと推測される。

《出土遺物》埋土から縄文土器(185.8g)、土師器坏類(1641.0g)・袋物類(1458.6g)・器種不明(96.2g)、須恵器坏類(33.8g)・袋物類(118.5g)、炉壁(313.6g)、鉄滓1点(197.5g)の他、板材片が数点6～8層から出土している。土師器や須恵器は1～6層で集中して出土している。その他、一部被熱した最大径20cmの大小の礫を1～7層で確認している。出土した遺物の内、土師器坏12点・皿1点・甕7点・耳皿1点、須恵器甕1点(第39・40図60～81、図版13)を図示した。60～71はロクロ調整の土師器坏片で、64のみが内黒である。また64～70は底部片で、外面はやや柱状気味である。65と68には内側底面の中央にロクロ調整時の指押さえの痕跡が残っている。71は柱状高台の小型坏の底部である。72は内黒土師器の高台付皿である。73は土師器耳皿と考えられ、口縁端部は内側へつまみ出されている。74～80は土師器甕片である。74・75・78・80は非ロクロ調整、76・77・79はロクロ調整である。74・75・76の口縁部は外反し、74の口唇部先端は丸味を持つ。一方、75の口唇部は僅かに上方へ引き出され外傾面を形成する。76の口縁端部は真上につまみ出され、先端は丸味を持つ。77は頸部に明瞭なロクロ調整による段を持つ。78は多条沈線の頸部片で、3条の沈線が確認できる。一方、79は底部片で直線的に外傾して立ち上がる。80は砂底の底部片であるが、内面にはナデを施している。81は須恵器甕胴部片で、叩き成形の痕跡が残る。その他8層下位出土板材片は放射性炭素年代測定を実施した。

《所見》素掘の井戸である。本遺構の時期は、出土遺物からみると10世紀代と推測される。しかし、8層下位出土板材の放射性炭素年代測定(暦年較正年代)結果では、1049～1158cal A D(1 σ)の値が示された。よって11世紀中葉～12世紀中葉の可能性も考えられ、このことから平安時代後期と推測される。9層上で出土した径4～6cmの小礫は、水を浄化する目的で敷き詰められたものと推測される。1～7層中に見られるやや大きめの礫は、廃棄に伴い入れられたものと考えられる。本遺構は、日常生活用及び手工業生産用に使用されたと考えられるが、詳細は不明である。

S E 1008井戸跡(第14・22図、図版7)

《位置・確認状況》MB 42・43に位置する。確認調査時に第3トレンチを精査中、第Ⅳ層地山上面で暗褐色土に焼土や炭化物の混じるプランを確認した。

《重複》なし。

《規模・形態》平面形は長軸1.96m(東-西)、短軸1.92mの円形である。確認面からの深さは2.08m

である。底面は平坦で、壁は底部から急に立ち上がる。

《埋土》8層に分けた。1～4層は第Ⅲ層土由来の黒色から黒褐色土を、6・7層は第Ⅳa層地山土由来の褐色土をそれぞれ基調としている。8層は地下水の影響でグライ化した粘土で、すべて人為的な一括埋め戻しと考えられる。5～8層は、井戸の廃棄に伴い埋められたものである。その後、しばらく上部が窪んで、開口部が開いている状態になっていたものと推測され、ある一定の時期を置いた後、遺跡内を平坦にならすため1～4層が埋め立てられたものと推測される。

《出土遺物》埋土から、土師器坏類(688.5g)・袋物類(1246.8g)・器種不明(65.2g)、須恵器坏類4点(11.2g)・袋物類(405.8g)・器種不明(2.9g)、白磁碗1点(35.4g)、釘1点(5.0g)、鉄滓(158.4g)、棒状木製品、板材片2点が出土した。土器は上位層で集中して出土している。白磁碗は4層からの出土である。出土した遺物の内、土師器坏2点・甕5点、須恵器皿1点・甕2点・壺1点、白磁碗1点(第40・41図82～93、図版13・14)を図示した。82・83はロクロ調整の土師器坏で、82は内黒の高台付坏で、高台部の断面形は接地部が隅丸の三角形である。83は底部片である。84～86・88はロクロ調整の土師器甕片である。84は口縁部がくの字状に外反し、口縁側面には2条の段を持ち、口唇部は外傾面を形成している。一方、87は非ロクロ調整の土師器甕頸部片であるが、外面に8条の沈線が確認できる。89は須恵器高台付皿である。90～92は須恵器甕片で、90は肩部、91は胴部で叩き成形である。92は口縁から頸部で、口縁は外反し先端の口端部は上につまみ出され、口端部直下の面に稜線を施す。93は白磁碗で、内外面胴部上半より上は施釉されている。高台から底部外面は露胎である。底部外面中央は、底部切り離しの際に残された円錐状の削り残し(兜巾)が見られ、高台部外形は下位が狭い台形状である。また内面見込み部で明瞭な段及び焼成時の灰かぶりが残る。太宰府編年白磁Ⅱ類の玉縁口縁の碗と考えられる。この他、8層から出土した棒状木製品の放射性炭素年代測定を実施した。

《所見》素掘りの井戸である。本遺構の年代は、出土遺物が9・10世紀代が中心であることから、10世紀代の年代が考えられる。しかし、8層出土棒状木製品の放射性炭素年代測定(暦年較正年代)結果では、1049～1158calAD(1 σ)の値を示した。よって時代が降って11世紀～12世紀半ばの可能性もある。以上から本遺構の年代は平安時代後期と推測される。4層から出土した白磁碗片は12世紀初頭に当たり、井戸埋め戻し時に混入した可能性も想定される。また本遺構は、日常生活用及び手工業生産用に使用されたと考えられるが、詳細は不明である。

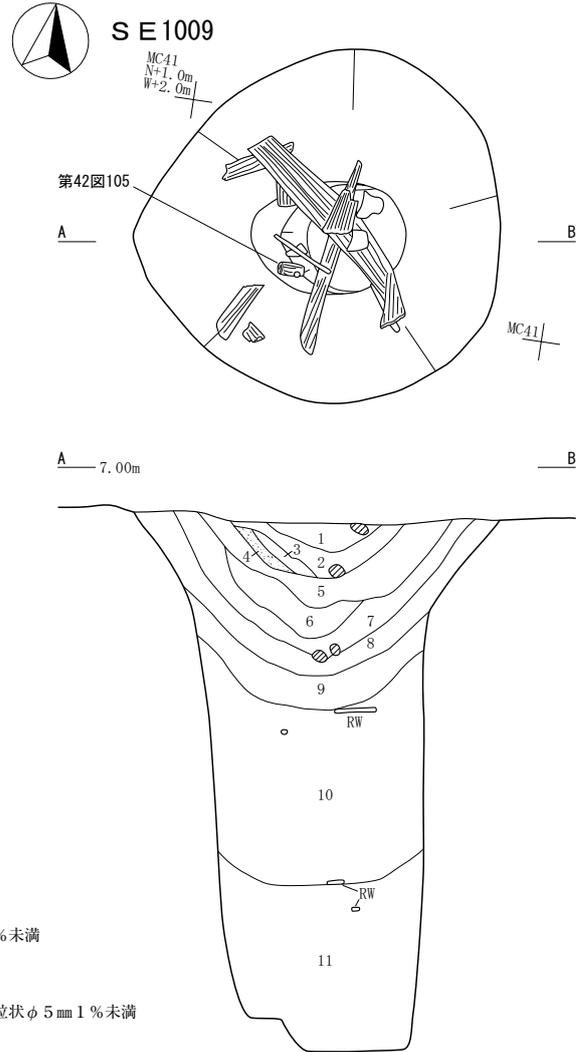
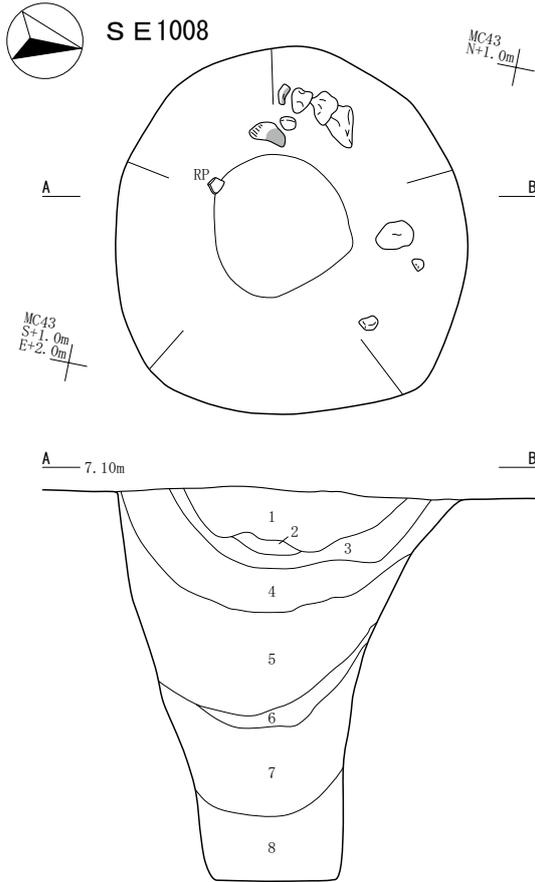
SE1009井戸跡(第14・22図、図版7)

《位置・確認状況》MC40・41に位置する。確認調査時に第3トレンチを精査中、第Ⅳ層地山上面で暗褐色土のプランを確認した。

《重複》なし。

《規模・形態》平面形は長軸1.93m(東-西)、短軸1.87mの円形である。確認面からの深さは2.86mである。底面は平坦であるが、西側では底部より0.20m程一段高い平坦な段がある。壁は、底部から2mほど垂直気味に立ち上がり、その後は開口部に向かって緩やかに立ち上がる。

《埋土》11層に分けた。1～3・8層は第Ⅲ層土由来の暗褐色から黒色土をそれぞれ基調としている。6・7・10層は第Ⅳ層地山土由来の褐色から黄褐色、9層はグライ化した第Ⅳ層地山土と酸化土の混合土、11層は地下水の影響によるグライ化粘土である。基本的には、地山土や炭化物及び焼土等が含

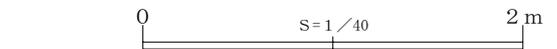
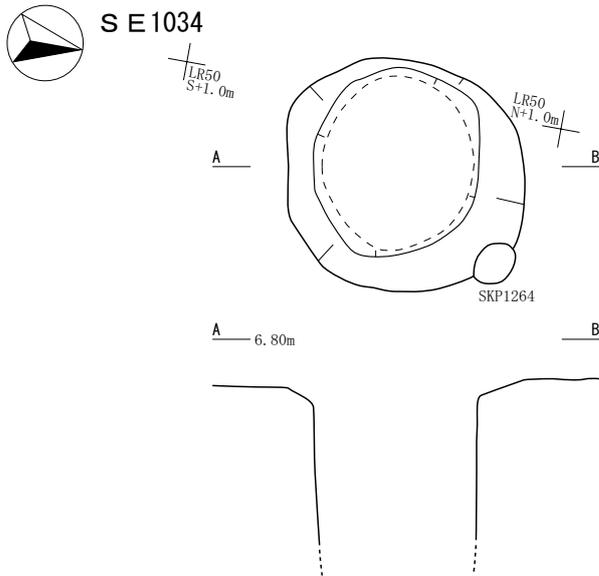


SE1008

- 1 黒褐色土(10YR2/2) しまり強 粘性中
炭化物粒状φ5~8mm3% 褐色土粒状φ3~5mm1% 焼土粒状φ3mm1%未満
- 2 黒色土(10YR2/1) しまりやや強 粘性中
炭化物粒状φ5~8mm3% 褐色から灰黄褐色土粒状φ5~8mm1%
- 3 黒褐色土(10YR2/3) しまり中 粘性強
炭化物粒状φ5~8mm3% 褐色から灰黄褐色土粒状φ3~5mm2% 焼土粒状φ5mm1%未満
- 4 黒褐色土(10YR2/2) しまり中 粘性強
炭化物粒状φ5~8mm3% 褐色から灰黄褐色土粒状φ10~20mm5%
- 5 黒褐色土(10YR3/2) しまりやや弱 粘性強
炭化物粒状φ5~8mm2% 褐色から灰黄褐色土粒状φ10~20mm5%
- 6 褐色土(10YR4/4) しまりやや弱 粘性強
- 7 褐色粘土(10YR4/4) しまりやや弱 粘性強
炭化物板状φ3~5mm1%
- 8 灰色粘土(5Y5/1) しまりやや弱 粘性強

SE1009

- 1 暗褐色土(10YR3/3) しまり強 粘性やや弱
炭化物粒状φ3~5mm2%
- 2 暗褐色土(10YR3/3)から黒色土(10YR1.7/1) しまりやや弱 粘性やや強
焼土粒状φ5~10mm1%
- 3 黒褐色土(10YR2/3) しまり中 粘性中
炭化物層
底部に暗紫灰色板状φ1~3mm5%
- 5 暗褐色土(10YR3/4) しまり強 粘性中
炭化物粒状φ5~8mm1% 褐色土粒状φ5~8mm1%
- 6 褐色土(10YR4/4) しまり中 粘性やや強
炭化物粒状φ3~5mm1%
- 7 暗褐色土(10YR3/4)と明赤褐色焼土(5YR5/8)が7:3で混在
しまり強 粘性弱
- 8 暗褐色土(10YR3/4) しまり強 粘性中
- 9 灰色土(7.5Y4/1)と明褐色土(7.5YR5/8)が6:4で混在
しまり強 粘性中 炭化物粒状φ3~5mm1%
- 10 褐色粘土から砂(10YR4/4) しまりやや弱 粘性強
炭化物板状φ3~5mm1%
- 11 灰色粘土(5Y5/1) しまりやや弱 粘性強



第22図 SE1008・1009・1034

まれ、特に7層では、焼土の混入の割合が高い。すべて人為的な埋め戻し土と考えられる。本遺構廃絶時に8層以下では第Ⅲ層由来土と地山土を埋め立てたものと思われる。その後、埋まりきらない窪みに遺跡内から出た焼土や炭化物等を廃棄して、再度埋め立てたものと推測される。

《出土遺物》埋土から、土師器坏類(895.3g)・袋物類(1148.5g)・器種不明(27.8g)、須恵器坏類(50.6g)・袋物類(79.6g)・器種不明(1.1g)、鉄滓(71.3g)、釘1点(2.5g)や不明鉄製品1点(9.6g)、鍬の風呂部・木槌頭部等の木製品や板材片、トチの種実が出土している。鍬の風呂部と木槌の頭部は10層下位、板材片27点が9層上位～10層下位で、またトチの種実が3層から出土している。土器は上位層に集中していた。出土した遺物の内、土師器坏4点・甕4点・鍋1点、須恵器壺1点、鍬、木槌、釘(第41・42図94～106、図版14・24)を図示した。94～97はロクロ調整の土師器坏で、96のみ内黒で、底部は柱状気味である。98・99・101はそれぞれ土師器甕片である。98は長胴甕、99は小型甕、101は甕の底部である。100・102は土師器鍋片で、102は口縁部が外反し、口端部は上へ引き上げられて口唇部は外傾面を形成している。100は白色の還元色を呈している。103は須恵器壺の口縁部片で、折返し口縁で口縁側面に凹凸がある。また口端部は上に引き出され外傾面を形成する。104・105は木製品である。104は一木造の鍬の風呂部分で、柄は根元から折れ欠損している。105は木槌で、破損した状態で出土し柄は折れていたが、頭部に開けたほぞ穴へ入りこんでいる部分のみ残る。頭部正面でも鋭利な刃痕が多数残ることから、柄が折れた後再利用されたものと推測される。106は釘で、断面形は方形である。10層下位から出土した木槌(105)の放射性炭素年代測定を実施した。

《所見》素掘の井戸である。出土遺物は9・10世紀代のものが多い。しかし、10層出土木槌の放射性炭素年代測定(暦年較正年代)結果では、1046～1155calAD(1 σ)の値を示していることから、本遺構の年代は、11世紀後半～12世紀中葉の平安時代後期の可能性も想定される。本遺構は、日常生活用及び手工業生産用に使用されたと考えられるが、詳細は不明である。

SE1034井戸跡(第10・22図、図版7)

《位置・確認状況》LQ・LR49・50に位置する。第Ⅳ層地山上面を精査中、暗褐色土のプランを確認した。

《重複》SKP1264に切られる。

《規模・形態》平面形は長軸1.38m(北東-南西)、短軸1.26mの略円形である。確認面から0.85mの深さまで確認している。湧水が多く作業が危険であることから掘削を中断したため、底部は確認できていない。壁は垂直に立ち上がる。

《出土遺物》土師器坏類(47.3g)、鉄滓1点(39.0g)が出土している。土師器坏底部片が出土しているが小片である。

《所見》本遺構の時期は、遺構内で出土した遺物から10世紀代と推測されるが、上層からの出土のため詳細な年代は不明である。遺跡内で確認された、他の素掘の井戸が10世紀末～12世紀中葉に収まると推測されるため、本遺構もそれらと同様、平安時代後期と考えられる。本遺構は、遺跡内で検出された素掘の井戸跡の中で平面形が最も小さく、また遺跡内で検出された井戸跡で唯一SD1027(=SD10)以北で検出している。平成13・14年度の調査で検出された鍛冶炉のSS13が、本遺構と同じくSD1027以北で検出されている。このことから本遺構はSS13での作業に際し、水を供給するために使用された井戸の可能性もある。

4 溝跡

SD1025溝跡(第9・23図、図版7・8)

《位置・確認状況》LN48・LO46～48・LP47に位置する。確認調査時の第7トレンチを精査中、第IV層地山上面で、溝状に東西へ延びる褐色土のプランを確認した。その後、本調査で調査区外である南側から同じく調査区外である北東へ向かって、弧状に延びるプランを確認した。当初はC-D以東のみの確認であるが、精査中に南東へ延びることが判明した。

《重複》SI1019、SKP1210・1258を切る。SKP1190に切られる。

《規模・形態》長さ(北東-南西)8.52m、幅0.90～1.34m、確認面からの深さ0.52m(A-B)、0.64m(C-D)で、南西から北東へ弧状に延びる溝である。底面はA-B・C-D共に平坦であるが、C-Dは狭小である。壁はやや急に立ち上がる。

《埋土》埋土は4層に分けた。1・2層は第IV層地山土由来の褐色土、3・4層は第III層土由来の暗褐色土を基調とする。流水の痕跡は認められない。4層は地山土の混入が少ないため、使用時に周辺の土が流れ込んだ自然堆積土と思われる。その他の1・2層は地山土由来であることや、3層では地山土や炭化物が混じることから、人為的な一括埋め戻し土と推測される。

《出土遺物》土師器坏類(310.9g)・袋物類(414.1g)・器種不明(17.2g)、須恵器坏類5点(65.7g)・甕1点(23.8g)、不明鉄製品1点(7.5g)、炉壁(8.3g)が出土している。出土した遺物の内、土師器坏1点、須恵器坏2点・甕1点(第43図107～110、図版14)を図示した。107はロクロ調整の土師器坏で底部は柱状気味である。108・109はロクロ調整の須恵器坏片で、底部切り離しが108は回転糸切り、109は回転ヘラ切りである。110は須恵器甕片で、外面に平行叩き目とカキ目、内面にはカキ目と同心円状の叩き目が残る。

《所見》本遺構の時期は、出土遺物から平安時代中葉と推測される。8世紀中葉と推測される土師器甕片の出土も数点確認されるが、本遺構はSI1019を切り込んでいるため、その時期の土器が紛れ込んだものと思われる。また本遺構は、南西から北東に弧を描くように延びているが、底面標高も南西から北東へかけ徐々に下がっていく。このことから区画及び排水の機能があると推測される。

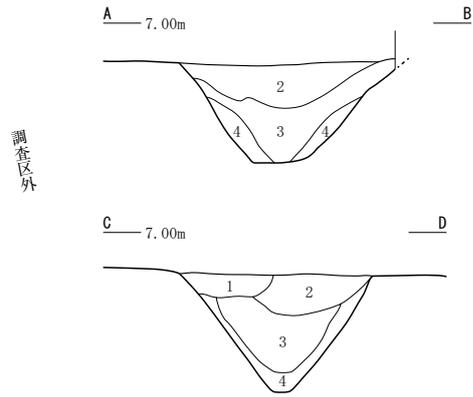
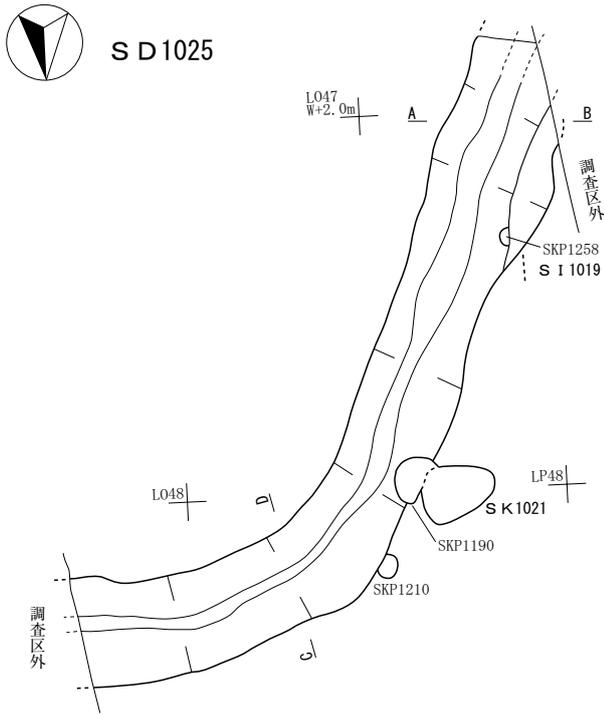
SD1027(第11・12・24図、図版8)

《位置・確認状況》平成13・14年度調査区内で検出されたSD10の北西延長部にあたる(以下SD1027と表記)。延長部はMB・MC45・46、MD46で確認した。確認調査時の第5トレンチを精査中、第IV層地山上面で、西側の調査区外へさらに延びていく暗褐色土のプランを確認した。また、底部にP1・P3、北壁付近にP2、南壁中にP4の柱穴4基を検出している。MC45の南壁では一部攪乱を受けている。

《重複》なし。平成13・14年度調査では、SA277P3・P4、SA278P6、SK271・279、SKP154・157・268・269に切られている状態を確認している。SKP154・156～158・268・269はその並び方から、本遺構と密接に関わるものと判断される。よって今回図面上では、それぞれP5～P10と新たに番号を付した。

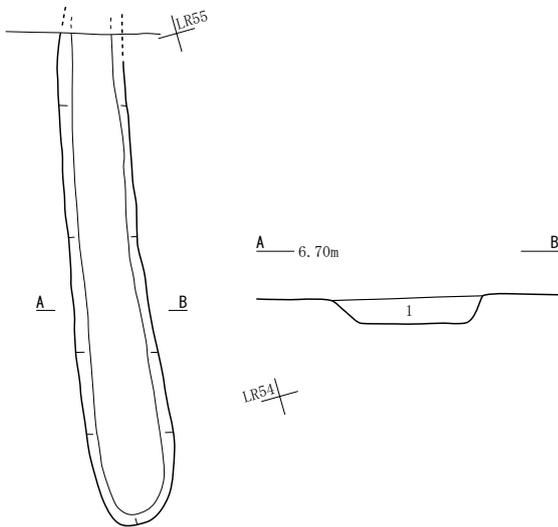
《規模・形態》今回確認された部分の長さ7.52m(北西-南東)、幅は2.52～3.46m、確認面からの深さ0.78m(A-B)、0.48m(C-D)で、北西から南東へ延びていく。底面は比較的平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。本遺構に関連する可能性のある柱穴の規模は長軸0.19～0.34m、確認面からの深さ

第3章 調査の方法と成果



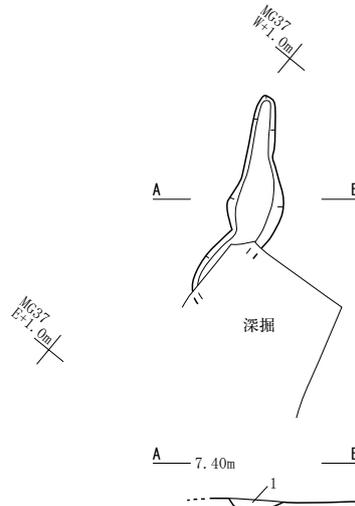
- SD1025
- 1 褐色土(10YR4/6) しまり強 粘性強
灰黄色褐色土まばらに3% 炭化物粒状φ 1mm 1%未満
 - 2 褐色土(10YR4/6) しまり強 粘性強
にぶい黄橙色土まばらに30% 炭化物粒状φ 1mm以下 1%未満
赤褐色焼土粒状φ 1mm以下 1%未満
 - 3 暗褐色土(10YR3/3) しまり強 粘性強
灰黄褐色土まばらに3% 炭化物粒状φ 1以下~2mm 1%未満
 - 4 暗褐色土(10YR3/3) しまり強 粘性強
灰黄褐色土まばらに5%

SD1035

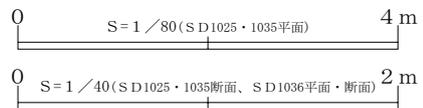


- SD1035
- 1 灰色土(7.5Y5/1)と暗褐色土(10YR3/4)が混在 しまり強 粘性強
焼土塊状φ30~50mm 5%

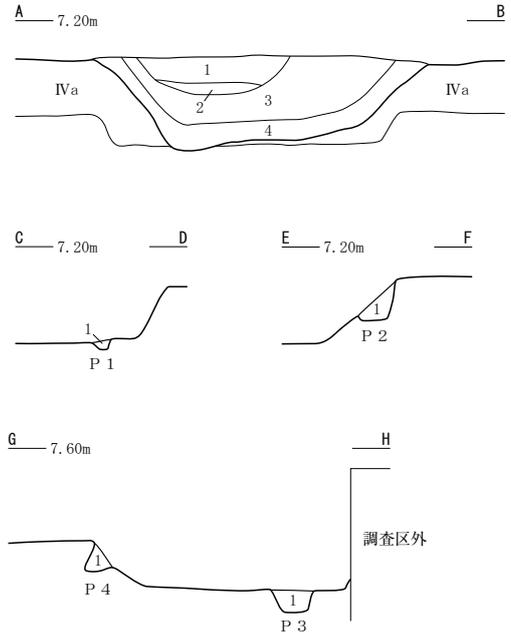
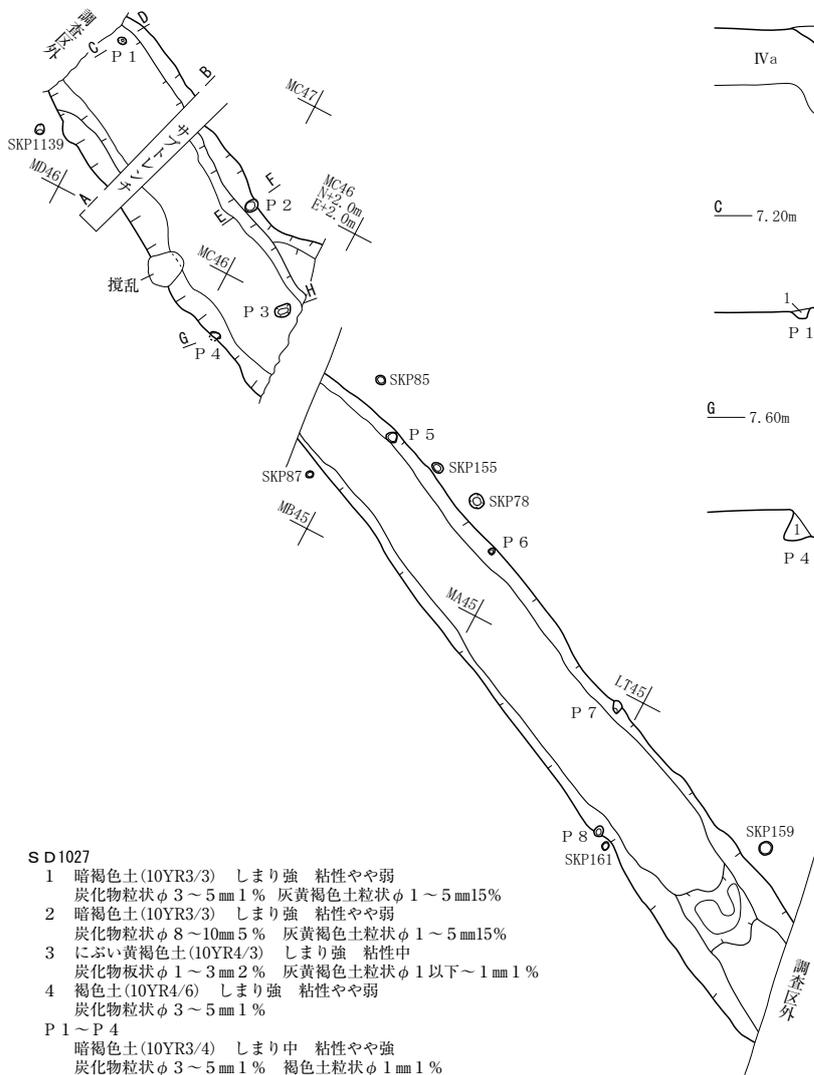
SD1036



- SD1036
- 1 暗褐色土(10Y3/3) しまり強 粘性中
黒褐色土塊状φ 5mm 30% 炭化物粒状φ 1以下~2mm 1%未満



第23図 SD1025・1035・1036



- SD1027**
- 1 暗褐色土(10YR3/3) しまり強 粘性やや弱
炭化物粒状φ 3~5mm 1% 灰黄褐色土粒状φ 1~5mm 15%
 - 2 暗褐色土(10YR3/3) しまり強 粘性やや弱
炭化物粒状φ 8~10mm 5% 灰黄褐色土粒状φ 1~5mm 15%
 - 3 にぶい黄褐色土(10YR4/3) しまり強 粘性中
炭化物板状φ 1~3mm 2% 灰黄褐色土粒状φ 1以下~1mm 1%
 - 4 褐色土(10YR4/6) しまり強 粘性やや弱
炭化物粒状φ 3~5mm 1%
 - P 1~P 4
暗褐色土(10YR3/4) しまり中 粘性やや強
炭化物粒状φ 3~5mm 1% 褐色土粒状φ 1mm 1%

遺構名	旧番号	平面形	長軸×短軸(cm)	確認面からの深さ(cm)	底面標高(m)
P 1	—	円形	19×17	10	6.36
P 2	—	円形	32×24	33	6.62
P 3	—	楕円形	34×24	19	6.30
P 4	—	楕円形	24×12	21	6.64
P 5	154	不整形円形	24×22	53	5.98
P 6	156	不整形円形	14×12	13	6.30
P 7	157	不整形円形	24×23	32	6.37
P 8	158	円形	22×18	36	6.28
P 9	268	不整形楕円形	27×20	14	6.32
P 10	269	隅丸方形	15×11	7	6.36
SKP 78	—	不整形円形	30×22	21	6.39
SKP 85	—	不整形円形	22×20	11	6.46
SKP 87	—	不整形円形	16×14	8	6.52
SKP 155	—	楕円形	26×19	20	6.36
SKP 159	—	円形	30×28	13	6.58
SKP 161	—	楕円形	18×14	18	6.49
SKP 270	—	隅丸方形	17×15	8	—
SKP 1139	—	円形	22×20	23	6.78
SK 279	—	円形	(40×40)	4	6.62
SK 280A	—	不整形円形	28×26	1	6.40
SK 280B	—	円形	42×37	8	6.42



第24図 SD1027

0.10～0.53mである。P4は南壁に対して、下向きに約40度の角度で掘削され、奥行きは0.20mである。柱間は、それぞれP1－P2が4.44m、P2－P3が2.32m、P3－P5が3.55m、P5－P6が5.80m、P6－P7が4.28m、P7－P9が9.30m、P9－P10が2.40mである。

《埋土》4層に分けた。1・2層は第Ⅲ層土由来の暗褐色土、3・4層は第Ⅳ層地山土由来の褐色・にぶい黄褐色土を基調とする。炭化物・地山土粒を含むことから人為的に埋め戻されたものと推測される。

《出土遺物》平成13・14年度調査では、土師器坏・皿・内黒の高台付坏、須恵器高台付皿・甕・壺等が出土している。今回の調査区では、縄文土器2点(11.6g)、土師器坏類(2817.4g)・袋物類(4601.4g)・器種不明(126g)、須恵器坏類(247.8g)・袋物類(1567.8g)・器種不明(3.1g)、鎌刃・鉄鏃の子・釘等の鉄製品(116.8g)、鉄滓(50.8g)、石器剥片1点(6.8g)が出土している。土器は1～3層から多量に出土している。出土した遺物の内、土師器坏6点・甕10点、須恵器坏2点・甕8点、鎌刃2点、鉄鏃1点(第43～45図111～139、図版14～16・24)を図示した。111～116はロクロ調整の土師器坏である。111は底部から直線的に外傾して立ち上がり口唇部に達する。口唇部先端は内側にやや先細りしている。112は内黒であるが、内面にミガキは施されていない。113～115は小型坏片である。113の底部外面は柱状気味である。116は高台付坏で、高台貼付後、高台内部にナデ調整が施されている。117～126は土師器甕である。117～119は非ロクロ調整の口縁部を残す小型甕片で、118のみ内黒である。117は胴部から頸部は内湾気味に、途中やや直立気味に変化して立ち上がり口縁は緩く外反する。口唇部先端は丸みを持つ。118は胴部から頸部はやや内湾して立ち上がり、頸部から口縁部は大きく外反する。口唇部先端はやや平坦である。119は頸部まで内湾し、口縁は外反する。口唇部先端は丸味を持っている。120の口縁から頸部片の外面には、ロクロ調整時につけられた段状の稜が見られる。頸部から口縁部は外反する。口端部は垂直気味に上方へ引き上げられ、口唇部に外傾面を形成する。121・122は小型甕底部片で底部切り離しは回転糸切りである。123～126は甕底部片である。123～126は非ロクロ調整で、123は底部外面が砂底である。124はロクロ調整の丸底長胴甕底部で、内外面を平行叩きにより叩き締めているが、底部はやや平底気味である。125は底部外面の木葉痕を消すようにミガキが施されている。126は底部外面にヘラ起こし痕が見られる。127～136は須恵器である。127は坏である。128は高台付坏で、高台は接地部にかけては外傾している。内面は平滑なので転用硯と考えられる。また、故意に打ち欠かれている。129～136は甕片である。129・130は同一個体の大型甕片と推測される。内外面にカキ目を、頸部外面には波状沈線文が施されている。また口縁部は外反し内面には折返しによる稜を持っている。131・132は甕の頸部から肩部にかけての破片で、内外面に叩き目が見られる。133は外面に平行叩き、内面にカキ目を施す。134・135は胴部片で内外面叩き調整後、それぞれカキ目やハケ目を施している。136は丸底甕の底部片で、内外面に平行叩きが施され、胴部へは内湾しながら立ち上がる。137～139は鉄製品で、137・138は鎌の刃部である。また139は鏃で、欠損した刃部の断面形状は長方形である。

《所見》本遺構は平成13・14年度の調査で検出されたS D10西側の延長部にあたる。前回検出分28.6mと今回の検出分を合わせると全長40.24mになり、さらに西側の調査区外に延びていくと考えられる。前回の調査結果と出土遺物から本遺構の時期は、9～10世紀と推測される。本遺構は、遺跡内を南北に分断するように東西に走っているが、本遺構の北側では、平成13・14年度及び今回の調査区内でも

柱穴様ピットが多数検出されている他、平成13・14年度調査区では、鍛冶炉であるS S13の他、焼土遺構であるS N12・46が検出されている。一方南側では、平成13・14年度調査区域で、掘立柱建物跡であるS B160や、本遺構廃絶後に構築された柱穴列S A277・278を構成する柱穴群が検出されているが、その他の柱穴群は今回の調査区と合わせても、本遺構北側と比較して明らかに少ない。また井戸跡では、平成13・14年度調査区を含め全部で8基検出されているが、その内の7基は南側で検出されている。このことから、遺跡内では、本遺構を挟んで北と南側で土地利用の違いが想定される。よって本遺構の性格は、区画を主な目的として構築された可能性がある。また本遺構に付属すると思われる柱穴が今回4基検出され、その内の3基は北壁及び底部で検出されている。平成13・14年度の調査でも本遺構を切る柱穴が、柱穴列を構成するものを除き、6基確認されている。その内の5基が北壁や底部で検出されている。これらの柱穴群は、その配置から本遺構に付属する可能性がある。詳細な性格は不明であるが、これらの柱穴が結び付いて柱穴列をなし、板塀等が設けられていた可能性がある。また、平成13・14年度及び今回の調査区で、本遺構と直接切り合わないが、本遺構周辺に点在し関連していたと思われる柱穴S K P78・85・87・155・159・161・270・1139や土坑S K 279・280A・280Bも合わせて掲載した。S K 279・280A・280Bは、以前の報告書では、土坑として報告しているが、規模や形状から柱穴の可能性もある。

S D 1035溝跡(第8・23図、図版8)

《位置・確認状況》L R 53～55に位置する。第IV層地山上面を精査中、北側の調査区外へ延びる灰色土と暗褐色土が混じるプランを確認した。

《重複》なし。

《規模・形態》長さ5.24m(北東-南西、残存値)、幅0.70～0.90m、確認面からの深さ0.15mである。直線的な溝跡である。底面は平坦で、壁は東側は急に、西側は緩やかに立ち上がる。

《埋土》埋土は第IV b層地山土由来のグライ化した灰色土と第III層由来の暗褐色土の混合土による単一層で、一括埋め戻し土である。流水の痕跡はない。

《出土遺物》土師器坏類(44.3g)・袋物類(47.7g)、須恵器甕1点(22.2g)が出土している。

《所見》本遺構の年代は、小型土師器坏片が出土していることから、10世紀代と考えられる。本遺構の詳細な性格は不明である。しかし、北に向かうに従い底面標高は低くなるため、排水を目的として設置されたものと推測される。

S D 1036溝跡(第15・23図、図版8)

《位置・確認状況》MF・MG37に位置する。第IV層地山上面及び深掘りの壁面を精査中、南西へ延びる暗褐色土のプランを確認した。

《埋土》埋土は第III層土由来の暗褐色土に黒褐色土塊・炭化物の混じる単一層で、人為的な一括埋め戻しである。流水の痕跡はない。

《重複》なし。

《規模・形態》長さ1.16m(北東-南西、残存値)、幅0.11～0.30m、確認面からの深さ0.05mである。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。

《出土遺物》なし。

《所見》本遺構の年代は、埋土や周辺の状況から平安時代と考えられる。平成25年度調査区内でも本

遺構に続く痕跡が確認されていないことや、後世の削平を受けているため残存状態は悪く、全体像が不明であることから、本遺構の詳細な性格は不明である。調査区南側は標高が低くなることから、本来南側に延びていたものと考えられる。

5 土坑

S K1001土坑(第15・25図)

《位置・確認状況》ME・MF40に位置する。第Ⅳ層地山上面で暗褐色土のプランを確認した。プランの中央に長さ9cm、径3.5cmの現代の杭が突き刺さっていた。

《重複》なし。

《規模・形態》平面形は長軸0.91m(北西-南東)、短軸が0.91mの不整円形で、確認面からの深さは0.42mである。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。

《埋土》2層に分けた。1・2層ともに第Ⅳ層地山土由来の褐色から黄褐色土で、炭化物粒や地山土塊を含むことから、一括して埋め戻されたと推測される。

《出土遺物》土師器坏類(35.2g)・袋物類(27.0g)、須恵器坏類2点(4.2g)、炉壁(21.2g)が出土した。

《所見》本遺構の時期は、2層底部から土師器・須恵器片が出土したことから、9～10世紀代の平安時代と推測される。本遺構の詳細な性格は不明である。

S K1010土坑(第14・25図)

《位置・確認状況》MC40に位置する。確認調査時に設置された第2トレンチの壁面及び床面で、暗褐色土のプランを確認した。

《重複》S K1011を切る。

《規模・形態》トレンチ調査時の掘削により、西半分は失われているため全体像は不明である。平面形は長軸0.70m(北-南)、短軸0.29m(残存値)で、略円形を呈するものと推測される。確認面からの深さは0.10mである。

《埋土》第Ⅲ層土由来の暗褐色土による単一層である。炭化物や地山土が混入されていることから、一括して埋め戻されたと推測されるが、炭化物や地山土粒の量が微量であることから、自然堆積の可能性も考えられる。

《出土遺物》なし。

《所見》本遺構の時期は、周辺の状況から平安時代と推測される。本遺構の詳細な性格は不明である。

S K1011土坑(第14・25図)

《位置・確認状況》MC40に位置する。第Ⅳ層上面で、S K1010と切り合う暗褐色土のプランを確認した。

《重複》S K1010に切られる。

《規模・形態》S K1010に切られているため、全体像は不明である。平面形は長軸(北西-南東、残存値)1.20m、短軸0.60mの不整楕円形を呈するものと推測される。確認面からの深さは0.06mである。底面は平坦であり、壁は西側は損失しているが、東側では急に立ち上がる。

《埋土》第Ⅲ層土由来の暗褐色土に、炭化物や第Ⅳa・b層地山土が粒状・塊状に混じる単一層である。

地山土塊が含まれていることから、一括して埋め戻されたと推測される。

《出土遺物》径5～16cmの、被熱を受けて割れた小礫を含む礫が数個出土している。

《所見》本遺構の時期は周辺の状況から、平安時代と推測される。本遺構の詳細な性格は不明である。

SK1017土坑(第14・25図)

《位置・確認状況》MB42に位置する。

《重複》なし。

《規模・形態》平面形は長軸0.40m(北西-南東)、短軸0.28mの楕円形で、確認面からの深さは0.09mである。底面は窪み、壁は緩やかに立ち上がる。特に西側壁は緩やかな立ち上がりである。

《埋土》第IV a層地山土由来の褐色土に、炭化物・焼土塊を含む単一層の一括埋め戻し土である。

《出土遺物》ロクロ調整の内黒土師器坏1点(29.1g)が出土し、図示した(第45図140)。

《所見》本遺構の年代は、出土遺物及び周辺の状況から平安時代と推測される。本遺構の堆積層の在り方から、本来第Ⅲ層中にあった焼土遺構の窪みが残存した可能性も考えられる。

SK1018土坑(第9・25図、図版9)

《位置・確認状況》LO48に位置する。第IV層地山上面を精査中、暗褐色土に焼土粒や炭化物等が混入したプランを確認した。

《重複》なし

《規模・形態》平面形は長軸0.86m(北東-南西)、短軸0.50mの不整楕円形で、確認面からの深さは0.14mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

《埋土》3層に分けた。1・2層は第Ⅲ層土由来の暗褐色土、3層は第IV a層地山土由来の褐色土を基調とする。全て炭化物や焼土が混入していることから、埋め戻し土と推測される。

《出土遺物》土師器坏類(72.9g)・器種不明(1.83g)の他、被熱を受けて割れた径7cmの円礫が確認面で、長さ10～12cmの細長い小礫が底部から出土している。出土遺物の内、土師器坏1点(第45図141、図版16)を図示した。また土師器皿口縁部や小型土師器坏底部も出土している。141はロクロ調整で、胴部は直線的に外傾して口縁部に達する。口縁部先端は欠損している。

《所見》本遺構の年代は、出土遺物や周囲の状況から10世紀代と推測される。埋土に炭化物や焼土粒が含まれていることから、焼土遺構や鍛冶に関連する遺構と思われるが、周辺にそれらの遺構は確認されず、本遺構の詳細な性格は不明である。

SK1021土坑(第9・25図)

《位置・確認状況》LO47・48に位置する。第IV層地山上面を精査中にSKP1190と切り合うプランを確認した。

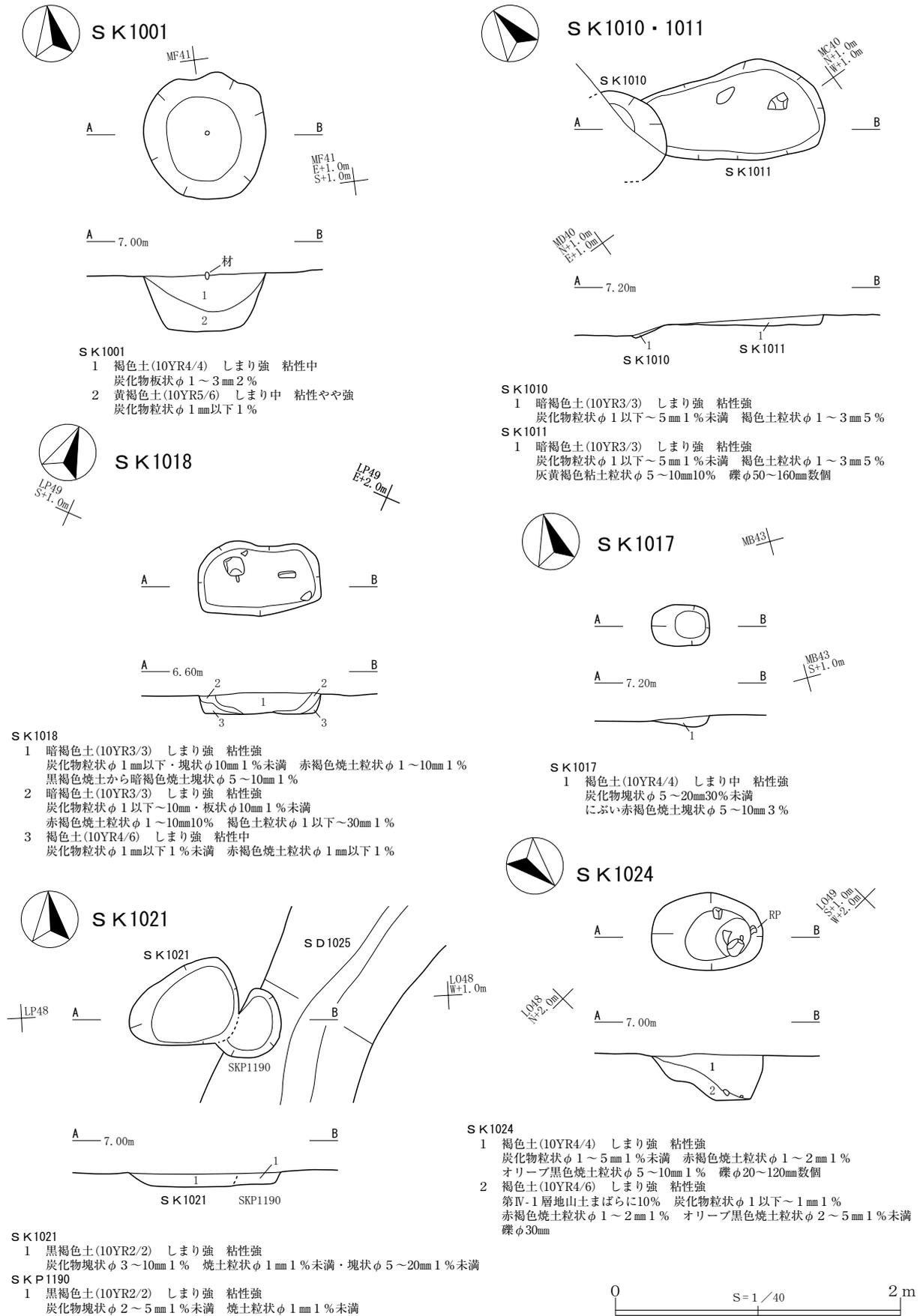
《重複》SKP1190を切る。

《規模・形態》平面形は長軸0.80m(北東-南西)、短軸0.58mの不整楕円形で、確認面からの深さは0.10mである。底面は平坦で、壁は東側は急に、西側は緩やかに立ち上がる。

《出土遺物》内外面ハケ目調整による土師器袋物類(48.4g)・器種不明(1.1g)が出土している。

《所見》本遺構の年代は、出土遺物及びSI1019に近接することから、8世紀代中葉の奈良時代と推測される。本遺構の詳細な性格は不明である。

第3章 調査の方法と成果



第25図 SK1001・1010・1011・1017・1018・1021・1024、SKP1190

S K 1023土坑(第14・21図)

《位置・確認状況》MC 39に位置する。井戸跡であるS E 1007を精査中、その西壁で、褐色土に炭化物の混じる掘り込みを確認した。その後、第IV層地山上面を再び精査し、S E 1007・S K P 1333と切り合うプランを検出した。

《重複》S E 1007に切られ、S K P 1333を切る。

《規模・形態》平面形は長軸0.85m(北西-南東)、短軸0.45m(残存値)の不整形円で、確認面からの深さは0.40mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

《埋土》第IV a層地山土由来の褐色土に炭化物が少量混じる単一層である。地山土が埋土であり、炭化物が混入されていることから一括した埋め戻し土と思われる。

《出土遺物》なし。

《所見》本遺構の時期は、11世紀初頭に比定されるS E 1007に切られていることから、平安時代前半と推測される。本遺構の詳細な性格は不明である。

S K 1024土坑(第9・25図、図版9)

《位置・確認状況》L O 48に位置する。確認調査時に第7トレンチを精査中、第IV層地山上面で焼土粒を含む褐色土のプランを確認した。

《重複》なし。

《規模・形態》平面形は長軸0.78m(北西-南東)、短軸0.55mの楕円形で、確認面からの深さは0.35mである。底面は比較的平坦で、壁は西側は急に、東側では緩やかに立ち上がる。

《埋土》2層に分けた。1・2層とも第IV a層地山土由来の褐色土を基調とし、焼土粒や礫を含む。

《出土遺物》土師器坏2点(50.2g)が西側壁で出土している。その他、被熱を受けた2~12cmの円礫が出土し、その内2点は同一個体が割れたものである。また炉壁(11.2g)が出土している。出土遺物の内、土師器坏底部1点(第45図142、図版16)を図示した。

《所見》本遺構の年代は出土遺物から平安時代前半と考えられる。本遺構の詳細な性格は不明である。

6 焼土遺構**S N 1029焼土遺構(第8・26図、図版9)**

《位置・確認状況》L S 54・55に位置する。第IV層地山上面を精査中、褐色土を焼土が帯状に囲むプランを確認した。

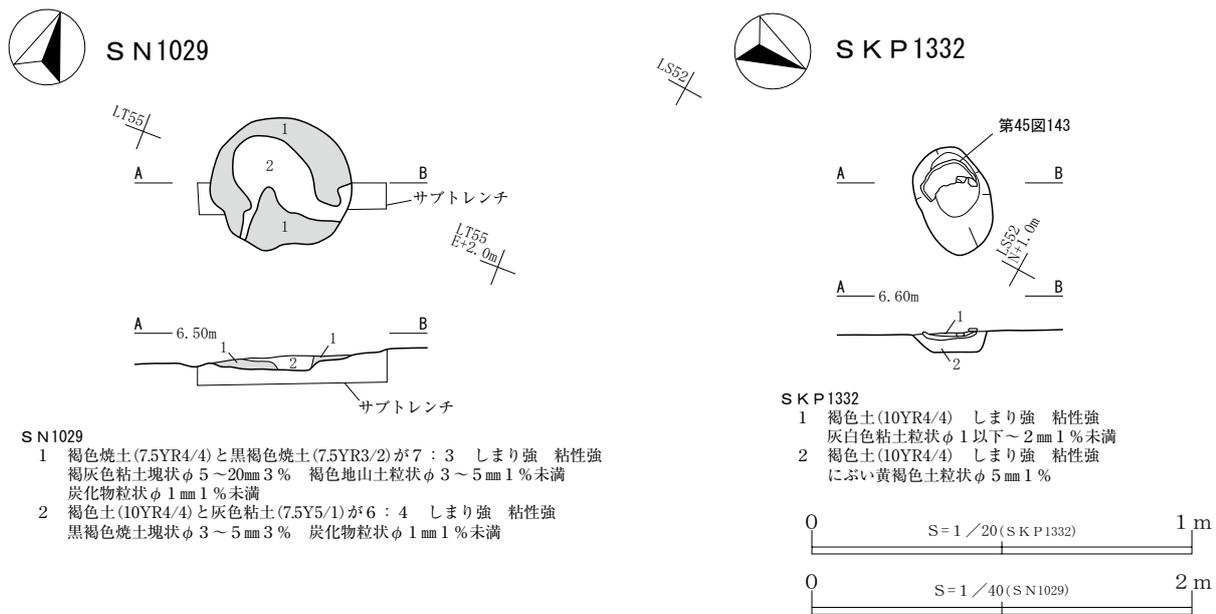
《重複》なし。

《規模・形態》長軸0.74m(北東-南西)、短軸0.68mの略円形で、焼土の厚さ0.04mである。

《埋土》2層に分けた。1層は被熱土であり、2層は第IV a・a'層地山土由来土である。2層は、炭化物を掻き出した痕跡と推測される。

《出土遺物》1層上で、同一個体と思われる土師器甕片2点(29.7g)が出土している。これらは、ミガキやカキ目が施され、本遺構周辺のL S 54出土の第46・47図147・150に類似する。

《所見》本遺構の年代は、本遺構周辺のL S 54から、8世紀中葉と推測される土師器が数点確認されていることから、奈良時代に遡る可能性がある。本遺構は焼土遺構であるが、詳細な性格は不明である。



第26図 SN1029、SKP1332

7 柱穴様ピット(第7~11・13~15図、第3~5表)

調査区全域から柱穴様ピット215基を検出した。SD1027以北に柱穴様ピットが集中して見られ、同以南は数が少ない。埋土は第Ⅲ層土由来の暗褐色土を基調とし、それに第Ⅳ層地山土由来である褐色・灰黄褐色土を含む他、焼土粒・塊や炭化物粒を微量に含むものもある。これらは遺跡内で検出された他の遺構同様に、ほとんどが平安時代に属すると推測される。しかし、遺物を伴わないものも多いため正確な時期は不明である。そのため一部中世に降る可能性もある。なお、柱穴様ピットの各位置については、遺構配置図(第7図)及び遺構配置区割図(第8~15図)に掲載した。個々の規模に関しては、柱穴様ピット一覧(第3~5表)に掲載した。また、須恵器高台付坏が出土し、廃棄儀礼の可能性のあるSKP1332のみ図示した(第26図)。遺物に関しては、同じくSKP1332出土須恵器高台付坏1点(第45図143、図版16)のみ図示した。143の高台部断面は三角形状を呈している。底部から直線的に立ち上がり、頸部から口縁部は外反する。口唇部先端はやや先細りである。

8 遺構外出土遺物(第46・47図144~155、第10表)

本調査区は、B区では遺物包含層がすでに削平されている。またA区でも51ライン以北は同様である。そのため遺構外出土遺物の量は、遺構内出土遺物の量と比較しても極めて少量である。遺構外から出土した遺物の重量は以下の通りである。縄文土器(1111.5g)、土師器坏類(5044.2g)・袋物類(3756.9g)・器種不明(230.9g)、須恵器坏類(350.9g)・袋物類(1012.5g)、鉄滓3点(14.7g)、炉壁(9.7g)、近世陶磁器4点(53.0g)、石器剥片2点(4.7g)である。図示したものは縄文時代後期後葉の深鉢1点、土師器坏1点・甕4点・鉄鉢1点、須恵器坏2点(内1点は墨書土器)・甕2点、近世陶器皿1点(第46・47図144~155、図版16・17)である。144は縄文時代後期の粗製深鉢形土器で、外面にLR横位単節縄文が施されている。頸部は内湾して立ち上がり、口縁はやや直立気味に内傾して立ち上がる。口唇部は平坦である。145は内黒土師器高台付坏の高台部である。内面は黒色処理されているが、ミガキの痕跡は不明である。高台先端は外に張り出すように成形され、接地部は丸みがあ

る。146～149は土師器甕、150は土師器鉄鉢で、146・147・150は非ロクロ調整である。器面調整は、146では、内外面にカキ目調整を施す。胴部下半からは外傾して立ち上がり、胴部上半で内湾し、頸部から口縁部は外反する。口唇部は比較的平坦であるが、中央には窪みがある。頸部に段を持つ。一方147は外面に縦位カキ目の後、指ナデ及びミガキが施され、内面には棒状工具痕が確認できる。148・149は共にロクロ調整で、148は大甕の口縁部、149は小型甕の底部である。150は土師器鉄鉢で、胴部は内湾して立ち上がり口縁部に至る。口唇部は丸味がある。151・152は、それぞれ須恵器坏の口縁部と底部である。151は墨書土器である。破片のため文字は解読できない。152は底部切り離しが回転ヘラ切りである。153・154はそれぞれ須恵器甕の口縁から頸部、頸から肩部である。153は外面叩き調整の後、ロクロナデ、さらに3条の波状沈線文及び縦位のカキ目が施されている。内面もロクロナデ後、横位のカキ目が施されている。また内面には折返しによる稜を持ち、口端部先端は丸味がある。154はロクロナデ後、外面に格子状叩きが、内面には同心円状の叩きが施されている。155は肥前(佐賀県)産の江戸時代初頭の陶器皿で、見込みは蛇ノ目釉剥ぎされ砂目積痕が残る。高台断面は三角形を呈する。胴部は大きく外傾して立ち上がる。

参考文献

- 秋田県教育委員会 『開防遺跡・貝保遺跡－主要地方道秋田八郎潟線高速交通関連道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』 秋田県埋蔵文化財調査報告書第361集 2003(平成15)年
- 秋田市教育委員会 『秋田城跡 政庁跡』 2002(平成14)年
- 秋田市教育委員会 『秋田市史第七巻 古代史料編』 2001(平成13)年
- 島田祐悦 「出羽北半の古代土器の変遷－横手盆地の事例を中心に－」 『秋田考古学』 第56号 秋田考古学協会 2012(平成24)年
- 秋田県教育委員会 『小谷地遺跡－地方道路交付金事業主要地方道男鹿琴丘線建設事業に係る埋蔵文化財調査報告書－』 秋田県文化財調査報告書第472集 2011(平成23)年
- 鐘方正樹 『ものが語る歴史8 井戸の考古学』 同成社 2003(平成15)年
- 秋田県教育委員会 『北遺跡－日本海沿岸東北自動車道建設に係る埋蔵文化財調査報告書VI－』 秋田県文化財調査報告書第315集 2001(平成13)年

第3表 柱穴様ピット一覧(1)

柱穴番号	挿図番号	所在グリッド	確認面	長軸×短軸(cm)	平面形状	深さ(cm)	底面標高(m)	重複(旧→新)	備考
1101	第15図	MF41	IV上	18×16	円形	6	6.99		土師器坏類1.0g出土。
1102	第15図	ME41	IV上	36×28	不整楕円形	20	6.86		
1103	第15図	ME41	IV上	14×13	円形	4	7.02		土師器5.1g出土。
1104	第15図	ME41	IV上	26×20	楕円形	12	6.93		
1106	第14図	ME42	IV上	24×20	隅丸方形	7	6.92		
1107	第14図	MD42・43	IV上	20×16	円形	8	6.92		
1108	第14図	ME43	IV上	22×(22)	(円形)	8	6.92	S K P 1108→S K P 1109	
1109	第14図	ME43	IV上	24×24	円形	7	6.94	S K P 1108→S K P 1109	
1110	第14図	ME43	IV上	18×18	円形	-	-		
1111	第15図	MF40	IV上	18×18	円形	10	6.95		土師器袋物類2.7g出土。
1112	第15図	MF40	IV上	14×14	円形	6	6.99		
1113	第15図	MF40	IV上	24×20	楕円形	12	6.93		
1114	第15図	MF40	IV上	26×22	不整円形	15	6.89		土師器1.0g出土。
1115	第15図	MF40	IV上	22×22	円形	3	7.03		確認面上に礫。
1116	第15図	ME・MF40	IV上	20×16	円形	12	6.95		土師器袋物類5.0g出土。
1117	第15図	MF40	IV上	22×16	楕円形	7	6.97		B区基本層序に断面図あり(第6図)。
1118	第14図	ME40	IV上	22×22	円形	13	6.92		
1119	第15図	ME39	IV上	40×36	隅丸方形	18	6.85		
1120	第15図	MF39	IV上	26×24	円形	18	7.02	S E 1006→S K P 1120	土師器坏類0.9g・袋物類3.73g出土。第20図。
1121	第15図	ME41	IV上	24×24	円形	13	6.91		
1122	第15図	ME42	IV上	18×18	円形	1	6.99		
1124	第14図	ME37	IV上	20×19	円形	2	6.92	S K P 1125→S K P 1124	
1125	第14図	ME37	IV上	19×16	円形	3	6.93	S K P 1125→S K P 1124	
1126	第14図	ME37	IV上	17×16	円形	4	6.97		
1127	第15図	MF37	IV上	22×16	楕円形	7	6.97		
1128	第15図	MF37	IV上	26×21	楕円形	4	6.97		
1129	第15図	MF37	IV上	39×37	円形	6	6.96	S E 1004→S K P 1129	第18図。
1130	第15図	ME41	IV上	36×29	楕円形	12	6.99		
1131	第14図	MD42・43	IV上	20×12	楕円形	7	6.97		
1132	第14図	MD42	IV上	28×24	円形	10	6.93		土師器坏類0.7g出土。
1133	第13・14図	MB41	IV上	36×26	楕円形	11	6.81		
1134	第11図	MB44	IV上	28×26	円形	21	6.79		
1136	第14図	MD42	IV上	(28)×(24)	(円形)	-	-	S A 1015→S K P 1136	第17図。
1139	第11図	MD46	IV上	22×20	円形	23	6.78		第24図。土師器坏類5.2g出土。
1140	第8・9図	LP50	IV上	23×18	不整円形	12	6.48		
1141	第15図	ME41	IV上	26×20	楕円形	3	7.01		
1142	第14図	ME40	IV上	20×15	円形	11	6.91		
1143	第14図	ME40	IV上	18×14	円形	9	6.96		
1144	第14図	ME40	IV上	15×11	楕円形	6	7.01		
1145	第14図	ME40	IV上	15×11	楕円形	6	7.01		
1146	第14図	MD40	IV上	19×14	円形	6	6.96		
1147	第14図	MA40	IV上	24×17	楕円形	13	6.84		
1148	第14図	MB41	IV上	28×19	楕円形	9	6.95		
1149	第14図	MB41	IV上	17×14	楕円形	9	6.88		
1150	第14図	MC41	IV上	24×17	円形	13	6.95		
1151	第11図	MC47	IV上	20×18	円形	8	6.59		
1152	第11図	MC47・48	IV上	22×18	円形	9	6.58		
1153	第11図	MC47	IV上	24×20	楕円形	10	6.56		土師器坏類2.3g出土。
1154	第9図	LO47	IV上	30×28	円形	21	6.55		土師器坏類1.8g出土。
1155	第9図	LO50	IV上	24×22	円形	10	6.59		
1156	第9図	LN47	IV上	49×37	不整形	24	6.46		
1157	第9図	LO49	IV上	28×22	不整円形	30	6.44		
1158	第9図	LO50	IV上	32×28	隅丸方形	25	6.46		土師器坏類2.6g出土。
1159	第9図	LO50	IV上	34×24	楕円形	6	6.64		
1160	第9図	LO49	IV上	40×32	不整形	18	6.45		土師器袋物類14.8g出土。
1161	第9図	LO49	IV上	16×16	円形	8	6.64		
1162	第9図	LO50	IV上	27×23	円形	47	6.25		
1163	第9図	LO50	IV上	18×13	円形	11	6.61		
1164	第9図	LO50	IV上	28×24	円形	9	6.60	S K P 1175→S K P 1164	
1165	第9図	LO49	IV上	(16)×(16)	(円形)	6	6.62		
1166	第9図	LO49	IV上	(18)×16	円形	12	6.60	S K P 1166→S K P 1167	
1167	第9図	LO49	IV上	26×24	円形	20	6.52	S K P 1166→S K P 1167	
1168	第9図	LO50	IV上	26×26	円形	33	6.34		土師器坏類1.8g出土。
1169	第9図	LO50	IV上	26×24	円形	18	6.52		土師器坏類4.5g出土。
1170	第9図	LO49	IV上	20×14	楕円形	14	6.53		
1171	第9図	LO49	IV上	22×20	円形	15	6.52		埋土中に炭化物・焼土粒を比較的多く含む。
1172	第9図	LO49	IV上	24×12	楕円形	14	6.60		
1173	第9図	LP49	IV上	36×30	楕円形	26	6.44		
1174	第9図	LP49	IV上	29×26	円形	40	6.32		
1175	第9図	LO50	IV上	36×23	楕円形	13	6.56	S K P 1175→S K P 1164	
1176	第9図	LP49	IV上	16×12	円形	20	6.50		
1177	第9図	LP50	IV上	26×19	楕円形	13	6.56		
1178	第9図	LO49	IV上	24×22	円形	11	6.61		
1179	第9図	LO47	IV上	14×12	隅丸方形	8	6.70		
1180	第9図	LO46	IV上	30×28	隅丸方形	4	6.44		土師器坏類4.0g出土。
1181	第9・12図	LO46	IV上	24×24	円形	34	6.51		
1182	第9・12図	LO46・47	IV上	24×18	円形	15	6.68		

※長軸×短軸(cm)欄の()や< >内の数値は、それぞれ推定値、残存値である。平面形状欄の()は推定形である。

第4表 柱穴様ピット一覧(2)

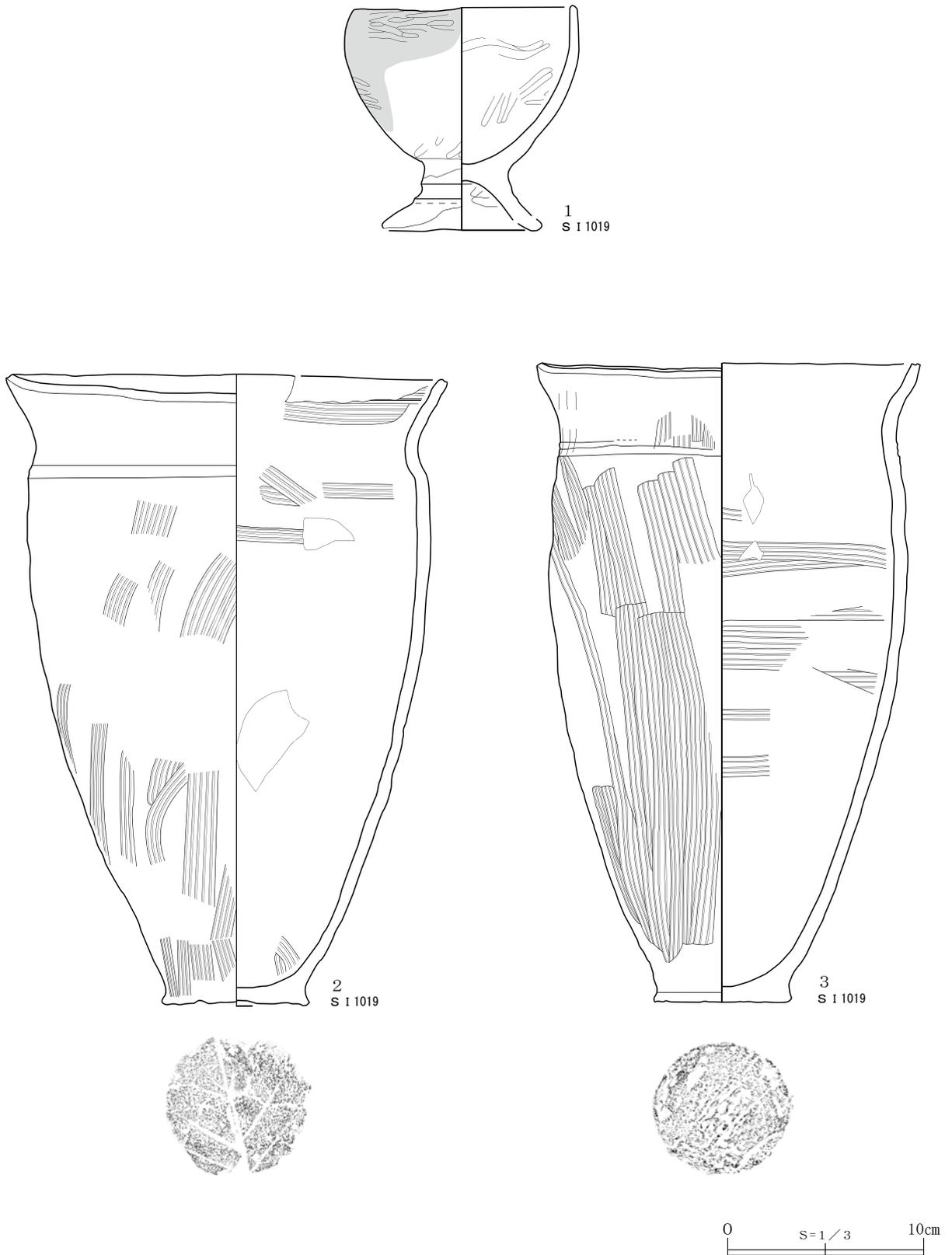
柱穴番号	挿図番号	所在グリッド	確認面	長軸×短軸(cm)	平面形状	深さ(cm)	底面標高(m)	重複(旧→新)	備考
1183	第9・12図	LO46	IV上	28×24	円形	29	6.54		
1185	第9図	LO47	IV上	34×26	楕円形	15	6.89		埋土中に炭化物・焼土粒を比較的多く含む。土師器坏類4.1g出土。
1186	第9図	LN47	IV上	40×30	楕円形	34	6.46		埋土中に炭化物・焼土粒を比較的多く含む。土師器袋物類3.1g出土。
1187	第9図	LO47	IV上	28×18	楕円形	19	6.62		土師器袋物類26.3g出土。
1188	第9図	LP48	IV上	44×32	楕円形	21	6.53		
1189	第9図	LO48	IV上	34×30	円形	16	6.63		
1190	第9図	LO47・48	IV上	52×(42)	不整楕円形	9	6.68	S K P 1190→S K 1021 S D 1025→S K P 1190	第23・25図。土師器袋物類3.2g出土。
1191	第9図	LO・LP47	IV上	22×18	隅丸方形	17	6.62		
1192	第9図	LO48	IV上	30×30	円形	14	6.66		
1193	第9図	LP48	IV上	24×22	隅丸方形	35	6.43		
1194	第9図	LN46	IV上	18×16	隅丸方形	5	6.73		
1195	第9図	LN46	IV上	16×12	円形	9	6.69		土師器坏類3.0g出土。
1196	第9図	LN47・48	IV上	24×14	楕円形	23	6.47		
1197	第9図	LN47	IV上	16×14	隅丸方形	22	6.55		
1198	第9図	LP48	IV上	16×16	隅丸方形	29	6.46		
1199	第9図	LP48	IV上	38×28	楕円形	55	6.21		
1200	第9図	LP48	IV上	40×30	楕円形	35	6.40		
1201	第9図	LN47	IV上	28×24	楕円形	12	6.60		埋土に焼土塊を比較的多く含む。土師器坏類3.0g出土。
1202	第9図	LN・LO49	IV上	26×24	円形	11	6.51		
1203	第9図	LO48	IV上	32×26	楕円形	39	6.34		土師器器種不明0.4g出土。
1204	第9図	LO48	IV上	23×16	楕円形	32	6.47		
1205	第9図	LO49	IV上	22×20	円形	21	6.41		
1206	第9図	LO49	IV上	28×28	円形	15	6.56		
1207	第9図	LO48	IV上	20×18	隅丸方形	19	6.55		
1208	第9図	LO48	IV上	24×24	円形	29	6.44		土師器坏類1.2g出土。
1209	第9図	LN47	IV上	22×18	円形	24	6.52		
1210	第9図	LO48	IV上	26×20	楕円形	29	6.48		土師器坏類1.2g出土。
1213	第9図	LN47	IV上	28×16	楕円形	18	6.54		土師器0.9g出土。
1214	第9図	LP47	IV上	20×16	円形	18	6.60		
1215	第9図	LN48	IV上	34×30	不整円形	19	6.51		
1216	第9図	LP49	IV上	28×(28)	楕円形	10	6.62		
1217	第9図	LP50	IV上	22×19	隅丸方形	18	6.48		
1218	第9図	LO50	IV上	(30)×(27)	(円形)	25	6.45		
1219	第9図	LO50	IV上	24×(9)	(円形)	13	6.56		
1220	第9図	LN49	IV上	28×(28)	(円形)	10	6.62		A区基本層序に断面図あり(第6図)。
1221	第8・10図	LR50	IV上	30×26	楕円形	20	6.26		
1222	第8図	LR52	IV上	20×16	円形	18	6.33		
1223	第8・10図	LS51	IV上	31×28	円形	26	6.21		土師器袋物類5.5g出土。
1224	第8図	LS53・54	IV上	29×18	楕円形	5	6.37		
1225	第8図	LS54	IV上	24×23	円形	14	6.37		
1231	第9図	LP49	IV上	18×14	楕円形	10	6.57		
1232	第9図	LQ48	IV上	26×25	円形	15	6.52		須恵器袋物類9.2g出土。
1233	第9図	LQ48	IV上	30×23	楕円形	15	6.51		
1234	第9図	LP・LQ49	IV上	20×19	円形	-	-		
1235	第9図	LQ49	IV上	26×23	円形	-	-		
1236	第9図	LQ49	IV上	28×24	円形	10	6.55		
1237	第9図	LQ49	IV上	30×17	楕円形	15	6.49		
1238	第9図	LQ49	IV上	16×13	円形	8	6.56		
1239a	第9図	LQ48・49	IV上	58×49	不整形	19	6.47	a→b、c・dは順不明	4時期あり。各時期の確認面は不明。
1239b						12	6.55		
1239c						13	6.54		
1239d						13	6.54		
1241	第9図	LN49	IV上	(30)×22	(楕円形)	5	6.63		A区基本層序に断面図あり(第6図)。
1250	第9図	LP・LQ48	IV上	22×22	円形	14	6.53		
1251	第9図	LQ48	IV上	22×20	円形	10	6.58		
1252	第9・10図	LQ48	IV上	21×15	楕円形	12	6.54		
1253	第9・10図	LQ48・49	IV上	24×18	楕円形	13	6.53		
1254	第9図	LQ49	IV上	22×14	楕円形	8	6.57		
1255	第9図	LQ49	IV上	23×21	円形	12	6.53		
1256	第9図	LQ49	IV上	24×22	円形	14	6.52		
1257	第9図	LQ49	IV上	18×16	円形	7	6.58		
1258	第9図	LO47	IV上	22×20	(円形)	30	6.32	S K P 1258→S D 1025	土師器坏類2.0g出土。第23図。
1259	第9・12図	LO46	IV上	16×14	円形	12	6.69		
1260	第9図	LO48	IV上	20×18	円形	34	6.38		
1261	第9図	LO48	IV上	26×26	円形	20	6.52		
1262	第9図	LO47	IV上	24×18	楕円形	14	6.54		
1263	第9図	LO・LP48	IV上	30×20	楕円形	23	6.50		
1264	第8・10図	LQ50	IV上	26×16	楕円形	6	6.50	S E 1034→S K P 1264	第22図。
1271	第8・10図	LQ50	IV上	36×25	不整楕円形	13	6.49		
1272	第9図	LQ50	IV上	19×16	不整円形	5	6.54		
1273	第8・9図	LQ50	IV上	19×14	楕円形	14	6.46		

※長軸×短軸(cm)欄の()や< >内の数値は、それぞれ推定値、残存値である。平面形状欄の()は推定形である。

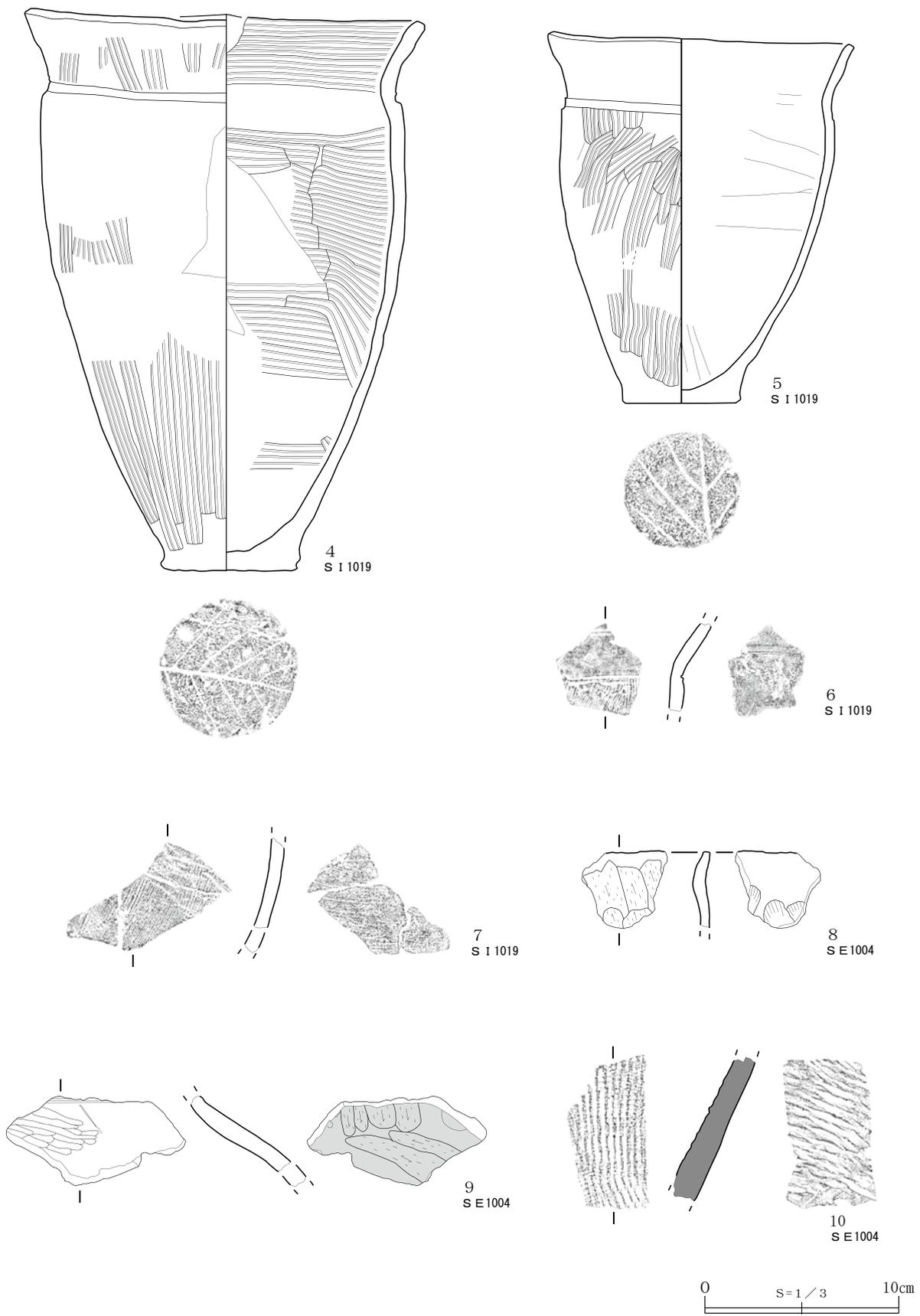
第5表 柱穴様ピット一覧(3)

柱穴番号	挿図番号	所在グリッド	確認面	長軸×短軸(cm)	平面形状	深さ(cm)	底面標高(m)	重複(旧→新)	備考
1274	第8・9図	LQ50	IV上	27×16	不整楕円形	14	6.46		
1275	第8・9図	LQ50	IV上	27×23	円形	12	6.48		
1276	第8・9図	LP・LQ50	IV上	29×24	不整楕円形	18	6.42		
1277	第8・9図	LQ50	IV上	24×21	円形	14	6.46		
1278	第8・9図	LQ50	IV上	36×30	楕円形	13	6.47		
1279	第8・9図	LQ50	IV上	2×16	不整楕円形	9	6.50		
1280	第8・9図	LQ50	IV上	43×34	楕円形	13	6.22		
1281	第8・9図	LP50	IV上	24×20	円形	14	6.46		
1282	第8・9図	LP50	IV上	25×24	不整円形	13	6.61		
1283	第9図	LQ49	IV上	19×19	円形	14	6.48		
1284	第9図	LQ49	IV上	15×14	円形	6	6.55		
1285	第9図	LP49	IV上	34×24	不整円形	18	6.43		
1286	第9図	LP49	IV上	26×23	不整円形	23	6.39		
1287	第8・9図	LQ51	IV上	39×29	隅丸方形	21	6.31		
1288	第8図	LQ51	IV上	33×28	円形	24	6.30		
1289	第8図	LQ51	IV上	18×16	円形	13	6.37		
1290	第8図	LQ52	IV上	27×22	楕円形	14	6.40		
1291	第8図	LQ52	IV上	18×17	円形	13	6.40		
1292	第8図	LQ52	IV上	32×29	円形	15	6.42		
1293	第8図	LQ52	IV上	35×33	不整円形	14	6.40		
1294	第8図	LP52	IV上	20×19	円形	14	6.55		
1295	第8図	LP52	IV上	20×17	円形	17	6.39		
1296	第8図	LQ52-53	IV上	26×22	隅丸方形	8	6.50		
1297	第8図	LQ53	IV上	20×17	不整円形	9	6.40		
1298	第8図	LQ53	IV上	30×24	不整円形	16	6.34		
1299	第8図	LQ53	IV上	28×24	円形	10	6.44		
1300	第8図	LQ53	IV上	20×19	隅丸方形	14	6.37		
1301	第8図	LP53	IV上	22×14	楕円形	12	6.39		
1302	第8図	LP53	IV上	24×21	円形	16	6.35		
1303	第8図	LP53	IV上	27×25	円形	9	6.31		
1304	第8図	LP53	IV上	20×15	不整円形	7	6.33		
1305	第8図	LR51	IV上	24×20	楕円形	10	6.40		
1306	第8図	LR51	IV上	15×14	円形	12	6.39		
1307	第8図	LR52	IV上	25×17	不整円形	11	6.50		
1308	第8図	LR52	IV上	20×19	円形	6	6.43		
1309	第8図	LR52	IV上	23×23	円形	12	6.39		
1310	第8図	LR52	IV上	20×13	楕円形	16	6.36		
1311	第8図	LR52	IV上	24×17	楕円形	15	6.38		
1312	第8図	LR52	IV上	26×24	円形	13	6.37		
1313	第8図	LR52	IV上	22×18	楕円形	6	6.44		
1314	第8図	LR52	IV上	27×23	楕円形	8	6.42		
1315	第8図	LR52	IV上	18×14	円形	10	6.34		
1316	第8図	LQ54	IV上	20×18	円形	12	6.34		
1317	第8図	LQ54	IV上	24×18	円形	14	6.23		
1318	第8図	LQ54	IV上	24×22	円形	13	6.23		
1319	第8図	LQ52	IV上	23×20	円形	15	6.42		
1321	第9図	LQ49	IV上	23×20	円形	10	6.48		
1322	第9図	LQ49	IV上	21×16	円形	11	6.46		
1323	第9・10図	LQ49	IV上	26×24	円形	11	6.49		
1324	第8~10図	LQ49	IV上	21×20	円形	7	6.49		
1325	第8~10図	LQ51	IV上	20×20	円形	24	6.30		
1326	第8図	LQ52	IV上	34×31	不整円形	17	6.30		
1327	第8図	LQ52	IV上	25×19	楕円形	10	6.38		
1328	第9・10図	LQ49	IV上	24×18	楕円形	11	6.46		
1329	第8・9図	LQ50	IV上	(26)×22	(円形)	26	6.34		
1331	第8~10図	LQ50	IV上	28×24	不整円形	18	6.41		
1332	第8図	LR・LS52	IV上	38×34	楕円形	6	6.45		須恵器坏141.5g出土(第26図・第45図143)。
1333	第14図	MC39	IV上	44×(26)	(円形)	14	6.81	S K P 1333→S K 1023 →S E 1007	第21図。
1401	第15図	MG37-38	IV上	25×23	不正隅丸方形	10	7.10		
1402	第15図	MG37	IV上	21×16	楕円形	3	7.09		
1403	第15図	MG38	IV上	19×17	隅丸方形	4	7.10		
1404	第15図	MF37	IV上	23×18	不正楕円形	15	6.98		土師器坏類1.6g出土。
1405	第15図	MG38	IV上	19×16	不正円形	4	7.10		土師器坏類1.5g・器種不明2.2g出土。
1406	第15図	MG38	IV上	15×12	隅丸方形	9	7.07		
1407	第15図	MG38	IV上	17×15	円形	5	7.11		
1408	第15図	MH37	IV上	17×16	円形	10	7.04		
1409	第15図	MH36-37	IV上	22×21	隅丸方形	15	7.01		

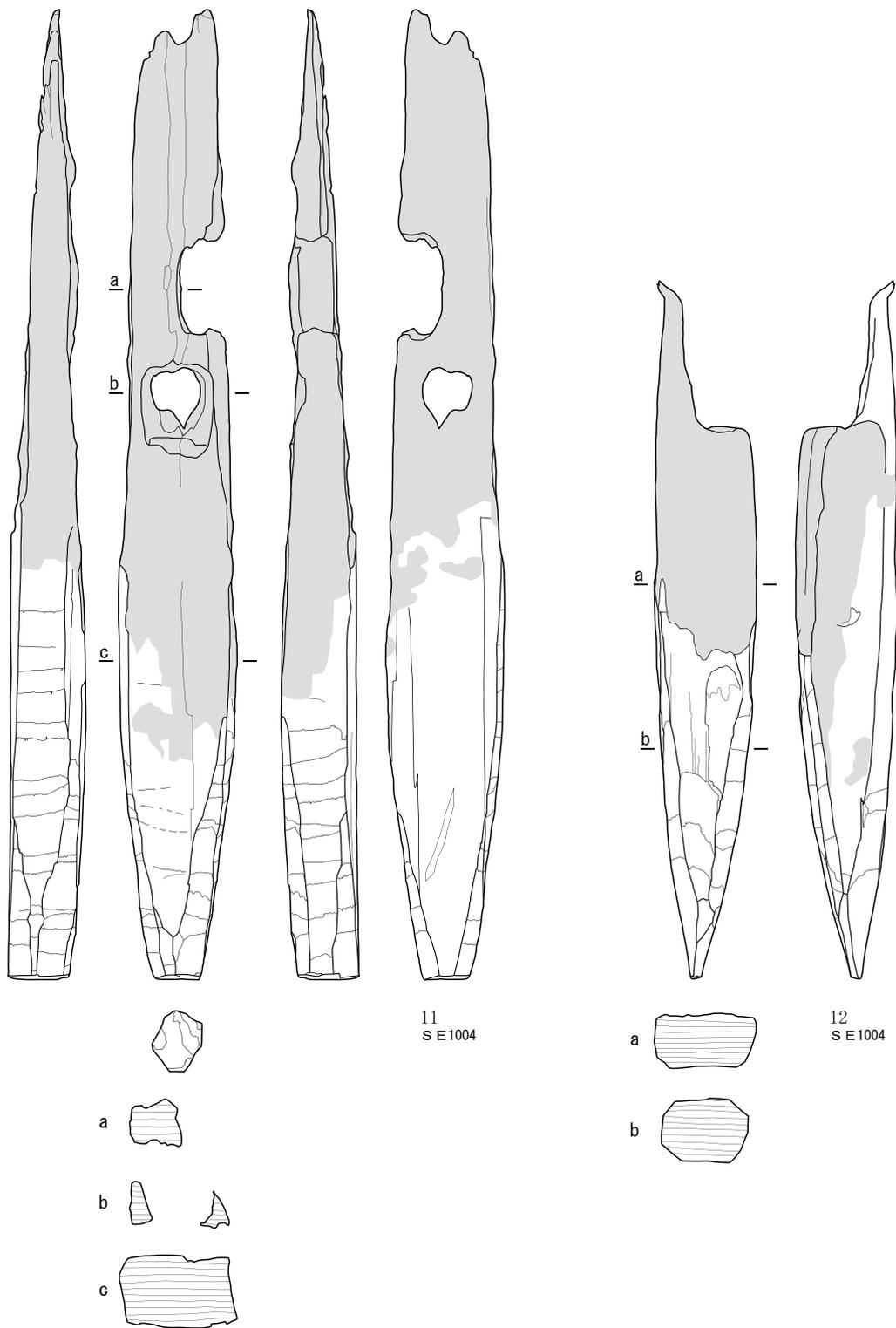
※長軸×短軸(cm)欄の()やく()内の数値は、それぞれ推定値、残存値である。平面形状欄の()は推定形である。



第27図 遺構内出土遺物(1) S I 1019



第28図 遺構内出土遺物(2) S I 1019、S E 1004

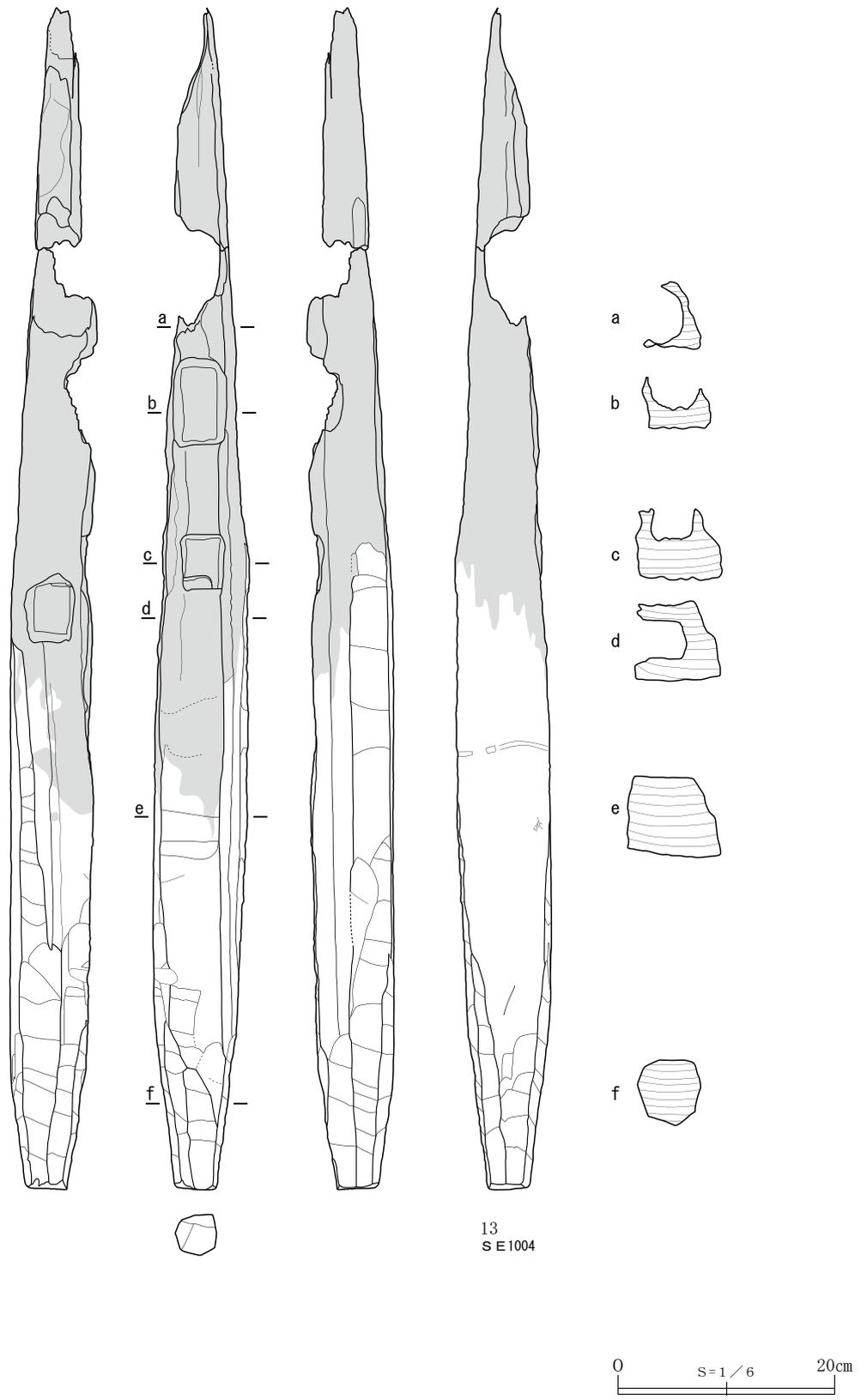


11
SE1004

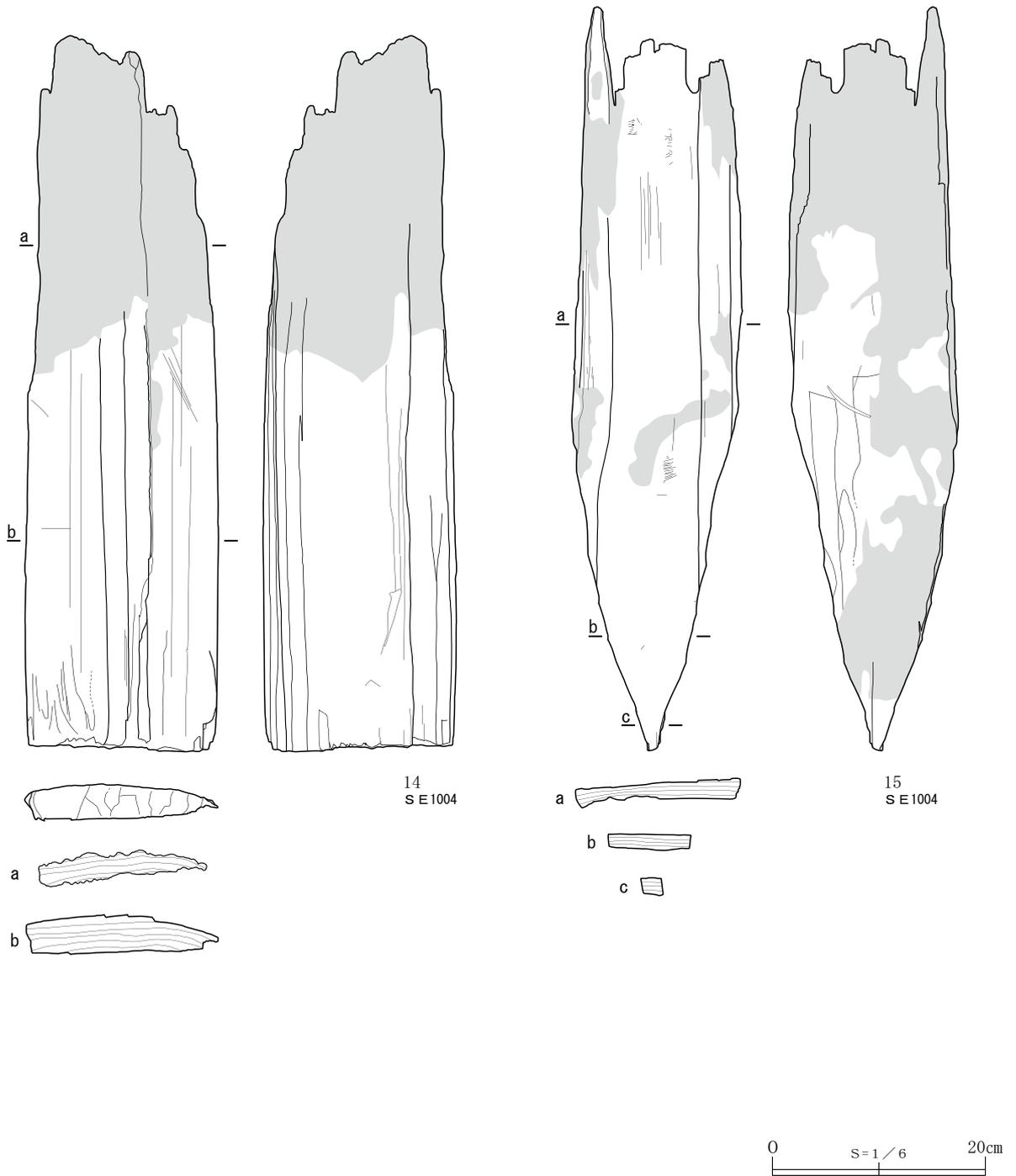
12
SE1004

0 S=1/6 20cm

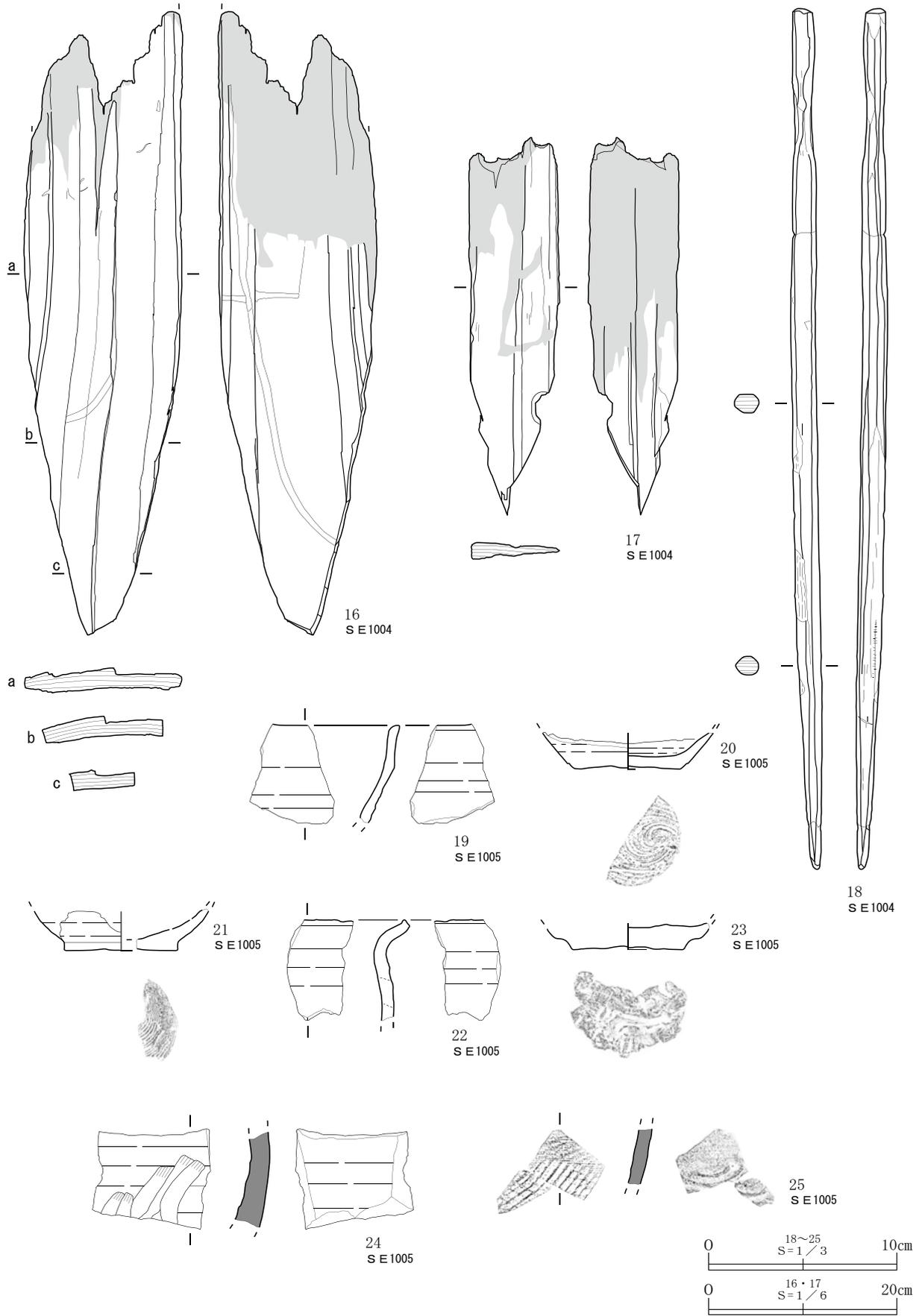
第29図 遺構内出土遺物(3) S E 1004



第30図 遺構内出土遺物(4) S E 1004



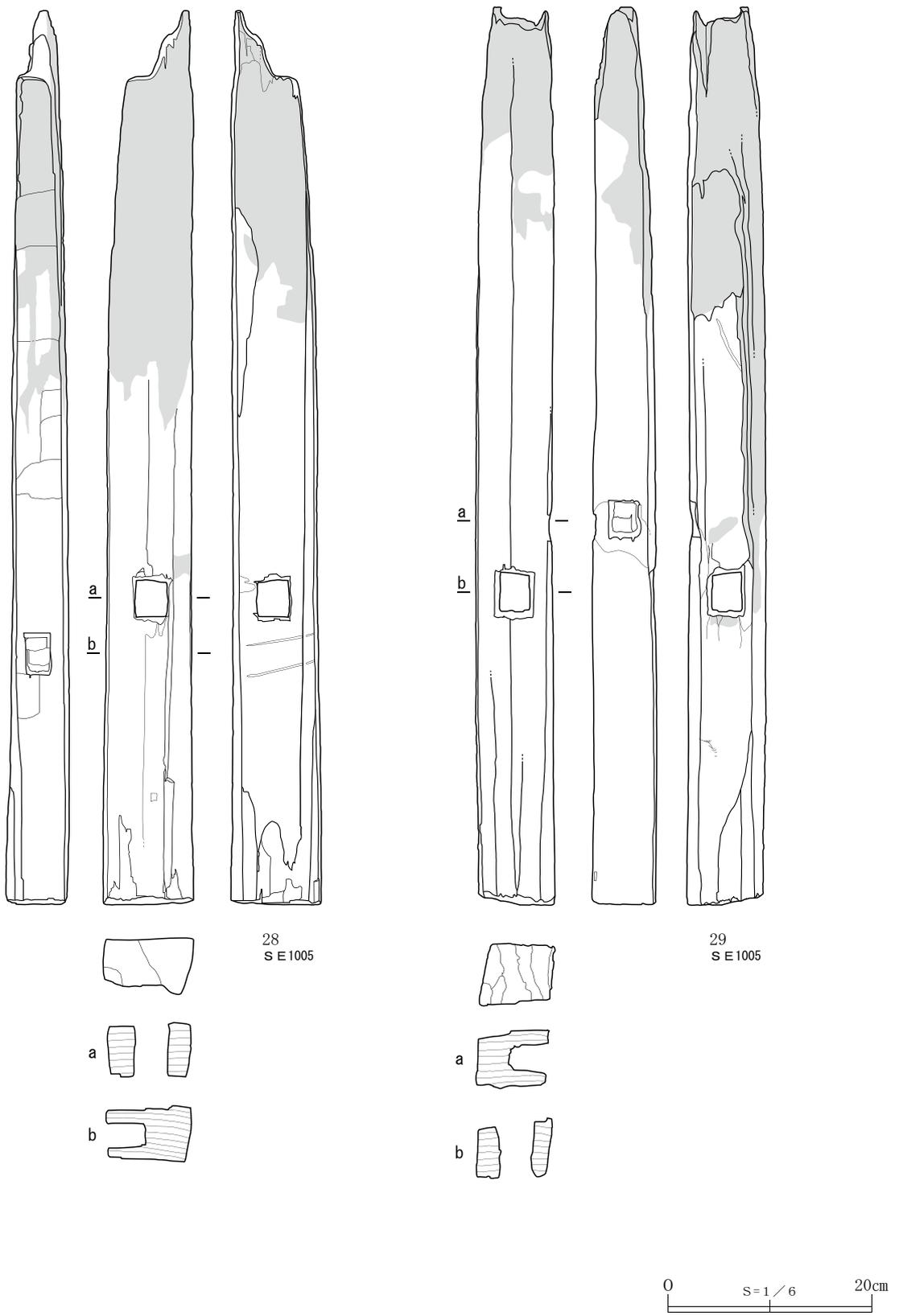
第31図 遺構内出土遺物(5) S E 1004



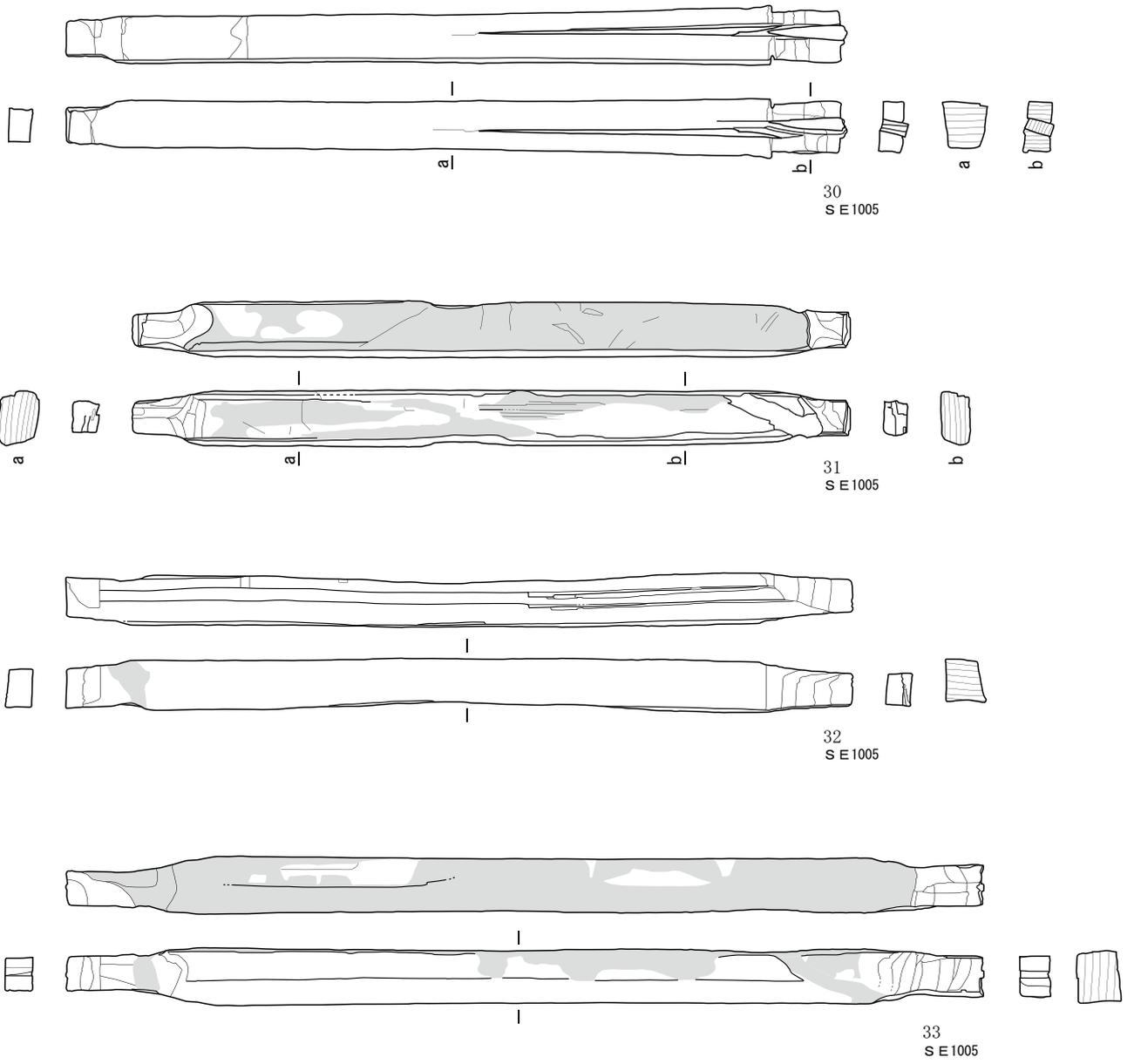
第32図 遺構内出土遺物(6) S E1004・1005



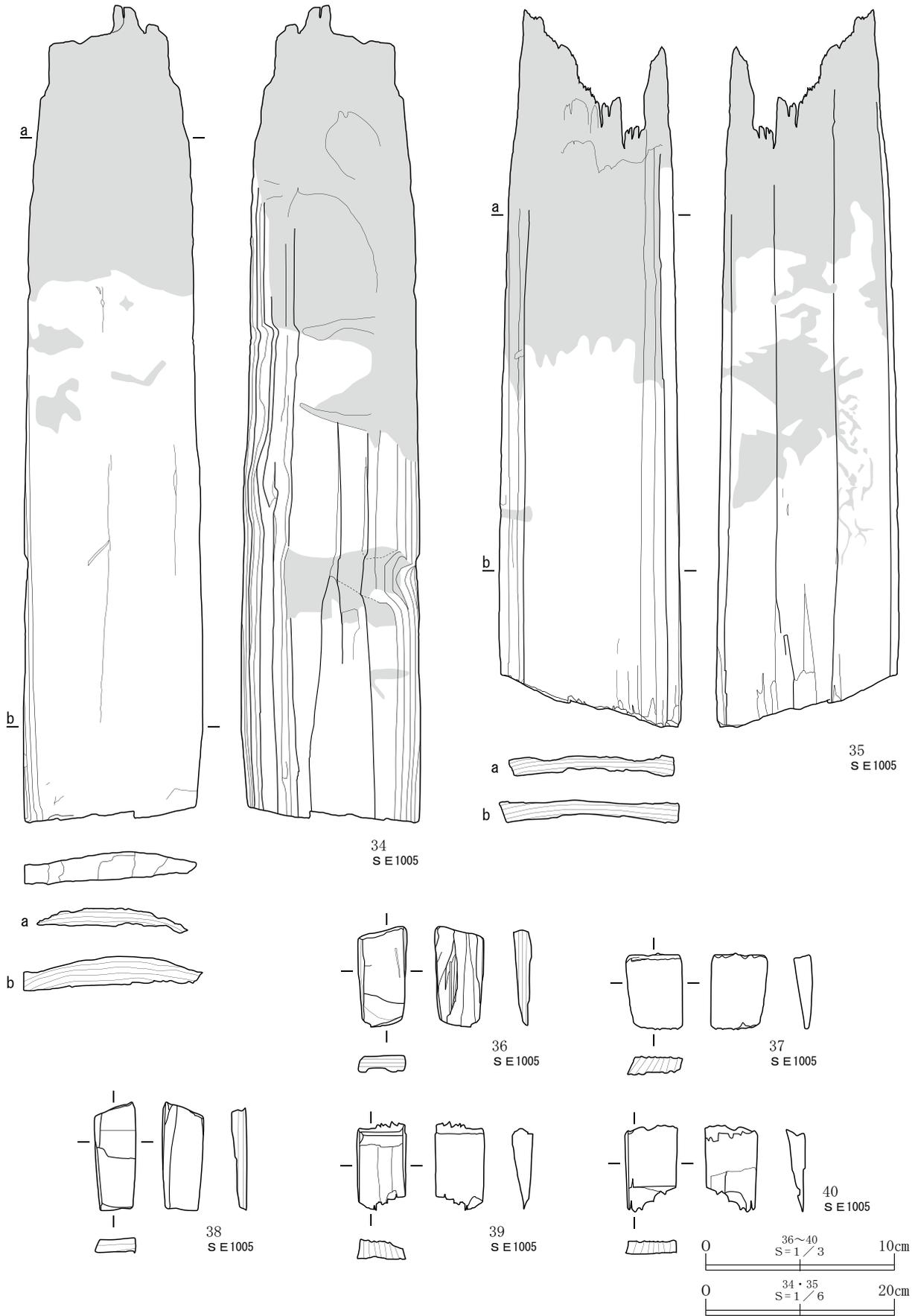
第33図 遺構内出土遺物(7) S E 1005



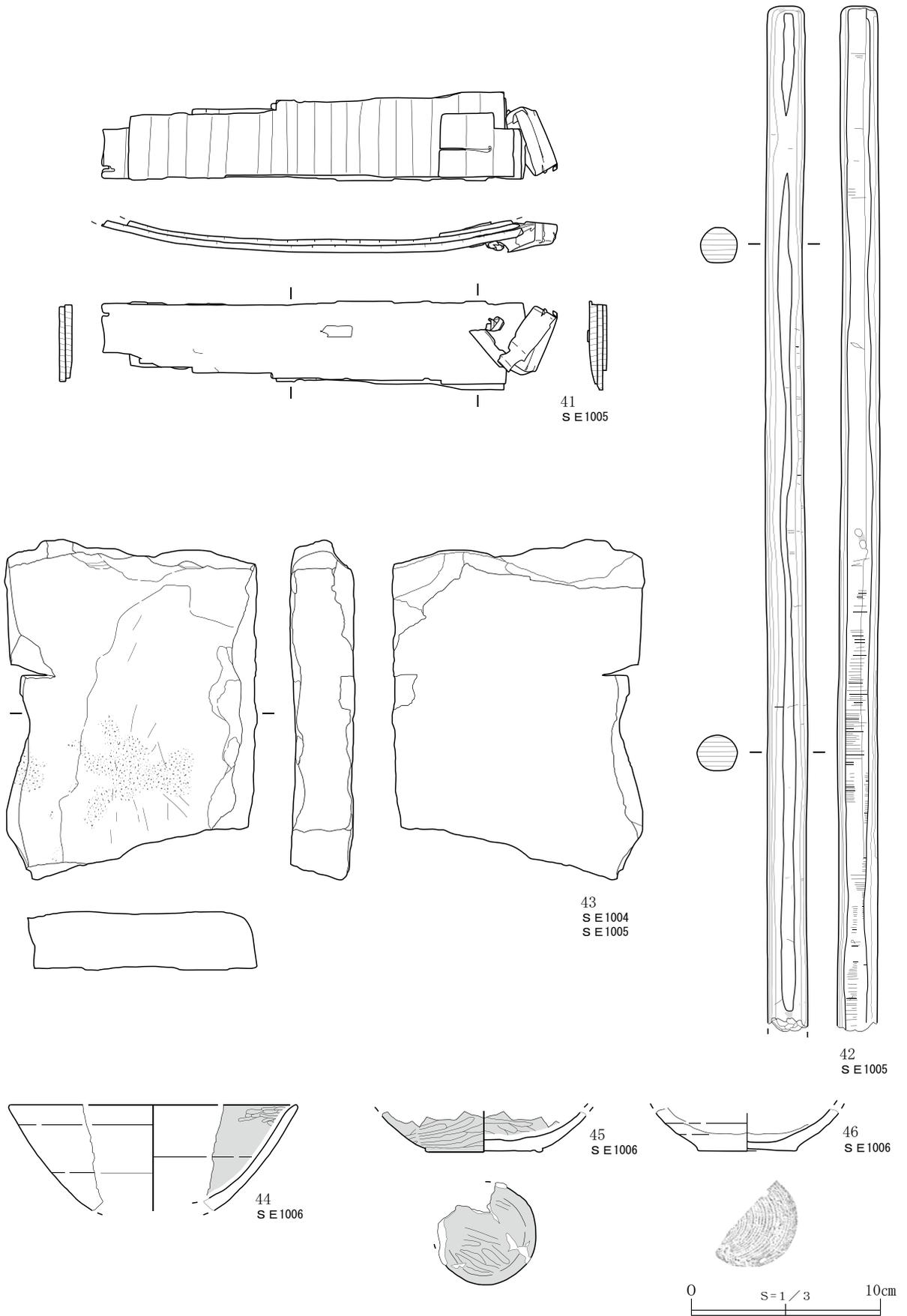
第34図 遺構内出土遺物(8) S E 1005



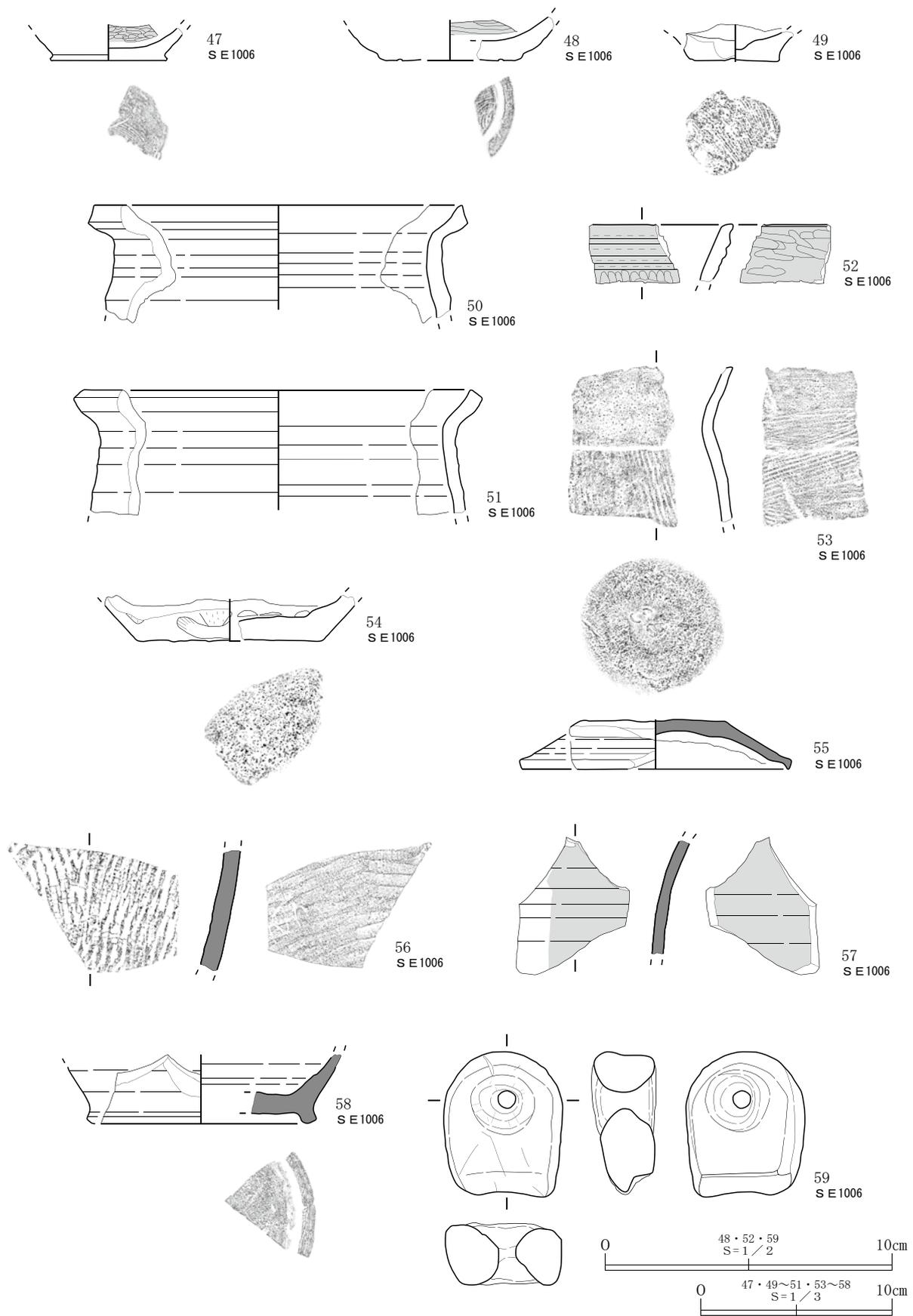
第35図 遺構内出土遺物(9) S E 1005



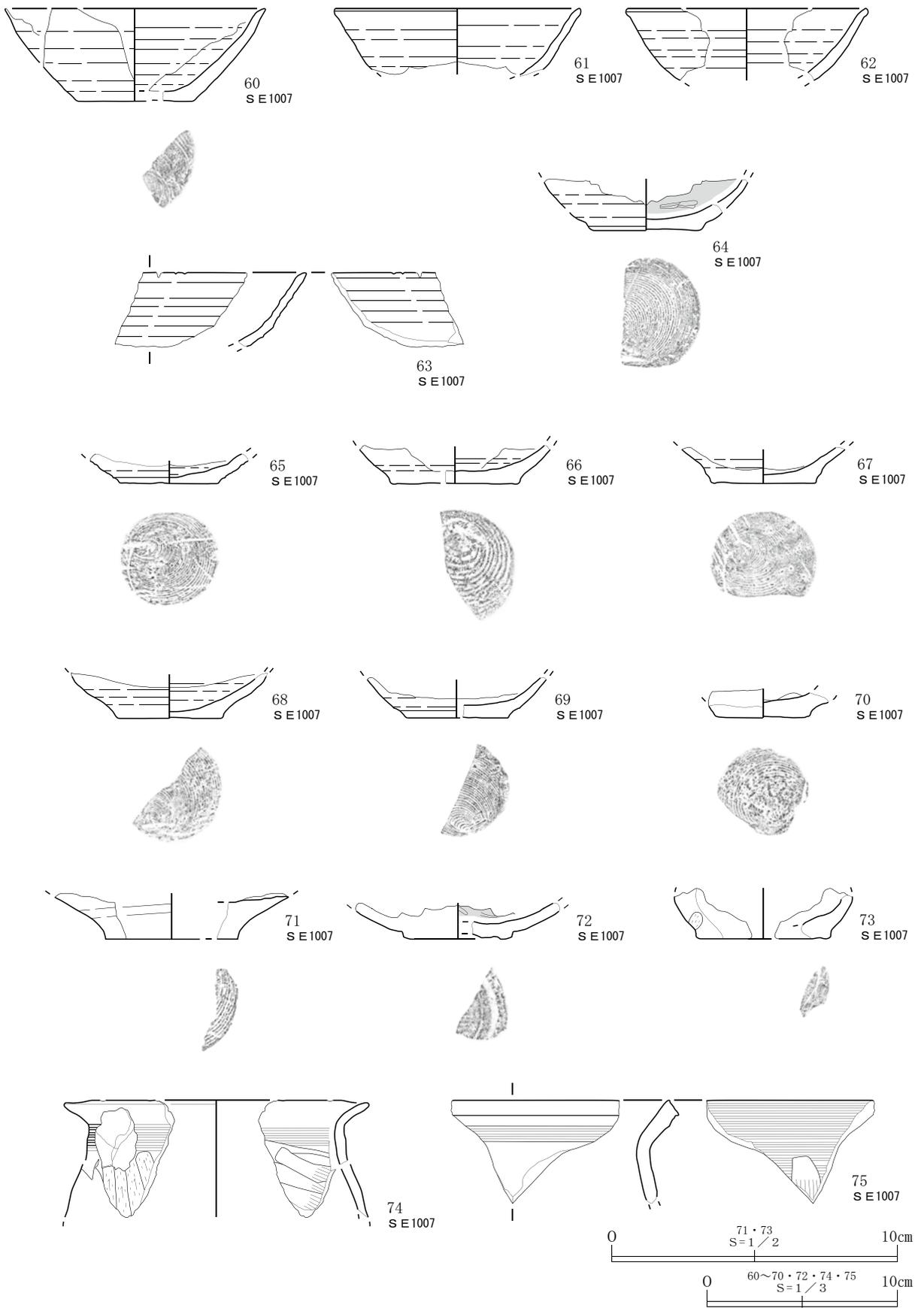
第36図 遺構内出土遺物(10) S E 1005



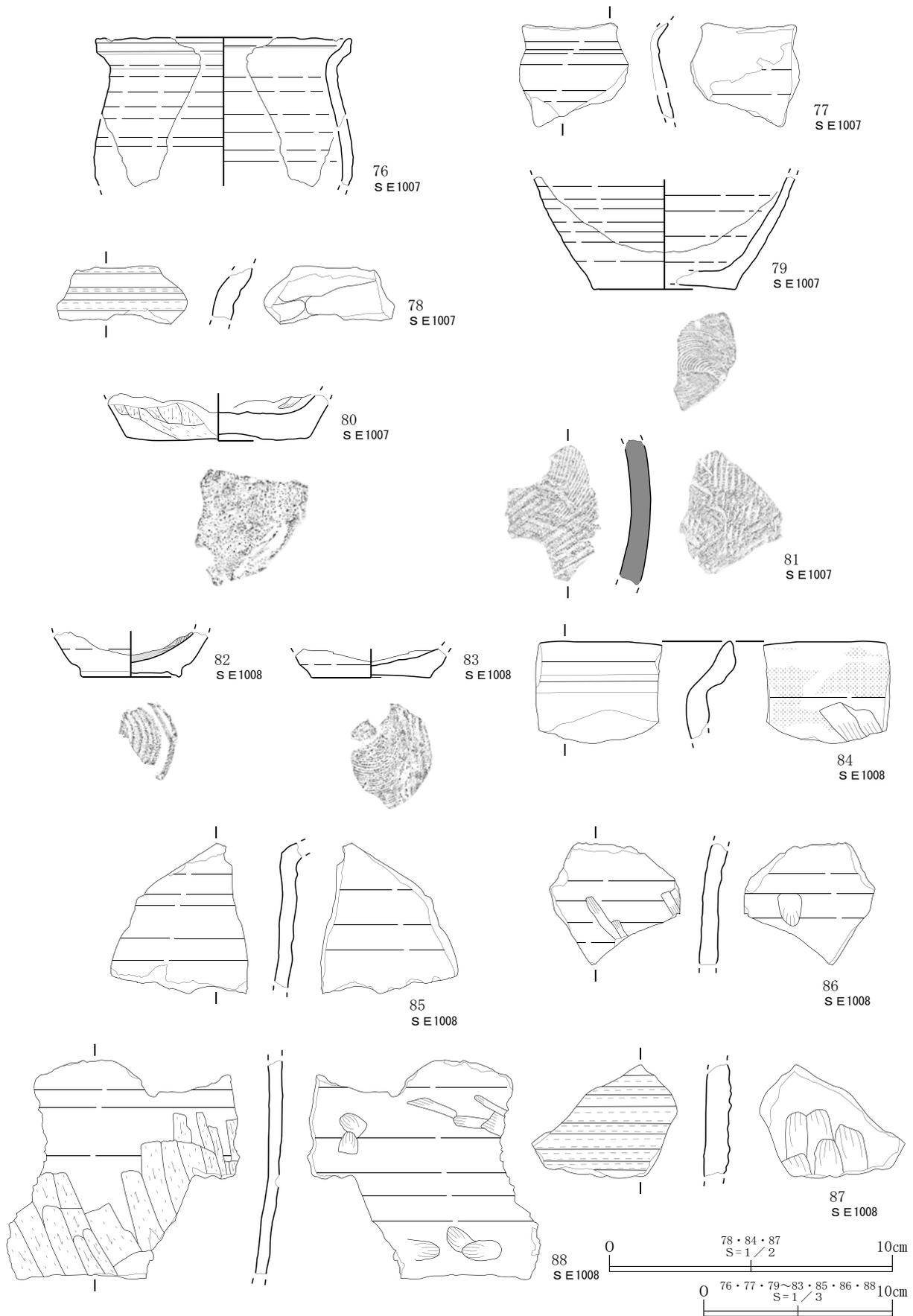
第37図 遺構内出土遺物(11) S E 1004・1005・1006



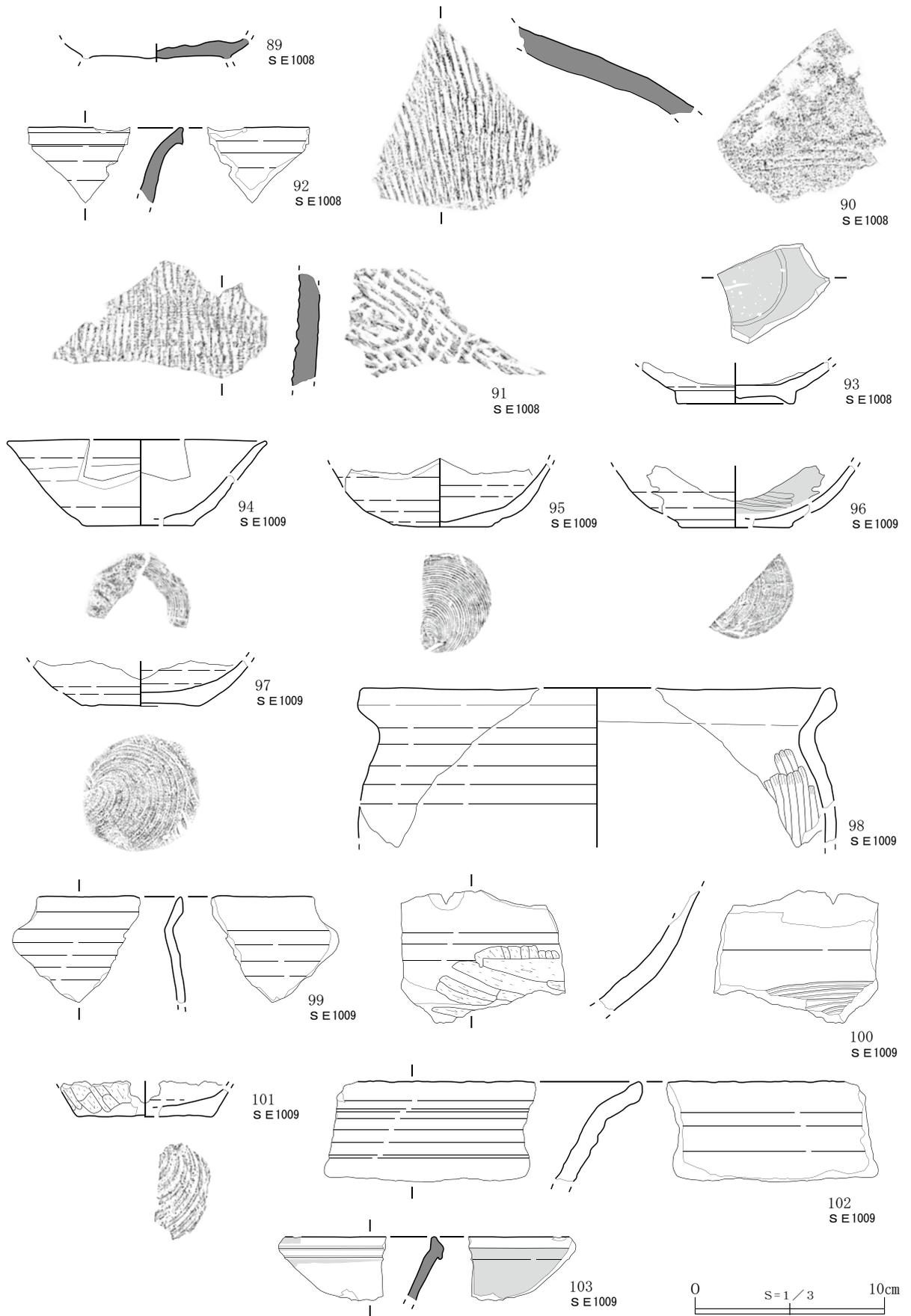
第38図 遺構内出土遺物(12) S E 1006



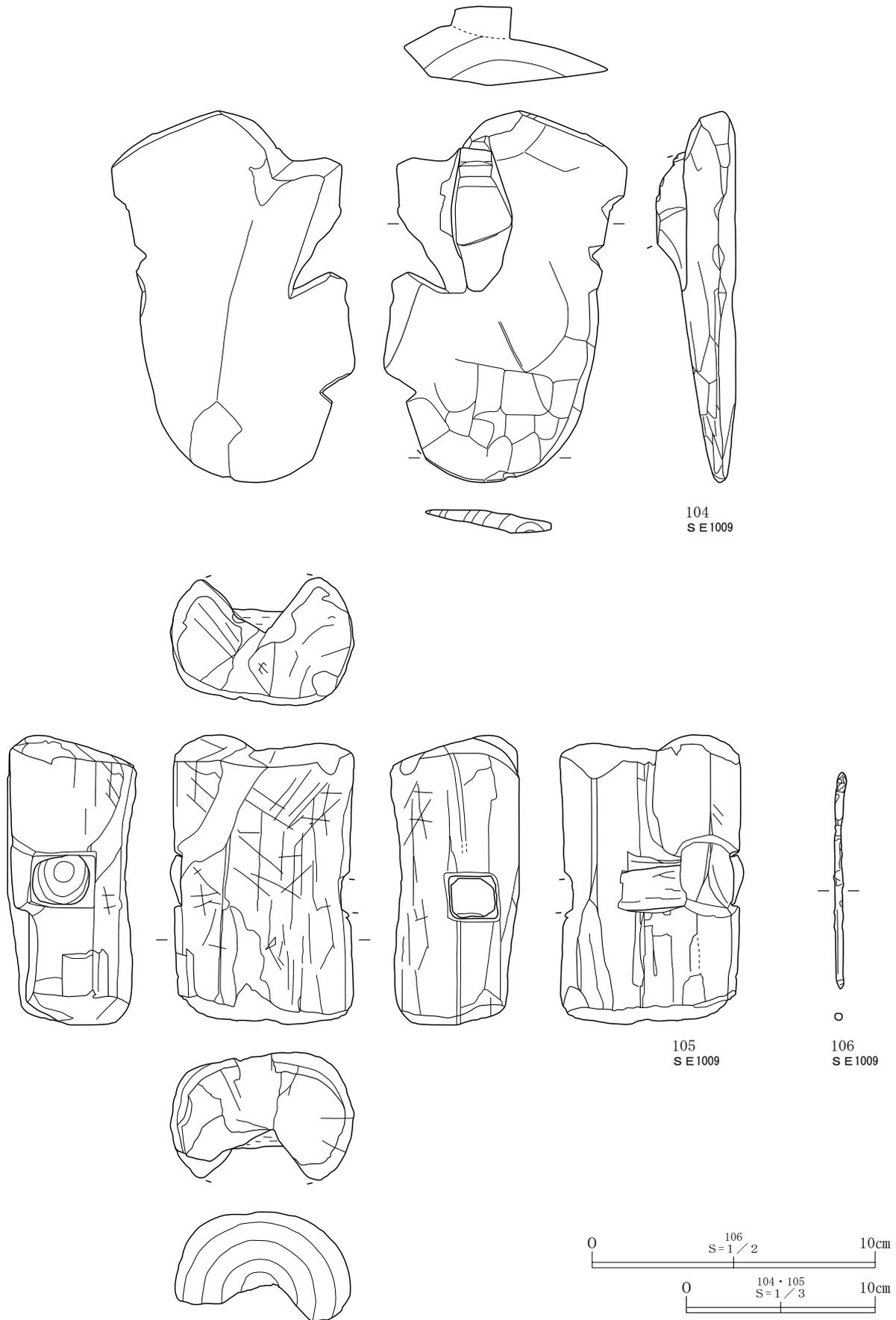
第39図 遺構内出土遺物(13) S E 1007



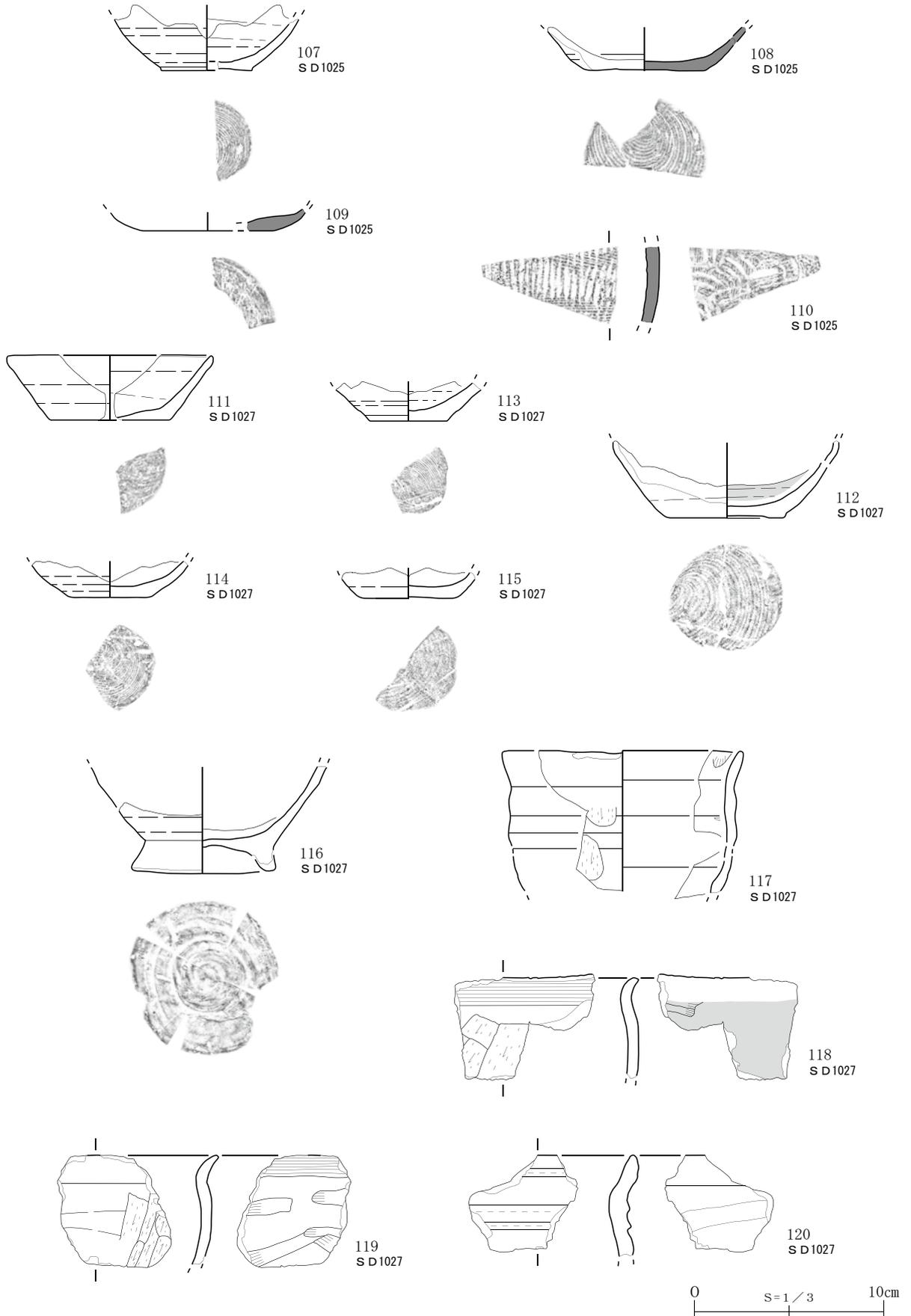
第40図 遺構内出土遺物(14) S E 1007・1008



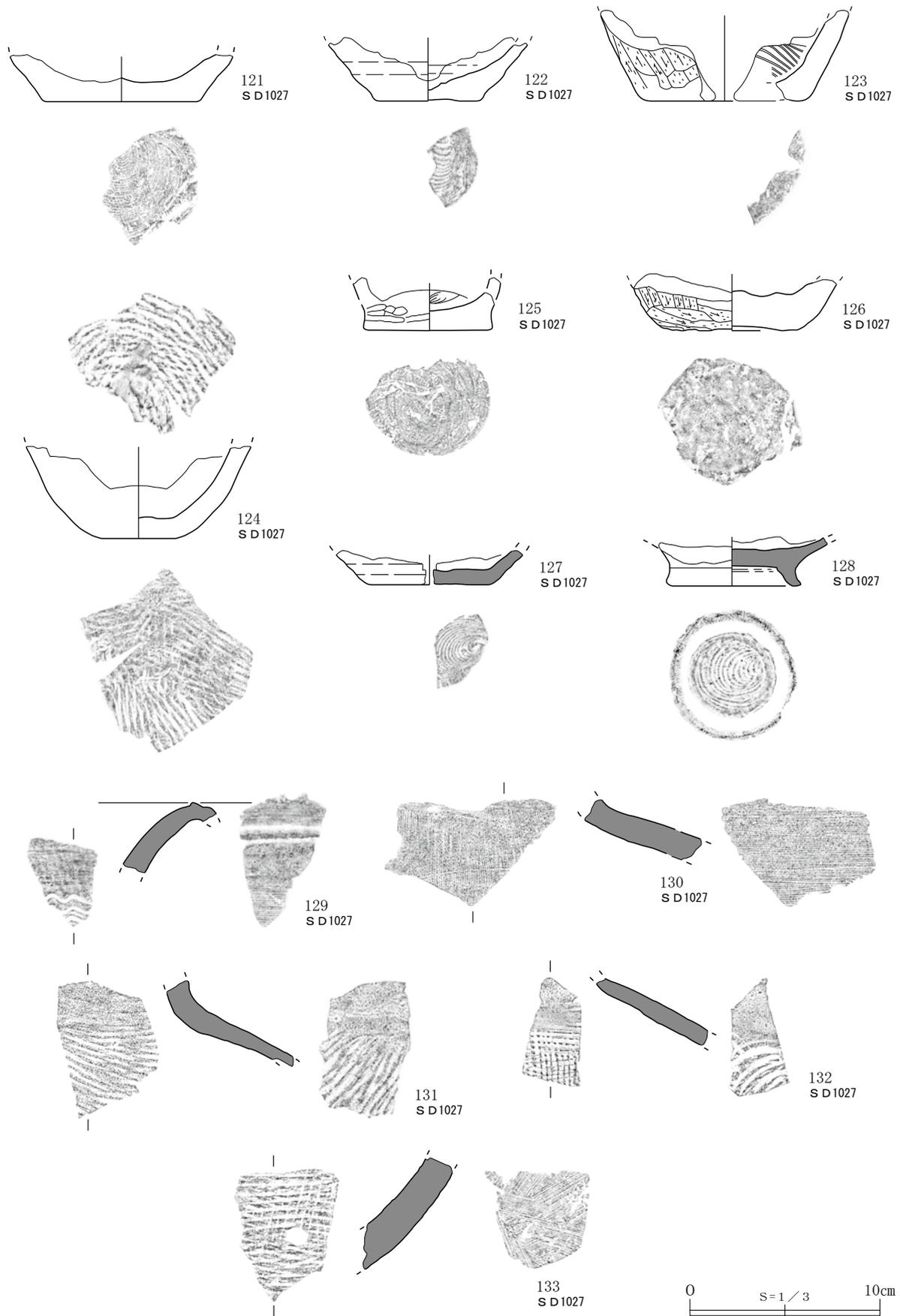
第41図 遺構内出土遺物(15) S E 1008・1009



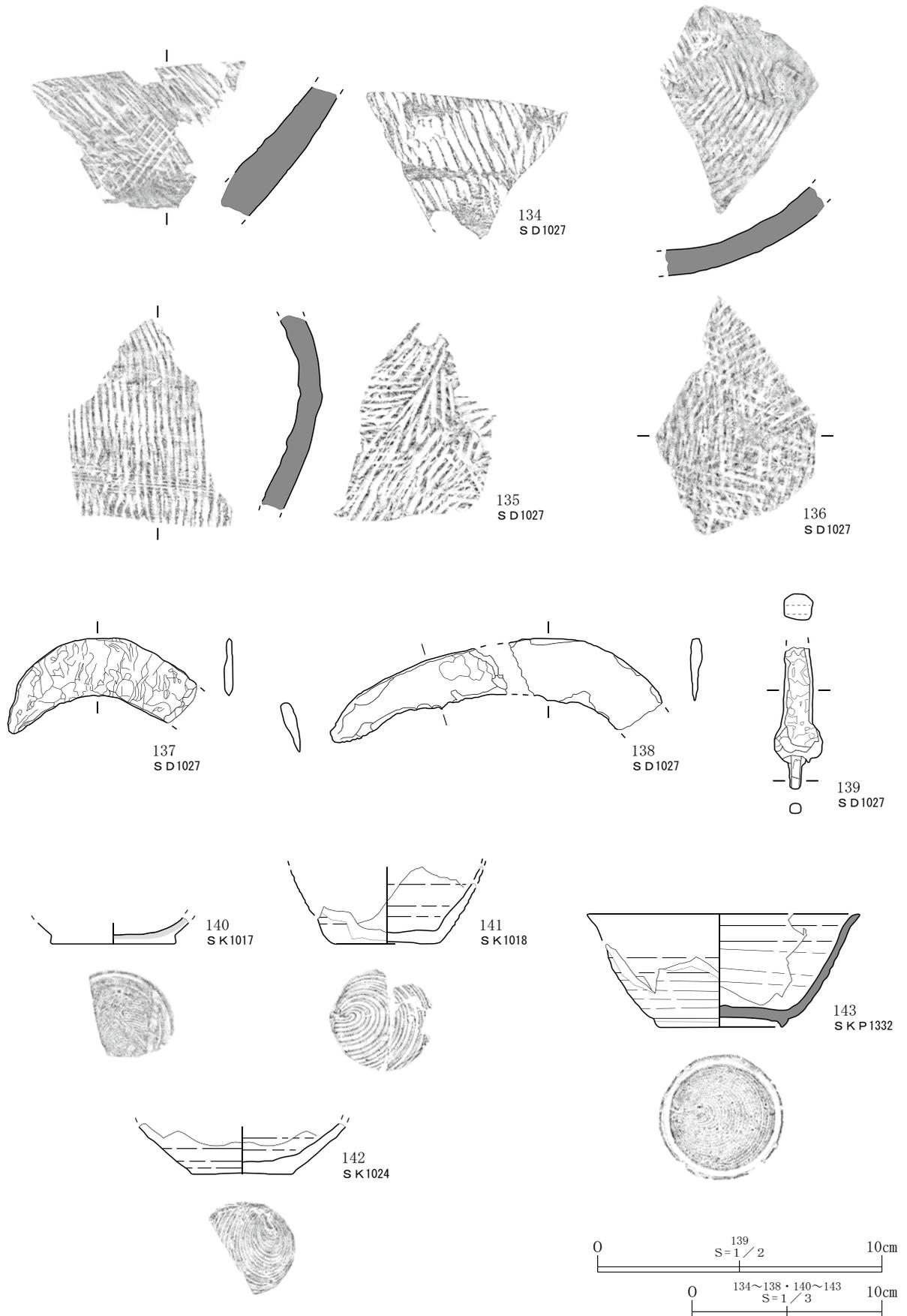
第42図 遺構内出土遺物(16) S E 1009



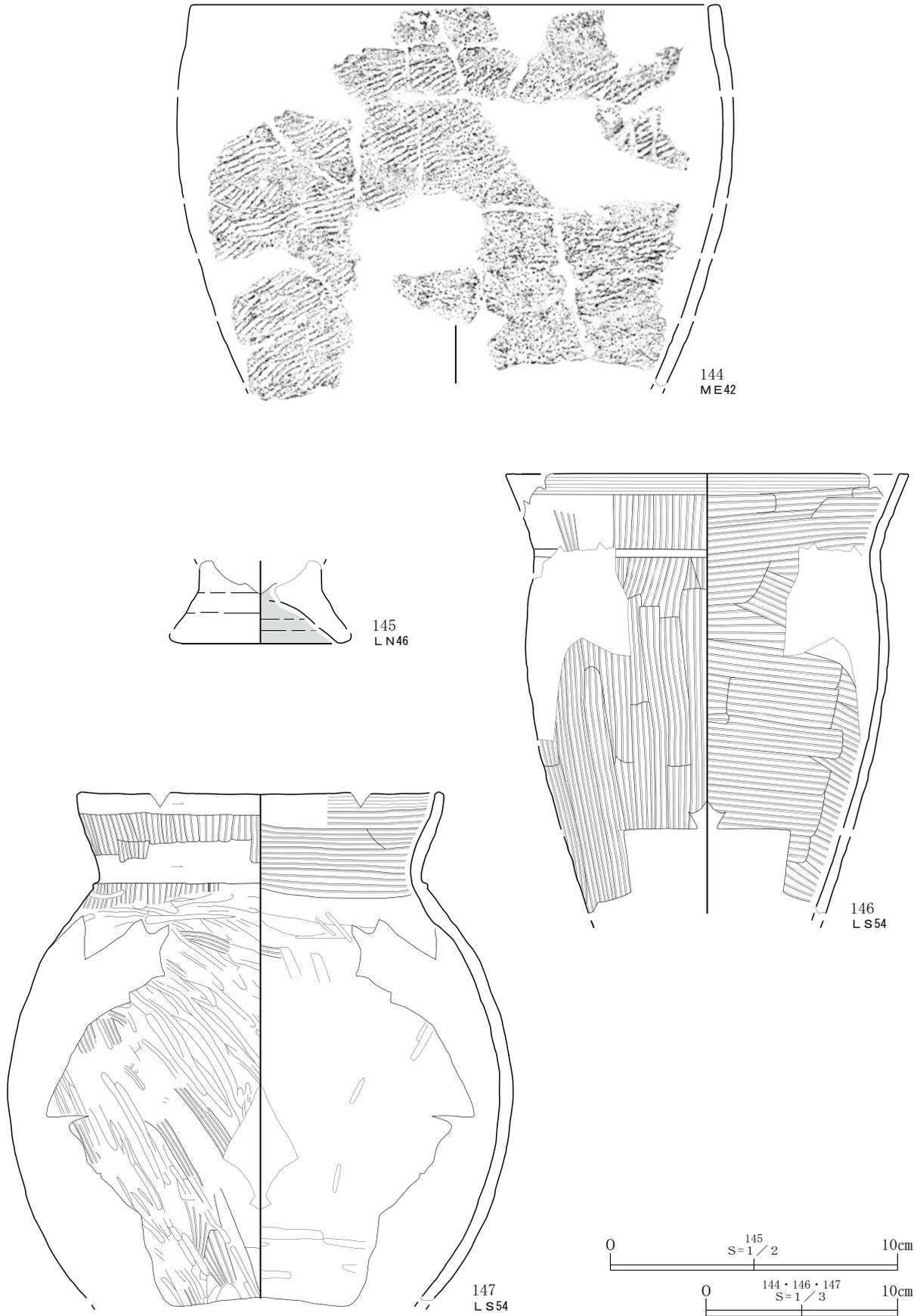
第43図 遺構内出土遺物(17) S D1025・1027



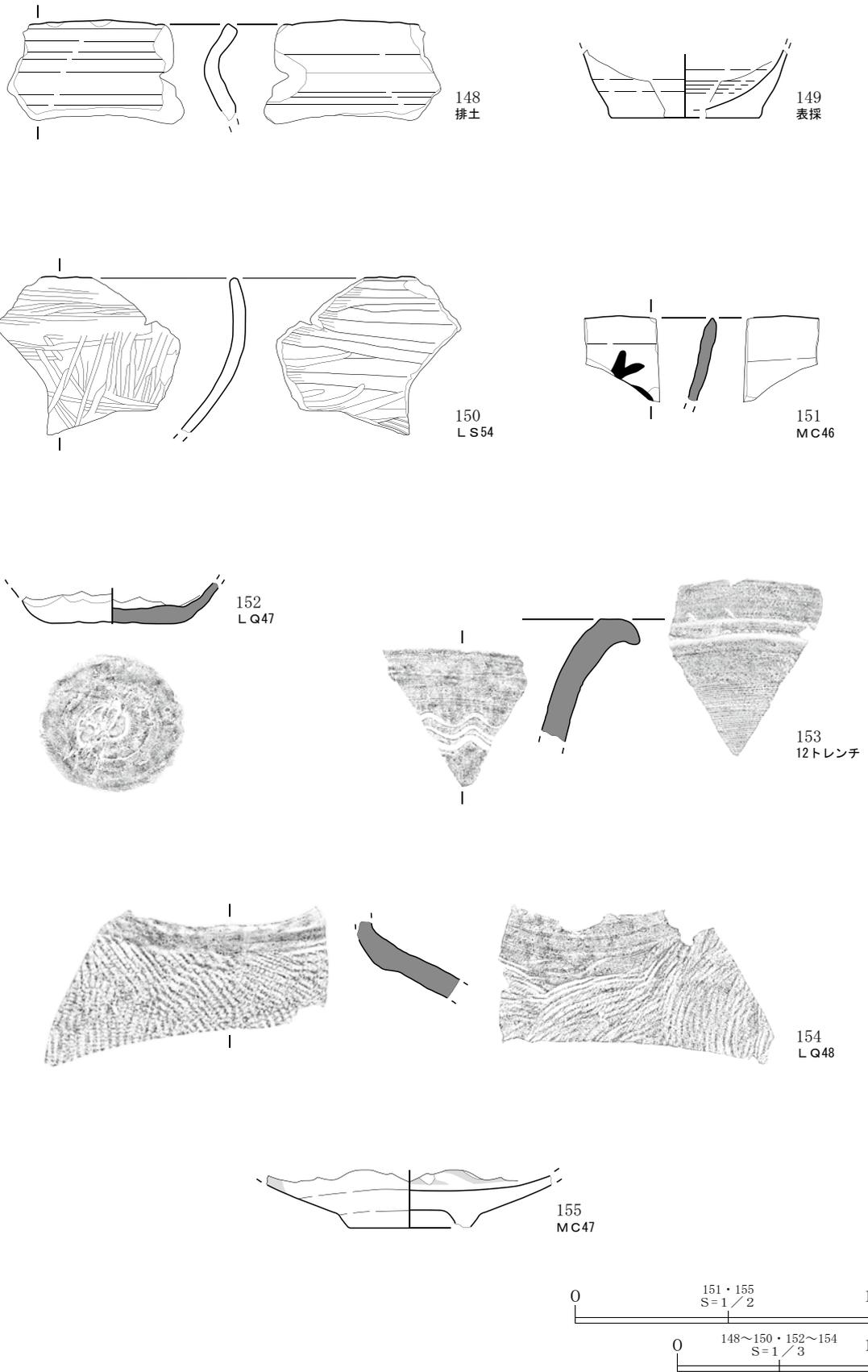
第44図 遺構内出土遺物(18) S D 1027



第45図 遺構内出土遺物(19) S D1027、S K1017・1018・1024、S K P1332



第46図 遺構外出土遺物(1)



第47図 遺構外出土遺物(2)

第6表 土器・陶磁器一覧(1)

遺物番号	挿図番号	図版番号	出土位置	出土層位	種類器種	部位	器面調整・切り離し	大きさ(cm)			重量(g)	備考
								口径	底径	器高		
1	第27図	11	SI1019	1層	両黒土師器高坏	口縁～脚部	【外面】ミガキ 【内面】ミガキ	11.4	8.1	11.5	34.1	内外面黒色。内外面摩滅強。内外面の一部で吸炭。非ロクロ成形。
2	第27図	11	SI1019	1・5層	土師器甕	口縁～底部	【外面】カキ目、底部：木葉痕 【内面】カキ目、口縁部横ナデ	22.5	7.5	32.4	1698.0	長胴甕。内外面摩滅強。外面底部付近が煤ける。非ロクロ成形。頸部に1条の沈線。
3	第27図	11・12	SI1019	1・5層	土師器甕	口縁～底部	【内外面】カキ目 底部：笹葉痕	19.5	7.0	32.8	1441.0	長胴甕。内外面摩滅強。内面頸部に煤付着。非ロクロ成形。頸部には1条の沈線。
4	第28図	11・12	SI1019	1層	土師器甕	口縁～底部	【内外面】カキ目 底部：木葉痕	20.7	7.1	29.3	1426.0	長胴甕。内外面摩滅強。外面底部付近が煤ける。非ロクロ成形。頸部に1条の沈線。
5	第28図	11	SI1019	1層	土師器甕	口縁～底部	【外面】カキ目 底部：木葉痕 【内面】ナデ(木口状)	15.8	6.1	19.3	665.4	小型甕。内外面摩滅強。内外面共に部分的に煤ける。非ロクロ成形。頸部に1条及び部分的に2条の沈線。
6	第28図	12	SI1019	1層	土師器甕	頸部	【外面】横ナデ、カキ目 【内面】横ナデ	-	-	(4.5)	16.2 (76.0)	第28図7と同一か。内面は一部摩滅し、全体的に煤ける。非ロクロ成形。
7	第28図	12	SI1019	1層	土師器甕	胴部	【内外面】カキ目	-	-	(5.9)	24.3	第28図6と同一か。内面は、ほぼ全面が煤ける。非ロクロ成形。
8	第28図	12	SE1004	2層	土師器甕	口縁～頸部	【外面】ヘラ削り 【内面】指ナデ	-	-	(3.9)	12.1 (14.3)	小型甕。胎土に大粒の砂礫粒含む。全体に煤ける。非ロクロ成形。
9	第28図	12	SE1004	2層	内黒土師器壺	頸～肩部	【外面】ミガキ 【内面】削り	-	-	(4.7)	49.3 (64.0)	内面黒色。胎土に大粒の砂礫粒含む。外面摩滅強。非ロクロ成形。
10	第28図	12	SE1004	井戸枠内上層	須恵器甕	胴部	【内外面】平行叩き	-	-	(7.5)	70.4	内面生焼け。外面の叩痕には、工具の木目が見える。
19	第32図	12	SE1005	裏込め土中	土師器坏	口縁～体部	【内外面】ロクロナデ	-	-	(5.2)	11.7	
20	第32図	12	SE1005	-	土師器坏	底部	【外面】ロクロナデ 底部：右回転糸切り 【内面】ロクロナデ	-	(5.6)	(1.9)	25.3	
21	第32図	-	SE1005	-	土師器坏	底部	【外面】ロクロナデ 底部：右回転糸切り 【内面】ロクロナデ	-	(6.0)	(2.2)	18.2	
22	第32図	12	SE1005	裏込め土中	土師器甕	口縁～頸部	【内外面】ロクロナデ	-	-	(5.4)	18.3	長胴甕か。
23	第32図	12	SE1005	2層	土師器甕	底部	【外面】ロクロナデ 底部：切り離し不明 【内面】ロクロナデ	-	6.0	(1.4)	46.4	胎土に大粒の砂礫粒含む。底部にヘラを抜いた際の痕跡。
24	第32図	12	SE1005	2層	須恵器甕	胴部	【外面】ロクロナデ→縦位ハケ目 【内面】ロクロナデ	-	-	(5.2)	53.3 (70.7)	
25	第32図	12	SE1005	裏込め土中	須恵器壺・甕	胴部	【外面】平行叩き→横ナデ 【内面】同心円状叩き→横ナデ	-	-	(3.1)	17.4	
44	第37図	12	SE1006	8層	内黒土師器坏	口縁～胴部	【外面】ロクロナデ 【内面】ロクロナデ→ミガキ	(15.2)	-	(5.6)	33.0 (53.5)	内面黒色。口縁部にはミガキの痕跡が残るが、他は不明。
45	第37図	12	SE1006	-	両黒土師器高台付坏	体～底部	【外面】ロクロナデ→ミガキ、底部：切り離し不明→高台貼付→ミガキ 【内面】ロクロナデ→ミガキ	-	(6.2)	(2.1)	45.2	内外面黒色。内面底部は一部摩滅。
46	第37図	12	SE1006	8層	土師器坏	体～底部	【外面】ロクロナデ 底部：左？回転糸切り 【内面】ロクロナデ	-	(5.2)	(2.2)	23.0	見込み中央に、ロクロ調整時の指押しえ痕。
47	第38図	13	SE1006	-	内黒土師器坏	体～底部	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り 【内面】ロクロナデ→ミガキ	-	(6.1)	(2.1)	19.4	内面黒色。外面摩滅強。
48	第38図	-	SE1006	3層	内黒土師器高台付坏	底部～高台	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り？→貼付高台 【内面】ロクロナデ→ミガキ	-	(5.0)	(1.5)	9.9 (20.4)	内面黒色。底部は一部煤ける。
49	第38図	-	SE1006	8層	土師器坏	底部	【外面】ロクロナデ 底部：静止糸切り 【内面】ロクロナデ	-	(4.6)	(1.9)	35.7	底部は柱状高台。見込み中央には調整時の指押しえ痕が残り、窪む。
50	第38図	13	SE1006	10層	土師器甕	口縁～頸部	【内外面】ロクロナデ	(19.6)	-	(5.5)	58.4	丸底長胴甕。胎土に大粒の砂礫含む。
51	第38図	13	SE1006	-	土師器甕	口縁～頸部	【内外面】ロクロナデ	(21.4)	-	(6.4)	64.4	丸底長胴甕。内面摩滅強。表面に僅かに酸化鉄分付着。

※大きさの欄の()や〈 〉内の数値は、それぞれ推定値、残存値である。重量の()は、同一片と思われる破片を合わせた重量である。

第7表 土器・陶磁器一覧(2)

遺物番号	挿図番号	図版番号	出土位置	出土層位	種類器種	部位	器面調整・切り離し	大きさ(cm)			重量(g)	備考
								口径	底径	器高		
52	第38図	13	SE1006	8層	両黒土師器甕	口縁部	【外内面】ミガキ→隆線・沈線	-	-	〈2.1〉	45.2	内外面黒色。擦文系土器？
53	第38図	13	SE1006	8層	土師器甕	口縁～頸部	【外面】カキ目 【内面】カキ目、横ナデ	-	-	〈7.9〉	38.9 (84.3)	外面口縁部は摩滅強。
54	第38図	13	SE1006	7層	土師器甕	底部	【外面】指ナデ、ヘラ削り 底部：砂底、指ナデ 【内面】指頭押さえ、指ナデ	-	(9.6)	〈2.4〉	85.5	底部には砂粒が付着。
55	第38図	13	SE1006	8層	須恵器坏蓋	天井～端部	【外面】ロクロナデ、天井部：回転ヘラ切り→ナデ調整 【内面】ロクロナデ	(14.0)	天井径7.4	2.5	107.5	内面は摩滅強。天井部外面は全体的に煤ける。
56	第38図	13	SE1006	-	須恵器甕	胴部	【外内面】平行叩き	-	-	〈6.3〉	77.3	胎土に硝石粒少量含む。
57	第38図	13	SE1006	7層	須恵器壺	頸部	【外内面】ロクロナデ	-	-	〈5.9〉	34.3	
58	第38図	13	SE1006	-	須恵器壺	底部～高台	【外面】ロクロナデ 底部：切り離し不明、ヘラ削り→高台貼付→高台部：ロクロナデ 【内面】ロクロナデ	-	(12.0)	〈3.7〉	49.0	
60	第39図	13	SE1007	4層	土師器坏	口縁～底部	【外内面】ロクロナデ 底部：切り離し不明(静止糸切りか)	(13.7)	(6.2)	4.9	39.5	
61	第39図	13	SE1007	-	土師器坏	口縁～胴部	【外内面】ロクロナデ	(13.0)	-	〈3.5〉	31.8	外面が全体的に煤ける。
62	第39図	13	SE1007	-	土師器坏	口縁～胴部	【外内面】ロクロナデ	(12.8)	-	〈3.8〉	30.8	外面の大部分が煤ける。
63	第39図	13	SE1007	-	土師器坏	口縁～胴部	【外内面】ロクロナデ	-	-	〈3.9〉	19.9	
64	第39図	13	SE1007	-	内黒土師器坏	体～底部	【外面】ロクロナデ 底部：左？回転糸切り 【内面】ロクロナデ→ミガキ	-	(6.0)	〈2.6〉	56.0	内面黒色。
65	第39図	-	SE1007	-	土師器坏	底部	【外面】ロクロナデ 底部：右回転糸切り 【内面】ロクロナデ	-	5.2	〈1.2〉	39.4	底部外側が全体的に煤ける。見込み中央にロクロ成形時の指押さえ痕。
66	第39図	-	SE1007	4層	土師器坏	底部	【外面】ロクロナデ 底部：右回転糸切り 【内面】ロクロナデ	-	(6.8)	〈2.0〉	37.8	
67	第39図	-	SE1007	-	土師器坏	底部	【外面】ロクロナデ 底部：右回転糸切り 【内面】ロクロナデ	-	5.6	〈1.8〉	35.6	
68	第39図	-	SE1007	7層	土師器坏	体～底部	【外面】ロクロナデ 底部：右回転糸切り 【内面】ロクロナデ	-	5.6	〈2.2〉	32.1	外面に酸化鉄付着。内外面ともに摩滅強。見込み中央にロクロ調整時の指押さえ痕。
69	第39図	-	SE1007	-	土師器坏	底部	【外面】ロクロナデ 底部：右回転糸切り 【内面】ロクロナデ	-	(5.4)	〈2.0〉	20.6	
70	第39図	-	SE1007	7層	土師器坏	底部	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り 【内面】ロクロナデ	-	5.0	〈1.5〉	40.1	摩滅強。見込み中央にロクロ調整時の指押さえ痕。
71	第39図	-	SE1007	-	土師器坏	底部	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り 【内面】ロクロナデ	-	(4.6)	〈1.5〉	8.3	小型坏。見込み全体が摩滅強。底部外面は柱状高台。
72	第39図	13	SE1007	-	内黒土師器高台付皿	底部	【外面】ロクロナデ 底部：切り離し不明→高台貼付→ミガキ 【内面】ロクロナデ→ミガキ	-	(5.6)	〈1.9〉	16.4	内外面黒色。
73	第39図	13	SE1007	-	土師器耳皿？	口縁～底部	【外面】ロクロナデ→ヘラ削り、底部：回転糸切り 【内面】ロクロナデ→ヘラ押さえ	-	(4.8)	〈1.8〉	6.4	底部付近に酸化した鉄分付着。
74	第39図	13	SE1007	-	土師器甕	口縁～胴部	【外面】横ナデ、ヘラ削り 【内面】横ナデ、ハケ目	(16.0)	-	〈6.2〉	49.6	小型甕か。内外面摩滅強。非ロクロ調整。内面は煤ける。外面に焼けた粘土塊が付着。
75	第39図	13	SE1007	-	土師器甕	口縁～頸部	【外面】横ナデ 【内面】横ナデ→縦位ハケ目	-	-	〈5.5〉	42.0	外面摩滅強。非ロクロ調整。
76	第40図	13	SE1007	-	土師器甕	口縁～胴部	【外内面】ロクロナデ	(13.7)	-	〈7.9〉	57.2	小型甕。胎土に砂礫粒含む。
77	第40図	13	SE1007	-	土師器甕	頸～胴部	【外内面】ロクロナデ	-	-	〈5.4〉	22.7	小型甕。内面は摩滅範囲が広い。全体的に煤ける。
78	第40図	13	SE1007	-	土師器甕	頸部	【外面】沈線→横ナデ 【内面】ナデ	-	-	〈1.8〉	9.0	外面に沈線が2条の多条沈線文。非ロクロ調整。
79	第40図	13	SE1007	-	土師器甕	胴～底部	【外面】ロクロナデ 底部：右回転糸切り 【内面】ロクロナデ	-	(7.6)	〈6.0〉	68.7	

※大きさの欄の()や〈 〉内の数値は、それぞれ推定値、残存値である。重量の()は、同一片と思われる破片を合わせた重量である。

第8表 土器・陶磁器一覧(3)

遺物 番号	挿図 番号	図版 番号	出土 位置	出土 層位	種類 器種	部位	器面調整・切り離し	大きさ(cm)			重量 (g)	備 考
								口径	底径	器高		
80	第40図	13	SE1007	4層	土師器甕	底部	【外面】ナデ→ヘラ削り、 底部：砂底 【内面】ナデ→指頭押さえ	-	(9.8)	(1.9)	81.7	胎土に大粒の砂礫粒含む。底部には砂粒が付着。
81	第40図	-	SE1007	-	須恵器甕	胴部	【外面】平行叩き→ハケ目 【内面】平行叩き→同心円状叩き	-	-	(7.2)	58.9	
82	第40図	-	SE1008	-	内黒土師器高台付坏	体~底部	【外面】ロクロナデ 底部：糸切り→高台貼付 【内面】ミガキ	-	(5.4)	(2.3)	28.9	内面黒色。胎土に雲母粒含む。
83	第40図	-	SE1008	-	土師器坏	底部	【外面】ロクロナデ 底部：右回転糸切り 【内面】ロクロナデ	-	(6.4)	(1.5)	35.1	見込み中央にロクロ調整時の指押さえ痕。
84	第40図	13	SE1008	-	土師器甕	口縁~頸部	【外面】ロクロナデ 【内面】ロクロナデ 縦位ハケ目	-	-	(3.6)	19.0	丸底長胴甕か。内面は大部分が煤ける。
85	第40図	-	SE1008	8層	土師器甕	頸~胴部	【内外面】ロクロナデ	-	-	(7.7)	47.9	胎土に大粒の砂礫粒含む。外面下方の一部が煤ける。
86	第40図	13	SE1008	8層	土師器甕	頸部	【外面】ロクロナデ 縦位ハケ目 【内面】ロクロナデ 指頭押さえ	-	-	(6.2)	38.5 (117.1)	胎土に大粒の砂礫粒含む。内外面共に一部煤ける。
87	第40図	13	SE1008	8層	土師器甕	頸部	【外面】沈線 【内面】指ナデ	-	-	(4.0)	17.2	沈線が8条の多条沈線文。外面は一部煤ける。
88	第40図	13	SE1008	-	土師器甕	胴部	【外面】ロクロナデ→ヘラ削り 【内面】ロクロナデ→横位ハケ目、指頭押さえ	-	-	(11.4)	111.2 (163.1)	胎土に大粒の砂礫粒含む。内面が一部煤ける。
89	第41図	-	SE1008	-	須恵器高台付皿	底部	【外面】ロクロナデ 底部：回転ヘラ削り→高台貼付 【内面】ロクロナデ	-	(7.8)	(1.0)	16.0 (17.8)	高台部分は接続部が僅かに残存。
90	第41図	14	SE1008	2層	須恵器甕	肩部	【外面】平行叩き 【内面】指頭押さえ→横位ヘラナデ	-	-	(4.7)	128.9	
91	第41図	14	SE1008	5層	須恵器甕	胴部	【外面】平行叩き 格子状叩き 【内面】平行叩き	-	-	(6.0)	82.8 (87.7)	胎土が生焼けの橙色。
92	第41図	14	SE1008	-	須恵器甕	口縁~頸部	【内外面】ロクロナデ	-	-	(4.0)	14.6	
93	第41図	14	SE1008	4層	白磁碗	胴~高台	【外面】ロクロナデ→施釉 底部：削り出し高台 【内面】ロクロナデ→施釉	-	(6.3)	(1.8)	35.4	胎土は緻密で、微細な黒粒・白粒を含む。内面及び外面胴部上半より上は施釉される。太宰府編年白磁Ⅱ類の碗で、玉縁口縁と推測される。
94	第41図	14	SE1009	-	土師器坏	口縁~底部	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り 【内面】ロクロナデ	(13.8)	(5.8)	4.5	64.8	胎土に大粒の砂礫粒含む。
95	第41図	14	SE1009	3層	土師器坏	体~底部	【外面】ロクロナデ 底部：右回転糸切り 【内面】ロクロナデ	-	(5.2)	(3.7)	67.4	見込み中央部に、ロクロ成形時の指押さえ痕。
96	第41図	14	SE1009	-	内黒土師器坏	体~底部	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り 【内面】ロクロナデ→ミガキ	-	(5.6)	(3.3)	32.0	内面黒色。
97	第41図	14	SE1009	3層	土師器坏	底部	【外面】ロクロナデ 底部：右回転糸切り 【内面】ロクロナデ	-	6.2	(2.4)	96.3	
98	第41図	14	SE1009	1・3層	土師器甕	口縁~頸部	【外面】ロクロナデ 【内面】ロクロナデ→縦位ハケ目	(24.6)	-	(8.5)	116.3	長胴甕。胎土に大粒の砂礫粒含む。外面が一部煤ける。
99	第41図	14	SE1009	-	土師器甕	口縁~胴部	【内外面】ロクロナデ	-	-	(5.6)	21.8	小型甕。外面は全体及び内面口縁部裏が煤ける。
100	第41図	14	SE1009	3層	土師器鍋	体部	【外面】ロクロナデ→ヘラ削り 【内面】ロクロナデ→カキ目	-	-	(6.3)	87.6	
101	第41図	14	SE1009	2層	土師器甕	底部	【外面】ロクロナデ→ヘラ削り 【内面】ロクロナデ	-	(7.0)	(1.9)	24.5	小型甕。胎土に大粒の砂礫粒含む。
102	第41図	14	SE1009	-	土師器鍋	口縁~頸部	【内外面】ロクロナデ	-	-	(5.3)	103.9	
103	第41図	14	SE1009	-	須恵器壺	口縁部	【内外面】ロクロナデ	-	-	(3.4)	14.6	内面全体及び外面の一部に自然釉。

※大きさの欄の()や< >内の数値は、それぞれ推定値、残存値である。重量の()は、同一片と思われる破片を合わせた重量である。

第9表 土器・陶磁器一覧(4)

遺物番号	挿図番号	図版番号	出土位置	出土層位	種類器種	部位	器面調整・切り離し	大きさ(cm)			重量(g)	備考
								口径	底径	器高		
107	第43図	14	SD1025	1層	土師器坏	体~底部	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り 【内面】ロクロナデ	-	(4.6)	<3.5>	26.1	
108	第43図	-	SD1025	-	須恵器坏	体~底部	【外面】ロクロナデ 底部：右回転糸切り 【内面】ロクロナデ	-	6.4	<2.1>	33.3	
109	第43図	-	SD1025	-	須恵器坏	底部	【外面】ロクロナデ 底部：回転ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	-	(7.0)	<1.2>	14.1	
110	第43図	14	SD1025	-	須恵器甕	胴部	【外面】平行叩き→カキ目 【内面】カキ目→ 同心円状叩き	-	-	<4.2>	23.8	
111	第43図	14	SD1027	3層	土師器坏	口縁~底部	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切りか 【内面】ロクロナデ	(10.8)	(6.4)	3.5	24.6	全体に摩滅強。
112	第43図	14	SD1027	3層	内黒土師器坏	体~底部	【外面】ロクロナデ 底部：右回転糸切り 【内面】ロクロナデ	-	6.0	<4.0>	81.3	内面黒色。部分的に摩滅強。内面ミガキなし。
113	第43図	14	SD1027	2層	土師器坏	体~底部	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り 【内面】ロクロナデ	-	(4.2)	<2.1>	21.1	小型坏。
114	第43図	14	SD1027	2層	土師器坏	体~底部	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り 【内面】ロクロナデ	-	(4.6)	<1.9>	23.2	小型坏。内面摩滅強。外面がかなり煤ける。
115	第43図	-	SD1027	3層	土師器坏	体~底部	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り 【内面】ロクロナデ	-	(5.2)	<1.6>	20.1	小型坏。外面は摩滅強。
116	第43図	15	SD1027	3層	土師器高台付坏	体~高台	【外面】ロクロナデ 底部：切り離し不明→ 高台貼付→ナデ(高台内) 【内面】ロクロナデ	-	(7.7)	<5.7>	115.0	内面摩滅強。
117	第43図	15	SD1027	3層	土師器甕	口縁~胴部	【外面】ヘラ削り 【内面】指ナデ、指押さえ	-	(12.8)	<7.6>	39.5 (42.6)	小型甕。胎土に大粒の砂礫粒含む。内外面口縁部付近が煤ける。非ロクロ成形。
118	第43図	15	SD1027	2層	内黒土師器甕	口縁~頸部	【外面】横ナデ、ヘラ削り 【内面】横位ハケ目	-	-	<5.4>	27.7	内面黒色。小型甕。
119	第43図	15	SD1027	3層	土師器甕	口縁~胴部	【外面】ヘラ削り 【内面】横ナデ 横位ハケ目	-	-	<5.8>	31.1	小型甕。胎土に大粒の砂礫粒含む。内面全域及び外面の一部が煤ける。非ロクロ成形。
120	第43図	15	SD1027	3層	土師器甕	口縁~頸部	【内外面】ロクロナデ	-	-	<4.9>	32.8	胎土に大粒の砂礫粒含む。頸部外面下に2条、口縁部に1条の段。
121	第44図	-	SD1027	1層	土師器甕	底部	【外面】ロクロナデ 底部：右回転糸切り 【内面】ロクロナデ	-	(8.4)	<2.5>	65.3	
122	第44図	15	SD1027	-	土師器甕	底部	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り 【内面】ロクロナデ	-	(5.4)	<3.0>	48.5	
123	第44図	15	SD1027	1層	土師器甕	胴~底部	【外面】ヘラ削り 底部：砂底 【内面】カキ目	-	(8.4)	<4.6>	71.6	胎土に大粒の砂礫粒含む。底部は砂粒が付着。
124	第44図	15	SD1027	-	土師器甕	底部	【内外面】平行叩き→ 底部：叩き出し	-	4.1	<4.9>	88.4	丸底長胴甕。胎土に砂礫粒含む。やや平底気味。
125	第44図	15	SD1027	3層	土師器甕	底部	【外面】ミガキ 底部：木葉痕→ミガキ 【内面】指ナデ	-	(6.8)	<2.2>	67.4	全体的に煤ける。底部外面は木葉痕が残り、その上にミガキを施す。
126	第44図	15	SD1027	-	土師器甕	底部	【外面】ヘラ削り 底部：ヘラ起こし 【内面】ハケ目	-	(7.4)	<3.0>	146.5	
127	第44図	15	SD1027	3層	須恵器坏	体~底部	【外面】ロクロナデ 底部：右回転糸切り 【内面】ロクロナデ	-	(6.2)	<1.8>	24.5	
128	第44図	15	SD1027	2層	須恵器高台付坏	高台	【外面】ロクロナデ 底部：右回転糸切り→ 高台貼付→ロクロナデ 【内面】ロクロナデ	-	7.3	<2.6>	109.0	転用甕。
129	第44図	15	SD1027	3層	須恵器甕	口縁部	【外面】ロクロナデ→ 波状沈線、縦位カキ目 【内面】ロクロナデ→ 横位カキ目	-	-	<3.8>	43.4	大型甕。第44図130・第47図153と同一か。外面頸部付近に波状沈線文。

※大きさの欄の()や< >内の数値は、それぞれ推定値、残存値である。重量の()は、同一片と思われる破片を合わせた重量である。

第10表 土器・陶磁器一覧(5)

遺物番号	挿図番号	図版番号	出土位置	出土層位	種類器種	部位	器面調整・切り離し	大きさ(cm)			重量(g)	備考
								口径	底径	器高		
130	第44図	15	SD1027	3層	須恵器甕	肩部	【外面】ロクロナデ→縦位カキ目 【内面】ロクロナデ→横位カキ目	-	-	〈3.2〉	91.0	大型甕。第44図129・第47図153と同一か。
131	第44図	15	SD1027	3層	須恵器甕	頸～肩部	【外面】ロクロナデ→平行叩き→指押さえ 【内面】ロクロナデ→平行叩き	-	-	〈4.5〉	47.2 (50.6)	大型甕。内面に自然釉。
132	第44図	15	SD1027	2層	須恵器甕	肩部	【外面】ロクロナデ→平行叩き 【内面】ロクロナデ→同心円状叩き	-	-	〈3.5〉	23.7	
133	第44図	15	SD1027	2層	須恵器甕	胴部	【外面】平行叩き 【内面】カキ目	-	-	〈6.8〉	91.7	
134	第45図	15	SD1027	3層	須恵器甕	胴部	【外面】平行叩き→縦位・横位ハケ目 【内面】平行叩き→横位ハケ目	-	-	〈6.2〉	189.8	底部に近い部位か。
135	第45図	15	SD1027	3層	須恵器甕	胴部	【外面】平行叩き→横位カキ目 【内面】平行叩き	-	-	〈9.8〉	109.9	
136	第45図	16	SD1027	2層	須恵器甕	底部	【内外面】平行叩き	-	-	〈4.7〉	164.0	丸底甕。
140	第45図	-	SK1017	-	内黒土師器坏	底部	【外面】ロクロナデ 底部：右回転糸切り 【内面】ロクロナデ→ミガキ	-	(6.6)	〈1.4〉	21.9	内面黒色。
141	第45図	16	SK1018	3層	土師器坏	口縁～底部	【外面】ロクロナデ 底部：右回転糸切り 【内面】ロクロナデ	-	5.5	〈3.9〉	50.6 (59.1)	胴部外面のロクロの段が明瞭。
142	第45図	16	SK1024	-	土師器坏	体～底部	【外面】ロクロナデ 底部：右回転糸切り 【内面】ロクロナデ	-	(5.4)	〈2.6〉	48.4	
143	第45図	16	SKP1332	-	須恵器高台付坏	口縁～底部	【外面】ロクロナデ 底部：右回転糸切り→高台貼付 【内面】ロクロナデ	(14.8)	7.1	6.0	129.7 (141.5)	
144	第46図	16	ME42	-	縄文土器深鉢	口縁～胴部	【外面】LR横位単節縄文 【内面】ナデ	(27.6)	-	〈20.0〉	361.4	後期後葉の粗製深鉢形土器。胎土に大粒の砂礫粒含む。
145	第46図	16	LN46サブトレンチ	-	内黒土師器高坏	高台	【外面】ロクロナデ 【内面】ロクロナデ→内面黒色処理	-	高台径(5.6)	〈2.9〉	26.0	内面黒色。外面が全体的に煤ける。内面のミガキの痕跡は不明。
146	第46図	16	LS54	-	土師器甕	口縁～胴部	【外面】縦位カキ目 【内面】横位カキ目	(21.0)	-	〈23.1〉	395.5	非ロクロ成形。
147	第46図	17	LS54	-	土師器甕	口縁～胴部	【外面】縦位カキ目→指ナデ→ミガキ 【内面】棒状工具痕	(19.1)	-	〈27.2〉	540.0	内外面の一部が煤ける。非ロクロ成形。
148	第47図	17	排土	-	土師器甕	口縁部	【内外面】ロクロナデ	-	-	〈4.9〉	52.3	外面は一部、内面はほぼ全体が煤ける。
149	第47図	17	表採	-	土師器甕	胴～底部	【外面】ロクロナデ 底部：切り離し不明 【内面】ロクロナデ	-	(7.4)	〈3.4〉	36.5	胎土に大粒の砂礫粒含む。外面の一部が煤ける。
150	第47図	17	LS54	-	土師器鉄鉢	口縁～胴部	【外面】ミガキ 【内面】カキ目→横位ハケ目→ミガキ	-	-	〈7.7〉	38.9 (129.3)	外面ほぼ全体が煤ける。
151	第47図	17	MC46	-	須恵器坏	口縁部	【外面】ロクロナデ→墨書 【内面】ロクロナデ	-	-	〈2.7〉	3.5 (11.8)	墨書が確認できるが、文字は不明。「大」の字か。
152	第47図	17	LQ47(調査区外)	-	須恵器坏	底部	【外面】ロクロナデ 底部：回転ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	-	6.2	〈2.0〉	87.4	
153	第47図	17	第12トレンチ	-	須恵器甕	口縁～頸部	【外面】叩き目→ロクロナデ→波状沈線、縦位カキ目 【内面】ロクロナデ→横位カキ目	-	-	〈6.0〉	77.1	第44図129・130と同一か。外面に波状沈線文。
154	第47図	17	LQ48	Ⅲ層	須恵器甕	頸～肩部	【外面】ロクロナデ→格子状叩き 【内面】ロクロナデ→同心円状叩き	-	-	〈3.6〉	149.0	
155	第47図	17	MC47	Ⅱ層	陶器皿	体～高台	【外面】ロクロナデ 高台：削り出し→砂目積 【内面】ロクロナデ→蛇ノ目剥ぎ→砂目積	-	4.0	〈1.7〉	35.3	胎土は緻密。ロクロ水引成形。見込み及び高台周辺は無釉で、それ以外には土灰釉が掛かる。

※大きさの欄の()や〈 〉内の数値は、それぞれ推定値、残存値である。重量の()は、同一片と思われる破片を合わせた重量である。

第11表 木製品一覧(1)

遺物 番号	挿図 番号	図版 番号	出土 位置	出土 層位	種類・器種	部位	大きさ(cm)			重量 (g)	備 考
							長さ	幅	厚さ		
11	第29図	18	SE1004	3~6層	井戸枠隅柱	南西内隅柱	<88.6>	10.7	7.1	-	二方桁の心去材。下端木口面先端を僅かに平坦に残し、両桁目面・両板目面をヨキで加工、杭状に仕上げた際の刃痕が残る。上部は腐食している。板目面に貫通孔を穿ち、その貫通孔開口面を北に向けて北西内隅柱と対し横棧で結合していた。また同様に貫通孔の上部では、桁目面に抉りを設け、その抉り面を内側に、南東内隅柱と対し横棧で結合していた。貫通孔面は、開口側が7×5.5cm、閉口側は3.5~5.5×4.5cmの不定形で、腐食により貫通した可能性がある。本来は盲孔か。ほぞ穴の深さ4cm。抉りの寸法は8.5×3×4cm【縦×横×深さ】。樹種同定の結果スギと判明。放射性炭素測定(暦年較正年代)の結果が、1023~1147calAD(1σ)の年代値を示す。
12	第29図	18	SE1004	3~6層	井戸枠隅柱	南西外隅柱	<63.7>	9.3	5.9	-	二方桁の心去材。下端木口面は、ヨキにより杭状に加工された際の刃痕が残る。材の上部には抉りがあるが、腐食のため欠損。抉りの寸法は(12)×4.5×3.5cm【縦×横×深さ】。放射性炭素測定(暦年較正年代)の結果が1016~1119calAD(1σ)の年代値を示す。
13	第30図	18	SE1004	3~6層	井戸枠隅柱	南東内隅柱	<109.5>	8.6	7.6	-	二方桁の心去材。下端木口面を、一部平坦に残し、杭状になるように先端周辺をヨキで加工した刃痕が残る。盲孔が板目面に2か所穿たれ、開口面を西に向いて開けていた。一方桁目面にも2か所穿たれ、開口面を北に向けて開けていた。板目・桁目両面とも同一方向に盲孔が穿たれているが、上部は腐食し、桁目面にある盲孔上部は、半分欠損している。盲孔は下から順に桁目→板目→板目→桁目(半分欠損)の順である。横棧により南西内隅柱と結合していた状況を残していたのは、下から2番目の板目面の盲孔である。また北東内隅柱と横棧で対になる盲孔は最上段の桁目面の盲孔と思われる。他の盲孔は、他の内隅柱と相対する部分がないため、別の井戸枠を構成していた材を転用していた可能性が考えられる。盲孔の寸法は、下から5.2×3.5×4.5cm【縦×横×深さ】、5.3×4×3cm、8×5×3cm、(8)×5.5×3cmである。
14	第31図	19	SE1004	3~6層	井戸枠縦板	内側縦板 (RW59)	<67.8>	18.2	3.5	-	年輪割で心去の板目板。出土時、木表面が外側で、南東内隅柱横の東内側面に配置されていた。上部は腐食している。断面形はやや弧状。木表・裏面ともに、割った際の段差が残る。下端木口面は、平坦に調整され、ヨキによる刃痕の段差が粗く残る。
15	第31図	19	SE1004	3・17層	井戸枠縦板	外側縦板 (RW69)	<70.4>	15.6	2.1	-	年輪割の割肌で心去の板目板。出土時、木表面が外側で、西外側面に配置されていた。上部は腐食している。断面はやや弧状。下端は矢板状に加工され、両桁目面にヨキによる刃痕が明瞭に残る。
16	第32図	19	SE1004	3・17層	井戸枠縦板	外側縦板 (RW94)	<66.6>	16.7	2.1	-	年輪割の割肌で心去の板目板。出土時、木表面が外側で、南西外隅柱の西外側に配置されていた。上部は腐食している。割った際の段差が木表面に残る。やや身が木裏側に曲がる。下端木口面は、矢板状に加工され、両桁目面にヨキによる刃痕が明瞭に残る。虫喰いが著しい。
17	第32図	19	SE1004	3・17層	井戸枠縦板	外側縦板 (RW100)	<40.2>	9.6	1.8	-	年輪割で心去の板目板。出土時、木表面が外側で、西外側北端、北西外隅柱の外側に配置されていた。断面は方形。上部は腐食。木裏面に段差が著しい。下端木口面は、矢板状に加工され、両桁目面にはヨキによる刃痕が明瞭に残る。
18	第32図	19	SE1004	3層 井戸枠内	棒状木製品	-	45.9	1.3	1.0	-	二方桁の心去材。箸状で、一方の先端は鋭く加工されている。反対側の木口面に近い側面では、部分的に細く抉った加工を施す。
26	第33図	20	SE1005	3~6層	井戸枠隅柱	北東隅柱	<87.7>	9.0	6.5	2730.0	ミカン割で二方桁の心去材。出土時、木口面が平坦な面を下にし、桁目面である盲孔開口面を南に向け、板目面の貫通孔開口面を西に向けていた。断面は台形で、上部は腐食している。板目面に貫通孔を穿つ。下端木口面は、ヨキにより平坦に加工され、刃痕による段差をやや残す。ほぞ穴は、盲孔が貫通孔のやや下に設置され、横棧により南東隅柱と対し、貫通孔は北西隅柱と対になっていた。盲孔は6×3×3.5cm【縦×横×深さ】で、鑿を使用したと思われる。その際の刃痕が残る。一方、貫通孔は5×3.8×5.5cmで、こちらも鑿による加工である。盲孔及び貫通孔の周りに鑿の刃痕がある。また楔(第35図36)が盲孔内にはめ込まれていた。
27	第33図	20	SE1005	3~6層	井戸枠隅柱	北西隅柱	<91.0>	8.4	6.8	2770.0	ミカン割で二方桁の心去材。出土時、木口面が平坦な面を下にし、盲孔の開口面を南、貫通孔開口面を東に向けていた。断面は方形。上部は腐食している。板目面に貫通孔を穿つ。下端木口面は、ヨキにより平坦に加工。また盲孔開口面とその裏下半は手斧による加工痕が明瞭。ほぞ穴は、盲孔が貫通孔のやや上に設置され、横棧により南西隅柱と対し、貫通孔は北東隅柱と対になっていた。盲孔は3×3.4×2.9cm【縦×横×深さ】、鑿で開けたものと思われる。その際の刃痕が残る。一方、貫通孔は4.4×4.5×5cmで、こちらも鑿による加工である。また楔(第35図37)が貫通孔内にはめ込まれていた。

※大きさの欄の〈 〉内の数値は、残存値である。

第12表 木製品一覧(2)

遺物 番号	挿図 番号	図版 番号	出土 位置	出土 層位	種類・器種	部位	大きさ(cm)			重量 (g)	備 考
							長さ	幅	厚さ		
28	第34図	21	SE1005	3～6層	井戸枠隅柱	南東隅柱	〈89.5〉	8.9	6.2	2550.0	ミカン割で二方桁の心去材。出土時、木口面が平坦な面を下にし、盲孔開口面を北に向け、貫通孔開口面を西に向けていた。断面は方形。上部は腐食している。板目面に貫通孔を穿つ。下端木口面は、ヨキにより平坦に加工され刃痕による段差を残す。ほぞ穴は盲孔が貫通孔のやや下に穿ち、横棧により北東隅柱と対に、貫通孔は南西隅柱と対になっていた。盲孔は4×3.2×3.5cm【縦×横×深さ】、鑿を使用したと思われる、その際の刃痕が残る。一方、貫通孔は4×3.5×5.2cmで、鑿による加工。また、楔が盲孔内及び貫通孔内にはめ込まれていた(第35図38・39)。
29	第34図	21	SE1005	3～6層	井戸枠隅柱	南西隅柱	〈88.8〉	7.6	6.3	2500.0	ミカン割で二方桁の心去材。出土時、木口面が平坦な面を下にし、盲孔開口面を東に向け、板目面に貫通孔開口面を北に向けていた。断面は方形。上部は腐食している。板目面に貫通孔を穿つ。下端木口面は、ヨキにより平坦に加工されているが、やや刃による段差を残す。ほぞ穴は盲孔が貫通孔のやや上に穿たれ、横棧により南東隅柱と対に、貫通孔は北西隅柱と対になっていた。盲孔は3.5×3.2×3cm【縦×横×深さ】、鑿を使用したと思われる、刃痕が残る。一方、貫通孔は4.8×3.7×5cmで、鑿による加工。また、楔が貫通孔内にはめ込まれていた(第35図40)。
30	第35図	22	SE1005	3層	井戸枠横棧	北横棧	70.5	5.5	4.5	929.8	二方桁の心去材。出土時、北東隅柱と北西隅柱のほぞ穴に対し、ほぞである両端を結合していた。断面は方形。ほぞは両端ともに方形に加工され、加工痕が残る。北西端は3×2×5cm【縦×横×深さ】、北東端は4.5【内、楔11.5】×2×6cm、北東側は、ほぞ先端から木製の楔を打ち込んでいるため、端から約32cmが割れている。楔は7×2.4×1.5cm【縦×横×厚さ】である。楔の断面は端が方形。側面は直角三角形。
31	第35図	22	SE1005	3層	井戸枠横棧	南横棧	65.0	5.2	3.7	698.4	二方桁の心去材。出土時、南東隅柱と南西隅柱のほぞ穴に対し、ほぞである両端を結合していた。断面は方形。ほぞは両端ともに方形に加工され、加工痕が残る。南西側が3×2×3.6cm【縦×横×深さ】、南東側が2.6×2.4×5cm。両端ともにヨキによる加工と思われる、先端は平坦に加工されているが、一部段差があり、ささくれが残る。
32	第35図	22	SE1005	3層	井戸枠横棧	東横棧	71.3	5.0	4.1	809.5	二方桁の心去材。出土時、北東隅柱と南東隅柱のほぞ穴に対し、ほぞである両端を結合していた。断面は方形。ほぞは両端ともに方形に加工され、加工痕が残る。北東側は、3.5×2～2.5×5cm【縦×横×深さ】、南東側は、2.8×2.1×7cm。両端ともに、ヨキで平坦に加工されている。南東側面には、手斧による加工痕が明瞭。
33	第35図	22	SE1005	3層	井戸枠横棧	西横棧	83.2	5.3	4.1	1220.0	二方桁の心去材。出土時、南西隅柱と北西隅柱のほぞ穴に対し、ほぞである両端を結合していた。断面は方形。ほぞは両端ともに方形に加工され、加工痕が残る。また先端はともに平坦に加工されているが、一部段差が残る。先端は南西側が3.1×2.9×9cm【縦×横×深さ】、北東側が、3.6×2.7×7cmである。南西端に虫喰いがある。
34	第36図	23	SE1005	3～6層	井戸枠縦板	縦板(RW57)	〈87.6〉	19.0	3.1	-	年輪割で心去の板目板。出土時、木表面が外側で、南西隅柱西側に配置されていた。上部は腐食。虫喰いが木裏面で著しい。下端木口面は、平坦に調整するためのヨキによる加工痕及びその際の段差が残る。木裏面で下端から22cm上で、幅6～7cmほどの横棧のアタリ痕が見える。
35	第36図	23	SE1005	3～6層	井戸枠縦板	縦板(RW72)	〈76.4〉	19.2	2.2	-	年輪割で心去の板目板。出土時、木表面が外側、南東隅柱東側に配置されていた。木裏面に虫喰いが多い。弧状の断面。下端木口面は、平坦に調整するためのヨキによる加工痕が残る。右側が突き出ているような形になっている。
36	第36図	22	SE1005	3層	井戸枠楔	北東隅柱内楔	5.4	2.7	1.1	-	年輪割で心去の板目板。断面形状は方形。側面の断面形状は三角形。北東隅柱盲孔内に残存。
37	第36図	22	SE1005	3層	井戸枠楔	北西隅柱内楔	4.1	3.0	1.1	-	年輪割で心去の板目板。断面形状は方形。側面の断面形状は三角形。北西隅柱貫通孔内に残存。
38	第36図	22	SE1005	3層	井戸枠楔	南東隅柱内楔	5.7	2.2	0.8	-	年輪割で心去の板目板。断面形状は方形。側面の断面形状は三角形。南東隅柱盲孔内に残存。表面の下半分が腐食。
39	第36図	22	SE1005	3層	井戸枠楔	南東隅柱内楔	4.8	2.7	1.1	-	年輪割で心去の板目板。断面形状は方形。側面の断面形状は三角形。南東隅柱貫通孔内に残存。
40	第36図	22	SE1005	3層	井戸枠楔	南西隅柱内楔	4.7	2.8	1.0	-	年輪割で心去の板目板。断面形状は方形。側面の断面形状は三角形。南西隅柱貫通孔内に残存。
41	第37図	23	SE1005	4層 井戸底	曲物	胴部	〈22.2〉	〈4.7〉	1.0	46.7 (48.7)	側板は2枚、綴じ皮で固定。罫引きの幅は0.5～1.4cm、綴じ皮の幅は1.3cm。樹種同定の結果、本体はスギ、綴じ皮はヤマザクラかカバの樹皮。
42	第37図	23	SE1005	3層 井戸枠内	棒状木製品	-	〈54.4〉	2.0	1.9	-	二方桁の心去材。井戸枠内の底部付近で出土。木口の一方は折れて破損。もう一方は一部炭化。円形の棒状に作られ、全体的に刃による加工痕が観察できる。直角に交わるような刃痕がいくつか残存。木口が破損している下半表面では、細かく直交するような向きに近い刃痕が、短冊状にミリ単位の間隔で刻まれる。

※大きさの欄の〈 〉内の数値は、残存値である。重量の()は、同一片と思われる破片を合わせた重量である。

第13表 木製品一覧(3)

遺物 番号	挿図 番号	図版 番号	出土 位置	出土 層位	種類・器種	部位	大きさ(cm)			重量 (g)	備 考
							長さ	幅	厚さ		
104	第42図	24	SE1009	10層	鍬	風呂～柄	19.8	〈12.9〉	〈4.2〉	260.2 (270.0)	風呂部分は年輪割で心去の板目板。一木造と想定される。柄が根元から欠損。ヨキによる加工痕が残る。
105	第42図	24	SE1009	10層	木槌	頭部・柄	15.5	9.8	6.9	493.8 (503.7)	破損した状態で出土。木取は頭部が丸太状である。一方、柄は二方桁の心去材である。柄の寸法は2.8×2.6×(9)cmである。頭部正面で刃痕を多数確認。

※大きさの欄の〈 〉内の数値は、残存値である。重量の()は、同一片と思われる破片を合わせた重量である。

第14表 石製品・鉄製品一覧

遺物 番号	挿図 番号	図版 番号	種別	出土 位置	出土 層位	大きさ(cm)			重量 (g)	備 考
						長さ	幅	厚さ		
43	第37図	24	砥石	SE1004 SE1005	1層 4層	18.1	12.9	3.2	1170.0	全体に被熱を受け割れた礫を使用か？表面である砥面に使用痕がある。墨のようなものが垂れ落ちたような跡がある。側面及び裏面の割れ面には、被熱を受け煤けた跡が残る。
59	第38図	24	有孔石製品	SE1006	7層	4.9	4.1	2.3	48.6	用途不明の有孔石製品。表裏面ともに打ち欠いて、穿孔し、穿孔部分はミガキをかけている。表面に使用痕と考えられる傷が顕著。
106	第42図	24	釘	SE1009	4層	〈7.7〉	0.3	〈0.2〉	2.5	保存処理済。断面は方形。
137	第45図	24	鎌刃	SD1027	1層	〈9.9〉	3.0	0.5	28.0	刃部。保存処理済。断面は楕円形。
138	第45図	24	鎌刃	SD1027	2層	〈17.5〉	〈3.3〉	〈0.7〉	55.9	刃部。保存処理済。一部欠損。断面は刃先が先細りしている。
139	第45図	24	鉄鍬	SD1027	2層	〈5.0〉	1.7	1.4	9.5	鍬の刃から茎。刃先端が欠損。征矢の鍬か。刃部の断面形状は長方形。

※大きさの欄の〈 〉内の数値は、残存値である。

第4章 理科学的分析

第1節 炭化材・木製品の樹種同定

《25年度分》

株式会社加速器分析研究所

1 はじめに

秋田県南秋田郡八郎潟町貝保遺跡では、9～10世紀を中心に古代から中世頃の遺構、遺物が検出されている。今回の分析調査では、竪穴建物跡のカマド燃焼部及び窯跡と考えられる炭化物層から出土した炭化材、井戸跡から出土した木材および隅柱について、樹種同定を実施する。

2 試料

試料は、竪穴建物跡のカマド燃焼部上(5層中)と井戸跡内に堆積した炭化物層(9層中)より出土した炭化材2点(No. 1・2)、井戸跡から生木の状態で出土した木材片と隅柱の2点(No. 3・4)の合計4点である。なお、同一試料の放射性炭素年代測定が実施されている(25年度分年代測定報告参照)。

3 分析方法

木材2点(No. 3・4)は、剃刀を用いて木口(横断面)・柁目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の徒手切片を直接採取する。切片は、ガム・クロラール(抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液)で封入し、プレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察する。炭化材2点(No. 1・2)は、自然乾燥させた後、3断面の割断面を作製して実体顕微鏡及び走査型電子顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察する。各試料の観察で確認された特徴を現生標本及び独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類(分類群)を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)、Wheeler他(1998)、Richter他(2006)を参考にする。また、日本産木材の組織配列については、林(1991)や伊東(1995,1996,1997,1998,1999)を参考にする。

4 結果

樹種同定結果を第15表に示す。No. 1は広葉樹のカツラ、No. 2は広葉樹のキハダ、No. 3・4は針葉樹のスギに同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・スギ(*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don) スギ科スギ属

軸方向組織は、仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1分野に2-4個。放射組織は単列、1-10細胞高。

・カツラ (*Cercidiphyllum japonicum* Sieb. et Zucc.) カツラ科カツラ属

散孔材で、道管はほぼ単独で散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の分布密度は高い。道管は階段穿孔を有する。放射組織は異性、1-2細胞幅、1-30細胞高。

・キハダ (*Phellodendron amurense* Ruprecht) ミカン科キハダ属

環孔材で、孔圏部は3-5列、孔圏外でやや急激に径を減じたのち塊状に複合して接線・斜方向に紋様状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1-3細胞幅、1-30細胞高。

第15表 樹種同定結果

資料番号	遺構	位置	状態	用途など	種類	放射性炭素年代
1	S I 1019	5層中	炭化材	燃料材	カツラ	○
2	S E 1006	9層中	炭化材	燃料材	キハダ	○
3	S E 1006	15層中	生木		スギ	○
4	S E 1004	南西内隅柱	生木	隅柱	スギ	○

5 考察

No. 1の炭化材は、竪穴建物跡S I 1019のカマド燃焼部上に堆積する5層中から出土しており、燃料材等に由来する可能性がある。炭化材は、広葉樹のカツラに同定された。カツラは、谷筋等に生育する落葉高木であり、木材は木理が通直で割裂性が高く、比較的軽軟で保存性は中程度とされる。カツラは、現在の本遺跡周辺の山地等にも分布している。今回の結果から、当時の本遺跡周辺にも生育し、その木材が燃料材等に利用されたことが推定される。

No. 2の炭化材は、井戸跡S E 1006の廃棄後の窪みに堆積したと推測される炭化物層から出土し、燃料材に由来する可能性がある。炭化材は、広葉樹のキハダに同定された。キハダは、河畔等に生育する落葉高木で、木材は軽軟で強度は低いが、耐朽性は高い。軽軟な木材は、一般的に火付きが良く、燃焼性が高いが、火持ちは悪い。窯跡の燃料材とすれば、燃焼性が高く、高い火力を得られる木材を選択して利用した可能性がある。

No. 3は、井戸跡S E 1006の底部から約80cmの高さで出土した木材片であり、針葉樹のスギに同定された。スギは、谷筋等の地下水位が高い土地に生育する常緑高木である。木材は、木理が通直で割裂性、耐水性が比較的高く、加工は容易である。用途不明の木材片であるため、詳細は不明である。

No. 4は、井戸跡S E 1004の南西内隅柱であり、スギに同定された。この結果から、井戸の隅柱として割裂性、耐水性等の材質を考慮して木材が利用されたと推定される。なお、秋田県内では、諏訪遺跡と小島田I遺跡で出土した古代の井戸部材にスギが確認されている(伊東・山田,2012)。

文献

- 林昭三,1991,日本産木材 顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
 伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181.
 伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所,66-176.
 伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201.
 伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166.
 伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216.

第4章 理化学的分析

伊東隆夫・山田昌久(編), 2012, 木の考古学 出土木製品用材データベース. 海青社, 449p.

Richter H. G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P. E. (編), 2006, 針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.

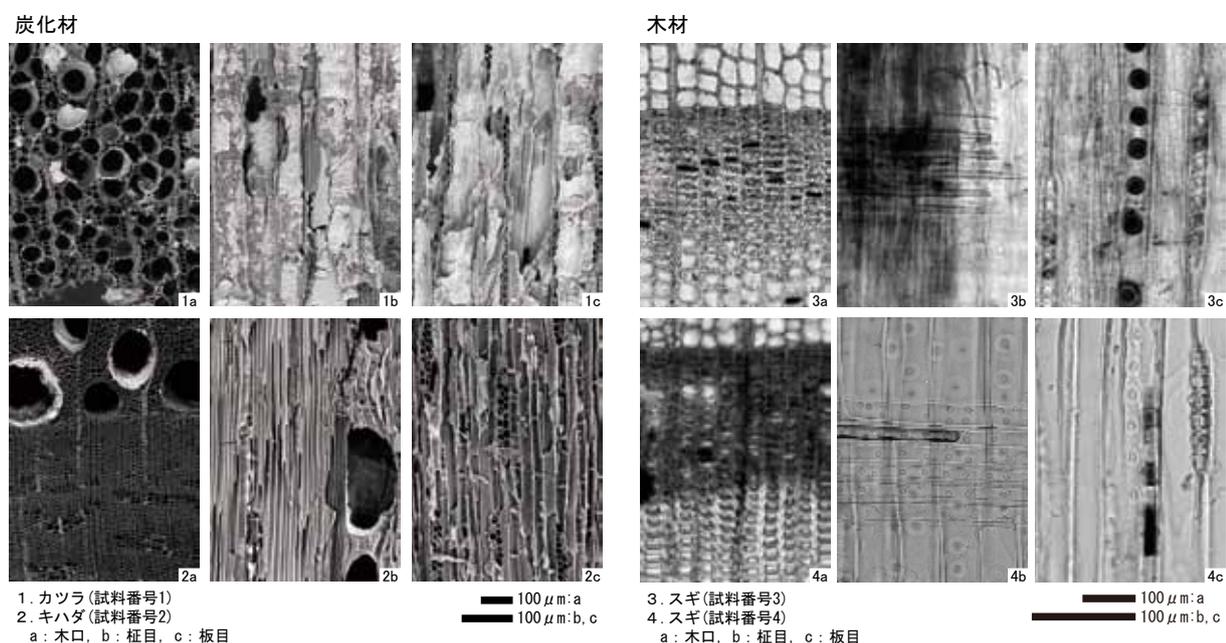
伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部久・内海泰弘(日本語版監修), 海青社, 70p.

[Richter H. G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P. E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].

島地謙・伊東隆夫, 1982, 図説木材組織. 地球社, 176p.

Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P. E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐伯浩(日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P. E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

※)本分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社の協力を得て行った。



第48図 プレパラート顕微鏡写真(1)

《25年度及び26年度分》

株式会社吉田生物研究所

1 試料

試料は秋田県貝保遺跡から出土した農具2点、容器1点の合計3点である。

2 観察方法

剃刀で木口(横断面)、柀目(放射断面)、板目(接線断面)の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

3 結果

樹種同定結果(針葉樹1種、広葉樹3種、樹皮1種)の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

1) スギ科スギ属スギ(*Cryptomeria japonica* D. Don) (遺物No. 2 A、写真No. 2 A)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部で接線方向に並んでいた。柾目では放射組織の分野壁孔は典型的なスギ型で1分野に1～3個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。樹脂細胞の末端壁はおおむね偏平である。スギは本州、四国、九州の主として太平洋側に分布する。

2) トチノキ科トチノキ属トチノキ(*Aesculus turbinata* Blume) (遺物No. 1、写真No. 1)

散孔材である。木口ではやや小さい道管(～80 μ m)が単独かあるいは2～4個放射方向に接する複合管孔を構成する。道管の大きさ、分布数ともに年輪中央部で大きく年輪界近辺ではやや小さくなる傾向がある。軸方向柔細胞は1～3細胞の幅で年輪の一番外側(ターミナル状)に配列する。柾目では道管は単穿孔と側壁に交互壁孔、螺旋肥厚を有する。放射組織はすべて平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔は六角形をした比較的大きな壁孔が密に詰まって篩状になっている(上下縁辺の1～2列の柔細胞に限られる)。板目では放射組織は単列で大半が高さ～300 μ mとなっている。それらは比較的大きさが揃って階層状に規則正しく配列しており、肉眼では微細な縞模様(リップルマーク)として見られる。トチノキは北海道、本州、四国、九州に分布する。

3) ヤマザクラorカバの樹皮 (遺物No. 2 B、写真No. 2 B)

接線断面では細胞が放射方向に規則正しく配列している。しかし桜、樺の皮は顕微鏡観察での判別は難しい。

4) ブナ科ブナ属(*Fagus* sp.) (遺物No. 3 B、写真No. 3 B)

散孔材である。木口ではやや小さい道管(～110 μ m)がほぼ平等に散在する。年輪の内側から外側に向かって大きさおよび数の減少が見られる配列をする。放射組織には単列のもの、2～3列のもの、非常に列数の広いものがある。柾目では道管は単穿孔と階段穿孔を持ち、内部には充填物(チロース)が見られる。放射組織は大体平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔には大型のレンズ状の壁孔が存在する。板目では放射組織は単列、2～3列、広放射組織の3種類がある。広放射組織は肉眼でも1～3mmの高さを持った褐色の紡錘形の斑点としてはっきりと見られる。ブナ属はブナ、イヌブナがあり、北海道(南部)、本州、四国、九州に分布する。

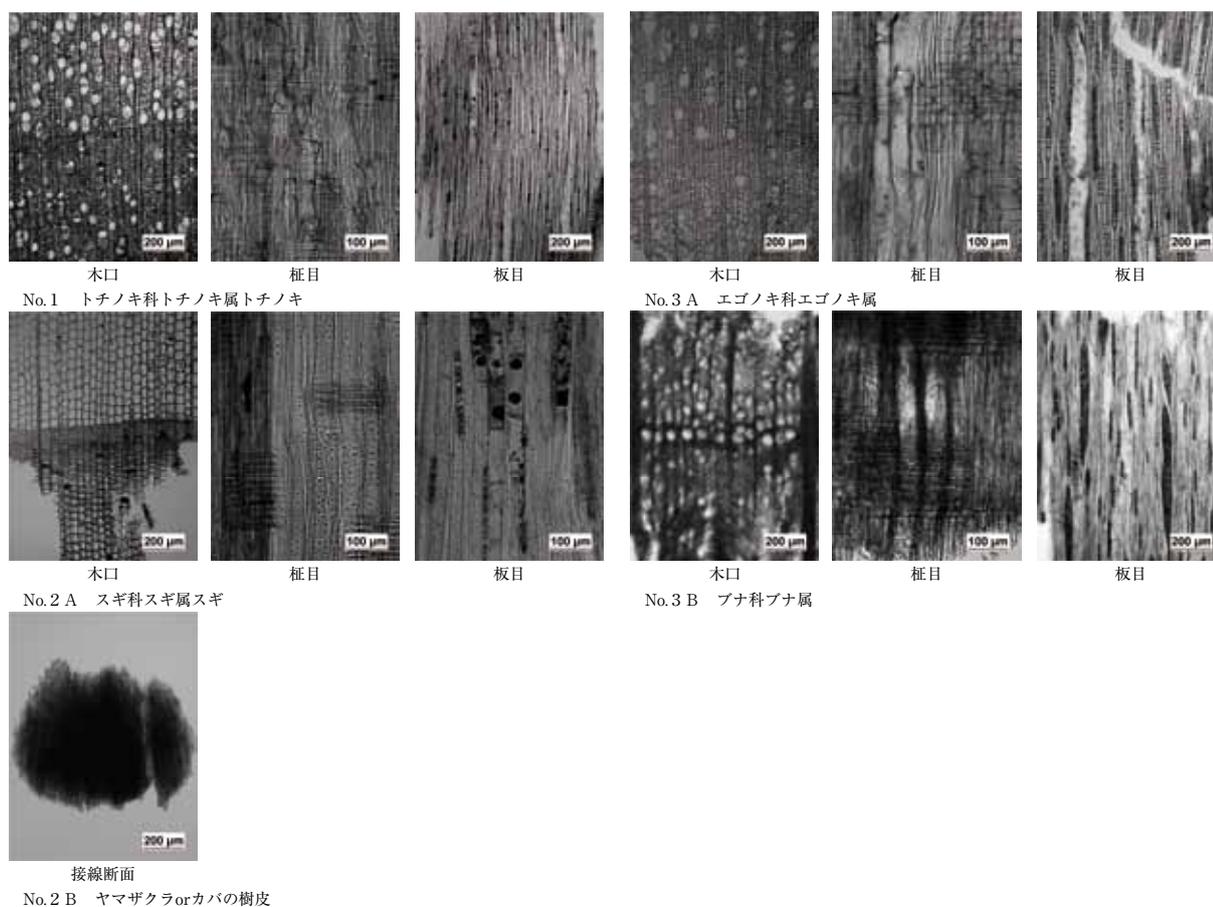
5) エゴノキ科エゴノキ属(*Styrax* sp.) (遺物No. 3 A、写真No. 3 A)

散孔材である。木口では道管(～130 μ m)が単独、あるいは放射状、小塊状に複合して多数分布している。軸方向柔細胞は接線状である。柾目では道管は階段穿孔を有する。放射組織は平伏と直立細胞からなり異性である。板目では放射組織は1～4細胞列、高さ～900 μ mからなる。エゴノキ属はエゴノキ、ハクウンボク等があり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

第16表 貝保遺跡出土木製品同定表

No.	品名	出土遺構	樹種	放射性炭素年代測定
1	鋏	S E 1009(10層中)	トチノキ科トチノキ属トチノキ	
2	A 曲物 (本体) B ッ (とじ皮)	S E 1005(4層中)	スギ科スギ属スギ ヤマザクラorカバの樹皮	
3	A 木槌 (頭部) B ッ (柄)	S E 1009(10層中)	エゴノキ科エゴノキ属 ブナ科ブナ属	○

※3の放射性炭素年代は、26年度分を参照。



第49図 プレパラート顕微鏡写真(2)

◆参考文献◆

- 林 昭三 「日本産木材顕微鏡写真集」 京都大学木質科学研究所 1991(平成3)年
 伊東隆夫 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～Ⅴ」 京都大学木質科学研究所 1999(平成11)年
 島地 謙・伊東隆夫 「日本の遺跡出土木製品総覧」 雄山閣出版 1998(平成10)年
 北村四郎・村田 源 「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」 保育社 1979(昭和54)年
 奈良国立文化財研究所 「奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇」 1995(平成7)年
 奈良国立文化財研究所 「奈良国立文化財研究所 史料第36冊 木器集成図録 近畿原始篇」 1993(平成5)年

◆使用顕微鏡◆

Nikon DS-Fil

第2節 放射性炭素年代測定(AMS年代)

《25年度分》

株式会社加速器分析研究所

1 測定対象試料

貝保遺跡は、秋田県南秋田郡八郎潟町川崎字貝保99-3ほかに所在し、八郎潟に注ぐ馬場目川下流域の河岸段丘上(標高約7m)にある旧河道跡の自然堤防上に立地する。測定対象試料は、竪穴建物跡、窯跡から出土した炭化材、井戸跡から出土した隅柱等の合計5点である(第17表)。炭化材1は細片の1つをそのまま試料とし、炭化材2と生木の試料3~5は残存最外年輪部を採取して処理、測定を行った。なお、5点の試料のうち、1~4については同一試料の樹種同定が実施されている(樹種同定報告参照)。

S I 1019は竪穴建物跡、S E 1006は井戸跡で埋め立てて廃棄した後に、その窪みに堆積したものと考えられる。S E 1004は井戸跡である。井戸跡出土試料はいずれも生木の状態で、No. 3は木材片、No. 4・5は井戸枠の隅柱である。S E 1004では井戸枠が二重に確認されたため、2本の隅柱も造り替えによる時期差を持つ可能性がある。遺跡の時期は主に平安時代(9~10世紀)であるが、出土遺物から8~12世紀の幅が考えられる。

2 測定の意義

試料が出土した各遺構の年代を検討する。

3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸(AAA: Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1 mol/ℓ(1 M)の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001Mから1 Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1 Mに達した時には「AAA」、1 M未満の場合は「AaA」と第17表に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO₂)を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。
- (6) グラファイトを内径1 mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4 測定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC社製)を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度(¹³C/¹²C)、¹⁴C濃度(¹⁴C/¹²C)の測定を行う。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOx II)を標

準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の ^{13}C 濃度($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(%)で表した値である(第17表)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) ^{14}C 年代(Libby Age : yrBP)は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。 ^{14}C 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を第17表に、補正していない値を参考値として第18表に示した。 ^{14}C 年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差($\pm 1\sigma$)は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- (3) pMC (percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMCが小さい(^{14}C が少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上(^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上)の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を第17表に、補正していない値を参考値として第18表に示した。
- (4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化等を補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差($2\sigma=68.2\%$)あるいは2標準偏差($2\sigma=95.4\%$)で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下一桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線及び較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース(Reimer et al. 2013)を用い、OxCalv4.2較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として第18表に示した。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」)という単位で表される。

6 測定結果

測定結果を第17・18表に示す。

試料の ^{14}C 年代は、1が $1630 \pm 20\text{yrBP}$ 、2が $1100 \pm 20\text{yrBP}$ 、3が $1000 \pm 20\text{yrBP}$ 、4が $970 \pm 20\text{yrBP}$ 、5が $990 \pm 20\text{yrBP}$ である。SE1004出土の4と5の値は、誤差($\pm 1\sigma$)の範囲で一致する。暦年較正年代(1σ)は、1が392~506calADの間に2つの範囲、2が899~981calADの間に2つの範囲、3が996~1039calADの範囲、4が1023~1147calADの間に3つの範囲、5が1016~1119calADの間に2つの範囲で示される。

遺跡の時期は8~12世紀と考えられているのに対し、2~5は推定の範囲内であるが、1は古墳時代中期前後のかなり古い年代を示した(佐原2005)。S E1006の遺構内覆土の堆積状況によると、

2は3より新しいが、2と3の年代値は、堆積状況の前後関係と逆転している。S E1004で検出された2本の隅柱試料4・5については、造り替えによる時期差を持つ可能性が指摘されるが、較正年代は重なる範囲が多い。

試料の炭素含有率はすべて50%を超え、化学処理、測定上の問題は認められない。

第17表 放射性炭素年代測定結果($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)

測定番号	No.	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-131927	1	S I 1019 5層中	炭化材	AaA	-23.83 ± 0.53	1,630 ± 20	81.68 ± 0.23
IAAA-131928	2	S E 1006 9層中	炭化材	AAA	-25.54 ± 0.66	1,100 ± 20	87.19 ± 0.25
IAAA-131929	3	S E 1006 15層中	生木	AAA	-23.99 ± 0.47	1,000 ± 20	88.31 ± 0.25
IAAA-131930	4	S E 1004 南西内隅柱	生木	AAA	-25.66 ± 0.76	970 ± 20	88.65 ± 0.27
IAAA-131931	5	S E 1004 南西外隅柱	生木	AAA	-22.58 ± 0.72	990 ± 20	88.42 ± 0.25

[#6154]

第18表 放射性炭素年代測定結果($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-131927	1,610 ± 20	81.87 ± 0.21	1,626 ± 22	392calAD-429calAD (61.6%) 497calAD-506calAD (6.6%)	382calAD-437calAD (66.5%) 445calAD-473calAD (4.7%) 486calAD-535calAD (24.1%)
IAAA-131928	1,110 ± 20	87.09 ± 0.22	1,101 ± 23	899calAD-923calAD (28.9%) 947calAD-981calAD (39.3%)	891calAD-991calAD (95.4%)
IAAA-131929	980 ± 20	88.49 ± 0.23	998 ± 22	996calAD-1039calAD (68.2%)	990calAD-1046calAD (82.6%) 1094calAD-1121calAD (11.1%) 1141calAD-1147calAD (1.7%)
IAAA-131930	980 ± 20	88.53 ± 0.23	967 ± 24	1023calAD-1046calAD (30.5%) 1093calAD-1121calAD (31.2%) 1141calAD-1147calAD (6.4%)	1017calAD-1058calAD (36.7%) 1076calAD-1155calAD (58.7%)
IAAA-131931	950 ± 20	88.86 ± 0.22	988 ± 23	1016calAD-1044calAD (52.7%) 1101calAD-1119calAD (15.5%)	992calAD-1050calAD (64.0%) 1084calAD-1125calAD (25.0%) 1136calAD-1151calAD (6.4%)

[参考値]

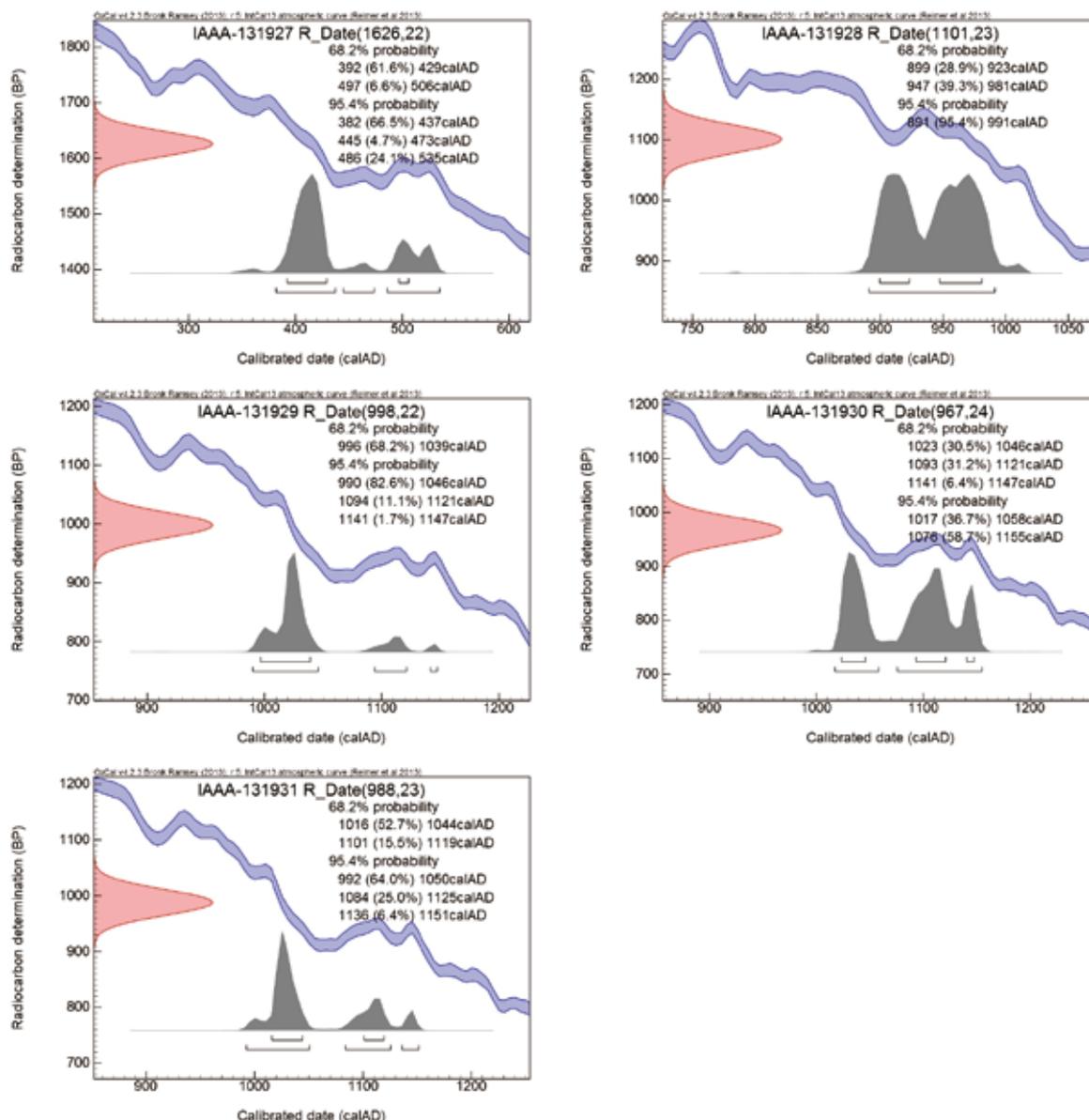
文献

Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360

Reimer, P. J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 55(4), 1869-1887

佐原真 2005 日本考古学・日本歴史学の時代区分, ウェルナー・シュタインハウス監修, 奈良文化財研究所編集, 日本の考古学
上 ドイツ展記念概説, 学生社, 14-19

Stuiver M. and Polach H. A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19(3), 355-363



第50図 暦年較正年代グラフ(参考)

《26年度分》

1 はじめに

秋田県貝保遺跡より検出された農具1点、建築部材1点、用途不明品2点の合計4点について、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。

2 試料と方法

測定試料の情報、調製データは第19表のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計(コンパクトAMS: NEC製 1.5SDH)を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

第19表 測定試料及び処理

No.	試料データ	前処理
3 A	種類：木材 状態：wet 備考：S E 1009(10層)出土 木槌(頭部)	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1.0N, 塩酸:1.2N) サルフィックス処理
4	種類：木材 状態：wet 備考：S E 1005出土 南西隅柱	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1.0N, 塩酸:1.2N) サルフィックス処理
5	種類：木材 状態：wet 備考：S E 1008(8層)出土 棒状木製品?	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1.0N, 塩酸:1.2N) サルフィックス処理
6	種類：木材 状態：wet 備考：S E 1007(8層)出土 板材	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1.0N, 塩酸:1.2N) サルフィックス処理

3 結果

第20表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代を示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代(yrBP)の算出には、 ^{14}C の半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差($\pm 1\sigma$)は、測定の実験誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い(^{14}C の半減期 5730 ± 40 年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正にはOxCal4.1(較正曲線データ: IntCal13)を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。

第20表 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

No.	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
3 A	-30.89 \pm 0.14	923 \pm 15	925 \pm 15	1046AD (42.4%) 1093AD 1121AD (19.0%) 1141AD 1147AD (6.8%) 1155AD	1039AD (95.4%) 1159AD
4	-24.85 \pm 0.13	915 \pm 14	915 \pm 15	1049AD (45.7%) 1085AD 1124AD (14.6%) 1137AD 1150AD (7.9%) 1157AD	1042AD (58.6%) 1106AD 1117AD (36.8%) 1163AD
5	-24.36 \pm 0.15	914 \pm 14	915 \pm 15	1049AD (45.6%) 1085AD 1124AD (14.2%) 1137AD 1150AD (8.5%) 1158AD	1042AD (58.7%) 1106AD 1117AD (36.7%) 1163AD
6	-28.36 \pm 0.13	913 \pm 14	915 \pm 15	1049AD (45.5%) 1085AD 1124AD (13.7%) 1137AD 1150AD (9.0%) 1158AD	1042AD (58.7%) 1105AD 1117AD (36.7%) 1164AD

参考文献

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

中村俊夫(2000)放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の ^{14}C 年代」: 3-20, 日本第四紀学会.

Reimer, P. J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J. W., Blackwell, P. G., Bronk Ramsey, C., Buck, C. E., Cheng, H., Edwards, R. L., Friedrich, M., Grootes, P. M., Guilderson, T. P., Hafidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T. J., Hoffmann, D. L., Hogg, A. G., Hughen, K. A., Kaiser, K. F., Kromer, B., Manning, S. W., Niu, M., Reimer, R. W., Richards, D. A., Scott, E. M., Southon, J. R., Staff, R. A., Turney, C. S. M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869-1887.

第5章 総括

貝保遺跡は、馬場目川右岸の標高約7mの旧馬場目川により形成された自然堤防上に位置する。周辺には、南西1.5kmに秋田郡衙跡と比定される石崎遺跡、南南西2.0kmにはその祭祀遺跡とされる中谷地遺跡、南東2.4kmには古代の墓域である岩野山古墳群、西0.8kmには旧河道跡を隔てて鉄製品生産関連集落跡である開防遺跡、東約0.6kmには、須恵器窯跡が確認された細越館跡(矢場崎窯跡A・B)がある。また馬場目川左岸石崎遺跡周辺の大川地区は、元慶2(878)年の元慶の乱に際し、政府に叛旗を翻した秋田十二村の一村「大河」に比定されている地域でもあり、貝保遺跡が存在する馬場目川流域は、古代の比較的早い時期に律令政府が進出した地域でもある。平成13・14(2001・2002)年度には、1,310㎡の調査が行われ、遺構は、掘立柱建物跡1棟、柱穴列2条、井戸跡1基、土坑5基、鍛冶炉1基、焼土遺構3基、溝跡4条、柱穴様ピット^(註1)201基、性格不明遺構1基が検出された。また遺物は土師器・須恵器を始め、曲物や鉄滓、炉壁等が出土し、出土した土器の年代から、平安時代9・10世紀の生産に関連した集落跡であることが判明した。今回は、前回の調査区を東西に挟む1,300㎡が対象である。調査の結果、竪穴建物跡1棟、柱穴列1条、井戸跡7基、溝跡4条(内1条は、前回の延長部分)、土坑8基、焼土遺構1基、柱穴様ピット215基が検出され、前回同様、土師器・須恵器・木製品・鉄製品・鉄滓等の遺物に加え、中国広東省産白磁や近世陶磁等が出土している。以下に特徴的な遺構・遺物を取り上げ、本遺跡の性格について考察したい。

1 遺構の性格

① S I 1019竪穴建物跡

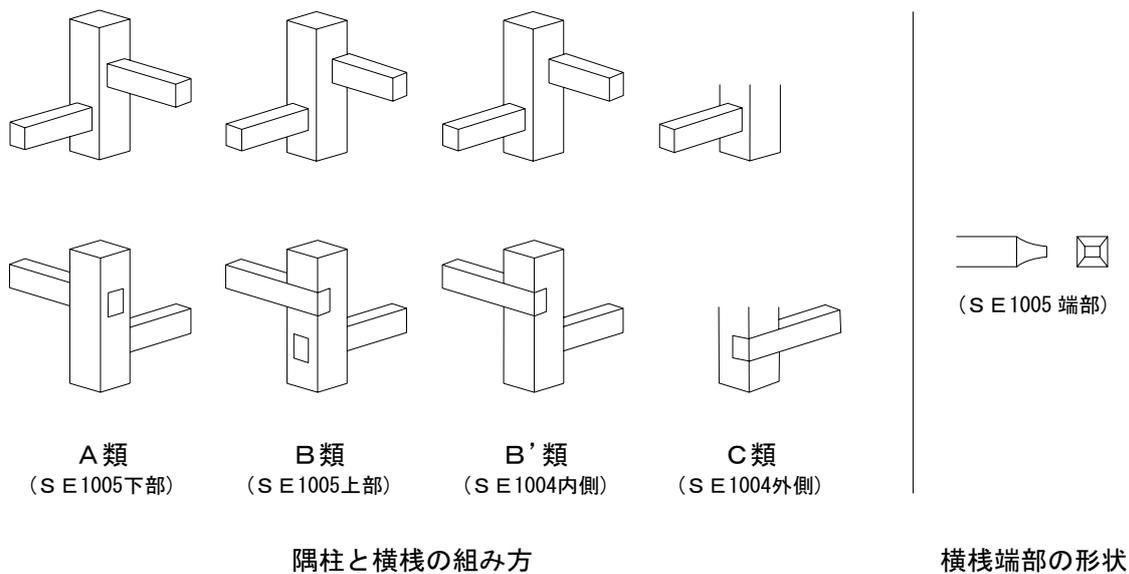
前回及び今回の調査を通じて、竪穴建物跡は1棟のみの検出である。調査区境に接するためカマドのみの検出である。調査区境には、平成20年度に八郎潟町が設置した污水管渠が平行して走っているため、竪穴建物跡の本体部分のほとんどはすでに消失してしまっている。建物跡のカマド燃焼部及び周辺から8世紀中葉と推測される完形に近い土師器長胴甕3点・小型甕1点・高坏1点が出土している。このことから、竪穴建物跡の時期は奈良時代中葉頃の年代が考えられる。8世紀代の遺物は、前回の調査では確認されておらず、遺跡の時期の上限を僅かに遡らせることとなった。八郎潟東岸の馬踏川流域から馬場目川流域において、この時期の住居跡の検出例は、本遺跡の他では開防遺跡及び大平遺跡(秋田市)の2遺跡のみである。

② S E 1004~1009・1034井戸跡群

今回の調査では7基の井戸跡が検出された。前回調査でも1基(S E 2)検出されているため、遺跡全体では8基存在し、狭い範囲に集中している。また時代は降るが、本遺跡の北西1kmの地点に、中世集落跡の一部と考えられる北遺跡があり、15基の井戸跡が検出されている。このことから本遺跡周辺の自然堤防上にある集落では、水を得るために井戸を掘っていたことがわかる。本遺跡の井戸跡を大別すると、S E 1004・1005の井戸枠を伴うものとそれ以外の素掘のもの2種類に分けられる。これらの井戸跡の上位層からは、9・10世紀代の土師器・須恵器がいくつか出土している。一方下位層では、時期の特定できる土器片が皆無に等しい状況である。よって各井戸が廃棄された年代を遺物に

よって具体的に提示することが難しく、時期の算出は放射性炭素年代測定(暦年較正)の結果に頼らざるを得ない。その結果、本遺跡内で検出された井戸跡の年代は、おおよそ10世紀末~12世紀中葉によることが判明した。また放射性炭素年代測定を行っていないS E 1034やS E 2も、検出状況や出土遺物が他の井戸跡と同様であることから、これらも前述の年代幅で把握できるものと考えている。

また井戸枠の残るS E 1004・1005であるが、両井戸跡とも縦板組隅柱横棧留の構造をしているが、それぞれ僅かながら構造に違いがある。特にS E 1004は、井戸枠が二重に残存し、外側から内側への作り替えの可能性がある。またS E 1004の縦板は、外側では矢板状がほとんどで平板は僅かであるのに対し、内側は平板が多く矢板状のものは僅少である。S E 1005の縦板はすべて平板である。隅柱も、S E 1005は4本すべて下端木口面が平坦に整えられているのに対し、S E 1004は内外隅柱8本すべて杭状に先端を加工していた。これはそれぞれ井戸を掘削した後、予め隅柱と横棧で梯子状に組んだものを、S E 1005は掘方底面に据え置き、S E 1004は突き刺して設置するという違いが考えられる。同様に縦板も、S E 1005とS E 1004内側は、梯子状に組んだ井戸枠の周囲を巡らせて、裏込め土を入れたものと思われる。しかし、S E 1004の外側縦板は矢板状であるため、板自身も掘方底面に突き刺しながら井戸枠の周囲を巡らす手のこんだ作りである。一方、井戸枠は横棧の組み方にも特徴があり、残存部だけで見るとS E 1005の下部はA類、上部はB類、S E 1004の内側はB'類、外側はC類(第51図参照)となっている。この組み方は、中世の井戸跡が検出された北遺跡でもそれぞれA類は4基、B類は1基の検出例が確認されている^(註2)。北遺跡の井戸跡は、12世紀後半から14世紀前半の年代幅が与えられていることから、井戸枠の作り方が、古代末から中世へ引き継がれているものと考えられる。またS E 1004とS E 1005ともに井戸枠内底部に小礫を敷き詰めているが、これは湧水の濁りを防ぐ狙いがあったものと推測される。一方、素掘の井戸跡群には、小礫を敷き詰めた痕跡はS E 1007で確認されたのみであることから、使用目的及び浄水方法を異にした井戸構築法の相違が想定される。



第51図 貝保遺跡出土井戸枠模式図

③ S D1025・1027溝跡

前回及び今回の調査で、溝跡は7条検出されている。ここでは、今回検出された2条についてみていく。S D1025は、A区調査区南東に位置し、S I 1019を切って、南西から北東へ弧状に延びていくが、両端とも調査区外へ続くため全体像は不明である。またS D1025の南側では、柱穴様ピットが数基確認されていることから、区画のために設置されたものと推測される。

またS D1027は、前回検出されたS D10の西側延長部分である。S D1027は、遺跡を南北に分断するように西から東へ走り、馬場目川の旧河道跡へつながるものと推測される。付属する柱穴様ピット群から板塀が設置された可能性もある。またS D1027の南側では、前回の調査で掘立柱建物跡S B 160が確認されている。しかし柱穴様ピットの数北側に比べはるかに少ない。前回及び今回の調査で、現在計416基の柱穴様ピットを確認しているが、南側59基に対し北側357基と北側の方が圧倒的に多い。また反対に井戸跡は、北側がS E1034の1基に対し、南側では7基検出している。その他の遺構では、北側で鍛冶炉を1基、焼土遺構を4基確認している。以上からS D1027は明らかに遺跡内を区画しており、柱穴様ピット群の集中する北側では、数棟倉庫が建っていたものと想定される。この柱穴様ピット群の集中している様子は、旧河道跡を隔てた位置にある開防遺跡でも同様に確認されている。また北側では、鍛冶炉や焼土遺構等も確認されていることから、鉄製品の製造に直接関わる区域であったことが想定される。一方、井戸跡が集中して確認されている南側では、主として生活用水等に関連した区域と考えられるが、調査した範囲は部分的であるため詳細は不明である。

2 出土遺物の特徴

①墨書土器

墨書土器(第47図151)である須恵器坏片が1点確認されている。隣接する開防遺跡では出土例がない。破片のため記された文字は不明であるが、その残画から、「大」の字の可能性はある。前述したが、馬場目川対岸は大川と呼ばれる地域である。元慶の乱に際し、政府側に叛旗を翻した秋田十二村の一村である「大河」に比定される地域でもあることや、遺跡の年代とも重なることから、反乱に際して貝保遺跡の間接的な関わりが想定される。

②砂底甕・耳皿

前回の調査では出土していないが、非ロクロ成形で、土器底部外面に砂粒が付着している砂底甕(第38図54・第40図80・第44図123)が出土している。すべて破片のみであるが、S D1027で1点、S E1006で5点、S E1007・1008・1009で各1点、合計9点が出土している。砂粒が全面に付着するものと木葉痕の周辺に砂が付着するものがあるが、本遺跡で確認したものはすべて前者である。隣接する開防遺跡でも出土している。北緯40度以北に出土遺跡が集中するため、「夷俘」の土器と捉える説と向化俘地の蝦夷が混わる城柵設置地域の住民が考案し、「夷俘」に伝えた説がある。^(註3) いずれにしても、律令政府と蝦夷社会の境目に位置する本遺跡の地理的状況を現している。

また前回の調査で耳皿底部が出土している。今回の調査ではS E1007で小型の耳皿と思われる破片(第39図73)が出土している。現在、耳皿の出土が確認されているのは、馬場目川流域では本遺跡のみであり、砂底土器同様、本遺跡の特異性を見ることができる。

③白磁碗

S E 1008井戸跡4層から、広東省潮州筆架山窯産とされる白磁碗(第41図93)が1点出土している。太宰府編年によれば12世紀前半の白磁碗Ⅱ-4 b類にあたる。遺跡全体では、土師器・須恵器を中心とした9・10世紀である古代の遺物が中心であり、時期的にも異質である。11世紀後半～12世紀前半の貿易陶磁は白磁を中心に全国へ流通する。この頃の奥羽地方は、奥州藤原氏の支配が浸透していく時期に当たり、奥州藤原氏の本拠地である平泉柳之御所遺跡では、白磁が多数出土している。また秋田県内では、奥州藤原氏の影響を強く受けていると言われる横手市旧大森町観音寺廃寺跡や大館市矢立廃寺跡で白磁が出土している。その他、出土数は少ないが、県内の白磁出土遺跡を概観するとこの時期の白磁碗はⅠ・Ⅳ・Ⅴ類が中心で、Ⅱ類はにかほ市家ノ浦Ⅱ遺跡出土の1点のみが該当する。

3 まとめ

以上より、貝保遺跡は8世紀中葉～12世紀中葉と継続的に人々が生活していたことが判明した。以下、前述の内容及び周辺の遺跡の動向を踏まえ、本遺跡の意義について見ていきたい。

前述のように、8世紀中葉頃、馬踏川から馬場目川流域で確認されている住居跡を伴う遺跡は、貝保遺跡を含む3例のみで、他の同時期の遺跡は、秋田郡衙に比定されている石崎遺跡周辺の中谷地遺跡・岩野山古墳群のみである。天平5(733)年、出羽柵(秋田城)が高清水岡に遷ることにより、その影響を受けて、馬場目川流域での開発が開始された頃である。また貝保遺跡に居住を開始した時期でもある。

9世紀代になると『類聚三代格』卷十五延暦22(803)年10月15日の太政官符による、「出羽国内で土地を無断で開発することを禁止」する内容が記されている。出羽国内で、田地の開発が盛んに行われていたことを示すとともに、本遺跡東約0.6kmの細越館跡(矢場崎窯跡A・B)では、窯が設けられ、須恵器の生産が行われて本遺跡にも供給された可能性がある。また開発の影響は本遺跡でも見受けられ、S I 1019竪穴建物跡を廃棄後にS D 1025が構築され、周辺に柱穴様ピットが多数確認されていることから、倉庫等が建てられ本遺跡内が大きく改変されている様子が窺える。また開防遺跡でも本遺跡同様に、同時期と想定される柱穴様ピットが多数検出されている。一方、元慶の乱の影響によるものと思われるが、祭祀遺跡である中谷地遺跡は9世紀第3四半期で終焉を迎える。前述したが、馬場目川対岸側は、秋田十二村の一つ「大河」に比定されている地域であり、石崎遺跡の影響力が弱体化した可能性がある。しかし、本遺跡及び隣接する開防遺跡では、10世紀代の遺構・遺物が確認できることから、両遺跡ともに集落は引き続き存続している様相を呈している。

11世紀代では、この時代と思われる土器の出土はないが、本遺跡の井戸跡から出土した井戸枠隅柱及び木製品等の放射性炭素年代測定(暦年較正年代)では、10世紀末～12世紀中葉の値が出ており、井戸が数基掘られ、微かながら集落が営まれていた痕跡が残る。一方隣接する開防遺跡でも、この時期に該当する珠洲系陶器が出土しており、やはりこの時代の明確な居住域は確認されていない。

12世紀代の遺構では、引き続き井戸が数基掘られていたのみで、遺物は白磁碗が1点のみの出土である。白磁碗の年代は12世紀初頭であるが、流過程によるタイムラグも入れると12世紀後半に使用されていた可能性もある。11世紀代同様明確な居住域は確認していないが、調査で確認された柱穴様ピットのいくつかは12世紀まで降る可能性もある。白磁碗の出土はこの地における奥州藤原氏に関わ

る有力者の存在を窺わせる。12世紀末の奥州藤原氏滅亡後の文治5(1189)年、鎌倉幕府に対し反乱を起こした大河兼任の本拠地も本遺跡の南、馬場目川対岸の大川地区と推定されていることから、白磁碗の出土した意義は大きい。

以上、貝保遺跡の性格を探ってみたが、前回及び今回の調査を踏まえ、具体的な年代を把握できる遺構が少なく、遺跡の調査も遺跡全体の一部であることからその性格を把握することは難しい。よって遺跡全体の評価は、今後未調査区部分にある遺構も含めて総合的になされなければならない。また馬場目川流域にある周辺遺跡の調査が進むことで、本遺跡の性格がより明らかになることが期待される。

註1 2003(平成15)年に刊行した『開防遺跡・貝保遺跡－主要地方道秋田八郎潟線高速交通関連道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』秋田県文化財調査報告書第361集では、柱穴様ピットの数を207基と報告している。今回、そのうち6基をS D1027に関連するものとして新たに番号を付した。よって改めて201基とした。

註2 北遺跡での井戸枠分類は、貝保遺跡のA類をⅡ類に、B類をⅣ類としているが、北遺跡にはB類に該当するものがない。また北遺跡のⅣ類を盲孔ではなく貫通孔に置き換えたものと類似しているためB'類とした。正確にはB'類は北遺跡Ⅳ類の類似型である。またC類としたS E1004外側隅柱は、腐食のためその上部構造が不明である。また北遺跡でも、最下部構造がC類の例は確認されていない。

註3 桜田隆氏は、砂底土器について、「『砂底』土器考」(『翔古論聚－久保先生追悼論文集』1993(平成5)年)や「底面に砂粒を付着させる土師器とその分布について」(『蝦夷・律令国家・日本海-シンポジウムⅡ・資料集』日本考古学協会1997(平成9)年)等で砂底土器を取り上げ、「蝦俘」の土器とした。一方、利部修氏は横手市中山丘陵窯跡群の富ヶ沢窯跡支群でまとまって砂底須恵器が確認されることから、「向化俘地の蝦夷が混わる城柵設置地域の住民によって考案され、夷俘と呼ばれた住民にも伝えられたと考えるべきだろう。しかし、10世紀以降平安時代の非クロコ砂底土器は、桜田のいう夷俘に直結するものであろう。」(利部 2008)で述べている。

参考文献

- 秋田県教育委員会 『開防遺跡・貝保遺跡－主要地方道秋田八郎潟線高速交通関連道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』秋田県文化財調査報告書第361集 2003(平成15)年
- 五城目町教育委員会 『開防遺跡－湖東総合病院建設に伴う敷地造成工事に係る埋蔵文化財調査報告書－』五城目町埋蔵文化財調査報告書第8集 2002(平成14)年
- 神田和彦 「秋田平野周辺における集落の様相」『第31回 古代城柵官衙遺跡検討会資料集』2005(平成17)年
- 横手市教育委員会 『横手市史資料編古代・中世』2006(平成18)年
- 秋田県教育委員会 『北遺跡－日本海沿岸東北自動車道建設に係る埋蔵文化財調査報告書Ⅵ－』秋田県文化財調査報告書第315集 2001(平成13)年
- 利部修 『出羽の古代土器』同成社 2008(平成20)年
- 日本貿易陶磁研究会 『出羽の出土陶磁器－安東氏とその時代－秋田大会資料集』2007(平成19)年
- 太宰府市教育委員会 『太宰府条坊跡X V－陶磁器分類編－』太宰府市の文化財第49集 2000(平成12)年
- 村上義直 「最北の郡衙石崎遺跡について」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第29号 2015(平成27)年



1975年貝保遺跡及び周辺古代遺跡(真上が北)



1 遺跡遠景(北→)



2 平成25年度調査前風景(北東→)



3 平成25年度A区調査前風景(北西→)



4 平成25年度B区調査前風景(南→)



5 平成25年度A区西側(北西→)



1 平成25年度A区東側(北→)



2 平成25年度B区(南→)



1 平成25年度B区(北→)



2 平成26年度調査区(北東→)



1 A区基本土層(西→)



2 B区基本土層(東→)



3 S I 1019土師器出土状況①(東→)



4 S I 1019土師器出土状況②(東→)



5 S A 1015完掘状況(東→)



6 S E 1004作業風景(北→)



7 S E 1004井戸枠検出状況(北→)



8 S E 1004完掘状況(北→)



1 S E 1004井戸枠内側縦板検出状況(南→)



2 S E 1004井戸枠外側縦板検出状況(南→)



3 S E 1005井戸枠検出状況①(南→)



4 S E 1005井戸枠検出状況②(南→)



5 S E 1005井戸枠検出状況③(南→)



6 S E 1006上層断面(西→)



7 S E 1006完掘状況(西→)



8 S E 1006須恵器坏蓋出土状況(東→)



1 S E 1007上層断面(東→)



2 S E 1007磔出土状況(東→)



3 S E 1008断面(東→)



4 S E 1008完掘状況(東→)



5 S E 1009板材出土状況(東→)



6 S E 1009完掘状況(東→)



7 S E 1034完掘状況(東→)



8 S D 1025完掘状況(東→)



1 S D1025完掘状況(北→)



3 平成13年度S D1027完掘状況(北東→)



2 平成13年度S D1027完掘状況(北→)



4 S D1027完掘状況(東→)



5 S D1027遺物出土状況(東→)



6 S D1035完掘状況(南→)



7 S D1036完掘状況



1 S K 1018遺物出土状況(南→)



2 S K 1024遺物出土状況(東→)



3 S N 1029被熱断面(南→)



4 S K P 1332遺物出土状況(東→)



5 平成25年度A区西側作業風景(北→)



6 平成25年度A区作業風景(南→)



7 平成25年度B区作業風景(南東→)



8 平成25年度遺跡見学会の様子(北西→)



1 平成14年度調査区(南東→)



2 平成13・14年度調査区現況(南→)



3 平成14年度調査区北側(南→)



4 平成14年度S E 2 遺物出土状況(南西→)



5 平成14年度調査風景(北→)



第27・28図 1～5



第27図 1



第28図 5



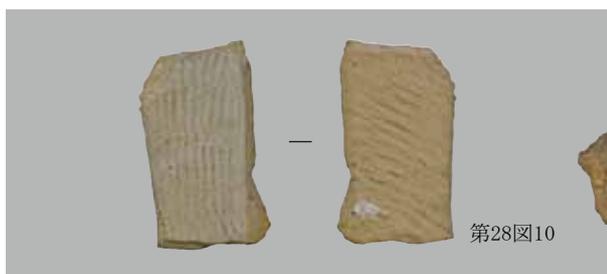
第27図 2



第27图 3



第28图 4



第28图 10



第28图 6

第28图 7

第28图 8

第28图 9



第32图 19

第32图 22



第32图 20



第32图 23



第32图 24



第32图 25



第37图 44



第37图 45



第37图 46



第38图47



第38图54



第38图55



第38图50

第38图52

第38图53

第38图51

第38图56



第38图57



第38图58



第39图60



第39图61

第39图62

第39图63

第39图74

第39图75



第39图64



第39图72



第39图73



第40图77

第40图78

第40图76

第40图84

第40图86

第40图87

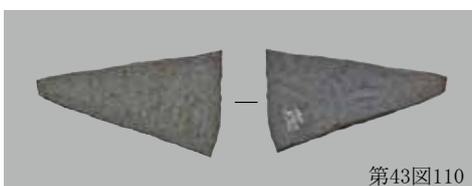
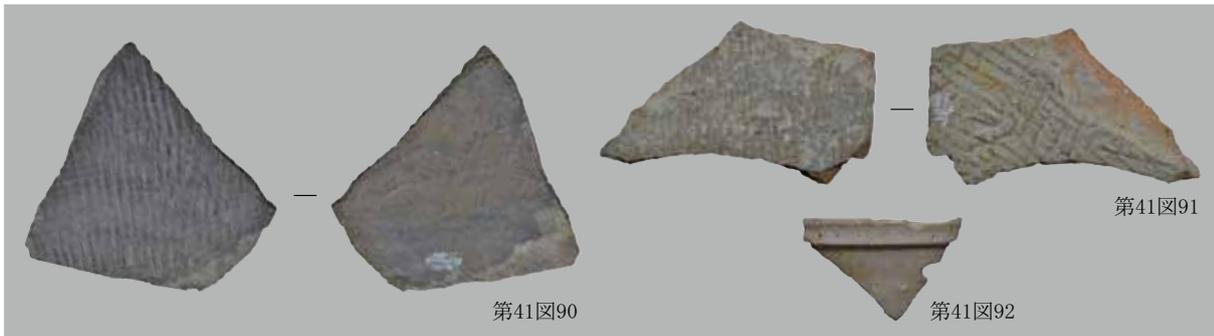
第40图88

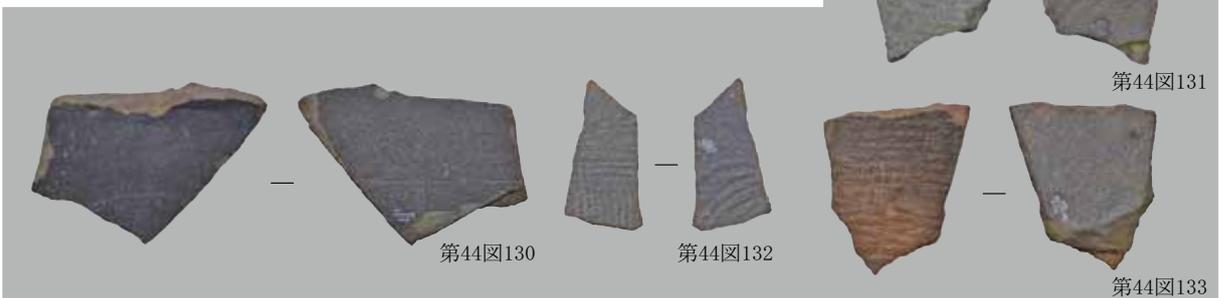


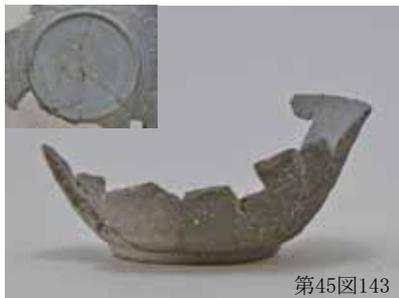
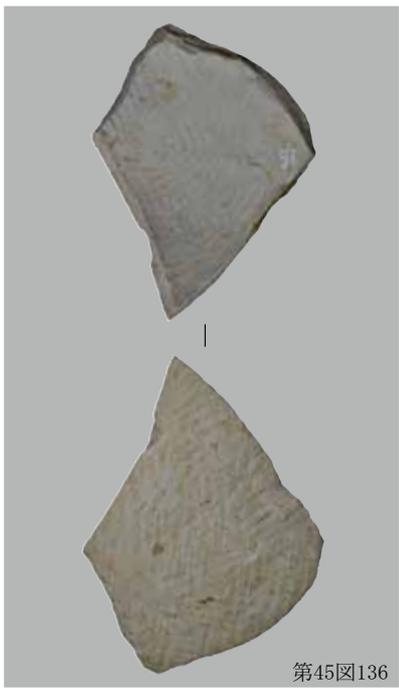
第40图79

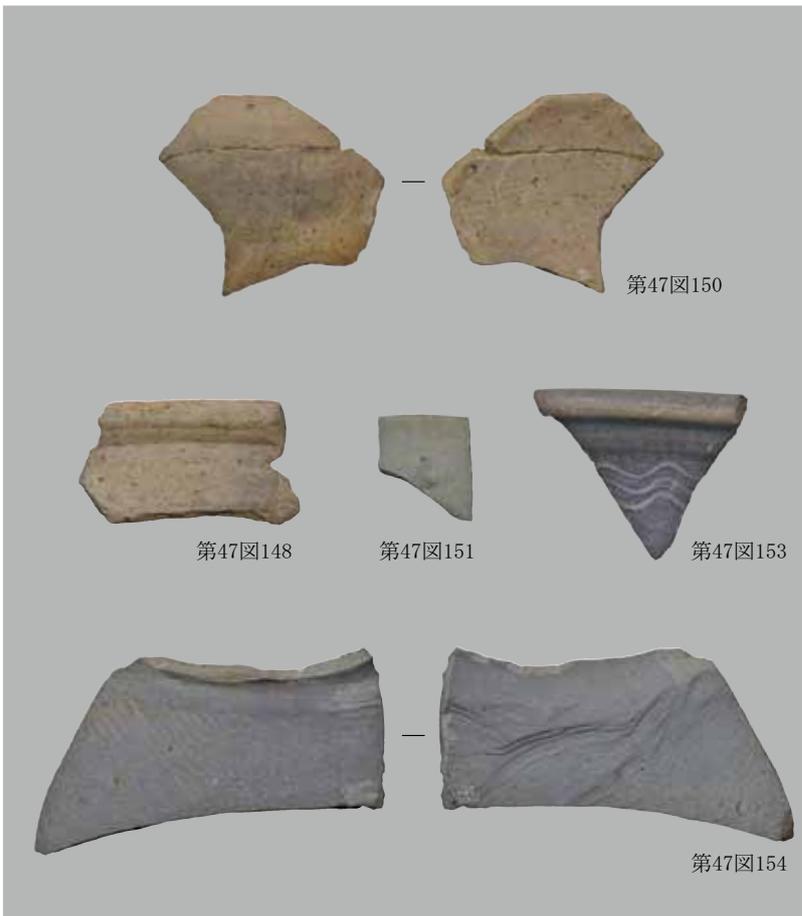


第40图80











第29图11



第29图12



第30图13



第31图14

第31图15

第32图16

第32图17

第32图18



第33图26

第33图27



第34图28

第34图29



第35図30



第35図31



第35図32



第35図33



第36図36~40正面



第36図36~40裏面



第36图34

第36图35

第37图41

第37图42



第42図104



第42図105



第37図43



第38図59



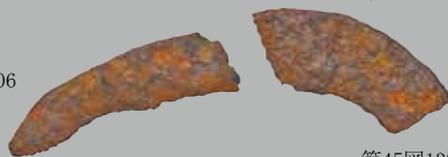
第42図106



第45図137



第45図139



第45図138

報 告 書 抄 録

ふりがな	かいほいせき							
書名	貝保遺跡（第2次）							
副書名	地方道路等整備事業(建設)主要地方道秋田八郎潟線に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第499集							
編著者名	水品仁志、山村 剛							
編集機関	秋田県埋蔵文化財センター							
所在地	〒014-0802 秋田県大仙市弘田字牛嶋20番地 TEL 0187-69-3331							
発行機関	秋田県教育委員会							
所在地	〒010-8580 秋田県秋田市山王三丁目1番1号 TEL 018-860-5193							
発行年月日	西暦2015年9月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 〃	東経 〃	調査期間	調査 面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡 番号					
かいほいせき 貝保遺跡	秋田県 みなみあきたぐん 南秋田郡 かわさきあざかいほ 川崎字貝保 99-3ほか	05363	363- 27-54	39° 56′ 32″	140° 6′ 23″	20130902 ～ 20131029 20140929 ～ 20141010	1,300㎡	地方道路等整備 事業(建設)主要 地方道秋田八郎 潟線に係る埋蔵 文化財事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
貝保遺跡	集落遺跡	縄文時代 奈良時代 平安時代 近世	竪穴建物跡 柱穴列 井戸跡 溝跡 土坑 焼土遺構 柱穴様ピット	1棟 1条 7基 4条 8基 1基 215基	縄文土器 石器剥片 須恵器 土師器 白磁 木製品 石製品 鉄製品 鉄滓 陶器	奈良時代の竪穴 建物跡を確認し た他、平安時代 の井戸跡7基が 集中して検出さ れた。		
要約	奈良時代から平安時代の集落跡。周辺では検出例が少ない奈良時代の竪穴建物跡を確認している。平安時代の遺跡内は溝によって南北に分断され、北側では柱穴様ピットを多数検出したのに対し、南側では僅少であった。また井戸跡は遺跡内で8基検出しており、うち南側で7基を集中して確認したことから、南北で土地利用の違いがあるものと考えられる。また、本遺跡の馬場目川対岸には秋田郡衙に比定される石崎遺跡があり、関連が注目される。							

秋田県文化財調査報告書第499集

貝保遺跡（第2次）

— 地方道路等整備事業（建設）

主要地方道秋田八郎潟線に係る

埋蔵文化財発掘調査報告書 —

印刷・発行 平成27年9月

編 集 秋田県埋蔵文化財センター

〒014-0802 大仙市払田字牛嶋20番地

電話(0187)69-3331 FAX(0187)69-3330

発 行 秋田県教育委員会

〒010-8580 秋田市山王三丁目1番1号

電話(018)860-5193

